

神戸市西区

玉津田中遺跡

—第4分冊—

(辻ヶ内・居住地区の調査)

—田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1995.3

兵庫県教育委員会

訂 正

玉津田中遺跡 第4分冊（兵庫県文化財調査報告第135-4冊）の図版の縮尺に
誤りがありましたので、以下のように訂正いたします。

	誤	正
図版116 (5001～5004)	1 : 3	→ 1 : 2
図版117 (5005～5011) (5012～5013)	1 : 3	→ 2 : 3
	1 : 3	→ 1 : 2
図版118 (5014～5016)	1 : 3	→ 1 : 2

神戸市西区

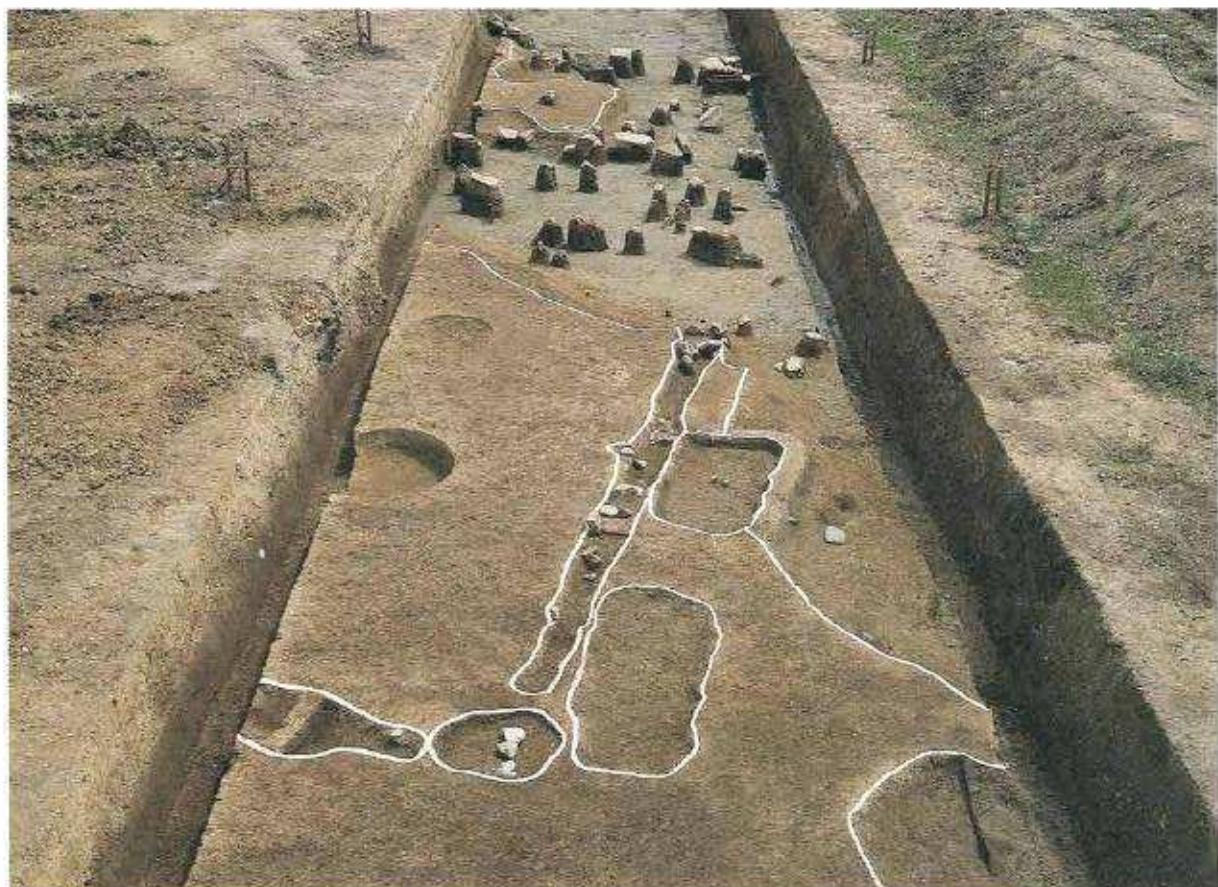
たま つ た なか
玉津田中遺跡

—第4分冊—

(辻ヶ内・居住地区の調査)



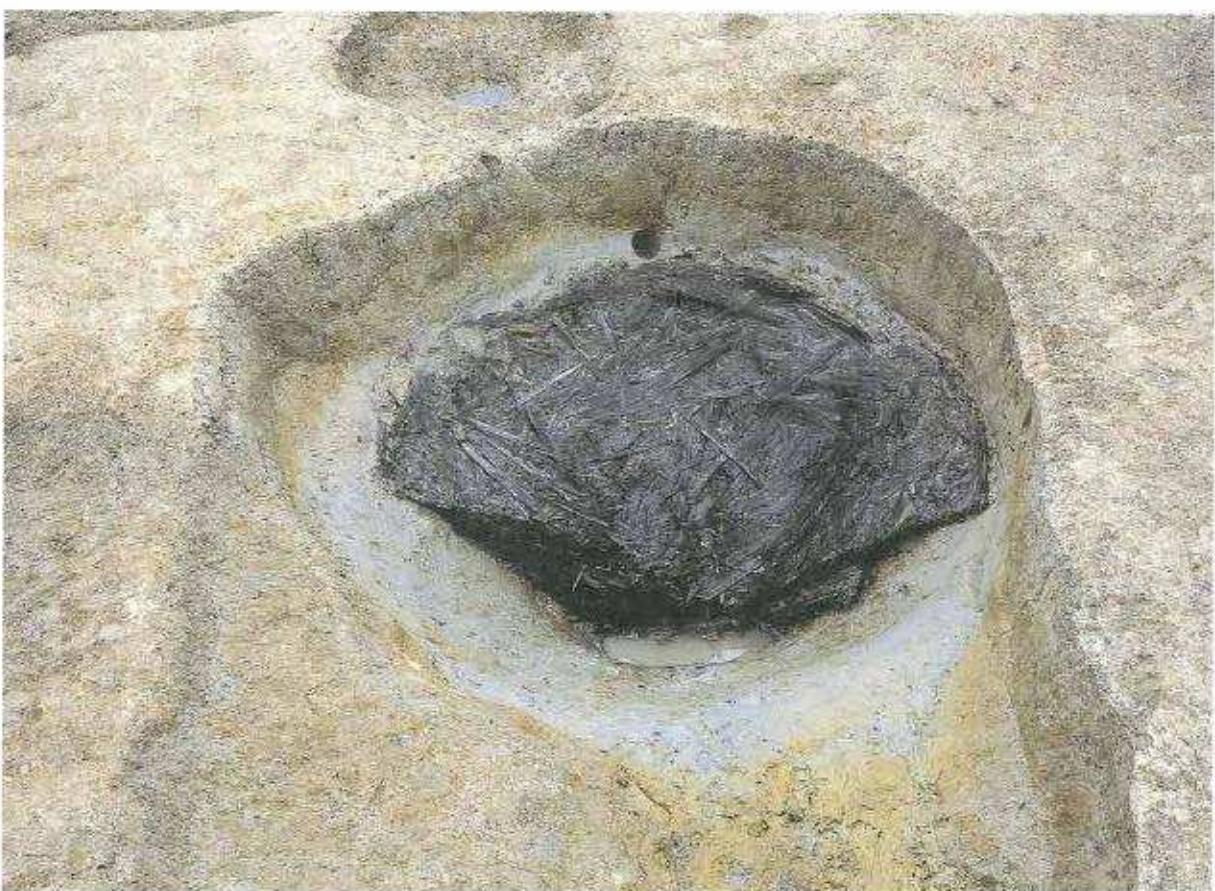
辻ヶ内5～9区全景 中世面



辻ヶ内5区 瓦葺建物跡 SB85001



辻ヶ内1区 池 SG85001



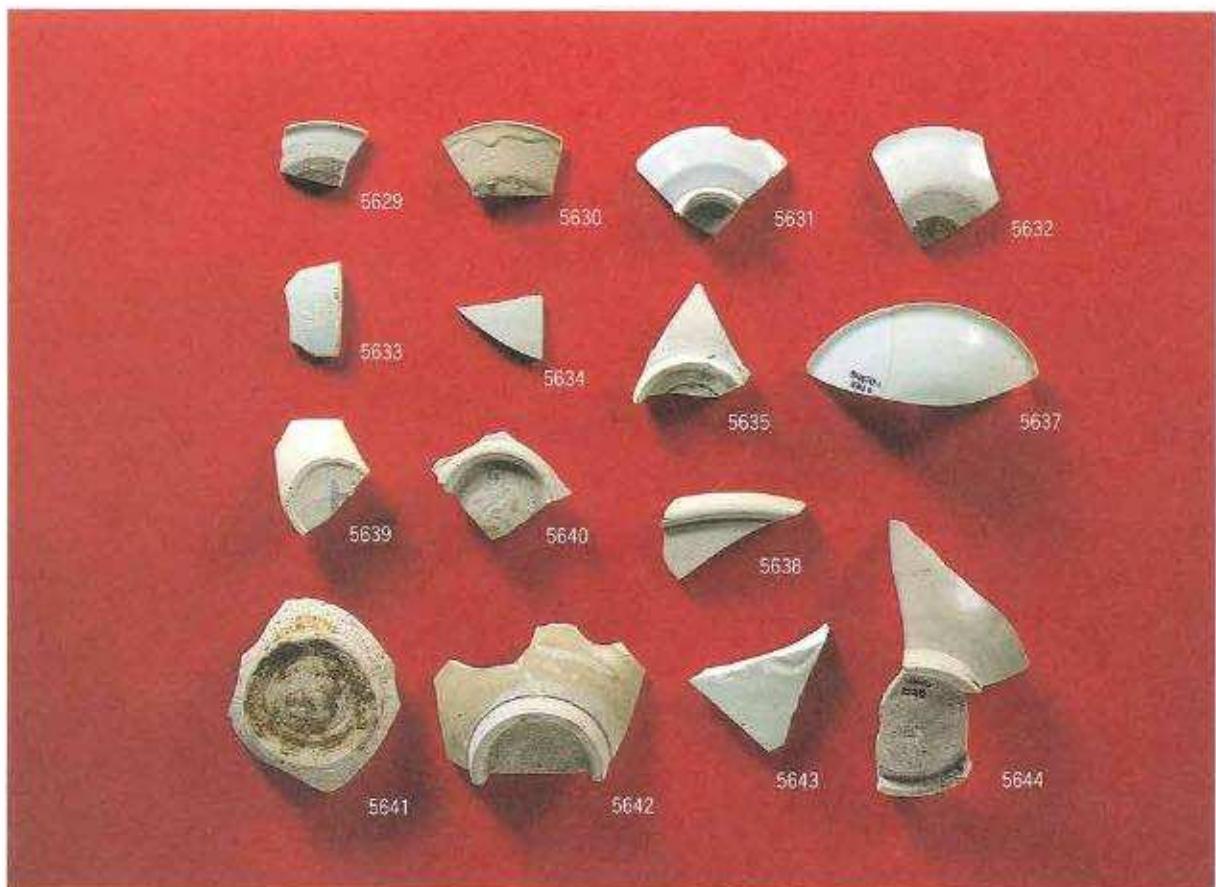
辻ヶ内1区 土坑 SK85009



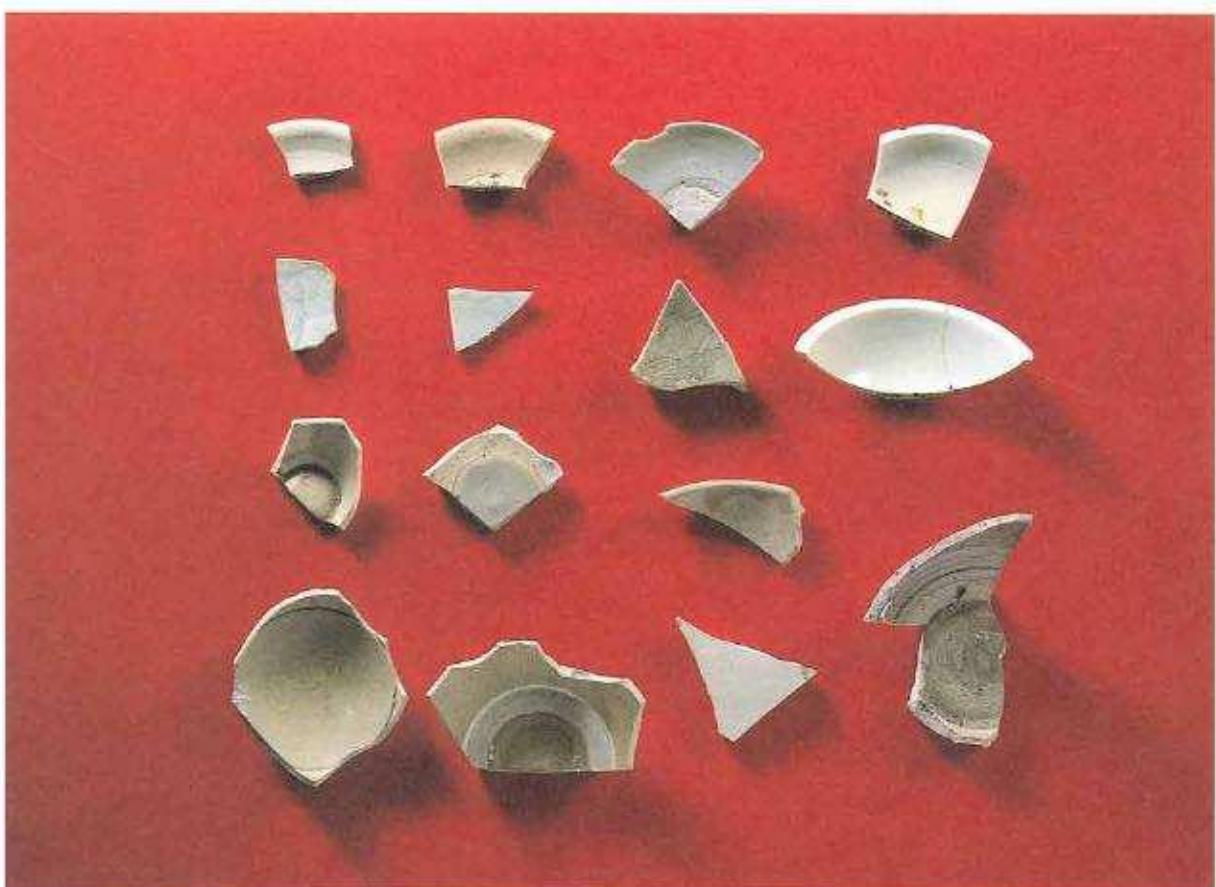
堀 SD 85001 出土土器



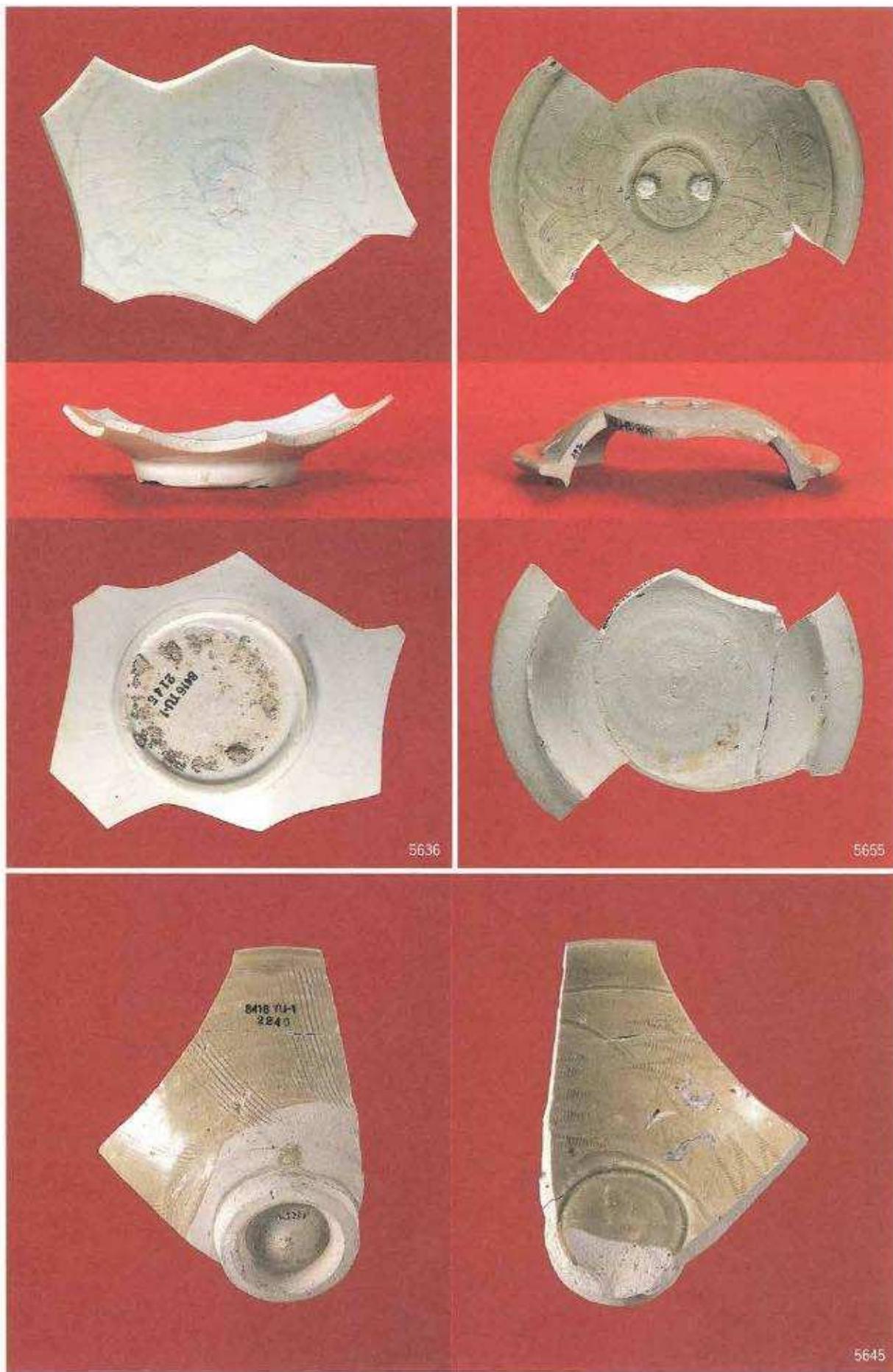
池 SG 85001 出土土器



中国製白磁（外面）



同 上（内面）

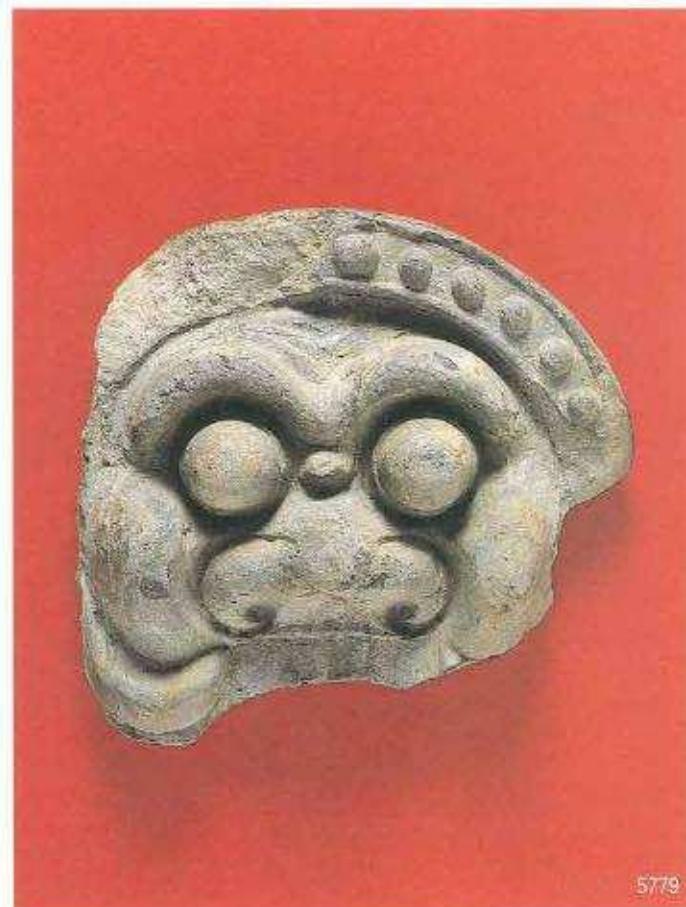


中国製白磁・青磁

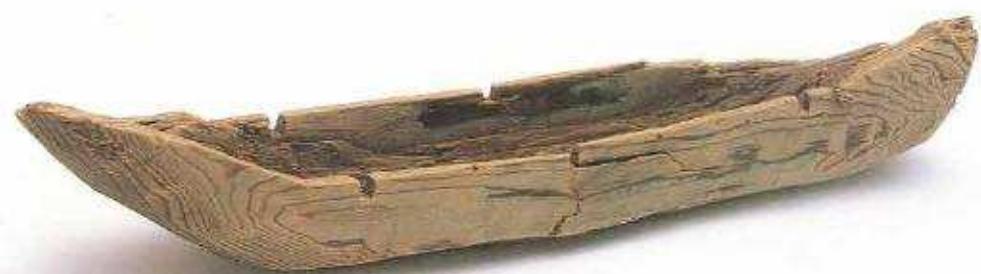


上) 中国製青磁(外面) 中) 同(内面) 下) 鉄絵草花文壺

3628



池 SG85002
出土鬼瓦
5779



5071

堀 SD 85001 出土舟形



5003



5002



5042



5038



5041

上) 土坑 SK 85009 出土木製品

下) 池 SG 85001 出土木製品

例 言

1. 本書は兵庫県神戸市西区玉津町田中（土地区画整理事業後の地名は、神戸市西区宮下1～3丁目）に所在する、玉津田中遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は田中特定土地区画整理事業に伴うもので、住宅・都市整備公団の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査報告書は、地区別に第1分冊～第5分冊に分け、別途、総括編を刊行する。
4. 第4分冊では、辻ヶ内地区と居住地区の調査を所収する。
5. 本文の執筆は、村上泰樹・中川 渉・藤田 淳・多賀茂治・鈴木敬二が行った。
6. 木製品の樹種同定については、京都大学名誉教授 島地 謙氏に依頼した。
7. 本書の編集は、中川 渉が担当した。
8. 本書にかかる玉津田中遺跡の写真・図面・遺物などは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）に保管する。
9. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の助力を得た。記して感謝の意を表します。
(敬称略)
上原真人（奈良国立文化財研究所）、森田 稔（神戸市立博物館）、丸山 潔・丹治康明・山本雅和・前田佳久・須藤 宏（神戸市教育委員会）、高橋 学（立命館大学）、高橋和子、今里幾次、真野 修

凡 例

1. 遺構

遺構番号はアルファベットの略号と、5桁の数字を組み合わせて表記する。

5桁の数字のうち、万の位「1～9」は遺構の時期を示している。また千の位「5」は本分冊に固有の番号で、その遺構が第4分冊に掲載されていることを示している。以下の3桁の数字は、遺構それぞれの個別番号で、遺構の種類・時代・分冊ごとに「001」からふっている。

(1) 遺構の略号

遺構は種類ごとに以下の略号を用いた。

S B 建物跡

S D 溝・堀

S E 井戸

S G 池

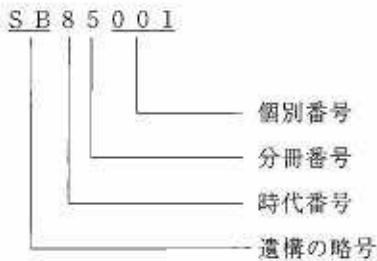
S H 竪穴住居跡

S K 土坑

S R 旧河道

S X 鋳冶炉

P 柱穴



(2) 万の位の示す時期

1 * * * * ~ 繩文時代晚期以前

2 * * * * ~ 繩文時代晚期～弥生時代前期

3 * * * * ~ 弥生時代中期前半

4 * * * * ~ 弥生時代中期後半

5 * * * * ~ 弥生時代後期

6 * * * * ~ 弥生時代終末期～古墳時代前期

7 * * * * ~ 古墳時代後期

8 * * * * ~ 古代～中世

9 * * * * ~ 近世～

(3) 千の位の示す分冊

* 0 * * * ~ 第1分冊

* 2 * * * ~ 第2分冊

* 4 * * * ~ 第3分冊

* 5 * * * ~ 第4分冊

* 6 * * * ~ 第5分冊

2. 遺物

遺物番号は4桁の数字で表記する。4桁の数字のうち、千の位「5」は本分冊固有の番号で、その遺物が第4分冊に掲載されていることを示している。以下の3桁の数字は遺物それぞれの個別番号で、「土器・瓦」「木器」「金属器・羽口」「石器」ごとに「001」からふっている。

土器の断面の色は、中近世以外は種別を問わずすべて黒塗りをしている。中近世の土器については、須恵器・陶器を黒塗り、土師器・瓦を白抜き、瓦器・施釉陶器・磁器・石鍋をスクリーントーンで表して区別している。

3. 座標・方位・標高

遺構図の記録に用いた座標は、玉津田中遺跡の調査のために兵庫県教育委員会が任意に設定したものである。この座標はまず任意の国土座標ポイントから、調査対象地内の条里制地割方向に合わせて設定した。さらにその座標を50m方眼に区切り、北から南へかけて0～14ライン、西から東へかけてA～Pラインとした。50m四方の各調査区の呼称は、北西側の交点に基づいている。この座標は国土座標第V系に対し、N $21^{\circ} 43' 37''$ Eの傾きをもち、座標値はL11がX = -145738.396、Y = 59423.893で、M11がX = -145756.905、Y = 59470.341である。

なお遺構図に示した方位は国土座標北を、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を示している。

目 次

第1部 はじめに

第1章 調査地点の概要 (中川)	1
第1節 遺跡の位置	
第2節 明石川流域の地理的環境	
第3節 歴史的環境	
第2章 調査の経過 (中川)	3
第1節 辻ヶ内地区の調査	
第2節 居住地区の調査	
第3節 出土品整理作業	

第2部 辻ヶ内地区の調査

第1章 調査の概要 (中川)	9
第1節 概 要	
第2節 土層断面図	
第2章 弥生時代中期下層の遺構 (中川)	14
第1節 概 要	
第2節 水田跡	
第3章 弥生時代中期上層の遺構 (中川)	15
第1節 概 要	
第2節 土 坑	
第3節 潟	
第4章 弥生時代後期の遺構 (中川)	17
第1節 概 要	
第2節 竪穴住居跡	
第3節 土 坑	
第4節 潟	
第5章 旧河道 (多賀)	19
第6章 中世の遺構	
第1節 概 要 (中川)	20
第2節 堀 (多賀)	20
第3節 池 (中川・多賀)	22
第4節 建物跡 (多賀)	24
第5節 井 戸 (鈴木)	25
第6節 土 坑 (多賀・中川)	26
第7節 鍛冶炉 (中川)	27

第 8 節 溝 (多賀)	28
第 7 章 弥生時代中期上層の遺物 (多賀)	29
第 8 章 弥生時代後期の遺物 (多賀)	30
第 9 章 旧河道の遺物 (鈴木)	32
第10章 中世の遺物	
第 1 節 土 器	
1. 器種分類 (中川)	34
2. 出土土器 (鈴木)	41
第 2 節 中国製磁器 (村上)	47
第 3 節 瓦 (多賀)	50
第 4 節 木 器 (多賀)	62
第 5 節 金属器 (中川)	68
第 6 節 石 器 (藤田)	70

第 3 部 居住地区の調査

第 1 章 調査の概要 (中川)	73
第 1 節 概 要	
第 2 節 土層断面図	
第 2 章 古墳時代の遺構 (中川)	74
第 1 節 概 要	
第 2 節 墓穴住居跡	
第 3 章 近世の遺構 (中川)	76
第 1 節 概 要	
第 2 節 掘立柱建物跡	
第 3 節 井 戸	
第 4 節 土 坑	
第 5 節 溝	
第 4 章 遺 物	
第 1 節 古墳時代～中世の土器 (多賀)	77
第 2 節 近世の土器・陶磁器 (村上)	79

第 4 部 小 結

第 1 章 辻ヶ内地区居館出土の土器について (中川)	81
第 2 章 辻ヶ内地区居館出土の瓦について (多賀)	91

挿 図 目 次

挿図1 器種分類図(1)	35
挿図2 器種分類図(2)	37
挿図3 器種分類図(3)	39
挿図4 器種分類図(4)	40
挿図5 東海系灰釉陶器短頸壺	46
挿図6 X線写真	67
挿図7 A~E地点の器種構成	85
挿図8 地点別の個体数(絶対値)	88
挿図9 地点別の器種構成(百分率)	89
挿図10 地点別の供膳具(口縁度数の百分率)	90
挿図11 瓦の長さ・幅散布図	92
挿図12 地区・遺構別瓦構成	95
挿図13 軒瓦 型式別出土構成	96
挿図14 瓦 大型・小型出土割合	97
挿図15 玉津田中遺跡と同文・同範の瓦	99

表 目 次

表1 第4分冊関係調査一覧表	7
表2 辻ヶ内地区出土木製品樹種同定一覧表(1)	71
表3 辻ヶ内地区出土木製品樹種同定一覧表(2)	72
表4 石器一覧表	72
表5 土器・瓦口縁度数集計表	86
表6 土器・瓦個体数集計表	86
表7 辻ヶ内地区瓦一覧表	94

卷首図版目次

卷首図版1 辻ヶ内5~9区全景 中世面	卷首図版5 中国製白磁・青磁
辻ヶ内5区 瓦葺建物跡 SB85001	卷首図版6 中国製青磁
卷首図版2 辻ヶ内1区 池 SG85001	鉛絵草花文壺
辻ヶ内1区 土坑 SK85009	卷首図版7 池 SG85002 出土鬼瓦
卷首図版3 堀 SD85001 出土土器	堀 SD85001 出土船形
池 SG85001 出土土器	卷首図版8 土坑 SK85009 出土木器
卷首図版4 中国製白磁	池 SG85001 出土木器

図 版 目 次

全 体 図

- 図版1 第4分冊調査地区の位置図
図版2 辻ヶ内地区・居住地区微地形等高線図
図版3 玉津田中遺跡周辺の中世の遺跡
図版4 現況・土地計画重ね図と調査区座標の関係図
図版5 玉津田中遺跡周辺の条里制地割

辻ヶ内地区

- 図版6 確認調査グリッド・トレント
全面調査区配置図
図版7 土層断面図(1)
(辻ヶ内1区北壁)
図版8 土層断面図(2)
(辻ヶ内4・2・3区北壁)
図版9 土層断面図(3)
(辻ヶ内8・9区東壁・2区西壁)
図版10 土層断面図(4)
(KM14・15トレント西壁)
図版11 弥生時代中期下層全体図
図版12 弥生時代中期下層遺構平面図
図版13 弥生時代中期上層全体図
図版14 弥生時代中期上層遺構平面図(1)
図版15 弥生時代中期上層遺構平面図(2)
図版16 弥生時代中期上層 土坑・溝
(SK45001~45003/SD45001~45005)
図版17 弥生時代後期全体図
図版18 弥生時代後期遺構平面図(1)
図版19 弥生時代後期遺構平面図(2)
図版20 弥生時代後期遺構平面図(3)
図版21 弥生時代後期 壺穴住居跡
(SH55001)
図版22 弥生時代後期 土坑
(SK55001~55008)
図版23 弥生時代後期 溝
(SD55001~55009)
図版24 中世全体図
図版25 中世遺構平面図(1)
図版26 中世遺構平面図(2)
図版27 中世遺構平面図(3)
図版28 中世遺構平面図(4)
図版29 中世 居館全体図
図版30 中世 堀(1)
(SD85001)
図版31 中世 堀(2)
(SD85001)

- 図版32 中世 堀(3)
(SD85002/85003/85010)

- 図版33 中世 池(1)
(SG85001/85002)

- 図版34 中世 池(2)
(SG85001)

- 図版35 中世 池(3)
(SG85001)

- 図版36 中世 池(4)
(SG85001)

- 図版37 中世 池(5)
(SG85002)

- 図版38 中世 池(6)
(SG85002)

- 図版39 中世 瓦葺建物跡
(SB85001)

- 図版40 中世 掘立柱建物跡(1)
(SB85002/85003)

- 図版41 中世 掘立柱建物跡(2)
(SB85004)

- 図版42 中世 井戸(1)
(SE85001)

- 図版43 中世 井戸(2)
(SE85001)

- 図版44 中世 土坑(1)
(SK85001~85007)

- 図版45 中世 土坑(2)
(SK85008~85011)

- 図版46 中世 鐵冶炉
(SX85001~85003)

- 図版47 弥生時代中期、後期の遺物(1)
(土坑・溝・壺穴住居跡・包含層
/5001~5023)

- 図版48 弥生時代後期の遺物(2)
(SD55004/5024~5040)

- 図版49 弥生時代後期の遺物(3)
(SD55004・包含層/5041~5062)

- 図版50 旧河道の遺物
(5063~5082)

- 図版51 中世の遺物(1) 土器(1)
(SD85001/5083~5162)

- 図版52 中世の遺物(2) 土器(2)
(SD85001/5163~5206)

- 図版53 中世の遺物(3) 土器(3)
(SD85001/5207~5215)

- 図版54 中世の遺物(4) 土器(4)
(SG85001/5216~5306)

- 図版55 中世の遺物(5) 土器(5)
(SG 85001/5307~5353)
- 図版56 中世の遺物(6) 土器(6)
(SG 85001/5354~5384)
- 図版57 中世の遺物(7) 土器(7)
(SG 85001/5385~5395)
- 図版58 中世の遺物(8) 土器(8)
(SG 85001/5396~5408)
- 図版59 中世の遺物(9) 土器(9)
(SG 85002/5409~5468)
- 図版60 中世の遺物(10) 土器(10)
(SG 85002/5469~5481)
- 図版61 中世の遺物(11) 土器(11)
(建物跡・土坑/5482~5538)
- 図版62 中世の遺物(12) 土器(12)
(溝・井戸/5539~5586)
- 図版63 中世の遺物(13) 土器(13)
(包含層/5587~5605)
- 図版64 中世の遺物(14) 土器(14)
(墨書き土器/5606~5628)
- 図版65 中世の遺物(15) 土器(15)
(中国製磁器/5629~5655)
- 図版66 中世の遺物(16) 瓦(1)
(軒丸瓦/5656~5665)
- 図版67 中世の遺物(17) 瓦(2)
(軒丸瓦/5666)
- 図版68 中世の遺物(18) 瓦(3)
(軒丸瓦/5667)
- 図版69 中世の遺物(19) 瓦(4)
(軒丸瓦/5668~5672)
- 図版70 中世の遺物(20) 瓦(5)
(軒丸瓦/5673~5674)
- 図版71 中世の遺物(21) 瓦(6)
(軒丸瓦/5675~5683)
- 図版72 中世の遺物(22) 瓦(7)
(軒丸瓦/5684~5685)
- 図版73 中世の遺物(23) 瓦(8)
(軒丸瓦/5686~5687)
- 図版74 中世の遺物(24) 瓦(9)
(軒丸瓦/5688~5697)
- 図版75 中世の遺物(25) 瓦(10)
(軒平瓦/5698)
- 図版76 中世の遺物(26) 瓦(11)
(軒平瓦/5699~5703)
- 図版77 中世の遺物(27) 瓦(12)
(軒平瓦/5704~5708)
- 図版78 中世の遺物(28) 瓦(13)
(軒平瓦/5709~5710)
- 図版79 中世の遺物(29) 瓦(14)
(軒平瓦/5711)
- 図版80 中世の遺物(30) 瓦(15)
(軒平瓦/5712~5716)
- 図版81 中世の遺物(31) 瓦(16)
(軒平瓦/5717~5731)
- 図版82 中世の遺物(32) 瓦(17)
(軒平瓦/5732~5739)
- 図版83 中世の遺物(33) 瓦(18)
(軒平瓦/5740~5749)
- 図版84 中世の遺物(34) 瓦(19)
(丸瓦/5750~5751)
- 図版85 中世の遺物(35) 瓦(20)
(丸瓦/5752~5753)
- 図版86 中世の遺物(36) 瓦(21)
(丸瓦/5754~5755)
- 図版87 中世の遺物(37) 瓦(22)
(丸瓦/5756~5757)
- 図版88 中世の遺物(38) 瓦(23)
(丸瓦/5758~5759)
- 図版89 中世の遺物(39) 瓦(24)
(丸瓦/5760~5763)
- 図版90 中世の遺物(40) 瓦(25)
(丸瓦/5764~5765)
- 図版91 中世の遺物(41) 瓦(26)
(丸瓦/5766~5767)
- 図版92 中世の遺物(42) 瓦(27)
(平瓦/5768~5769)
- 図版93 中世の遺物(43) 瓦(28)
(平瓦/5770~5771)
- 図版94 中世の遺物(44) 瓦(29)
(平瓦/5772~5773)
- 図版95 中世の遺物(45) 瓦(30)
(平瓦/5774~5775)
- 図版96 中世の遺物(46) 瓦(31)
(平瓦/5776)
- 図版97 中世の遺物(47) 瓦(32)
(平瓦/5777)
- 図版98 中世の遺物(48) 瓦(33)
(平瓦/5778)
- 図版99 中世の遺物(49) 瓦(34)
(鬼瓦/5779~5784)
- 図版100 中世の遺物(50) 木器(1)
(SK 85009~85008/5001~5004)
- 図版101 中世の遺物(51) 木器(2)
(SK 85008/5005)
- 図版102 中世の遺物(52) 木器(3)
(SK 85008/5006~5007)
- 図版103 中世の遺物(53) 木器(4)
(SE 85001/5008~5021)
- 図版104 中世の遺物(54) 木器(5)
(SE 85001/5022~5025)

- 図版105 中世の遺物(55) 木器(6)
(SE85001/5026~5030)
- 図版106 中世の遺物(56) 木器(7)
(SE85001/5031~5037)
- 図版107 中世の遺物(57) 木器(8)
(SG85001/5038~5050)
- 図版108 中世の遺物(58) 木器(9)
(SG85001・85002/5051~5062)
- 図版109 中世の遺物(59) 木器(10)
(SD85001/5063~5074)
- 図版110 中世の遺物(60) 木器(11)
(SD85001/5075~5079)
- 図版111 中世の遺物(61) 木器(12)
(SD85001/5080~5082)
- 図版112 中世の遺物(62) 木器(13)
(SG85002・SD85001/5083~5085)
- 図版113 中世の遺物(63) 木器(14)
(柱穴/5086~5090)
- 図版114 中世の遺物(64) 金属器(1)
(鉄器/5001~5014)
- 図版115 中世の遺物(65) 金属器(2)
(鉄器・羽口/5015~5025)
- 図版116 石器(1)
(5001~5004)
- 図版117 石器(2)
(5005~5013)
- 図版118 石器(3)
(5014~5016)

居住地区

- 図版119 遺構全体図
- 図版120 土層断面図
- 図版121 古墳時代 堪穴住居跡(1)
(SH75001~75003)
- 図版122 古墳時代 堪穴住居跡(2)
(SH75004~75006)
- 図版123 近世 捩立柱建物跡
(SB95001)
- 図版124 近世 井戸
(SE95001)
- 図版125 古墳時代の遺物
(SH75003・75002/5785~5803)
- 図版126 古墳時代~中世の遺物
(SH75004~75006・包含層
/5804~5814)
- 図版127 近世の遺物
(土坑・溝・包含層/5815~5832)

辻ヶ内地区写真図版

- 図版128 航空写真
- 図版129 辻ヶ内地区付近の航空写真
- 図版130 遺跡全景
1. 遠景(南西から)
2. 調査前の状況
- 図版131 調査区空中写真(1)
1. 2区 弥生時代中期下層面
2. 5区 弥生時代後期面
3. 5・6区 弥生時代後期面
4. 5・8・9区 弥生時代後期面
- 図版132 調査区空中写真 中世面
- 図版133 調査区全景(1)
1. 5区 中世面(西から)
2. 5区 弥生時代後期面(東から)
- 図版134 調査区全景(2)
1. 6区 中世面(南から)
2. 6区 弥生時代後期面(東から)
- 図版135 調査区全景(3)
1. 7区 旧河道(西から)
2. 同上(東から)
- 図版136 調査区全景(4)
1. 8・9区 中世面(南から)
2. 8・9区 弥生時代後期面(南から)
- 図版137 弥生時代中期下層の遺構
1. 2区 水田(北から)
2. 同上(東から)
3. 同上(南から)
4. 同上大畦畔(南から)
5. 同上断面(南東から)
6. 同上畦畔の断面(南から)
- 図版138 弥生時代中期上層の遺構
1. 4区 SK45001・45002(南から)
2. 4区 SD45001・45002(北から)
3. 4区 SD45003(南から)
4. 2区 SD45005(南から)
- 図版139 弥生時代後期の遺構(1)
1. 5区 全景(西から)
2. 5区 SH55001(南から)
3. 4区 全景(西から)
4. 4区 SD55007(南から)
- 図版140 弥生時代後期の遺構(2)
1. 1区 SD55004(南西から)
2. 同上 アップ(北西から)
3. 同上 アップ(南東から)
4. 1区 流路状遺構(南から)
5. 同上 アップ(南から)
- 図版141 中世の遺構(1) 堀(1)
1. 1区 東側 SD85001(北から)
2. 同上 アップ(東から)

3. 同上 アップ(北から)
- 図版142 中世の遺構(2) 堀(2)
1. 1区西側 SD85001(東から)
 2. 同上(北から)
 3. 同上木製品出土状況(南から)
 4. 同上断面(南から)
- 図版143 中世の遺構(3) 堀(3)
1. 5・8区 SD85001(南から)
 2. 6区 SD85001(南西から)
 3. 8区 SD85001北東コーナー(北東から)
 4. 6区 SD85001遺物出土状況(北西から)
 5. 1区西側 SD85001 遺物出土状況
 6. 6区 SD85001 断面(南西から)
- 図版144 中世の遺構(4) 池(1)
1. 1区 SG85001(東から)
 2. 同上(空中写真)
- 図版145 中世の遺構(5) 池(2)
1. 1区 SG85001アップ(東から)
 2. 同上 アップ
 3. 同上断面(北から)
- 図版146 中世の遺構(6) 池(3)
1. 1区 SG85001土器出土状況
 2. 同上
 3. 同上 木製品出土状況
 4. 同上
 5. 同上
 6. 同上
- 図版147 中世の遺構(7) 池(4)
1. 1区 SG85001(東から)
 2. 同上断面(南東から)
 3. 同上
- 図版148 中世の遺構(8) 池(5)
1. 1区 SG85001・SD85004(北から)
 2. 同上 瀧口(西から)
 3. 同上 瀧口(東から)
 4. 同上 瀧口(南から)
 5. 同上 遺り水(北から)
 6. 同上 遺り水(南から)
- 図版149 中世の遺構(9) 池(6)
1. 1区 SG85002(東から)
 2. 同上(東から)
 3. 同上 橋脚(北から)
 4. 同上 瓦出土状況
- 図版150 中世の遺構(10) 建物跡(1)
1. 5区 SB85001・SG85002
(空中写真)
 2. 同上(西から)
 3. 同上(南東から)
- 図版151 中世の遺構(11) 建物跡(2)
1. 6区 SB85002・85003(南から)
 2. 6区 SB85002内 P205柱穴断割り状況
 3. 同上 P202柱穴断割り状況
 4. 2区 SB85004(西から)
 5. 同上 P403柱穴断割り状況
 6. 同上 P401柱穴断割り状況
- 図版152 中世の遺構(12) 井戸(1)
1. 6区 SE85001上層遺物出土状況(西から)
 2. 同上 井戸側検出状況(東から)
 3. 同上 遺物出土状況(東から)
- 図版153 中世の遺構(13) 井戸(2)
1. 6区 SE85001(東から)
 2. 同上 挖削状況
 3. 同上 最下層遺物出土状況(北から)
 4. 同上 断割り状況(東から)
 5. 同上 最下層礫敷(東から)
 6. 同上 最下層断割(東から)
 7. 同上 横棟の仕口
- 図版154 中世の遺構(14) 土坑(1)
1. 1区 SK85008上層(北から)
 2. 同上 下層(北から)
 3. 6区 SK85007(南から)
- 図版155 中世の遺構(15) 土坑(2)
1. 1区 SK85009 上層(西から)
 2. 同上 下層断面(西から)
 3. 同上 木製品出土状況
 4. 同上 樹皮を敷きつめた状況
 5. 同上 完掘状況(西から)
- 図版156 中世の遺構(16) 土坑(3)
1. 1区 SK85010 検出状況
 2. 1区 SK85011 検出状況
 3. 1区 SK85010 断面
 4. 1区 SK85011 断面
 5. 6区 SK85007 断面(東から)
 6. 6区 SK85006(南から)
 7. 5区 SK85001 断面(西から)
 8. 5区 SK85002 断面(西から)
 9. 5区 SK85003 断面(南から)
 10. 5区 SK85004 断面(南から)
- 図版157 中世の遺構(17) 鎔冶炉
1. 1区 SX85002・85003(東から)
 2. 1区 SX85003 断面(東から)
 3. 1区 SX85002 断面(東から)
 4. 1区 SX85001(南から)
 5. 同上 断面(西から)
- 図版158 中世の遺構(18) 水田
1. 1区 中世～現代の畦畔の断面

	2. 1区 水田畦畔(南から)	図版196	中世の遺物(32)	瓦(12)
	3. 2区 全景(東から)	図版197	中世の遺物(33)	瓦(13)
	4. 同上(西から)	図版198	中世の遺物(34)	瓦(14)
図版159	発掘調査状況	図版199	中世の遺物(35)	瓦(15)
	1. 確認調査	図版200	中世の遺物(36)	木器(1)
	2. 機械掘削	図版201	中世の遺物(37)	木器(2)
	3. 人力掘削	図版202	中世の遺物(38)	木器(3)
	4. 同上	図版203	中世の遺物(39)	木器(4)
	5. 遺構掘削	図版204	中世の遺物(40)	木器(5)
	6. 測量	図版205	中世の遺物(41)	木器(6)
	7. 空中写真撮影	図版206	中世の遺物(42)	木器(7)
	8. 現地説明会	図版207	中世の遺物(43)	木器(8)
図版160	弥生時代中期の遺物	図版208	中世の遺物(44)	木器(9)
	弥生時代後期の遺物(1)	図版209	中世の遺物(45)	木器(10)
図版161	弥生時代後期の遺物(2)	図版210	中世の遺物(46)	木器(11)
図版162	弥生時代後期の遺物(3)	図版211	中世の遺物(47)	木器(12)
図版163	弥生時代後期の遺物(4)	図版212	中世の遺物(48)	木器(13)
	旧河道の遺物(1)	図版213	中世の遺物(49)	木器(14)
図版164	旧河道の遺物(2)	図版214	中世の遺物(50)	木器(15)
図版165	中世の遺物(1) 土器(1)	図版215	中世の遺物(51)	鉄器(1)
図版166	中世の遺物(2) 土器(2)	図版216	中世の遺物(52)	鉄器(2)
図版167	中世の遺物(3) 土器(3)	図版217	石器(1)	
図版168	中世の遺物(4) 土器(4)	図版218	石器(2)	
図版169	中世の遺物(5) 土器(5)			
図版170	中世の遺物(6) 土器(6)			
図版171	中世の遺物(7) 土器(7)			
図版172	中世の遺物(8) 土器(8)			
図版173	中世の遺物(9) 土器(9)			
図版174	中世の遺物(10) 土器(10)			
図版175	中世の遺物(11) 土器(11)			
図版176	中世の遺物(12) 土器(12)			
図版177	中世の遺物(13) 土器(13)			
図版178	中世の遺物(14) 土器(14)			
図版179	中世の遺物(15) 土器(15)			
図版180	中世の遺物(16) 土器(16)			
図版181	中世の遺物(17) 土器(17)			
図版182	中世の遺物(18) 土器(18)			
図版183	中世の遺物(19) 土器(19)			
図版184	中世の遺物(20) 土器(20)			
図版185	中世の遺物(21) 瓦(1)			
図版186	中世の遺物(22) 瓦(2)			
図版187	中世の遺物(23) 瓦(3)			
図版188	中世の遺物(24) 瓦(4)			
図版189	中世の遺物(25) 瓦(5)			
図版190	中世の遺物(26) 瓦(6)			
図版191	中世の遺物(27) 瓦(7)			
図版192	中世の遺物(28) 瓦(8)			
図版193	中世の遺物(29) 瓦(9)			
図版194	中世の遺物(30) 瓦(10)			
図版195	中世の遺物(31) 瓦(11)			

居住地区写真図版

図版219	調査区全景(1)	
	1. 遠景(北から)	
	2. 全景(東から)	
図版220	調査区全景(2)	
	1. 全景(東から)	
	2. 全景(西から)	
図版221	古墳時代の遺構(1)	
	1. SH75001・75002(北から)	
	2. SH75003 土器出土状況	
	3. SH75002 土器出土状況	
	4. SH75003(北から)	
図版222	古墳時代の遺構(2)	
	1. SH75005(東から)	
	2. SH75004(東から)	
	3. SH75006(東から)	
図版223	近世の遺構	
	1. SB95001(北西から)	
	2. 近世土坑(西から)	
	3. SE95001(南から)	
	4. 同上 断割り状況	
図版224	古墳時代の遺物(1)	
図版225	古墳時代の遺物(2)	
	中世の遺物	
図版226	近世の遺物	

第1部

はじめに

第1章 調査地点の概要

第1節 遺跡の位置

1. 遺跡の立地

玉津田中遺跡は神戸市西区玉津町田中（現在の地名は西区宮下1～3丁目）に所在する。当地は神戸市の西端に近く、市の中心部からは西へ約20km、明石の市街地からは北へ約5kmの地点にあたる。遺跡の東側には国道175号線が南北に通り、第二神明道路との交点に玉津インターチェンジが設けられている。

遺跡の立地する場所は、明石川左岸の沖積地から段丘にかけての範囲で、調査前は一面の水田地帯であった。標高は15～23mで、ほぼ平坦な地形となっている。

2. 辻ヶ内地区・居住地区の位置と地形

第4分冊に所収する辻ヶ内地区・居住地区は、調査対象地区の東南部にあたり、田中川を境に東へ突出している部分である。辻ヶ内地区は他の地区と同様、小字名をとって呼称している。一方、居住地区の行政区画上の所在地は玉津町居住字前田で、別の字となるため、字名をとって呼称する。

辻ヶ内地区は現田中集落の南側に広がる沖積地で、標高は15～17mである。地区の北縁から東縁にかけては、段丘崖下の旧河道の存在が判読できる。

段丘崖のへりに沿う里道を間に挟んで、東側に居住地区がある。地区の西端は辻ヶ内地區に接し、東端は国道175号線に取り付いている。段丘上に立地し、標高は15.5～19mで、東から西へ向かって低くなっている。

第2節 明石川流域の地理的環境

明石川は木見峠付近と藍那付近を水源とし、六甲山地の西裾を回り込むように西から南へ向かって流れ下り、明石の市街地を河口としている。

河口付近はアルカを形成しており、元来低湿な土地であったが、近世以降埋め立てられて、城下町として発展してきた。

中下流域では両岸に段丘と沖積地が発達し、条里制地割を伴う水田が最近までよく残されていた。出合付近から上流では扇状地的な地形に変わり、水深は浅くなり、両岸の平野も狭くなる。

平野の背後の丘陵は、両岸で大きく様相を異にしている。

左岸では伊川・天上川・櫛谷川・養田川・性海寺川といった中小規模の支流が六甲山地を侵蝕し、起伏に富んだ地形をなしている。

これに対して右岸では印南野台地が眼前に迫り、比高差50m前後の崖上は平坦な地形となっている。崖面は小さな支谷が複雑に入り組み、あまり大きな支流は認められない。唯一、鍋谷川が雄岡山の南麓まで深く切れ込んでいるのが目立っている。

流域の北面には雌岡山・雄岡山が立ちふさがり、上流は大きく東へ迂回している。標高は雌岡山が249.5m、雄岡山が241.3mで、どちらも円錐形の美しい山容を誇り、古くから信仰の対象となってきた。この付近を中継地として、明石川流域は加古川中流域と連絡することができる。

第3節 歴史的環境

第4分冊の内容は中世を中心としているため、ここでは中世についての歴史的環境を述べたい。

図版3には明石川流域の主な中世の遺跡を示した。これを見ると、中下流域では主に自然堤防や段丘上に集落・城館跡などが立地しており、上流域では台地や丘陵の開析谷を利用した窯業生産に関する遺跡が分布している。

玉津田中遺跡では今回報告する辻ヶ内地区において、12世紀末～13世紀初の居館とみられる遺構が見つかっており、一時期この地域の拠点となっていたようである。そこから東へ約1kmの二ツ屋遺跡でも、12世紀後半の同様な遺構が調査されており、両遺跡の関係が注目される。

また12～13世紀の掘立柱建物群が、玉津田中遺跡の二ノ郷地区・徳政地区、および辻ヶ内地区に隣接する居住遺跡で検出されており、上記の遺跡を拠点とした遺跡群として捉える必要があろう。

下流域には古代から中世にかけて、明石郡の中心地であった吉田南遺跡がある。中世前半には掘立柱建物群や瓦積みの井戸などがあり、中世後半には溝で囲まれた屋敷地の存在が判っている。

こうした明石川中下流域の遺跡の多くは、上流の神出古窯址群と切り離しては考えられない。神出古窯址群は11世紀後半～13世紀にかけて須恵器生産を行った窯跡で、100基程度が分布していると考えられ、現在20ほどの支群に分類されている。その他、粘土採掘坑など関連する遺跡も含めて、神出遺跡群と総称している。図版3で試みに、標高100mの等高線を引いてみると、神出遺跡群をそっくり囲んでしまうことが判った。つまり神出遺跡群は雄岡山の西から南麓にかけて、標高100～140m前後の斜面に展開する遺跡群であると言える。

この神出遺跡群で生産された製品が消費地へ向かって流通する間には、いくつかの中継地が介在したであろうことは想像に難くない。それには明石川中下流域のいくつかの遺跡があてはめられ、玉津田中遺跡もその1つであった可能性は非常に高い。

第2章 調査の経過

第1節 辻ヶ内地区の調査

1. 確認調査

確認調査は第1次・第5次・第12次の3回に分けて実施した。調査の方法は各次調査によって異なるので、それについて以下に述べた。

第1次調査（昭和57年4月12日～6月30日）

まず、調査対象地内の条里制地割方向に合わせて、20m方眼の調査区を設定した。ただし、この調査区はあくまで机上のものであったため、第3次調査の際に設定した50m方眼の調査区に読み替えたことを断っておく。

調査の方法は20m方眼について1箇所の割合で2m×2mの試掘グリッドを設けることを基本とし、場合によって、グリッドの拡張あるいは省略を行った。辻ヶ内地区内で設定したグリッドは計46箇所である。グリッドの名称は、50m方眼の地区名とグリッドNo.を組み合わせて呼称することにする。

調査の結果、中世（平安時代末～鎌倉時代）と弥生時代後期～庄内式併行期の2枚の遺構面を確認した。特に中世の面では、K11-5グリッドで円形土壙、またK11-8グリッドで石組井戸、L11-2グリッドで礎石と思われる石と多量の瓦が出土するなど、顕著な遺構・遺物が認められた。さらにK11・L11調査区周辺で中世の遺物がまとまって出土しており、同地区を中心に、屋敷跡の存在が予想された。

弥生時代後期～庄内式併行期の面では、K11区を中心に遺物包含層を検出した。

第5次調査（昭和59年4月12日～昭和60年3月31日）

第1・2次調査においては、2m×2mの試掘グリッドによる確認調査を行っていた。しかし堆積状況の変化が激しい沖積地における広大な遺跡の性格を把握するためにはトレンチ調査が不可欠であるとの観点から、第3次調査からは2m幅の試掘トレンチを重機掘削して断面観察を行い、遺構を検出した際には適宜平面調査を行うという手法を取り入れた。また地理学的視点から、当時立命館大学院生であった高橋一学・前葉和子の両氏が調査に参加し、実際の土層断面の分析をもとに、地形環境の復原を行った。

第5次調査では、調査対象地全域で試掘トレンチ調査を行う一方、辻ヶ内地区と竹添地区において全面調査に着手した。辻ヶ内地区では第1次調査の結果に基づいて、辻ヶ内1区で全面調査を行うとともに、中世の遺構の広がりの北・南・東限を抑えるために、KM14～17トレッヂを設定した。

KM14・15トレッヂでは埋没段丘崖下の流路と水路を検出し、北限を抑えることができた。KM14トレッヂの水路からは中世の土器・瓦が出土しており、後の調査で方形居館を囲む堀の一

部であったことが判明した。

KM16トレンチでは中世の土器が多量に出土し、遺構の広がりが調査対象地の南側にも続くことを確かめた。また後の調査によって、この地点は居館内の池であったことが判明した。

KM17トレンチでは水田土壤層を認めたが、遺物の混じりが次第に稀薄になるため、これより東には遺構の範囲は広がらないものと判断した。

第12次調査（平成2年5月15日～5月24日）

辻ヶ内・唐土・狭間地区の中で、これまで調査が行われていなかった部分について、確認調査を実施した。辻ヶ内地区では、1m幅×6mのトレンチ2箇所について、人力掘削した。

調査の結果、トレンチ内では明確な遺構面を見出すことができず、遺構はないものと判断した。

2. 全面調査

確認調査によって遺構・遺物が認められた範囲のうち、遺構面が破壊される恐れのある道路予定地および擁壁部分について、全面調査を第5次・第9次・第10次・第13次の4回に分けて実施した。

第5次調査（昭和59年4月12日～昭和60年3月31日）

辻ヶ内地区と竹添地区において全面調査を行った。このうち辻ヶ内地区では、12m幅の幹線道路部分で、辻ヶ内1区の調査を行った。調査区の範囲は幅12m、延長179m、面積2148m²である。

なおここでは、道路センターを利用した辻ヶ内1区独自の座標を設定し、調査の記録に用いた。辻ヶ内1区の座標は、第3次調査時に設定した50m方眼の調査座標に対してN18°33'37"W、国土座標に対してN3°10'00"E31Eの関係にある。ただし辻ヶ内2区以降の調査では、50m方眼の調査座標を使用しているため、報告書ではそちらに振り替えている。

調査の結果、辻ヶ内1区の西半部では東西1町の間隔で平行する2本の大溝や、庭園の池とみられる遺構など特徴的な遺構・遺物が数多く出土し、今後の周辺の調査の進展が期待された。なお第1次調査のK11-8グリッドで石組井戸とされていたものは、沼状の落ち込み（後に池の一部であったと判る）に伴う転石であることが判明した。またL11-2グリッドで礎石と言われていた石の周囲からは新たな礎石は出土せず、立地の面からみても、建物がある可能性は薄いと判断した。

この他、ほぼ同一の面で弥生時代中期～後期の遺構・遺物も検出した。

第9次調査（昭和62年7月11日～10月31日）

辻ヶ内・亀ノ郷・下町・池ノ内・二ノ郷地区において全面調査を行った。このうち辻ヶ内地区では、幹線道路の南側をコの字形にめぐる6m幅の区画道路部分で、辻ヶ内2区の

調査を行った。調査区の範囲は幅6m、延長171.5m、面積1052m²である。

辻ヶ内2区では当初、コの字形の区画道路の西辺と南辺のみを調査対象としていた。しかし中世面の調査を終えた後、重機による断ち割りを行ったところ、下層に弥生時代中期下層以前とみられる水田面を発見した。そこで急速、下層の調査を進めるとともに、遺構面の広がりが予想されるコの字形の東辺についても調査を拡張した。拡張した地区では、図らずも中世の掘立柱建物跡をも検出することができ、中世の遺構の広がりに新たな知見が加わった。

第10次調査（昭和63年10月17日～平成元年3月20日）

辻ヶ内・徳政・二ノ郷・亀ノ郷・下町・西ヶ市地区において全面調査を行った。このうち辻ヶ内地区では、南側の擁壁部分である辻ヶ内3・4区の調査を行った。調査区の範囲は辻ヶ内3区が幅4m、延長37.5m、面積150m²、辻ヶ内4区が幅3.5m、延長126m、面積443m²である。

辻ヶ内3区では辻ヶ内2区から続く遺構面の調査を行ったが、調査区内を現代の水路が貫流していたため、遺構を検出できた範囲は調査区の西端7mほどに過ぎず、それ以東は削平されてしまっていた。

辻ヶ内4区では辻ヶ内1区で検出した中世および弥生時代中期～後期の遺構面と、辻ヶ内2区で検出した弥生時代中期下層以前の水田について調査した。その結果、辻ヶ内1区から続く遺構については検出することができたが、辻ヶ内2区の弥生時代中期下層以前の水田とのつながりについては明らかとならなかった。調査の際に、宮崎大学農学部の藤原宏志教授にプラントオパール分析を依頼し、土層断面からサンプルを採集した。

第13次調査（平成2年6月4日～平成3年3月25日）

辻ヶ内・竹添・池ノ内・黒岡・亀ノ郷・狭間・唐土地区において全面調査を行った。このうち辻ヶ内地区では、幹線道路から北側にある6m（一部4m）幅の区画道路部分で、辻ヶ内5～9区の調査を行った。調査区の範囲は辻ヶ内5区が幅6m、延長145m、面積876m²、辻ヶ内6区が幅6m、延長59m、面積約354m²、辻ヶ内7区が幅5～6m、延長72m、面積380m²、辻ヶ内8区が幅6m、延長26m、面積162m²、辻ヶ内9区が幅4m、延長17m、面積72m²である。

調査では、辻ヶ内1・4区で見つかっていた中世の堀が方形に廻ることや、辻ヶ内1区で沼状の落ち込みとしていた遺構が実は広大な池の一端であったことなど、重要な事実が次々と明らかとなったため、この成果について9月22日に現地説明会を開催し、一般に公開した。

第2節 居住地区的調査

1. 調査にいたる経過

居住地区には田中特定土地地区画整理事業の予定地内と国道175号線とを結ぶ都市計画道路市道北玉津環状線の建設が計画された。この事業は神戸市土木部から住宅・都市整備公団が委託を受けて実施するため、公団との協議の結果、兵庫県教育委員会が昭和60年度に確認調査を行った。

確認調査の結果、全面調査の必要が認められた範囲については、引き続き昭和61年度に兵庫県教育委員会が発掘調査を行った。

2. 確認調査

確認調査は玉津田中遺跡の第6次調査の中で行った。

第6次調査（昭和60年4月30日～昭和61年3月31日）

居住地区はほとんどが段丘上に立地し、国道175号に接続する東側から、西側の辻ヶ内地に向かって低くなる地形を呈している。現状では5段の水田となっている。

5段の水田のうち、最も東側の最上段の水田部は調査を行えなかつたが、以下の4段の水田の市道建設予定地部分に、幅3m、延長約90mのトレーニングを設定し、表土を重機で除去した後、遺構を精査した。

調査の結果、2～4段目の水田部で古墳時代後期・平安時代・近世の遺構・遺物を検出し、調査を行わなかつた最上段の水田部にも遺構が広がるものと推定できた。一方、5段目の水田部では段丘崖下の旧河道を検出し、若干の遺物も出土したが、全面調査の必要は認められなかつた。

3. 全面調査

居住1区の調査（昭和61年5月29日～8月30日）

確認調査の結果を受けて、最上段～4段目の水田部の市道予定地部分を調査対象地とした。但し、隣接する店舗への進入路確保の関係で、2回に分けて調査した。調査範囲は、幅12m、延長約90mである。

調査の結果、古墳時代後期・平安時代・近世の遺構がほぼ同一面で検出できた。

古墳時代後期の遺構はほとんどが調査区の東半部で見つかり、竪穴住居跡6棟などがある。

平安時代の遺構は、わずかにピットが見つかった程度である。

近世の遺構は主に調査区の西半部で見つかり、掘立柱建物跡1棟、井戸1基の他、土坑・溝などがあった。

表1 第4分冊関係調査一覧表

調査次	期 間	種別	調査区	面 積	調査主体	調査担当者	遺跡調査番号
第1次	昭和57年4月12日 ～6月30日	確認	坪堀り	188m ²	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課	技術職員 大平 茂 技術職員 山下史朗	820041
第5次	昭和59年4月12日 ～昭和60年3月31日	確認 全面	KM14～17 トレンチ 辻ヶ内1区	100m ² 2160m ²	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課	主任 山本三郎 技術職員 加古千恵子 技術職員 中川 渉	840016
第6次	昭和60年4月30日 ～昭和61年3月31日	確認	居住トレンチ	270m ²	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課	技術職員 深井明比古 技術職員 篠宮 正	850011
	昭和61年5月29日 ～8月30日	全面	居住1区	1080m ²	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課	技術職員 深井明比古 技術職員 村上賢治	860026
第9次	昭和62年7月11日 ～10月31日	全面	辻ヶ内2区	1052m ²	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課	技術職員 中川 渉 菱田淳子	870011
第10次	昭和63年10月17日 ～平成元年3月20日	全面	辻ヶ内3・4区	593m ²	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課	技術職員 中川 渉 菱田淳子	880011
第12次	平成2年5月15日 ～5月24日	確認	90-17・18 グリッド	12m ²	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所	主任 山下史朗 技術職員 鈴木敬二 事務職員 広野 誠	900019
第13次	平成2年6月4日 ～平成3年3月25日	全面	辻ヶ内5～9区	1844m ²	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所	主任 山下史朗 技術職員 中川 渉 技術職員 多賀茂治 技術職員 鈴木敬二 事務職員 広野 誠	900009

第3節 出土品整理作業

玉津田中遺跡の整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において行った。そのうち、第4分冊にかかる遺物整理作業は、平成5年度～平成6年度に実施した。

1. 平成5年度の整理作業

行った作業は土器の接合・補強・実測・拓本・復元、木器・石器の実測、遺物の写真撮影・写真整理、木器の樹種同定などである。

整理担当職員	整理普及班
技術職員	中川 渉
整理技術嘱託員	主任技術員 宮田 麻子・山口 卓也・古谷 章子
企画技術員	岡田依理子・岡崎 輝子・多賀 直子 松村 肇
図化技術員	本窪田英子・香川フジ子・茨木恵美子 前田千栄子・杉本 淳子・藏 幾子 蓬萊 洋子・西原美知代・光澤 鈴子 伊藤ミネ子・川上 啓子・衣笠 雅美 長谷川洋子
図化補助技術員	林 寿珠子・江口 初美・家光 和子 真田美恵子・船木 昌美・井上 誠子

2. 平成6年度の整理作業

行った作業は土器の実測・復元、遺物の写真撮影・写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、金属器・木器の保存処理、印刷などである。

整理担当職員	整理普及班
主任	中川 渉
整理技術嘱託員	主任技術員 宮田 麻子
企画技術員	多賀 直子・杉本 淳子
図化技術員	本窪田英子・香川フジ子・石野 照代 和田寿佐子・西野 淳子・吉田 優子 蓬萊 洋子・西原美知代・伊藤ミネ子 川上 啓子・衣笠 雅美・長谷川洋子 喜多山好子・川上 緑
図化補助技術員	江口 初美・家光 和子・島村 順子 高鳴 美和・村上 京子

第2部 辻ヶ内地区の調査

第1章 調査の概要

第1節 概 要

第1部すでに述べたように、辻ヶ内地区では昭和57・59年度、平成2年度に確認調査を行い、昭和59・62・63年度、平成2年度に全面調査を行った。

全面調査は12m幅の幹線道路、6m(一部4m)幅の区画道路および擁壁部分を対象とし、辻ヶ内1~9区の調査区を設定した。

以下、調査区ごとに概要を述べる。

辻ヶ内1区

見つかった遺構は中世・弥生時代中期~後期のもので、ほぼ同一の面で検出した。

中世の遺構は西半部に集中し、東半部では水田畦畔が認められたのみである。西半部では、東西約1町の間隔で2本の堀を検出し、その堀に挟まれた範囲で造り水を伴う池と沼状の落ち込み、その他鍛冶炉・土坑・ピットといった遺構を検出した。池や堀などからは大量の土器・瓦とともに将棋の駒(桂馬)・独楽・漆椀・呪符木箋など多様な木製品が出土し、地域の有力者の館が存在すると考えられた。

弥生時代後期の遺構には溝が1本ある。溝中から完形に近い土器を多く含む一括資料が出土している。また調査区の西端では弥生時代中期~後期の流路状の遺構を検出した。中世の遺構に切られていて、流路の輪郭は不明であるが、概ね北から南へ流れているものとみられる。遺物は上層から後期の土器、下層から中期の土器が出土している。

辻ヶ内2区

調査は中世と弥生時代中期上層および弥生時代中期下層の遺構面について行った。

中世面では条里方向の水田畦畔と、掘立柱建物跡を検出した。この掘立柱建物跡はKM17トレンチに近接した地点にあり、辻ヶ内地区の東端付近にも遺構が分布することが判明した。

調査区を断ち割ったところ、中世面の約1m下で、洪水砂に覆われた水田面を検出した。これは小区画の方形水田とみられ、2箇所で大畦畔も見つかった。大畦畔より出土した土器片から、弥生時代中期下層以前の年代が考えられる。

この他、上下の層の間で、弥生時代中期上層の時期の溝を1本検出した。この溝は南接する居住遺跡につながるものと考えられる。

辻ヶ内3区

調査は辻ヶ内2区に対応する中世と弥生時代中期下層の遺構面について行った。しかし現代の水路によって大きく削られていたため、遺構を検出できた範囲は調査区西端のごく一部である。

中世面では条里境の水路とそれに伴う畦畔が検出できた。

弥生時代中期下層面では水田面と畦畔が検出できた。

辻ヶ内4区

調査は中世と弥生時代中期上層～後期および弥生時代中期下層の遺構面について行った。

中世面では辻ヶ内1区から続く2本の堀と池の一部などを検出し、堀が事業予定地からさらに南へ続くことと、池の南限を抑えることができた。

弥生時代中期～後期の面では、調査区の西半部で複数の溝・土坑・ピットなどを検出した。この複数の溝は、辻ヶ内1区西端の流路状の遺構から続くものと考えられる。

辻ヶ内2区で調査した弥生時代中期下層の水田の続きは、調査区の東端では認められたものの、現代の水路や中世の堀による攪乱の西側では追跡できなかった。

辻ヶ内5～9区

調査は中世と弥生時代後期および弥生時代中期下層の遺構面について行った。

中世の遺構は辻ヶ内5～8区で検出した。特に辻ヶ内5区の西半部と辻ヶ内6・8区では、辻ヶ内1・4区から延長する堀の西・北・東辺を抑えることができ、堀が方形に巡っていることが明らかとなった。また辻ヶ内1区で沼か流路と見られていた落ち込みが池であることも判明し、辻ヶ内1区の造り水を伴う池とも一体となった、巨大な池である可能性も考えられた。この他、瓦葺建物跡・掘立柱建物跡・井戸なども見つかり、東西1町、南北1町以上の規模をもつ、本格的な方形居館の存在が浮かび上がった。

また辻ヶ内5・7区では、条里制地割に伴う溝を検出した。この溝は辻ヶ内1・4区につながるもので、居館東辺の堀から10数m西へずれている。断面観察から、この溝は居館の遺構よりも古くからあったと考えられ、居館の選地の問題とも絡んで、興味深い。

さらに辻ヶ内5～8区では、堀の外周に沿って開削された水路を検出した。この水路は辻ヶ内1・4区でも見つかっており、戦前の水害で埋まったものと認識していた。しかし今回辻ヶ内6区でも同様の状況であったことから、水路の開削の時期が、堀を埋めた段階まで遡る可能性も生じてきた。

この他、辻ヶ内5区の東半部において中世の水田跡を調査した。しかし水田面の遺存状況が悪く、畦畔の痕跡を1本検出したのみである。

弥生時代後期の遺構は辻ヶ内5区の西端と6区に集中して見つかった。検出した遺構には、竪穴住居跡・溝・土坑などがある。

弥生時代中期下層の遺構としては、辻ヶ内2区の弥生時代中期下層以前の水田に対応する面の検出に努めた。しかし遺存状況が悪く、畦畔らしき高まりを1箇所検出したのみで、判然とはしなかった。

第2節 土層断面図

1. 土層の概要 (図版7~10)

辻ヶ内地区の東西・南北方向の断面図を5箇所掲げた。その土層の検討から、辻ヶ内地区的土層堆積を、およそ10の段階に分類した。

第I段階 近現代の盛土・耕土・洪水砂である。洪水砂は地区を広く覆っており、坪境の水路を一気に埋積している。特に地区の西北部の堆積が厚く、本来旧河道のために低かったはずの水田面が、現状では一段高くなっている。地元の方の話では、この洪水砂は昭和13年の阪神大水害によるもので、それ以来水路は埋もれたままのことである。

第II段階 近世の水田土壤で、数面に細分が可能である。灰白色を呈し、瘦せた土壤と見受けられる。鉄分の沈着が著しく、酸化が進んでいる。上面は現代の耕土の床土ともなっている。

第III段階 中世の水田土壤で、中世の遺物包含層ともなっている。暗灰色を呈し、シルト分の強い土層である。

第IV段階 中世居館の遺構が掘り込まれ、それが埋積していく段階である。地区の主体となる遺構であり、かつ堆積土量も大きいため、特にこの段階を設けた。堀・池などの大きな掘削面では、湛水した状況での堆積が認められ、土器・木器の他、植物遺体も多量に含まれている。遺構の上層は人為的に埋め戻されている場合が多い。

第V段階 居館造成以前の中世の堆積土で、白色の洪水砂とブロック混じりの土壤層からなる。辻ヶ内4区の西半部でのみ検出しており、堀・池などがこの層を切って掘り込んでいる。一方、条里制地割に伴う南北方向の溝はこの層に覆われているところから、居館造成以前に条里制地割が施行されていたことが判る。

第VI段階 弥生時代後期～中世の堆積土である。地区の西半部では弥生時代後期の遺構を覆い、中世の遺構が掘り込まれている。東半部は水田であったとみられ、遺物がほとんど無いため判別が困難である。

第VII段階 弥生時代中期上層～後期の堆積土である。地区の西半部では堆積が少なく、第VI段階とほぼ同一面である。東半部は水田であったとみられ、中期上層の溝を覆っている。

第VIII段階 弥生時代中期下層～中期上層の堆積土である。辻ヶ内2・3区では中期下層の水田面を厚い洪水砂で覆っている。この洪水砂は辻ヶ内1・4区になるとはっきりしなくなり、途切れてしまう。

第IX段階 縄文時代晩期～弥生時代中期下層の堆積土である。地区の西半部では比較的厚く堆積しており、微高地を形成している。東半部は後背湿地で、グライ化が著しく、水田として利用されている。

第X段階 縄文時代晩期以前の堆積土である。遺跡全体に広く堆積している湿地性の黒色シルトと洪水砂の互層である。

2. 辻ヶ内1区北壁の土層断面図（図版7）

地区的中央を東西に横断する断面図である。

第I～III段階 中世の水田畠畔は近世から現代に至るまで、概ね踏襲されていることが見て取れる。

第IV段階 中世居館に伴う東西の堀SD85001、池SG85001の造り水、SG85002などを連続的に見ることができる。遺構の検出面は西側の堀付近で16.0m、東側の堀付近で15.2mで、100mの間で約80cmの比高差が認められる。

第VII・VIII段階 弥生時代中期上層～後期の遺構は地区の西半部にのみ認められる。

3. 辻ヶ内2～4区北壁の土層断面図（図版8）

地区的南端を東西に横断する断面図である。

第IV段階 東西の堀SD85001の延長を確認し、居館の範囲が調査対象地区よりも南へ広がることが判明した。また池SG85001の一部がかかっており、南端を抑えることができた。しかしSG85002はここまで続いておらず辻ヶ内1区と4区の間で収まることが判った。

第V段階 辻ヶ内4区では居館の遺構と条里に伴う溝SD85010の間に挟まる、薄い白色の洪水砂とその土壤層を検出した。この洪水砂に覆われて出土した須恵器片口鉢（5601）の年代から、当地域の条里制施行が11世紀末～12世紀初頭頃まで遡る可能性がある。

第VII段階 東半部で弥生時代中期上層の溝を1本検出した。この溝は南接する居住遺跡へ直線的につながっており、水田に伴う水路と考えられる。

第IX段階 東半部で弥生時代中期下層の水田面を良好な状態で検出した。この付近はこれ以後現代にいたるまで、もっぱら水田として利用され続けてきたものと思われる。

4. 辻ヶ内2区西壁、辻ヶ内8・9区東壁の土層断面図（図版9）

地区的中央を南北に縦断する断面図である。8区では近現代の水路と居館の東側の堀を縱に切っており、2・9区では堀・水路より東側の土層が見えている。

第Ⅰ段階 近現代の水路は洪水性の砂礫によって一気に埋まっている。溝底にそれ以前の堆積は少なく、定期的に溝浚えが行われていたものとみられる。

第Ⅰ～Ⅲ段階 2区の南端は坪境となっており、中世から現代にかけて水路が踏襲されている。この水路と中世の堀との関係は、攪乱されているため、不明である。

第VI～VIII段階 8区の北端は段丘崖下の旧河道部分にあたっている。弥生時代中期頃には既に埋まっていたが、弥生時代後期以降も頻繁に水の流れ道となっている。

第IX段階 2区では弥生時代中期下層の水田面を良好な状態で検出した。1区を挟んだ北側の9区では、延長とみられる土壌層はあるが、良好な状態では検出できなかった。

5. KM14・15トレント西壁の土層断面図（図版10）

段丘崖下の旧河道部分を南北に断ち割った確認トレントで、中世の遺構の広がりの北限を抑えるために設定した。西側の14トレントでは、中世居館の堀と旧河道の関係がよく判る結果となった。

第IV段階 トレントの北端で、中世居館の北側をめぐる堀の南肩を検出した。堀は旧河道を切って掘り込まれており、埋土中からは土器・瓦などが出土した。

第2章 弥生時代中期下層の遺構

第1節 概要

調査した遺構には水田跡がある。辻ヶ内2区では水田面が洪水砂にパックされた状態で見つかった。しかし辻ヶ内1・4・5区では水田土壤層の延長が認められたものの、辻ヶ内2区ほど明瞭に洪水砂が堆積していなかった。従って、水田跡が良好に遺存している範囲は、辻ヶ内地区の中でも東南部の、辻ヶ内2区を中心とした範囲に限られるとみられる。

第2節 水田跡

検出した水田跡は49筆分であるが、調査区の幅が1～4mしかなかったため、水田1筆全体を検出できたものはない。水田の輪郭は長方形で、定形小区画水田に分類できる。

水田1筆ごとを区切る小畦畔には、北西—南東方向と北東—南西方向の2種類がある。北西—南東の小畦畔は、地形の傾斜に沿って長い延長をもち、5～8cmの高さがある。畦畔の方向は東に行くほど北—南方向に近づいており、これは辻ヶ内地区の東縁で、旧河道が南北方向に流れを変えるためと考えられる。

北東—南西の小畦畔は、北西—南東の小畦畔の間を千鳥状に区切っており、高さはやや低く3～4cmのものが多い。両者はT字状に接続し、決して交わらないのが特徴である。水口を設けておらず、水は北東—南西の畦畔越しに回したものと考えられる。

水田を大きく区画する大畦畔は、2箇所で見つかった。2区の北西端の大畦畔は北東—南西方向のもので、幅1.6m、高さ8～14cmである。この畦畔より北側では洪水砂の堆積が少なく、畦畔は検出できなかった。

もう1箇所の大畦畔は、2区の中央やや東寄りにある。ほぼ北—南方向を向き、幅2.5m、高さ30～40cmで、傾斜方向に沿った畦畔の方が高く作られているのは、小畦畔の場合と同じである。この大畦畔には2つの特徴が認められた。まず水田面の高さが北西端から大畦畔に向かって14.25～13.9mと徐々に低くなっていたのが、この大畦畔を境に一旦14.0mまで高くなり、また東南端では13.8mまで低くなるという現象が現れた。つまり大畦畔は水田面の高さを調節する役割を担っていたようである。さらにこの大畦畔の両脇の水田面は特に低く作られており、水路としての機能も兼ね備えていたと考えられる。

遺物は、大畦畔の盛土の中から出土した数点の弥生土器のみである。小片のため図化できなかったが、胎土の特徴などから、II様式以前のものとみられる。また徳政地区においても、弥生時代中期下層以前の水田が定型小区画であったことから、この水田跡についても弥生時代中期下層以前のものと捉えられる。

第3章 弥生時代中期上層の遺構

第1節 概 要

遺構が分布する範囲は、辻ヶ内地区の西南部と東南部に分かれる。

西南部は竹添地区から続く自然堤防の縁辺部にあたり、若干の土坑の他、幾筋もの溝や流路状の堆積が認められる状況であった。

東南部は旧河道と微高地に挟まれた後背湿地にあたるため、遺構の密度は希薄で、溝を1本検出したのみである。

第2節 土 坑

土坑は辻ヶ内4区の西端部で3基見つかった。

SK45001 (図版16)

4区の西側に位置する。平面橢円形で、規模は長軸0.7m、短軸0.4m、検出面からの深さ0.15mである（以下、特に断りのない限り、遺構の深さは検出面からのものとする）。

SK45002 (図版16)

4区の西側に位置する。平面不整形で、規模は長軸1.1m、短軸0.65m、深さ0.35mである。出土土器には5001がある。

SK45003 (図版16)

4区の西側に位置する。平面不整形で、規模は長軸0.9m、短軸0.35m、深さ0.1mである。

第3節 溝

溝は辻ヶ内4区の西端で4本、辻ヶ内2区で1本見つかった。この他、遺構のラインが不明であったため図には示していないが、辻ヶ内1区の西端でも流路状の堆積が認められた。このうち辻ヶ内1・4区の溝・流路は、微高地の北縁に沿って掘削された溝もしくは自然流路で、同じような立地の溝・流路を竹添17区でも検出しており、その延長の可能性がある。

SD45001／45002（図版16）

4区の西端にあり、平行して走る。北半部は中世の溝に切られている。規模は幅1.0～1.1m、深さ0.4mである。

SD45003（図版16）

4区の中世の堀SD85001に西半部を切られているため、西肩は検出できなかった。規模は幅1m以上、深さ0.7mである。中下層の遺物はローリングを受けて磨滅が激しい。出土土器のうち、図示した5002・5003は上層の土器溜まりのものである。堆積状況は1区西端で検出した流路状の堆積の下層とよく似ており、一連のものと考えられる。5004～5012の土器は包含層扱いとしているが、1区西端の流路からの出土である。

SD45004（図版16）

4区SD45003の東側に位置する。規模は幅1.0m、深さ0.5mである。

SD45005（図版16）

2区の中央に位置する。幅0.7m、深さ0.4mの直線的な溝で、南接する居住遺跡のSX02につながる。立地からみて水田に伴う水路と考えられるが、畦畔状の盛り上がりは認められなかった。遺物は出土しなかったが、居住遺跡ではIV様式の土器が出土している。

第4章 弥生時代後期の遺構

第1節 概 要

弥生時代後期の段階では、地区の西半部の微高地が拡大し、中期よりも広い範囲で遺構が見つかった。検出できた遺構には竪穴住居跡・土坑・溝などがある。また東半部には水田域が広がっていたものと考えられるが、良好な状態では遺存しておらず、判然としなかった。地区の北縁部は河道となっており、これについては次章に譲る。

第2節 竪穴住居跡

SH55001（図版21）

5区の西側に位置する。平面長方形で、南端は調査区外で検出できなかった。規模は東西3.2m、南北2.9m以上、深さ0.1mである。床面の中央やや東寄りに中央土坑があり、土坑内には炭層が堆積していた。規模は長軸1.45m、短軸1.0m、深さ0.1mである。柱穴は掘り方の北辺に沿って1本のみ検出できた。住居の規模も小さいところから、2本柱の可能性が高い。住居跡の東北隅から、土器製作用のデボとみられる、きめの細かい粘土の固まりが出土している。出土土器には5013がある。

第3節 土 坑

SK55001（図版22）

6区の中央に位置する。平面梢円形で、規模は長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.1mである。

SK55002（図版22）

6区の中央に位置する。平面不整形で、規模は長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.2mである。

SK55003（図版22）

6区の中央に位置する。平面不整形で、規模は長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.2mである。

SK55004（図版22）

5区の西端に位置する。平面円形で、規模は直径0.7m、深さ0.35mである。

SK55005 (図版22)

5区の西端に位置する。溝状の細長い土坑で、北端は溝に切られている。規模は長軸2.6m以上、短軸0.95m、深さ0.3mである。

SK55006 (図版22)

5区の西端に位置する。平面円形で、規模は直径0.6m、深さ0.15mである。出土土器には5014がある。

SK55007 (図版22)

5区の西側に位置する。平面円形で、規模は直径1.55m、深さ0.2mである。

SK55008 (図版22)

6区の中央に位置する。調査区の端に一部が辛うじてかかっていた。規模は短軸1.0m、深さ0.85mである。断面形は垂直に近く掘り込んでおり、一度掘り直された形跡がある。出土土器には5015がある。

第4節 溝

SD55001／55002 (図版23)

5・6区を東西に流れる。SD55001は幅1.1m、深さ0.3mである。出土土器には5016～5019がある。SD55002はSD55001から分かれる細い溝で、幅0.6m、深さ0.15mである。

SD55003 (図版23)

5・6区を西—南東方向に流れる。幅1.05m、深さ0.3mである。

SD55004 (図版23)

1・6区を北西—南東方向に流れる。幅0.75m、深さ0.15mである。特に辻ヶ内1区において完形品を多く含む土器群(5024～5040・5042～5047)が出土しており、良好な一括資料である。

SD55005 (図版23)

1・4区を北西—南東方向に流れる。幅1.2m、深さ0.5mである。土器はローリングを受けており、磨滅が激しい。堆積状況は1区西端の流路状の堆積の上層とよく似ており、一連のものと考えられる。1区からは壺(5049・5051・5054)、甕(5055・5057・5058)、土鍤(5059～5062)などがある。

4区を北西-南東方向に流れる。幅0.95m、深さ0.3mである。出土土器には5020~5023がある。

第5章 旧河道

辻ヶ内地区の北側には洪新世に形成された段丘崖があるが、これに沿って弥生時代以来の河道SR54001が流れている。この河道は北側の狭間地区・西ヶ市地区・池ノ内地区でも検出されている。辻ヶ内地区では7区と8区においてこの河道を検出している。河道は洪水堆積物である砂・シルトによって埋没しており、弥生時代中期に堆積した砂礫によってその規模を著しく減じている。この砂礫層の上には、シルト層が堆積するが、そこから弥生時代後期から古墳時代前期に至る遺物が少量出土している。

河道はその後、古墳時代後期に大きな洪水があったらしく、それ以前に堆積したシルト層を削り込んで、幅の狭い流路が形成されている。この流路からは古墳時代後期の遺物が出土し、またその上層からは奈良時代の遺物も出土している。辻ヶ内地区に居館が造営された平安時代末期には、河道は完全に埋没しており、浅い凹地として残っていたようである。川の機能自体はほとんど失われているが、その後も洪水の通り道になっていたらしく、河道の周辺は砂・シルトの堆積が著しい。

旧河道から出土した遺物には、弥生時代後期の土器(5066・5068~5070)、古墳時代前期の土器(5063~5065・5067・5071・5072)、古墳時代後期の土器(5073~5076・5078)、奈良~平安時代の土器(5077・5079~5082)がある。

第6章 中世の遺構

第1節 概要

辻ヶ内地区では全面調査を行ったほぼ全域で、中世の遺構および遺物包含層を検出した。中でも地区のほぼ西半部を占める形で、堀に囲まれた方形居館の存在が明らかとなった。見つかった遺構には、方形居館とそれに付随する各種の遺構の他、掘立柱建物跡、水田跡およびそれに伴う条里制地割などがある。方形居館は堀を方形にめぐらしており、その敷地内に建物・庭園・井戸などの施設を設けていた。

以下、個々の遺構について説明を加える。

第2節 堀

SD85001（図版30～32）

辻ヶ内地区では1区、4区、5区、6区、8区において平安時代末期の遺物が出土する溝を検出した。溝はいずれも幅5m前後、深さが検出面から1.4m前後であり、ほぼ同じ規模をもつ。また埋土の状況も、下層に灰色系のシルト、中層に植物遺体を多く含んだオリーブ灰色のシルト、上層に粘土のブロックを含んだ灰色系のシルト質砂が堆積するという共通性を示す。また溝の走行する方向を追うと、これら全ての溝が連続することが明らかになった。以上のことからこれらの溝は堀であると判断し、すべての溝にSD85001という名称を与えた。

堀は池・建物など平安時代末の遺構が集中する部分をコの字形に取り囲む。その規模は溝の外側で東西104m、南北が100m以上になる。南北方向の堀は条里制地割の方向に従い、西側・東側の堀が完全に平行している。南北方向の方位は、おおよそN16°Eである。北側の堀は南北方向の堀と西側では110°の鈍角でつながり、東側では70°の鋭角でつながる。このため北側の堀は条里制地割の東西方向とは約20°ずれている。堀の総延長は調査範囲内で約260mである。

次に1区と6区における堀の土層断面について説明してゆく。1区東側の堀は弥生時代の遺構面を掘削し、底は縄文時代の堆積である黒色シルト層にまで達している。断面の形状は底が平らで、堀の内側・外側とともに約30°の傾斜をもつ。最下層（第9層）には青灰色の極細砂質シルトが堆積する。これは堀が機能していた段階での堆積物である。その上には第8層としてオリーブ黒色のシルトが堆積する。この層には植物遺体・土器・瓦・木製品などが多量に含まれており、堀が機能していた段階での堆積である。その上は第7層の青灰色のシルト層をはさんで植物遺体を含むシルト系の第5層・第6層が堆積する。第5層までが平安時代末の遺物包含層であり、これらの層が堆積したころには堀の機能はほと

んど失われていたのであろう。その上の第1層から第4層は黒色シルトブロックを含む人為的な埋土である。堀に並行して近世まで機能していた溝が掘削されていることから、この土はその際の掘削土であると考えられる。この層の堆積でもって堀は全くその痕跡を失っている。

6区の堀も底は黒色シルト層にまで達している。底は平らであり、1.8mほどの幅を持つ。堀の内側は約50°の急な傾斜になっており、外側は約30°のゆるやかな傾斜をもつ。最下層の第13層はその上の堆積に切られているのが観察された。第13層が堀底に堆積した後に、人為的に堀底を再掘削しているようである。第9層から第12層までは灰色系のシルトもしくはシルト質砂であり、土器が少量含まれる。その上の第6層から第8層までは黒色シルトのブロックを含む人為的な埋土である。この段階で堀底の整形をおこなったようである。第2層から第5層は植物遺体を多く含むシルト層であり、土器・瓦も多く含まれる。最上層の第1層は黒色シルトブロックを多量に含んだ人為的な埋土であり、11区の堀の最上層同様、堀に並行して走る新しい水路の掘削土と考えられる。

1区と6区の土層を比較してその対応関係を考えると、以下のようなになる。1区の第1層から第4層は6区の第1層に対応し、1区の第5層・第6層が6区の第2層から第5層までと対応し、1区の第9層が6区の第8層に対応する。6区において、堀の再掘削や底の整形が行われているのは、6区が1区に比べて相対的に低い位置にあり、旧河道に近いため洪水による堆積が激しかったためであろう。

堀SD85001は埋土の堆積状況から水を溜めた、あるいは水が流れていた水濠であったことが窺われる。堀に区画された内部には広大な池SG85001・85002があり、これへの導水の役割も果していたのであろう。堀の北側には段丘崖に沿って走る旧河道SR55001があり、西側には現田中川が流れている。1区西側の堀には西側に続く溝SD85002が、4区の西側の堀には西側に続く溝SD85003が検出されている。これらの溝が堀への給排水の役割を果していたのであろうが、これらの溝の西側には田中川が流れしており、この方面から導水されていたと考えるのが妥当であろう。

堀の南側は調査対象範囲外となるため、どのようにになっているかは明らかではないが、区画の機能を果たすためには東西方向の堀が北側同様に掘削されていた可能性が高い。しかし航空写真の判読から、近世まで機能していた堀に沿う水路が、明石川本流まで直線的に続いていることが窺われる(図版5)。もしこの水路が完全に堀と同一の経路を走るものならば、堀の南端は閉じずに明石川本流まで続いていた可能性もある。

最後に堀からの出土遺物を挙げておく。遺物はいずれも堀の下層・中層から出土している。6区の堀では土器類は下層に多く、瓦・木製品は中層に多いという傾向が窺われる。1区東側・5区の堀では特に瓦の出土が多い。木器のうち、船形は5区からの出土である。出土遺物のうち、土器は図版51~53、木器は図版109~111に掲げた。瓦は遺構別には掲載していない。

第3節 池

池の概要（図版33）

辻ヶ内地区で見つかった池は、居館の中で最も広大な面積を占める遺構であり、庭園の景観の中で、最も重要視された要素と見なすことができる。従って、池の復元如何によって、庭園の構成が左右されることもあり、慎重に判断したい。

池は辻ヶ内1区の2箇所と4・5区の、計4箇所で見つかっている。これらがすべて一連の掘り方をもった池と捉えることもでき、またその可能性も高い。しかし事実報告の段階では、遺物・土層の堆積状況、掘り方のつながり具合から、確実に同一の遺構として捉えられる2つの池（SG85001・85002）に分けて報告することにしたい。

SG85001（図版34～36）

居館の西側で見つかった池で、辻ヶ内1区と4区で検出している。1区では池に水を引き込む導水路部と、導水路からの水を受ける滝口部が見つかっている。

北西方向から池に水を引いてくる導水路SD85004はいわゆる「造り水」で、クランク状に曲がりくねりながら池の西端に取り付いている。溝の幅は0.3m、深さ0.2mで、池の中と同様に土師器の杯・小皿で埋まっていた。

導水路の取り付き部には、水を受けるための石組みである「滝口」が設けられていた。滝口ではまず中央に、長さ50～60cmほどの平たい石を横向きに2枚置き、その周りに幅20～40cmの角礫を据え、底に栗石を敷いていた。滝口の規模は幅1.1m、深さ0.2m、造り水からの落差は5～15cmである。

池の形状は、この滝口を要として扇状に広がり、大きく南へ曲がり込んで調査区外へ抜けている。その延長はK11-6グリッドおよびKM16トレンチといった確認調査でも見つかっており、辻ヶ内4区では池の南限を抑えることができた。検出した範囲での規模は、南北20m、東西20m、深さ0.5～0.6mで、池の大きさをこれだけに限定して、小さく見積もれば面積180m²程度である。

池の堆積状況は大きく下層と上層に分けることができる。下層は湛水状態で堆積したシルト層となっており、マツボックリや竹の断片などといった植物遺体が多く含まれている。下層からは土器・木器の他、木材の削りかすなどが多数出土した。上層は土壤化したシルト質の粘質土層で、完形の土師器杯・小皿類で埋め尽くされたような状況を呈している。さらに上層の上面、つまり池を検出した面では、整地によって細片となった土器の層および火を焚いた焼土面を検出した。焼土の周辺からは、焼けて炭化した米粒も多数出土している。

出土遺物には数千個体におよぶ土師器の杯・小皿を中心とした大量の土器（図版54～58）や多種多様な木器（図版107～108）がある。全ては図示しなかったが、木器の中では箸が多く出土している。この他、少量の瓦・鉄器（5006・5011～5013・5021・5022）、羽口（5023・5024）、焼土塊なども出土している。

居館の中心部にある池である。辻ヶ内1区と5区で検出しており、5区では北岸を抑えられた。北岸は出島状に突出しており、周囲の池の中に入頭大の角礫が多数落ち込んでいるところから、築山のような構築物の存在が考えられる。おそらく西岸に建つ瓦葺建物SB85001から眺めるためのものであろう。

池の東岸は5区から1区にかけてほぼ直線的につながるのに対し、西岸は出入りの多い曲線的なラインとなっている。また南岸については、池の延長が4区に続いていなかったため、1区と4区の間に汀線を想定できる。なお池のはば中央部、1区の北壁際において、池底に打ち込まれた大型の杭(5084)1本を検出した。杭の大きさ、打ち込まれた場所などを考え合わせると、橋の支脚であった可能性が高く、1区の北側の未調査部分に橋が架かっていたと思われる。

検出した範囲での規模は、南北40m以上、東西30mで、池の大きさをこれだけに限定して、小さく見積もってみても、1700m²近い面積がある。池は沖積層を掘り込んで造成されており、検出面からの深さは最深部で1m程度、平均深度は0.7mほどである。当時の地表面が検出面+30cm程度と考えられるので、その深さは平均1.0m程であり、掘削土量は1700m²近くなる。

埋土の最下層は植物遺体などの有機質を多量に含んだ灰褐色のシルト層であり、この層から土器・瓦・木製品が多量に出土している。池がその本来の機能を果していた時期からその機能の放棄までの間の堆積物である。この層の上にはシルトや砂などの洪水堆積物が重なる。近世水田耕作土の直下はブロック状の土塊を含んだ人為的な埋土と考えられる土によって埋没している。中世のうちのいずれかの時期に埋められたものであろう。

出土遺物には土器(図版59~60)、瓦、木器(図版108・112)などがある。土器・木器は1区からの出土が多く、瓦は5区に集中した。特にSB85001の周囲では夥しい量の瓦が出土している。

池SG85001とSG85002の関係(図版33)

上に述べた2つの池の関係を、両者の底面のレベルで比べてみることにする。まず池SG85001に取り付く導水路SD85004から約0.1mの落差で水を受ける滝口の底面のレベルは、15.4mである。SG85001の最深部のレベルが14.9mなので、約0.5mの比高差をもって西から東へ傾斜することになる。次に池SG85002の底面のレベルは辻ヶ内5区では14.5m、1区では14.3mである。その傾きは北から南へ向かってわずかに0.2mほどであり、ほとんど平坦といって差し支えない。東西方向も底面においてはほとんど傾斜はないが、西岸と東岸では0.3mの比高差がある。全体的にみて、SG85001からSG85002に向かって底面が低くなっているのは明らかである。調査の中では確認できなかったが、導水路SD85004から引き込まれた水は、SG85001を下って東側のSG85002に注ぎ込み、この池のいずれかの部分から排水されていたのであろう。

この両者が1つの広大な池であったと想定した場合の大きさは、南北50~60m、東西70m、面積にして2000m²を超える規模となるだろう。

第4節 建物跡

辻ヶ内地区で平安時代末の建物跡を4棟検出している。調査区の幅が狭いため、建物の全容はつかめていない。SB85001が礎石建物である以外は、いずれも掘立柱建物である。

SB85001（図版39）

5区の中央部、池SG85002の北西で検出した遺構である。東西方向に走る幅0.4mの溝と南北方向に並ぶSK85003・85004がL字形に連続しており、東西方向の溝は池SG85002に連続する。溝の深さは検出面から10~20cmである。東西方の溝の方位はW16°Nである。溝に囲まれた内部の空間は南北長は不明であるが、東西長は8mである。溝の南側に接して平面長方形の土坑SK85001・85002がある。東側の土坑SK85002の周辺は池側に向かって盛土が施されている。溝内からは瓦と拳大から人頭大までの大きさの角礫が多量に出土している。

この遺構の内部空間では柱穴や礎石、あるいは礎石抜き取り痕などは全く検出していない。しかしその規模・位置、及び盛土を施して基礎を造成している点などから、溝を建物に伴う雨落ち溝と考え、内部に礎石建物が存在したと考える。この遺構に接した池SG85002には、人頭大の角礫が多量に投棄されていた。加工の痕跡は認められなかったが、その一部は建物の礎石であった可能性も考えられる。

礎石建物であるならば、周辺から瓦が多量に出土していることから、瓦を用いた建物であった可能性も指摘できる。この遺跡の中心的な建物を構成する一部分、池に面した小堂のようなものを想定できよう。

SB85002（図版40）

6区の南端において検出した掘立柱建物跡である。SB85003と切り合うが、その先後関係は不明である。建物は2間×5間分を検出したが、大半は調査区外に続く。柱間は南北方向が2.1m程度、東西方向が1.9m程度である。南北方向の方位はN16°Eである。柱穴は掘り方の直径が40~50cm、深さが検出面から60~80cmである。P201内の底には拳大の石がはいる。P202には柱根が、P204には礎板が、P205には柱根と礎板が、P209には柱根がそれぞれ残っていた。遺構が沖積地の軟弱地盤の上にあるため、柱の沈み込みを防ぐ目的で礎板を入れたのであろう。柱根は直径15cm程の丸太材である。

建物は遺跡全体の北西隅に位置しており、北側には井戸SE85001があることと併せて、雜舎のようなものであると想定できる。

SB85003（図版40）

6区の南端で検出した掘立柱建物跡である。SB85002と切り合う。3間×6間分を検出した。柱間は東西・南北とも不均一であり、1m~2mの間である。南北方向の方位はN20°Eである。柱穴は直径30~50cm、深さは30~60cmである。SB85002と比して、規格性に乏しい建物である。

2区の北東端で検出した掘立柱建物跡である。居館の周囲を巡る堀の外側に位置する。遺構は南北方向に並ぶ2間分の柱穴と、その西側に平行する溝からなる。全容が明らかでないが、建物と雨落ち溝と考えられ、南端の柱穴P401が建物の南西端にあたるようである。柱間長は1.85m、柱穴の直径は30~40cm、深さは30~40cmである。南北方向の方位はN17°Eである。雨落ち溝は幅1.4m、深さ0.4mで、砂・シルトで埋没する。

第5節 井 戸

この井戸は調査の途中で大雨によって崩壊したため、やむなく機械掘削による断割りを行った。従って、充分な調査が施せなかつたことを断つておく。

6区中央のやや南寄りに位置し、西側約1/3は調査区の外にはみ出している。掘り方はほぼ円形で、掘り鉢状に掘り込まれ、底面は平坦である。掘り方の規模は検出面で直径約5m、底面で直径約3mあり、かなり大型の部類に属する。深さは2.8mで、微高地の基盤となっている黒色シルト層を掘り抜いている。掘り方の埋土は緑灰色のシルト質細砂で、黒色シルトがブロック状に混じっている。

井戸側の構造は、材のほとんどが撤去されてしまっていたので判然としないが、縦板に用いられていた板材が数枚、立った状態で出土した。また掘り方の底面全体には、拳大くらいの礫が敷き詰められており、その中央に、長さ1.3mの角材4本を三枚組仕口で組んだ木枠が据えられていた。この木枠には他に納穴などは切られておらず、縦板を内側から支える横桟の最下段のものであったとみられる。従って、井戸側の構造は隅柱をもたない「縦板組横桟の井戸」と考えられる。開口部の形状は一辺1.3mの正方形で、堀の方向に沿って作られていた。

井戸側内の埋土は、灰色のシルト質細砂の中に黒色シルトのブロックが混じっており、人為的に埋め戻されたことが判る。埋土中からは井戸側材の他に、片口鉢の破片を用いた転用硯(5586)などの土器(5580~5586)や、曲物(5008~5009)・箸(5010~5015)・建築部材(5016~5025)といった木器が出土している。これらのことから、この井戸の廃棄にあたっては、まず井戸側材を引き抜き、建築部材などを投棄しつつ、一気に埋め戻したものとみられる。

埋め戻した井戸の上面では、廃棄に伴う祭祀が営まれていた。祭祀の痕跡は直径2m弱の範囲で、深さ0.3mほどの皿状に落ち込んでいた。ここで火を焚いたらしく、周囲は熱のために赤変し、埋土には炭層が認められた。この中からは墨書き器(5577)などの土器(5549~5579)や瓦(5751)が出土している。以上の状況から、祭祀には火を焚く行為が伴い、何らかの形で土器や瓦が捧げられ、祭祀の跡は取り去られないまま、埋没したという過程が読み取れる。

第6節 土 坑

SK85001 (図版44)

5区のSB85001の南側に接する土坑である。平面形は長方形で、東西2.4m、南北1.0m、深さ0.1mである。灰オリーブ色の砂で埋没する。SB85001に付属する土坑であろうか。

SK85002 (図版44)

5区のSB85001の南側に接する土坑である。平面形は長方形で、東西2.1m、南北1.05m、深さ0.1mである。灰オリーブ色の砂で埋没する。拳大の角礫・瓦が出土している。これもSB85001に付属する土坑であろうか。

SK85003 (図版44)

5区のSB85001の雨落ち溝のコーナー部分にある土坑である。平面形は円形で直径0.9m、深さ0.1mである。灰黄色の砂で埋没する。内部には角礫が入る。SB85001の雨落ち溝の一部である。

SK85004 (図版44)

5区の中央で検出した遺構である。北側は調査区外に出る。平面形は不整形で、東西0.7m、南北1.4m以上である。砂・シルトで埋没する。SB85001の雨落ち溝の一部である。

SK85005 (図版44)

5区の西部で検出した土坑である。南側は調査区外に出る。平面形は橢円形で、東西1.9m、深さ0.3mである。シルト・砂で埋没する。

SK85006 (図版44)

6区の南端で検出した土坑である。南北に長い溝状の土坑で、東西1.2m、南北3m以上、深さは0.6mである。シルト・砂で埋没する。出土土器には5503~5512がある。

SK85007 (図版44)

6区の北部で検出した土坑である。平面形は円形で、直径0.4m、深さ0.2mである。埋土下層は炭層であり、その中に土師器小皿が20個体入っていた。炭があることから、何らかの火を使用する行為のあと、土器を一括して廃棄したものであろう。出土土器には5513~5532がある。

SK85008 (図版45)

1区東側のSD85001の西脇で検出した。平面は不整円形で、垂直に近く掘り込まれている。規模は南北1.8m、東西1.6m、深さ0.75mである。土坑内には5点の板材(5004~5007)が水平に積み上げられていた。そのうちの4点には、木材を牽引する際に綱を通すための

孔、いわゆる「鼻切り」が開けられていた。従ってこの土坑は、運搬が終了していらなくなつた「鼻切り」の部分を、切つて廃棄したものと判断できる。

SK85009 (図版45)

1区 SG85001の東側で検出した。平面は円形で、掘り方は上半部を垂直に掘り込んだあと、下半部を斜めに掘り下げ、底部を平らに作る。規模は南北1.9m、東西1.75m、深さ1.05mである。土坑内の下層にはヒノキの皮様のものと細かい植物質の有機物が、約20cmの厚さで敷き詰められていた。この層の上面からは建築材(5001)が、層の中からは火焔状木製品(5002)・呪符木筒(5003)・箸などが出土した。底面には人頭大の角礫と拳大の栗石が散かれていた。この土坑はその特異な構造と出土遺物からみて、何らかの祭祀が行われた場所と考えられる。出土土器には5533~5537がある。

SK85010 (図版45)

1区 SG85001の東側で検出した。平面は不整六角形で、浅く落ち込み、底面は平らである。規模は南北0.95m、東西0.8m、深さ0.15mである。

SK85011 (図版45)

1区 SK85009の東側に隣接する。平面は不整六角形で、浅く落ち込む。底面は平らで、中央に小さな窪みを作る。規模は南北0.9m、東西0.9m、深さ0.1m、中央の窪みの径0.2m、深さ0.05mである。

第7節 鍛冶炉

SX85001 (図版46)

1区 SG85001の東側に位置する。上部はほとんど削平されており、下底部のみが残存する。焼成部は平面円形で、南側に焚き口が突出する。炉の底と縁は赤く焼けており、焚き口の外側に炭層の溜まりがある。炉の下層には炭を多く含む層が堆積し、鉄釘の残欠が出土した。規模は長軸0.85m、短軸0.65m、深さ0.1mである。

SX85002/85003 (図版46)

1区 SG85001の北側に位置する。上部はほとんど削平されて、下底部のみが残存する。SX85002は不整円形の掘り方で、東側に焚き口が取り付く。炉底の奥の方が赤く焼けており、焚き口の外側に炭層の溜まりが散在する。炉の下層には炭を多く含む層が堆積していた。規模は長軸0.45m、短軸0.35m、深さ0.1mである。

SX85003は SX85002の南側に隣接する。梢円形の掘り方で、熱を受けた痕跡はなかった。規模は南北0.5m、短軸0.35m、深さ0.1mである。埋土からは鍛造の際に剥がれ落ちたとみられる微小な鉄片が多量に出土した。従つてこの土坑SX85003は、隣の鍛冶炉SX85002

で加熱した鉄素材を鍛えるのに利用したものと言える。つまり SX85002と SX85003は、セットで1つの鍛冶炉として機能していたものである。

第8節 溝

辻ヶ内地区では堀SD85001以外にも平安時代末～中世の時期の溝を検出している。それらは堀に接続するものなど館造成時に掘削された溝と、現在の水田畦畔に沿うものや古代以来の条里境に沿うものの、すなわち水田耕作に伴う水路に大別できる。前者としては1区のSD85002、4区のSD85003、6区のSD85005がある。後者としては6区のSD85006／85007、1区のSD85008、4区のSD85009、1区・4区・6区・7区にまたがるSD85010がある。

SD85002（図版32）

1区の西端で検出した東西方向に走る溝である。堀SD85001に直交している。幅は3m、深さは検出面から0.7mである。底は平らで幅は1.1mである。溝の両肩は傾斜が約40°である。最下層は黒灰色のシルトで埋没しており、その上に砂・シルトが堆積している。底のレベルは堀よりも高く、堀への給排水路であった可能性が考えられる。

SD85003（図版32）

4区の西端で検出した溝である。これもSD85002同様、堀に直交している。溝の北側が調査区外に出ているが、幅は推定2.5m程度であったと考える。深さは検出面から1.0mである。肩の傾斜は約50°であり、底はU字形になっている。第2層以下は土器などの遺物を含んだ砂・シルト層であり、第1層のみ礫や黒色シルトブロックを含んだ人為的な埋土である。この溝も底のレベルが堀よりも高い。堀への給排水路であろうか。

SD85005（図版25）

6区の井戸SE85001から北へ伸びる不整形な溝である。溝底は南から北へと傾斜する。幅は最大で1m程度であり、深さは0.1mである。井戸からの排水路であると考えられるが、形状が不整形であるため、流水によって自然に形成されたものである可能性もある。

SD85006／85007／85008／85009（図版25）

これらはいずれも現代の水田畦畔に沿う水路と重なって検出されたものである。居館の廃絶後、水田化された時点に掘削された水路である。中世の包含層を掘削しているため、これらの溝からも中世の遺物が出土している。

SD85010（図版32）

古代以来の条里境に沿う水路である。居館が条里境を越えて占地しているため、その内側に入っている。幅1.3m、深さ0.5mであり、人為的に埋められている。

第7章 弥生時代中期上層の遺物

辻ヶ内地区では1区・2区・4区において弥生時代中期上層面の調査を行った。これらの地区では土坑・溝・包含層から少量の土器が出土している。

SK45002出土の土器（図版47 5001）

5001は4区の土坑SK45002から出土した壺の底部である。底は焼成後に穿孔されている。器面は磨滅が著しく、調整は不明である。

SD45003出土の土器（図版47 5002～5003）

4区の溝SD45003からは脚部が2点出土している。5002は脚上部と裾部端面に細い凹線文を施し、その間にヘラ描きの斜格子文と鋸歯文を配する。5003は脚中位に3条の凹線文を施し、その下にヘラ描きの鋸歯文、沈線を配し、最下部に器面を彫り込んで表現した鋸歯文を配する。

1区包含層出土の土器（図版47 5004～5012）

1区の西端の流路状の堆積の下層から、弥生時代中期の土器がまとまって出土した。

5004は手づくねのミニチュア土器である。5005はイイダコ壺である。穿孔は1ヵ所である。5006は蓋である。内面は横方向のハケで仕上げる。5007は大型の壺である。口縁部はヨコナデで、体部は縦方向のハケで仕上げる。

5008～5010は壺である。5008は広口壺であり、口縁端部を拡張し垂下させる。口縁端面にはヘラ描きの羽状文を、内面には櫛描きの扇状文を配する。頸部下半には断面三角形の突帯を2条以上巡らせるが、突帯間は強く横方向にナデられる。頸部外面は縦方向のハケで仕上げる。5009は直口壺である。口縁部は内側に屈曲し、端部がわずかに肥厚する。口縁部にはヘラキザミが巡る。頸部内面は横方向のハケで仕上げられる。5010は短頸壺である。頸部に压痕文突帯が巡る。口縁部内面は横方向のハケで仕上げられる。

5011・5012は高杯である。5011は水平口縁をもつものであり、鋤の端部が若干垂下する。外面は縦方向のハケを施した後に、縦方向にヘラミガキする。5012は大型の杯部を持つ高杯である。口縁端部は上下に拡張される。杯部の底は円板充填される。外面はハケを施した後に縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面は横方向のヘラミガキで仕上げられている。

以上が弥生時代中期上層の遺物であるが、これらはいずれも弥生時代中期後半（畿内第IV様式並行）の土器である。

第8章 弥生時代後期の遺物

辻ヶ内地区では1区・4区・5区・6区・8区で弥生時代後期面の調査を行った。これらの地区的住居跡・土坑・溝・包含層からは土器等の遺物が出土している。

SH55001出土の土器（図版47 5013）

5013は5区の住居跡SH55001から出土した高杯である。杯部の屈曲部に沈線を巡らせる。外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキで仕上げられる。

SK55006出土の土器（図版47 5014）

5014は5区のSK55006から出土した広口壺である。口縁端面に沈線を巡らせる。

SK55008出土の土器（図版47 5015）

5015は6区のSK55008から出土した台付の鉢である。5015は外面を縦方向のハケで仕上げる。

SD55001出土の土器（図版47 5016～5019）

5016～5019は5区の溝SD55001から出土した壺・器台である。5016・5017は広口壺である。5016は外面を縦方向のヘラミガキで仕上げる。5017は口縁端部に刻み目を入れ、頸部外面は縦方向のハケで仕上げる。5018は器台である。口縁端部を拡張し、そこに円形浮文・鋸歯文・キザミメを施して加飾する。5019は二重口縁壺である。器面は磨滅しており、調整は不明である。

SD55007出土の土器（図版47 5020～5023）

5020～5023は4区の溝SD55007から出土した土器である。5019は広口長頸壺であり、口縁端面に沈線を巡らせる。頸部外面は縦方向のハケで仕上げ、口縁部内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。5021は精製の鉢である。口縁端面には沈線を巡らせる。内面・外面ともにヘラミガキで仕上げられる。5022は台付の鉢である。5023はミニチュアの手づくり土器である。

SD55004出土の土器（図版48・49 5024～5040・5042～5047）

5024～5040、5042～5047は1区の溝SD55004から出土した土器である。5024～5030は壺である。5024はミニチュアの壺である。5025は小型の短頸直口壺である。口縁部に沈線を巡らせる。体部外面は横方向のハケで、内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。5026～5028は広口壺である。5026は口縁部内面に段をもち、体部外面は縦方向のハケで仕上げる。5027は口縁部に穿孔したものである。外面は縦方向のハケで仕上げられる。5028は口縁端面に沈線を巡らせる。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げる。5029は長頸壺である。口縁部が外反する。

頸部は内面は横方向、外面は縦方向のハケで仕上げる。5030は壺の底部である。底部付近にタタキ痕が残り、内面は左上がりのハケで仕上げる。

5031～5040は壺である。5031は内面を横方向のハケで仕上げ、5032は外面上半のタタキメをハケで消す。口縁部は叩き出しである。5033は口縁部が長く伸び、外面に段がある。内面は横方向のハケで仕上げる。5034は受け口口縁の壺である。5035は内面を横方向のハケで仕上げる。5036は頸部の縮まりが小さいものである。5037は口縁部の屈曲が大きく、胸部との境が鋭い稜になっている。底部外面は縦方向にユビナデされている。5038・5039は分割成形の痕跡が明瞭なものである。5038は胸部上半のタタキメをハケで消している。5040は外面のタタキメを縦方向のナデで完全にナデ消したものである。頸部の縮まりは少なく、内面はイタナデされている。

5042～5047は鉢である。5042は小型の粗製鉢であり、タタキ成形されている。内面は底部のみヘラケズリされている。5043は有孔鉢である。タタキ成形されており、内面は縦方向のハケを丁寧に施す。5044～5046は中型鉢である。5044は粗製の鉢であり、口縁部に沈線を巡らせる。外面は縦方向のユビナデで仕上げ、内面は軽くヘラケズリされている。5046は精製のものである。内面・外面ともにヘラミガキで丁寧に仕上げられている。5047は片口鉢である。タタキ成形されている。口縁部を押さえて、注口を1箇所設ける。

包含層出土の土器（図版49 5048～5062）

5048～5062は1区と5区の包含層から出土した土器・土製品である。5048・5050が5区の包含層からの出土であり、他は1区の包含層からの出土である。

5048～5053は壺である。5048は頸部と胸部が連続する長胴の壺である。外面に縦方向のハケが残り、内面は中位に横方向のハケを施す。5049は短頸の壺である。5050～5053は二重口縁壺である。5050は上方に粘土を付加することにより立ち上がりを作る。5051は口縁部に2個1単位の円形浮文を付加する。5052は無文の大型のものである。5053は口縁部に粗雑な櫛描き波状文を施す。頸部外面は縦方向のハケで仕上げ、内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。

5054は器台である。口縁端面に沈線・波状文を施し、その上に2個1単位の円形浮文を付加する。内面は横方向のヘラミガキで仕上げている。

5055～5058は甕である。5055・5056はタタキ甕であり、5055は内面を縦方向のハケで仕上げる。5057・5058はハケ甕である。いずれも口縁端部を上方に拡張し、端面に沈線を施す。調整は内面・外面ともにハケ仕上げである。

5059～5062は管状土錘である。長さはいずれも5cm前後である。黒褐色を呈する。

以上が弥生時代後期の遺物である。遺物は若干の時期幅を持つが、弥生時代後期後半の範疇に納まるものである。

第9章 旧河道の遺物

辻ヶ内地区では、7区・8区において段丘崖下を通る旧河道の調査を行った。旧河道からは弥生時代後期～平安時代にかけての遺物が出土している。

弥生時代後期の土器（図版50 5066・5068～5070）

5066は直口壺である。器高9.4cmの小型品である。体部はやや脇の張る球形、口縁部は直立よりやや外反する。体部外面の調整はナデの後、横方向の磨きを施し、体部内面は上半部は横方向のユビナデ、下半部には横方向のハケもしくはイタナデによる調整を施している。底部付近ではハケ状の工具を止めた痕跡が放射状に残されている。

5068はの甕である。体部は長胴形で底部は平底である。体部の調整は、外面は器壁を叩いて調整した後、ハケでタタキの痕をなで消している。内面はヘラケズリを行っているが、ケズリの方向は、体部の上側四分の一が横方向、下側四分の三が縦方向である。また土器の底部付近の外面には煤が付着している。

5069は後期でも終末期に属する甕である。底のやや尖った球形の体部の上に、直立よりもやや外傾する口縁部がつく。体部の表面調整は、外面はタタキで整形したのちハケで調整し、内面は縦方向のヘラケズリを行う。口縁部の調整は、外面はタタキ、内面はヨコハケである。

5070は甕である。やや脇の長い体部の上に、丸く外反する体部がつく。表面調整は、外面にはタタキの痕が口縁部から体部にかけて残り、内面は口縁部から体部にかけてハケの痕が残されている。

古墳時代前期の土器（図版50 5063～5065・5067・5071・5072）

5063は小型鉢である。調整は外面はナデ、外面はハケ状の工具を用いてヨコナデを施した後、放射状に磨きを施している。工具を用いたヨコナデは約1cmごとに工具を止めるため、見込みには工具痕が放射状に残っているさまが観察される。

5064は鉢である。先端がやや尖り気味の底部の上にやや外反する口縁部がつく。調整は内外面ともナデであるが、体部内面に指頭の圧痕が見られる。

5065は台付き鉢である。体部は直線的で外傾している。底部は平底である。5063と同様、内面の調整はハケ状の工具を用いた幅広な横方向のナデが施されている。底部内面はユビナデと思われるが、ナデの方向は一定ではない。

5067は直口壺である。体部はやや脇の張る球形、口縁部は直立よりやや外反する。口縁と体部の境界部分には36個の刺突文が施されている。調整は、口縁部については内外面とも横方向のハケを施した後、なでている。体部は、外面についてはヘラミガキ、内面はイタナデで仕上げられている。

5071は甕である。球形と思われる体部の上に、直線的に外傾する口縁がつく。底部は丸底と考えられる。器表面は内外面ともハケによる調整を施している。

5072は壺である。球形の体部の上に直線的に外傾する口縁部がつく。口縁部の幅は広く、口縁端部での径は、体部最大径を上回っている。体部の表面調整は、外面はイタナデ、内面はヘラケズリを行っている。口縁部は内外面ともヨコナデである。

古墳時代後期の土器（図版50 5073～5076・5078）

5073は土師器の壺である。体部は球形であるが底部は平らに近い。その上につく口縁部に丸く外反する口縁部がつく。調整は外面がハケ、内面がナデである。

5074は須恵器の杯蓋である。天井部と口縁部との境目の稜線はなく、器形は全体的に丸みを帯びている。口径14.0cmに対して器高は4.2cmである。

5075は須恵器の蓋杯である。立ち上がりは内傾しており、体部はやや深めである。底部は回転ヘラケズリの痕が明瞭に残っている。器高4.9cmに対して、口径12.3cm、蓋受け部の径15.0cmである。

5076は須恵器の碗である。ヘラキリされた平らな底部の上に、丸く内弯する体部がつく。器表面は内外面とも回転ナデで調整されている。さらに体部外面には十字形の線刻が見られる。

5078は須恵器の壺である。ほぼ球形の体部の上に大きく外反する口縁がつく。体部はほぼ球形であるが、最大径部が中程よりやや上に位置しており、この部分より上方から頭部にかけてカキメが残っている。その他の体部下半と口縁部にはタタキの痕が見られる。

奈良～平安時代の土器（図版50 5077・5079～5082）

5077は須恵器の杯Bである。口径は15.2cm、器高は4.1cmである。底部はヘラキリの後、回転ヘラケズリが施される。

5079は須恵器壺の口縁部の破片である。口縁部の最下部はほぼ真上に立ち上がるが、上に行くにつれて丸くカーブを描いて外反している。口縁の端部はやや肥厚させている。

5080も須恵器壺の口縁部の破片である。5079と較べて口径および頭部の径が大きい。口縁の端部はやや上方につまみ上げて、幅広の口縁端部を形成している。この幅広な口縁端部の直下に断面形が三角形の突堤が巡らされている。

5081は土師器の壺である。長胴形のものであろう。体部外面はハケによる調整が施されている。器壁の厚さは、口縁部付近では約5mmあるが、体部の下のほうに行くに従って薄くなっていく。

5082は土師器で鉄鉢形の鉢である。体部の上方から口縁部にかけて内弯し、体部下半部は直線的に外反する。底部は存在しないが、やや尖り気味の丸底、と考えられる。

第10章 中世の遺物

第1節 土 器

1. 器種分類

中世の土器は器種構成が比較的単純で、類型化が容易である。従って、記述を進めるにあたっては、あらかじめ器種分類を行っておくことが有効といえる。

土器の種別は土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・輸入陶磁器などに分けられる。また滑石製品もこの土器の節の中で扱う。なお凡例の中でも示したが、中世の土器実測図の断面については、土師器が白抜き、須恵器・国産陶器が黒ベタ、それ以外が網点トーンで区別している。

各種の土器はさらに、杯・碗などの供膳具、鉢などの調理具、鍋・羽釜などの煮炊具、壺・甕などの貯蔵具、その他の雑具といった用途別の区分が可能である。以下、各種別の土器を用途別に器種分類する。ただし輸入陶磁器については、次節で扱うこととする。

a. 土師器

《供膳具》 杯A・小皿A・皿B・小皿B・小皿C・皿D・托がある。成形技法・形態の特徴によって、杯A・皿B・小皿Bはさらに細分する。

杯 A ロクロ成形された杯である。底部の切り離しは回転糸切り技法によって行う。平らな底部から、体部が上外方へ直線的に開き、杯形を呈す。一般的な法量は口径15cm前後、器高3.5~4cm程度である。体部の調整技法の差から、A₁~A₄類に分類したが、本質的な差はないものと考える。

A₁類 体部に明瞭な稜線をもたないもの。強い特徴はなく、ほとんどの杯Aがここに分類される。

A₂類 口縁部に強いヨコナデを施すもの。A₁類との区別が困難なものがある。

A₃類 体部中程で強く屈曲するもの。

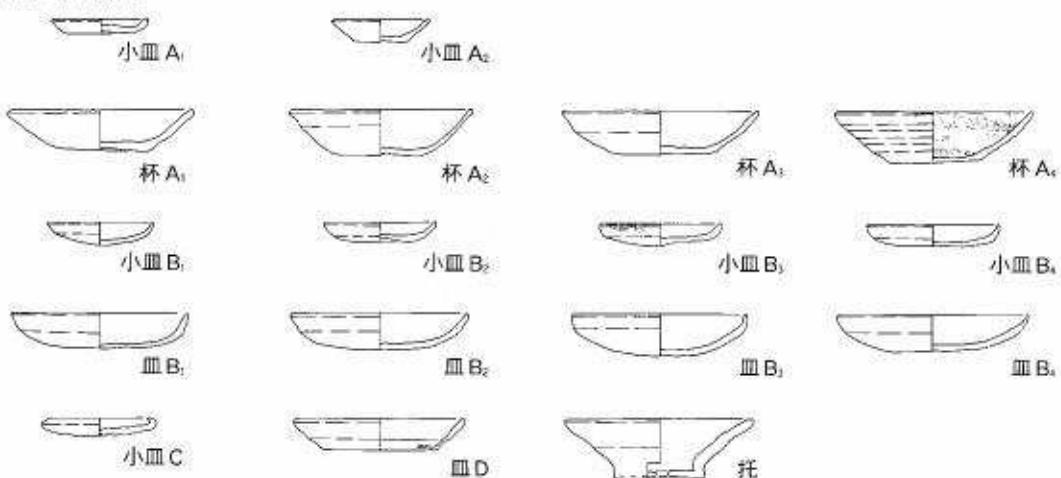
A₄類 体部に数条のヨコナデ稜線を残すもの。

小皿 A ロクロ成形された小皿である。底部の切り離しは回転糸切り技法によって行う。平らな底部から、体部が上外方へ開く。一般的な法量は口径8~9cm、器高1.5cm前後である。体部の形態の差異から、A₁~A₂類に分類した。

A₁類 体部が短く立ち上がり、端部を丸く收める。強い特徴はなく、ほとんどの小皿Aがここに分類される。

A₂類 体部が上外方に外反する。1点のみ認められる。

土師器《供膳具》



挿図1 器種分類図(1)

皿 B 手づくね成形された皿である。底部外面は不調整で、内面を一方向のナデで調整した後、口縁部を1段のナデで仕上げる。一般的な法量は口径9~10cm、器高1.5~2cm程度である。胎土・調整の特徴から、B₁~B₄類に分類した。このうちB₁~B₂類は精製品の皿である。B₃~B₄類は粗製品で灯明皿に用いられることが多い。

- B₁類 胎土は精良なものを用いる。口縁部を強いナデで外反気味にする。
- B₂類 胎土は精良なものを用いる。口縁部がやや直立気味で、端部には面をもつ。
- B₃類 胎土はやや不良である。口縁部がやや直立気味で、端部には面をもつ。
- B₄類 胎土はやや不良である。口縁部のナデは弱く、はっきりしない。

小皿 B 手づくね成形された小皿である。底部外面は不調整で、内面を一方向のナデで調整した後、口縁部を1段のナデで仕上げる。一般的な法量は口径14~15cm、器高3cm前後である。胎土・調整の特徴から、B₁~B₄類に分類した。このうちB₁~B₂類は精製品の皿である。B₃~B₄類は粗製品で灯明皿に用いられることが多い。

- B₁類 胎土は精良なものを用いる。口縁部を強いナデで外反気味にする。
- B₂類 胎土は精良なものを用いる。口縁部がやや直立気味で、端部には面をもつ。
- B₃類 胎土はやや不良である。口縁部がやや直立気味で、端部には面をもつ。
- B₄類 胎土はやや不良である。口縁部のナデは弱く、はっきりしない。

小皿 C 手づくね成形された小皿で、口縁部が強く内屈し、受皿形を呈する。底部外面は不調整で、口縁部をヨコナデで仕上げる。一般的な法量は口径8cm前後、器高1~1.5cm程度である。

皿 D 手捏ね成形された皿で、口縁部に1段のヨコナデを施し、ヨコナデの下端が強く屈曲する。1点のみ認められた。

托 ロクロ成形され、底部の切り離しは回転糸切り技法によって行う。平らな底部から、体部がラッパ状に開く。

《煮炊具》 鍋A・鍋B・鍋C・羽釜A・羽釜B・羽釜Cがある。形態的な特徴の差異から、鍋A・羽釜Bはさらに細分する。

鍋 A 口縁部は強くくの字に屈曲し、いわゆる變形を呈する。体部の特徴および調整技法の差異から、A₁～A₂類に細分した。

A₁類 脇部最大径は口径より大きくならない。体部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケで仕上げる。

A₂類 脇部最大径は口径を大きく凌ぐ。体部外面には横方向のタタキの痕跡が残り、内面は横方向のハケで仕上げる。

鍋 B 口縁部はくの字に屈曲し、扁平な体部をもつ。脇部最大径は口径より大きくならない。体部外面はタタキで成形した後、上半部のみ縦方向のハケで調整し、内面は横方向のハケで仕上げる。底部に三足の脚部をもつものも含まれると考えられるが、接合資料はなかった。口径は28～29cmである。

鍋 C 口縁部は弱く開き、端部には面をもつ。体部は下ぶくれで、脇部最大径は口径を超える。体部外面はタタキの痕跡を残し、内面は横方向のハケで仕上げる。口径は約25cmである。

羽釜 A 口縁部の立ち上がりは内傾し、それに取り付く鍔部は比較的薄く、長い。体部外面にはタタキの痕跡が残り、内面は横方向のハケで仕上げる。口径は26～30cmで、深手の体部をもつ大型品である。

羽釜 B 口縁部の立ち上がりは内傾し、鍔部の基部を厚く作る。体部外面はタタキで成形した後、上半部のみ縦方向のハケで調整し、内面は横方向のハケで仕上げる。法量の差異から、B₁～B₂類に細分した。

B₁類 口径18～21cmで、扁平な体部を持つ小型品である。

B₂類 口径約24cmの中型品である。

羽釜 C 口縁部は短く直立し、太くて短い鍔部が取り付く。口径は約28cmである。

《雑 具》 椅・小壺・粗製鉢・盤がある。形態の特徴から、盤はさらに細分する。

椀 体部は底部近くで棱をもって直線的に開き、口縁部は外側へつまみ出す。口縁部の下に1条の沈線を施す。金属器の写しかと考えられる。

小 壺 口径5～10cm程度の無頸の壺である。内弯した体部をもつ。

粗製鉢 器形はバケツ形を呈する。体部は直線的に立ち上がり、口縁部が棱をもって開く。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケで調整するが、底部は不調整で凹凸が激しい。作りは非常に雑で、指頭痕が多数残る。器壁に煤などは付着せず、火にかけられた痕跡は認め

られない。法量は口径15~20cm、器高10cm未満である。

盤

平らな底部から、体部が丸みをもって立ち上がり、直線的に開く。内外面の調整はヨコナデあるいは強いナデで行うが、底部外面はほとんど不調整である。法量は口径37~50cm、器高約10cm、器壁の厚さ2~3cmで、非常に低平で肉厚な器形である。口縁部の特徴の差異から、1~2類に分類した。

1類

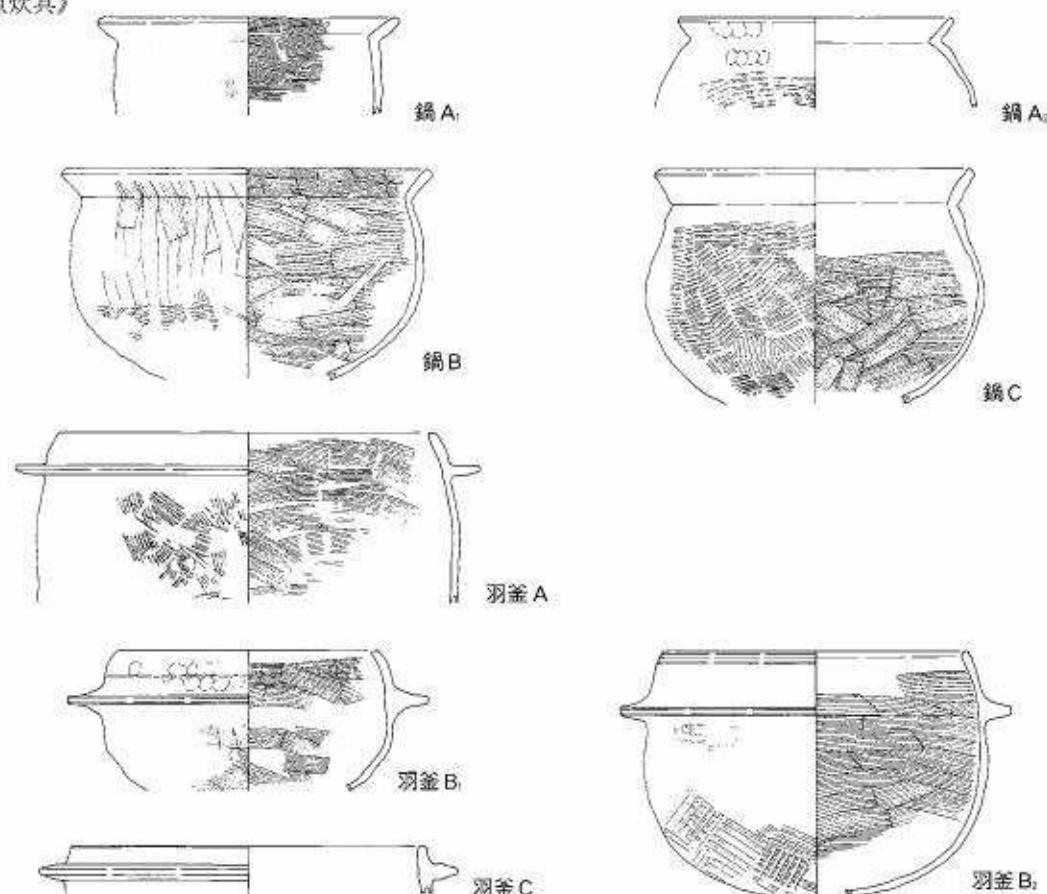
口縁端部に水平な面をとる。

2類

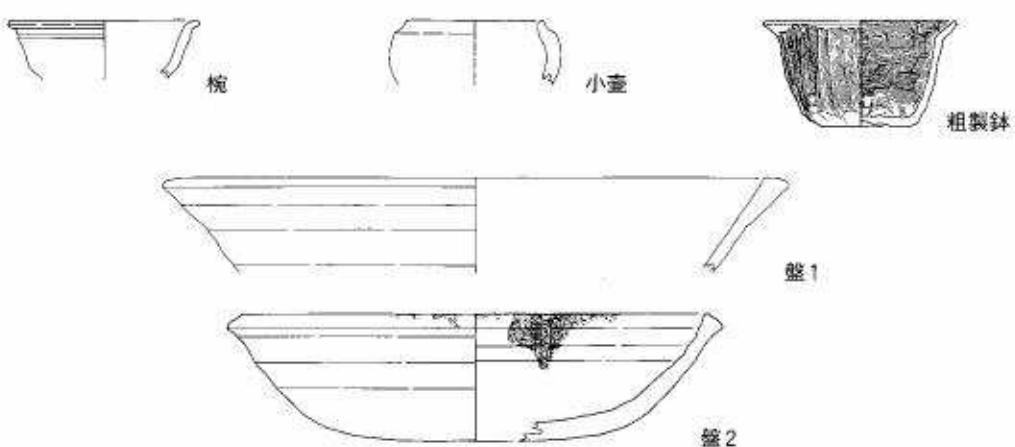
口縁端部に傾斜した面を取る。

土器

《煮炊具》



《雜具》



挿図2 器種分類図(2)

b. 須恵器

《供膳具》 梶・小皿がある。形態の特徴から、小皿はさらに細分する。

梶 ロクロ成形され、底部の切り離しは回転糸切り技法によって行う。底部は平底で、立ち上がりの稜ははっきりしない。体部は直線的に立ち上がり、端部は丸く收める。見込みの凹みはほとんど消失している。一般的な法量は口径16~17cm、器高4~5cm程度である。

小皿 ロクロ成形され、底部の切り離しは回転糸切り技法によって行う。平らな底部から、体部が上外方へ開く。一般的な法量は口径8~9cm、器高1.5cm前後である。体部の形態の差異から、1~2類に分類した。

1類 体部が短く立ち上がり、端部を丸く收める。強い特徴はなく、ほとんどの小皿がここに分類される。

2類 体部が上外方に外反する。1点のみ認められる。

《調理具》 片口鉢A・片口鉢B・片口鉢Cがある。形態の特徴から、片口鉢A・片口鉢Bはさらに細分する。

片口鉢A ロクロ成形され、底部の切り離しは回転糸切り技法によって行う。平らな底部から、体部が直線的に開く。口縁部はわずかにつまみ上げ、端部に面をとる。一般的な法量は口径28~31cm、器高10cm前後である。口縁部の形態から、A₁~A₂類に細分した。

A₁類 口縁部をわずかにつまみ上げ、端部に面をとる。

A₂類 口縁端部が下方に垂下する

片口鉢B ロクロ成形され、底部の切り離しは回転糸切り技法によって行う。平らな底部から、体部が直線的に開く。一般的な法量は口径18~19cm、器高5~6cm程度で、片口鉢Aと梶の中間的な大きさである。口縁部の形態から、B₁~B₂類に細分した。

B₁類 口縁端部が丸く收まる。

B₂類 縁端部が内側に屈曲する。

片口鉢C 体部が内弯気味に開き、口縁端部を外側へつまみ出す。

《貯蔵具》 壺・壺A・壺Bがある。形態の特徴から、壺A・壺Bはさらに細分する。

壺 ロクロ成形され、底部の切り離しは静止糸切り技法によって行う。底部は平底で、底部と体部との境は明瞭である。肩部には稜をとらず、細くすぼまる頸部になだらかにつながる。

壺A 口縁部は体部から直接外反する。口縁部の形態から、A₁~A₃類に細分した。

A₁類 口縁端部が平たく收まり、傾斜した面をとる。

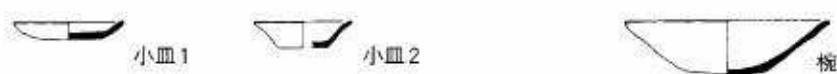
A₂類 口縁端部をわずかにつまみ上げ、外側に垂直な面をとる。

A₃類 口縁部は玉縁状となる。

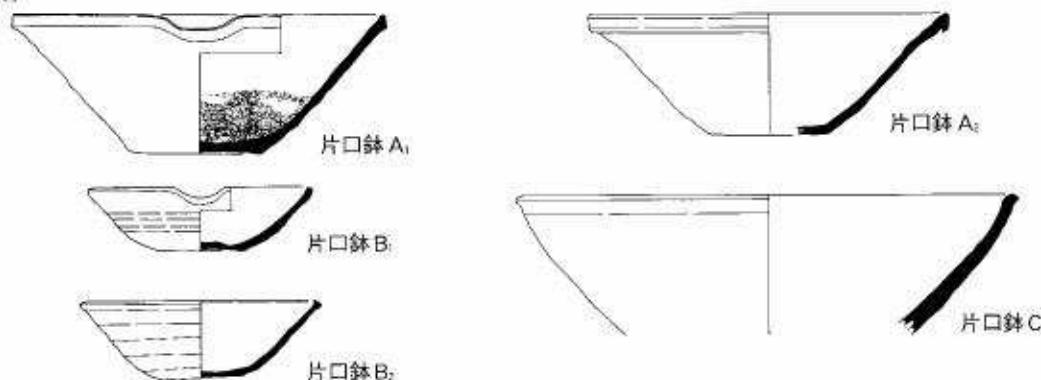
- 堺 B** 口縁部は頸部が立ち上ったあと、緩やかに外反する。口径が18~23cmの小型品と、27~40cmの大型品がある。口縁部の形態から、B₁~B₂類に細分した。
- B₁類 口縁端部が平たく收まり、傾斜した面をとる。
- B₂類 口縁内面に匙面をとる。

須恵器

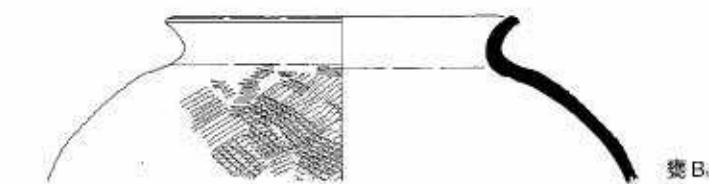
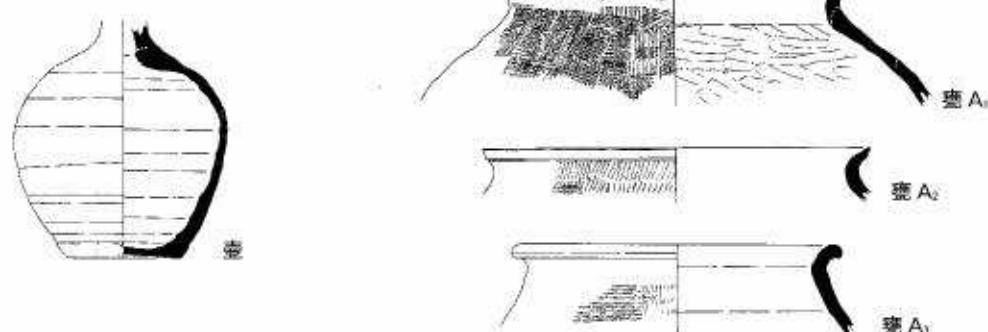
《供膳具》



《調理具》

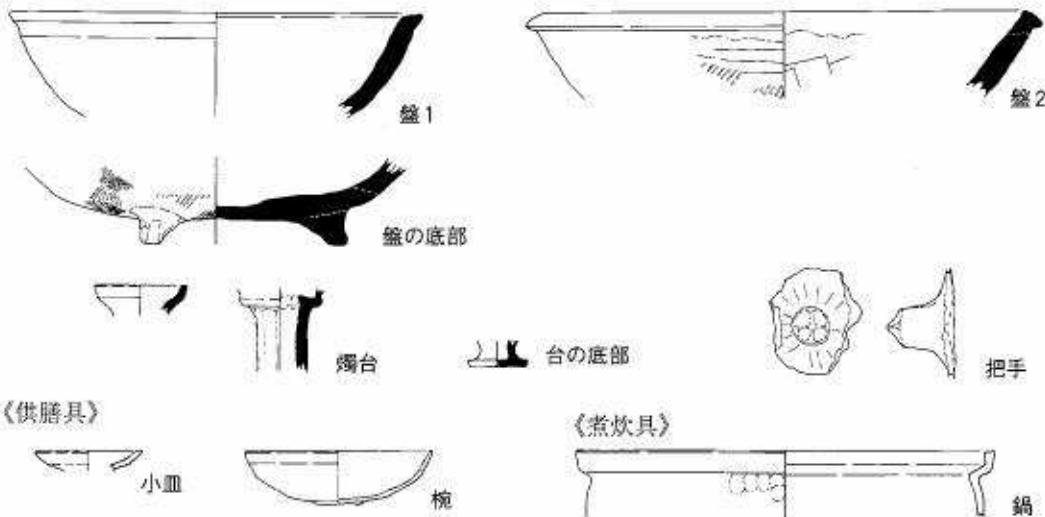


《貯藏具》



挿図3 器種分類図(3)

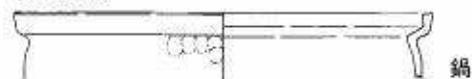
須恵器《雑具》



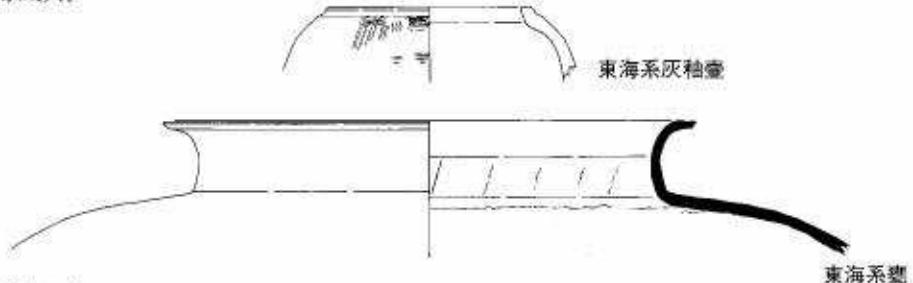
瓦器《供膳具》



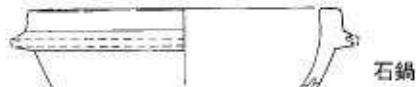
《煮炊具》



国産陶器《貯藏具》



滑石製品《煮炊具》



挿図4 器種分類図(4)

《雑具》 盤・燭台がある。形態の特徴から、盤はさらに細分する。

盤 平らな底部から、体部が丸みをもって立ち上がり、直線的に開く。底部には短い脚部が取り付く。外面にはタタキの痕跡が残り、内面はイタナデで仕上げる。法量は口径33~52cm、器壁の厚さ2~3cmで、非常に低平で肉厚な器形である。口縁部の特徴の差異から、1~2類に分類した。

1類 口縁端部に水平な面をとる。

2類 口縁端部を玉縁状に作る。

燭台 円筒形の体部から、口縁部が水平に屈曲して立ち上がる。

c. 瓦器

《供膳具》 小皿・椀がある。

小皿 口縁部をヨコナデで仕上げる。

椀 体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部をヨコナデで仕上げる。底部には輪高台が取り付

き、見込みには暗文を描く。

《煮炊具》 鍋がある。

鍋 口縁部は外へ屈曲したあと立ち上がり、受け口状となる。口縁端部は水平な面をとる。外面の口縁基部には、指頭痕が残る。

d. 国産陶器

《貯蔵具》 東海系の灰釉壺・甕がある。

灰釉壺 口縁部が短く直立する短頸壺で、外面に櫛状工具による調整の痕跡がある。

甕 口径40cmを超える大型の甕で、器壁は約1cmの薄い作りである。内外面にタタキの痕跡は残さない。常滑か渥美の製品と考えられる。

e. 滑石製品

《煮炊具》 石鍋がある。

石 鍋 口径は約25cmで、太く短い鍔が付く。

2. 出土土器

堀SD85001出土の土器（図版51～53 5083～5215）

5083～5127は土師器小皿Aで、いずれもA₁類である。また5128は土師器小皿B₁類、5129は

土師器小皿B₂類である。5130は土師器小皿Cで、内屈した口縁部の先端を尖らしている。

5131～5134は須恵器小皿で、いずれも器高は低めである。

5135は土師器小壺である。手づくねで作られ、外面の底部付近と内面に指頭痕が残っている。4区西側の堀から出土しており、弥生時代の溝と切り合っているため、混入品の可能性も考えられる。

5136～5174は土師器杯Aである。このうち5158・5167・5171はA₂類、5174はA₃類で、それ以外はA₁類である。5174の内面には漆が付着しており、漆の容器として用いられていたようである。

5175～5180は土師器皿Bで、このうち5176・5177はB₁類、5178・5180はB₂類、5175・5179はB₃類である。

5181～5206は須恵器椀である。いずれも底部は回転糸切りの平らなもので、その上につづく体部は直線的である。5206は見込みの部分に墨が画的に付着している。

5207～5210は須恵器片口鉢である。いずれも口縁部は垂下せず、上方にわずかに持ち上げる形態をとっており、A₁類である。

5211は土師器羽釜B₁類で、口径約18cmの小器品である。

5212は土師器鍋Bで、扁平な体部外面の下半部にはタタキの痕跡が残るが、上半部は磨滅と煤の付着のため、観察ができなかった。

5213・5214は須恵器甕Bで、5213は口縁内面に匙面をとるB₁類、5214は口縁端部を平たく収めるB₂類である。

5215は東海系陶器の甕で、常滑が渥美産と考えられる。

池SG85001出土の土器（図版54～58 5216～5408）

5216～5245は土師器小皿Aである。5220はA₁類で、やや深手で外反する体部をもつ。A₂類はこれ1点のみで、他はすべてA₁類である。5246～5272は土師器小皿Bで、このうちB₁類は5247・5248・5250・5251、B₂類は5252・5253・5257・5261・5271、B₃類は5249・5254・5255・5256・5258～5260・5262～5268・5270・5272、B₄類は5246・5269である。小皿Bは口縁部に油煙の煤が付着したものが多く、灯明皿として使用される頻度が高かったとみられる。5273・5274は土師器小皿Cで、受皿形を呈する。

5275～5285は須恵器小皿である。5275は2類で、やや深手で外反する体部をもつ。2類はこれ1点のみで、他はすべて1類である。

5286～5335は土師器杯Aである。このうちA₁類は5289・5291・5293・5295・5306・5307・5310・5314・5315・5321・5325、A₂類は5331～5333、A₃類は5334・5335で、それ以外はA₄類である。

5336～5349は土師器皿Bで、このうちB₁類は5337・5347、B₂類は5341・5342・5344・5348、B₃類は5338～5340・5343・5345・5346、B₄類は5336・5349である。5350は唯一の土師器皿Dである。後世の混入品の可能性がある。

5351は土師器托で、底部に穿孔をもつ。5352は5351に類似した形態の底部であるが、見込みの凹みがやや深いことと、器壁が他の椀類よりもかなり厚いことから、壺などの底部になる可能性がある。

5353は土師器の合子状の容器である。

5354～5370は須恵器椀である。いずれも底部は平らな回転糸切り底で、その上に直線的な体部が付く。

5371～5377は須恵器片口鉢Bで、口径約18cmの小型品である。そのうち口縁端部を内側に折り曲げた5372はB₂類、他はB₁類である。5378～5380は片口鉢A₁類である。

5381～5384は土師器粗製鉢である。口径12.3cm～19.5cm、器高は7.6cm～9.2cmと幅がある。いずれも外面を縦方向のハケ、内面を横方向のハケで調整している。口縁部下の頸部と、体部最下段に指頭圧痕が残っている。

5385・5386は土師器鍋Bで、体部外面をハケで調整する。5387・5388はいずれも体部外面にタタキの痕跡が残っており、5387は壺形を呈する鍋A₁類、5388は下膨れの体部を持つ鍋Cである。

5389は瓦質の鍋である。直線的な体部の上に、直角に屈曲した受け口状の口縁部が付く。体部内外面の調整は不明であるが、体部内面の最上部に指頭圧痕が残っている。

5394・5395は石鍋である。口縁部は短く、鍔も幅1.2cmと短い。

5390・5391は土師器羽釜Bで、短くて太い鍔をもつ。このうち5390は直径約20.8cmの小型品でB₁類、5391は口径約24cmの中型品でB₂類である。5392・5393は幅広の鍔をもつ羽釜

Aである。

5396は須恵器細頸壺である。平らな底部から丸みをもった体部が立ち上がり、肩部には稜をとらない。頸部は径4cm弱で細くしまり、口縁部を欠失している。底部の切り離しは、静止糸切り技法で行っている。

5397～5400は須恵器壺で、口縁部の形態から、5397はB₁類、5398はA₁類、5399はA₂類、5400はA₁類に分類する。

5406・5407は須恵器燭台である。円筒形の体部の上に屈曲した口縁部が付く。

5408は須恵器把手である。全長4.2cm、径3.5cmである。把手の先端部は、四方向からつまむように尖らせている。

5401～5403は須恵器盤である。5401は口縁端部が水平な盤1類、5402・5403は玉縁状の口縁部をもつ盤2類である。

5404・5405は土師器盤である。5404は口縁端部が水平な盤1類、5405は口縁端部が傾斜した面をもつ盤2類である。

池SG85002出土の土器（図版59～60 5409～5481）

5409～5427は土師器小皿A、5428～5437は土師器小皿Bである。小皿BのうちB₁類は5428～5430、B₂類は5432・5435～5437、B₃類は5431・5433・5434である。小皿B₃類のうち5435～5437の3点は焼成後に口縁部の一部を丸く削り込んでいる。そのくぼみの縁には煤が付着しており、ここから灯心をつき出して、灯明皿として使用したものである。

5438は土師器小皿C、5439は瓦器小皿である。

5440～5444は須恵器小皿である。

5445～5455は土師器杯Aである。

5456～5459は土師器皿Bである。このうちB₁類は5458・5459、B₂類は5457、B₃類は5456である。

5460～5466は須恵器椀である。

5467は土師器椀で、形態的にみて金属碗の写しと考えられる。体部は稜をもって直線的に開き、口縁部が外へ屈曲する。口縁部の直下には1条の沈線を施す。

5468は小型の須恵器の底部である。回転糸切りの平らな底部から、体部が外反気味に立ち上がる。器壁の厚さは5～7mmと薄く、燭台のような小型の器種の底部と考えられる。

5469～5472は須恵器片口鉢A₁類である。5469・5471・5472は内面に墨が付着している。

5473・5474は須恵器臺で、5473がB₁類、5474がA₁類である。

5475は土師器鍋A₁類で、直立気味の体部外面をハケで調整する。

5476は土師器羽釜Cで、口縁は非常に短く、鋸も太く短い。

5477は石鍋の体部の破片で、外面には煤が付着している。

5478は土師器盤2類で、口縁部に油煙の煤が付着している。

5479・5480は須恵器盤2類である。5481は盤の底部で、太くて短い脚が付いており、三脚になると考えられる。

掘立柱建物跡SB85002出土の土器（図版61 5482～5487）

5482は土師器小皿A、5483は小皿B₁類、5484は小皿B₄類である。5485～5487は土師器杯Aである。

掘立柱建物跡SB85003出土の土器（図版61 5488～5489）

5488は土師器の小皿A、5489は須恵器片口鉢Aである。

その他のピット出土の土器（図版61 5490～5497）

5490～5493は土師器小皿A、5494は須恵器小皿である。5495は土師器杯A、5496は須恵器碗、5497は土師器鍋A₁類である。

掘立柱建物跡SB85001の雨落ち溝出土の土器（図版61 5538）

5538は土師器鍋A₁類である。口縁部はくの字形に屈曲し、胴部最大径は口径を大きく上回っている。体部外面にはタタキの痕跡が残っている。

掘立柱建物跡SB85004の雨落ち溝出土の土器（図版61 5498～5502）

5498は土師器小皿A、5499・5500は須恵器小皿、5501・5502は土師器杯Aである。

土坑SK85006出土の土器（図版61 5503～5512）

5503～5505は土師器小皿A、5506～5511は小皿Bである。小皿Bのうち5506～5508はB₂類、5510・5511はB₄類である。5512は土師器杯Aである。

土坑SK85007出土の土器（図版61 5513～5532）

5513～5532は土師器小皿Aで、20個体が一括で出土した。口径は7.0～7.4cmの小振りな一群である。火を受けたために黒く煤けている。

土坑SK85009出土の土器（図版61 5533～5537）

5533は土師器小皿A、5534・5535は土師器杯Aである。このうち5534は体部に強いヨコナメを施すA₁類である。5536は須恵器碗で、口縁端部が丸く肥厚する。5537は須恵器盤2類である。

溝SD85005出土の土器（図版62 5543～5548）

5543～5545は土師器小皿A、5546は小皿B₁類である。5547は土師器杯A、5548は土師器皿B₁類である。

溝SD85006出土の土器（図版62 5539～5542）

5539～5541は土師器小皿A、5542は土師器杯Aである。SD85006は井戸SE85001を切っているため、これらの土器は井戸の上面の祭祀に伴う土器を攪乱したものとの可能性が強い。

井戸 SE85001出土の土器（図版62 5549～5586）

SE85001では埋土上面の土坑内で廃棄に伴う祭祀を行っており、この祭祀土坑の中から出土した土器は、火を受けて黒く煤けた痕跡をとどめていた。SE85001出土の土器は、こういった上面祭祀の土坑内の土器と、その下部の埋土中の土器とに分けて報告する。

SE85001上面の祭祀土坑（5549～5579）

5549～5562は土師器小皿A、5563は小皿B₁類、5564は小皿B₁類、5565～5568は小皿C類である。5569・5570は須恵器小皿である。

5571～5575は土師器杯Aで、このうち5574・5575は口縁部に強いヨコナデを施すA₂類である。5576は土師器皿B₃類である。

5577・5578は須恵器碗である。5577は体部の二箇所に「中」の墨書が見て取れる。5579は須恵器片口鉢A₁類で、口縁端部が上方につまみ上げるように面取りされている。

SE85001埋土中（5580～5586）

5580・5581は土師器小皿A、5582は杯A、5583は皿B₃類である。5584・5585は須恵器碗である。5586は須恵器片口鉢A₁類の破片で、楕に転用されており、内面に墨が付着しているほか、筆で試し書きなどをした痕跡が認められる。口縁部の形態、胎土および色調が神出産のものと異なっており、他地域産のものと推測される。

包含層出土の土器（図版63 5587～5605）

5587・5589は土師器小皿A、5588は小皿B₁類、5590・5591は小皿B₁類である。5592～5594は須恵器小皿で、5592・5593は内弯気味の深手の体部をもつ。

5595は土師器皿B類、5596は杯Aである。5597は瓦器碗で、体部内面にはミガキでいくつかの輪を描くような暗文を施している。ただし暗文はかなり乱れ、ミガキとミガキの間隔は粗くなっている。高台は断面三角形で、その機能が失われるほどには退化していない。5598・5599は須恵器碗である。

5600は須恵器燭台の破片である。筒形の体部から口縁部が直角に屈曲している。

5601は須恵器片口鉢Cである。体部の上半部を内弯させ、口縁部は外側へつまみ出すように外反させている。これとよく似た土器は釜ノ口5号窯などから出土しているため、神出古窯址群の中でも初期の製品と考えられる。

5602～5604は須恵器盤で、このうち5602・5603は盤2類、5604は盤1類である。5605は土師器盤1類で、形態・胎土の特徴から、5404と同一個体と考えられる。

墨書土器（図版64 5606～5625）

池SG85002（5606）

1点のみ出土している。土師器小皿Aの底部外面に墨痕が認められるものの、文字は判読できない。

池SG85001（5607～5619）

5607は土師器小皿Aである。底部外面に墨書の跡が見られる。5608～5613は土師器杯Aで

ある。5608・5609は体部外面の中ほどに墨書の痕跡が残る。5610・5611は体部外面の下の方の部分、5613は体部外面の上半部に墨書の痕跡が残る（5612は破片が小さいため、部位が不明である）。いずれも文字は判読できていない。5614～5619は須恵器碗である。5614は体部外面の中ほどに「七」という文字が認められる。5615は体部下半部に「二」の字と判読不能な文字が書かれている。5616は体部外面の中ほどに「上」という文字が書かれている。5617～5619は体部外面に文字が書かれているが、いずれも判読できない。

堺 SD85001 (5620～5624)

5620～5624はいずれも須恵器碗である。5620は体部外面の下半部に「十」の字が書かれている。5621・5622は体部外面の下半部に墨書が見られるものの、いずれも判読できていない。5623は体部外面の中位に「十」の字が書かれている。5624は体部外面の下半部に墨痕が認められる。「中」の字を横に寝かせたような形の文字である。

包含層 (5625)

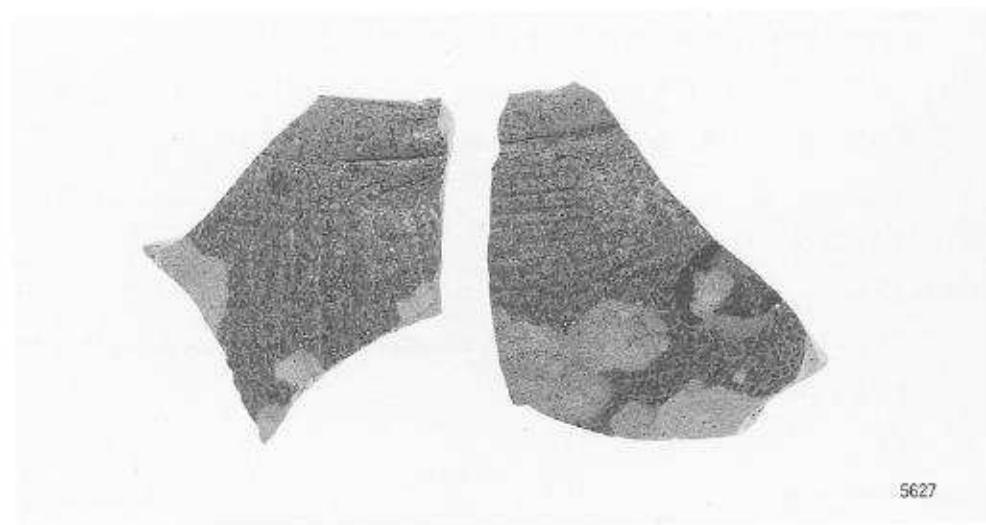
5625は須恵器碗の体部である。体部中位の破片と思われる。外面に墨書が認められるが、文字の判読は不能である。

施釉陶器 (図版64 5626～5628)

5626は緑釉陶器の皿で、1区のSG85002西側の方形土坑SK85012から出土した。体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。底部の高台は断面が台形を呈している。

5627は灰釉陶器短頸壺で、口縁部は短く立ち上がり、端部に平らな面をとる。肩部から体部上半部には櫛状の工具で調整した痕跡が認められる。

5628は須恵質焼成の壺に、鉄釉と思われる釉薬で草花文を描いたものである。さらに全体に釉がかかっていた痕跡が認められる。4点の破片は直接には接合しておらず、図上で復元した。破片の断面に漆と思われる樹脂が付着している。一度壊れたものを補修して使い続けたものであろう。5627・5628は1区の池 SG85001付近の包含層から出土した。



5627

挿図5 東海系灰釉陶器短頸壺

第2節 中国製磁器

中国製磁器は細片も含めると84点の青磁と白磁が出土している。このうち資料化できた27点の中国製磁器について報告する。

出土した中国製磁器の内訳は、白磁が小皿・皿・碗・瓶、青磁は碗が主体で蓋が1点出土している。これ以外に青磁の瓶もしくは壺の口縁部と思われる不明製品(5654)が出土している。

出土位置は5629・5632・5633・5648・5654が堀SD85001より、5634・5636・5645～5647・5649・5650・5652・5655が1区の池SG85001とその周辺より、5630・5637が池SG85002よりそれぞれ出土している。これら以外はすべて包含層より出土した。

以下、個々の中国製磁器について詳細を述べる。

白 磁 (図版65 5629～5644)

小 皿 (5629～5632)

5629は口縁部が外反する皿である。内面体部中位に圓線が巡る。外面体部下半は露胎で、回転ヘラケズリ痕が顯著である。口径は復元値で9.5cm、残存高は1.6cmである。

5630は口縁部が外反する皿である。外面体部下半は露胎である。口径は復元値で10.0cm、残存高は2.0cmである。

5631は端部は尖り氣味の高台をもつ皿である。内面底部には2つ以上の砂目跡が残り、高台端部は露胎である。釉調は、他の小皿に比べて透明度が高い。口径は復元値で9.4cm、器高は2.4cmである。

5632は口縁端部が平坦な面をもつ輪花皿である。内面体部中位に圓線が巡る。外面底部は回転ヘラケズリを施し、底部は露胎である。釉の透明度は高い。口径は復元値で10.7cm、器高は2.2cmである。

皿 (5633～5636)

いずれも内面に草花文が施される。釉色は、いずれも青味を帯び、所謂「青白磁」と呼称される製品である。

5633は底部から体部の破片である。内面体部から底部への移行部は僅かに段をもつ。内面には草花文が施されている。

5634は体部の破片である。内面は草花文、10本一単位の櫛描き文が施される。

5635は高台端部が僅かに突出し、擬高台様の高台部をもつ皿である。高台内中央部付近は露胎である。内面には草花文・櫛描き文が施される。高台径は復元値で5.7cm、残存高は2.5cmである。

5636は高台端部が僅かに突出し、擬高台様の高台部をもつ皿である。内面底部周縁に沿って熔着物が認められる。高台内は露胎で、釉の透明度は極めて高い。内面には片影りの飛雲文が施される。高台径は5.9cmで、残存高は3.4cmである。

小 碗 (5637・5639)

5637は口縁端部に平坦な面をもつ碗である。釉調は青味を帯び、透明度も高い。口径は復元値で11.9cm、残存高は3.4cmである。

5639は高台端部が僅かに突出し、擬高台様の高台部をもつ碗である。内面底部周縁は凹み、底部中央は盛り上がり気味である。高台端部・高台内は露胎である。高台内には墨書「□」が施される。釉調は黄色味を帯びるが、透明度は高い。胎土は灰白色を呈し、やや軟質である。高台径は復元値で4.3cm、残存高は2.3cmである。

碗 (5638・5640～5642)

5638は玉縁状の口縁部をもつ碗である。釉調は気泡が多く、不良である。口径は復元値で15.5cm、残存高は3.1cmである。

5640は高台端部・高台内は露胎で、高台内に墨書「長」が施されている。高台径は復元値で6.0cm、残存高は1.3cmである。

5641は内面体部と底部の境に圓線が巡る碗である。外面体部下半・高台内は露胎で、体部下半には整形の際生じたヘラ状工具による条痕が残る。全体に磨耗している。高台径は6.7cm、残存高2.4cmである。

5642は内面底部の釉を輪状に搔き取った碗である。外面体部下位・高台部は露胎である。高台径は復元値で6.0cm、残存高は3.7cmである。

瓶 (5643・5644)

5643は所謂「梅瓶」の肩部破片と考えられる。釉は青味を強く帯び、透明度も高く「青白磁」に分類される製品である。外面にはヘラ状工具による片彫りの文様が施され、内面は露胎である。

5644は高台部をもつ壺、ないしは注口をもつ瓶と考えられる。外面には4本一単位の櫛描き文が縱方向に施され、内面にはロクロ成形の凹凸が顕著に残る。内面底部・高台端部・高台内は露胎である。高台径は7.4cm、残存高は7.1cmである。

青 磁 (図版65 5645～5655)

碗 (5645～5653)

5645は内外面に文様を施した碗である。外面は9本一単位の櫛描き文、内面はジグザク文とヘラ状工具による文様が施されている。外面体部下位から高台にかけて露胎である。口径は復元値で14.8cm、器高は7.4cmである。

5646は内面に文様を施す碗である。内面はヘラ状工具による飛雲文と14本一単位の櫛描き文が施される。外面は回転ヘラケズリ痕が顕著である。口径は復元値で14.6cm、器高は5.6cmである。

5647は割画蓮華文碗である。内面の花文は細かい筋彫りで施され、花文の周囲には筋彫りの飛雲文が施される。口径は復元値で15.7cm、残存高6.0cmである。

5648は内面に櫛描き文・ヘラ状工具による片彫りを施した碗である。外面は回転ヘラケズ

リ痕が顯著に残る。口径は復元値で16.0cm、残存高は5.7cmである。

5649は無鏽の蓮弁文碗である。口径は復元値で16.0cm、残存高は4.0cmである。

5650は鏽蓮弁文碗である。内面は無文で体部中位に圈線が巡る。口径は復元値で17.1cm、残存高6.2cmである。

5651は鏽蓮弁文碗である。高台部から体部への移行部にはヘラ状工具による刺突痕が認められる。高台内は露胎である。高台部径5.4cm、残高2.8cmである。5652は内面にヘラ描きの文様が施される。高台端部・高台内は露胎である。釉調は透明度が極めて高い。高台径は復元値で6.0cm、残存高は2.0cmである。

5653は内外面とも無文の碗である。内面口縁部から体部への移行部には圈線が巡る。口径は復元値で15.0cm、残存高は4.7cmである。

壺・瓶 (5654)

壺ないし瓶の口縁部の破片と考えられる。外面口縁部中位付近に圈線が巡っている。内面下位は露胎である。口径は復元値で6.0cm、残存高は5.3cmである。

蓋 (5655)

摘まみをもつ壺の蓋である。全体に暗緑色を呈し、釉の透明度は高い。外面は、摘まみ部付近にヘラ状工具による三重の圈線を施し、周囲にはヘラ状工具による花文、10本一単位の櫛描き文を施している。内面は露胎である。胎土は暗灰色を呈する。口径9.9cm、残存高3.0cmである。

出土した中國製磁器の中で特筆すべきは5633～5637の皿および小碗の一群である。いずれも胎土は白色に近く、ガラス化の進んだ透明感がある。これらは釉の透明度が高く、青味を帯びる「青白磁」と呼称される一群で、景德鎮窯の所産と考えられる。玉津田中遺跡の調査区のなかでも、この青白磁の一群は、辻ヶ内地区でのみ出土している。

その他の白磁では高台に墨書をもつ碗が2例(5639・5640)出土している。5640は「長」と判読できる。5639は欠損した部分もあり確定できないが「上」の可能性が高い。

横田・森田分類に従えば、皿では5629がIV-1-b類、5630がIV-1-a類、5631はII類に、碗では5638がIV類、5641がIV-1類、5642はIII-3類にそれぞれ分類されると理解している。

青磁のなかで特筆すべき製品は5655の蓋があげられる。生産地は不明であるが、釉調は透明度が高く、施文も丁寧で上質の仕上がりとなっている。壺の蓋と考えられるが、この蓋に該当する壺は、今回調査した範囲では出土していない。

横田・森田分類に従えば、5645が同安窯系碗I-1-b類、5646が龍泉窯系I-3類、5649が同I-5-a類、5650・5651がI-5-b類にそれぞれ該当すると理解している。

第3節 瓦

辻ヶ内地区においては各調査区から大量の瓦が出土している。大部分が堀SD85001あるいは池SG85002からの出土であり¹⁰、これらの瓦が葺かれていた建物の位置、規模、構造は明らかではない。ここでは瓦を軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、その他の瓦に分類しそれぞれの瓦についての個別の説明を記述してゆく。

1. 軒丸瓦

軒丸瓦は大きく分類して蓮華文系、巴文系に分けられる。蓮華文系が9類に、巴文系が12類に細分できる。

蓮華文1類（図版66 5656～5657）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。全長は不明、径は14cm前後である。焼成は須恵質である。文様は突出した中房に1+6の蓮子を配し、周囲に雄蕊帯をめぐらせる。全体に薄く作られており周縁の幅も狭い。瓦当の下端部は面をなさずに裏面へと続く。

蓮華文2類（図版66 5658）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。全長は不明、径は12.6cm前後である。焼成は須恵質である。文様は突出する中房に1+6の蓮子を配し、周囲に雄蕊帯をめぐらせる。花弁の端は表現されておらず、周縁と接している。瓦当と丸瓦の接合部は縦方向のナデで仕上げ¹¹、瓦当側面・裏面もナデで仕上げる。神出古窯址群宮ノ裏支群で同文の瓦が出土している。

蓮華文3類（図版67～69 5666～5670）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。全長は34～35cm、直径は13.5cm前後である。焼成は須恵質である。中房は突出せず、凸線によって表現される。中には1+4の蓮子が配される。花弁は若干のふくらみを持つが、輪郭は凸線によって表現されている。瓦当と丸瓦は上下にはりつけた粘土で包み込んで接合している。瓦当の側面と裏面はナデで仕上げられている。丸瓦部凹面は糸切り痕、布目痕が残ったままで調整は無い。凸面は接合部を強く縦方向にナデ、他は縦方向を基調としたナデで仕上げる。玉縁部のみ横方向にナデる。側面はケズリを施した後にナデで仕上げている。また玉縁部には釘孔が1個あけられている。

蓮華文4類（図版66 5664）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。全長は不明、直径は14cm前後である。焼成は須恵質である。文様は凸線によって団まれた中房に1+8の蓮子を配する。花弁も凸線によって表現されており、内部に棒状の子葉を二つおく。瓦当と丸瓦の接合部は横方向のナデで仕上げられている。

蓮華文5類（図版66 5659）

小型の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。全長は不明、直径は10.2cmである。焼成は須恵質であり、表面には自然釉がかかる。文様は突出する中房の内部に1+6の蓮子を配し、その周囲に凸線によって表現された雄蕊帯がめぐる。花弁の端は表現されておらず、周縁に接している。花弁の内のひとつは、割りつけの関係で幅が狭くなっており、内部の子葉が一つしか配されていない。接合部は凹凸両面ともに縦方向にならぶ。瓦当端面と裏面もナデで仕上げられている。

蓮華文6類（図版66 5660～5661）

単弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。全長は不明、直径は12～13cmである。焼成は須恵質であり、表面に自然釉がかかるものもある。文様はわずかに突出する中房に1+4の蓮子を配し、花弁の境界は表現されていない。焼成・胎土・瓦当面の処理の異なる二つのタイプがある。ひとつは焼成がやや甘く胎土が精良で、文様面をナデで仕上げるものである。もうひとつは焼成が硬質で胎土に砂粒を含み、文様面を調整しないものである。两者は同范である。接合部は縦方向のナデで、端面は横方向のナデで仕上げ、裏面もナデで仕上げる。同范のものが神出古窯址群宮ノ裏支群で出土している。

蓮華文7類（図版66 5665）

複弁八葉蓮華文軒丸瓦であると判断する。全長は不明、直径は13cm程に復元できる。焼成は軟質である。花弁は凸線によって表現されており、内部に子葉を二つ配する。これと同文と思われるものが神出古窯址群宮ノ裏支群から出土している。

蓮華文8類（図版66 5662）

複弁五葉蓮華文軒丸瓦である。全長は不明、直径13cmである。焼成は須恵質であり、表面に自然釉がかかるものが多い。中房内の蓮子は不明瞭であり、花弁内の子葉も不明瞭である。瓦当と丸瓦の接合部は横方向のナデ、端面・裏面はナデで仕上げる。神出古窯址群拍子ヶ池3号窯で同文の瓦が採集されている。

蓮華文9類（図版69～70 5671～5674）

単弁十三葉蓮華文軒丸瓦である。全長25～26cm、直径11.3cmである。中心に左巻三つ巴文を配し、その周囲に凸線表現の花弁を配する。焼成は須恵質であり、表面に自然釉がかかるものもある。瓦当と丸瓦は、上下にはりつけた粘土によって包み込んで接合する。接合部は横方向のナデで仕上げる。丸瓦は厚さ1.5cm程のものであり、玉縁に釘孔がある。凸面は横方向のナデで仕上げられ、凹面は軽くナデされているが糸切痕・布目痕が残る。玉縁部のみ横方向に強くナデされている。同范の瓦が神出古窯址群南支群で出土している。

巴文1類（図版71 5675）

左巻三つ巴文軒丸瓦である。全長不明、直径14.5cm程である。焼成は須恵質である。巴文の周囲に圓線をめぐらせ、その外側に梢円形につぶれた珠文を配する。

巴文2類（図版71 5676）

左巻三つ巴文軒丸瓦である。全長、直径ともに不明。太い巴文の周囲に大粒の珠文を配する。焼成は軟質で灰白色を呈する。

巴文3類（図版71 5677）

左巻三つ巴文軒丸瓦である。巴文の周囲に大粒の珠文を配し、その外側に圓線をめぐらせる。焼成は須恵質である。

巴文4類（図版71 5678）

左巻三つ巴文軒丸瓦である。巴文の周囲に太い圓線をめぐらせ、その外側に小粒な珠文を配する。焼成は須恵質である。

巴文5類（図版71 5679）

左巻三つ巴文軒丸瓦である。直径14.5cm。長く尾をひく巴文の周囲に大粒の珠文を配する。焼成は須恵質である。

巴文6類（図版71 5680）

左巻三つ巴文軒丸瓦である。直径14.5cm。太い平板な表現の巴文の周囲に細い圓線を巡らせ、その外側に大粒の珠文を25個配する。焼成は須恵質である。瓦当と丸瓦の接合部は縦方向のナデで仕上げられており、瓦当端面・裏面もナデで仕上げられる。丸瓦は厚さ1.2cmであり、凸面はナデで仕上げられている。

巴文7類（図版71 5681～5683）

左巻三つ巴文軒丸瓦である。先細りで高く表現された巴文の周囲に小粒な珠文を31個配する。焼成は軟質で瓦当裏面および丸瓦凹面は灰白色、瓦当文様面はいぶされて灰黒色を呈する。丸瓦は厚さ1.8cmの平行タタキのものである。接合部は横方向にナデられており、瓦当側面・裏面もナデで仕上げられる。

巴文8類（図版72～73 5684～5687）

左巻二つ巴文軒丸瓦である。全長は27.3～29.5cm、直径は10.4～11.0cmである。巴文の周囲に細い圓線をめぐらせ、その外側に小粒な珠文を18個配する。焼成は須恵質である。瓦当と丸瓦の接合部は縦方向にナデる。瓦当の裏面・端面もナデで仕上げる。丸瓦は厚さ1.3cm程のものであり、凸面は玉縁部のみ横方向のナデで仕上げ、他は縦方向のナデで仕上げる。凹面は軽いナデで仕上げる。側面は丸味を帯び、ナデで仕上げる。

巴文9類（図版74 5688～5691）

右巻三つ巴文軒丸瓦である。全長は不明、直径は12cm前後である。巴文は平板な表現の太目のものである。焼成は須恵質であり、瓦当面に自然釉がかかるものもある。瓦当と丸瓦の接合部の凸面側は横方向にナデるものと縦方向にナデるものがある。瓦当の側面および裏面はナデで仕上げる。丸瓦は厚さ1.5cmのものである。同范と思われる瓦が神出古窯址群宮ノ裏支群で出土している。

巴文10類（図版74 5692～5695）

左巻三つ巴文軒丸瓦である。全長は不明、直径は13cmである。巴文は高く表現された太めのものであり、中心にコンバスの痕跡がある。焼成は須恵質である。瓦当と丸瓦の接合部は縦方向のナデで仕上げる。丸瓦は厚さ1.2cm程のものである。

巴文11類（図版74 5696）

左巻三つ巴文軒丸瓦である。直径13cmである。巴文は太い平板な表現のものであり、尾が周縁に接する。范の傷みが激しく、木目が顕著に出ている。焼成は須恵質であり、胎土には炭粒が多く入る。裏面、側面は粗いナデで仕上げる。全体に粗雑な造りの瓦である。

巴文12類（図版74 5697）

小型の右巻三つ巴文軒丸瓦である。直径9cmである。先細りの巴文の尾が連結して囲線となり、その外側にもう一重囲線がめぐる。焼成は須恵質であり、表面には自然釉がかかる。

2. 軒平瓦

軒平瓦は大きく分類して唐草文系、半截華文系、蓮華文系、剣頭文系に分けられる。唐草文系は21類に、華文系は4類に分類でき、蓮華文系、剣頭文系は各1類のみである。

唐草文1類（図版75～76 5698～5699）

偏行唐草文軒平瓦である。唐草の単位は瓦当面に向かって右から左へと連続する。范がかなり傷んでおり、文様の輪郭が若干不明瞭になっている。幅は25.2cm、高さ5.5～6.1cm、全長36.6cmである。焼成は須恵質であり、表面には自然釉がかかる。また焼成時のひずみ、亀裂が多く認められる。接合部は凹凸両面ともに横方向のナデで仕上げる。平瓦は瓦当の上端近くに接合されており、上下に粘土を附加する包み込み技法による接合である。平瓦は凸面を縦方向のナデで仕上げ、凹面は布目を軽くナデ消している。側面はヘラケズリの後にナデで仕上げる。

唐草文2類 (図版76 5700)

偏行唐草文軒丸瓦である。唐草文1類とは左右反転の同文のものである。唐草の単位は瓦当面に向かって左から右へと連続する。範の傷みが激しく木目が顕著に現れる。幅25.2cm、高さ5.6cmである。焼成は須恵質であり、表面には自然釉がかかる。平瓦は瓦当の上端近くに接合されており、粘土で包みこまれる。平瓦は凸面を粗い縦方向のナデで仕上げ、凹面は軽く布目をナデ消す。

唐草文3類 (図版76 5701)

均正唐草文軒平瓦である。細い線によって表現された唐草文帯の外に細い界線をめぐらせ、その外側に珠文を配する。焼成は須恵質である。接合部・頸部は横方向のナデで仕上げる。東寺出土瓦、明石市三本松瓦窯出土瓦に同文のものがある。

唐草文4類 (図版76 5702~5703)

均正唐草文軒平瓦である。唐草文の下に界線を入れ、その下に珠文を配する。焼成は須恵質である。伝雪ノ御所出土瓦と同文である。

唐草文5類 (図版77~79 5704~5711)

均正唐草文軒平瓦である。本来の文様の瓦当面に向かって左側を切断しており、中心筋りが右側に片寄る。文様の細部が異なる同範の瓦がa・bの2種類ある。bはaの文様の左端をさらに切断したものである。5a類(5704~5706)は全長不明、幅が21.0cm、高さ4.7~5.0cmであり、5b類(5707~5711)は全長28~30cm、幅が19~20cm、高さ4.6~4.8cmである。焼成は須恵質のものが多いが、5a類の中には少量軟質のものがある。平瓦は瓦当上端近くに接合されており、上下左右に粘土を附加して包み込む。接合部は横方向のナデで仕上げる。平瓦は5a類には2種類あり、それぞれ須恵質の焼成のものと軟質の焼成のものに対応する。須恵質のものは凸面を縦方向のナデで仕上げ、凹面の布目痕が粗い平瓦を用い、軟質のものは凸面に平行タタキを残し、凹面の布目が細かい平瓦を用いる。5b類の平瓦は凸面を縦方向のナデで仕上げ、凹面はほとんど無調整であり、釘孔を穿つ。神出古窯址群南支群から5b類と同範のものが出土している。

唐草文6類 (図版80 5712~5713)

中心を境に上下反転させた唐草文を配する唐草文軒平瓦である。瓦当面に向かって右側は文様が切れており、範が切断されたことを示している。全長25.6cm、幅16.2cm、高さ4cmである。焼成は須恵質である。平瓦は瓦当の上端近くに接合され、接合部は横方向のナデで仕上げられる。平瓦は厚さ1.0~1.5cmほどのものであり、凸面は縦方向のナデで仕上げ、凹面は粗く横方向にナデる。側面は瓦当との接合部から中ほどにかけて丁寧にナデで仕上げる。

唐草文7類（図版80 5714～5716）

中心飾りを欠いた均正唐草文軒平瓦である。幅16cm、高さ4cmである。焼成は須恵質であり、表面には自然釉がかかる。平瓦は瓦当の上端近くに接合され、接合部は凹凸両面ともに丁寧なナデで仕上げられる。平瓦の凸面は縦方向のナデで仕上げ、凹面は布目痕を軽くナデ消す。

唐草文8類（図版81 5717～5719）

簡略化された均正唐草文軒平瓦である。幅23cm、高さ5cmである。焼成は軟質であり、灰白色を呈する。瓦当と平瓦の接合部は丁寧にナデで仕上げる。平瓦は凸面をナデで仕上げる。法住寺殿で同文の瓦が出土している。

唐草文9類（図版81 5720～5721）

唐草文軒平瓦であるが、小破片のため文様の全容は不明である。文様の右端および上端が窮屈になっており、範が縮小されたことをうかがわせる。焼成は須恵質である。

唐草文10類（図版81 5722）

均正唐草文軒平瓦である。幅16cm、高さ3.4cm程度であろう。焼成は須恵質である。平瓦と瓦当の接合部は横方向のナデで仕上げる。

唐草文11類（図版81 5723）

均正唐草文軒平瓦である。焼成は須恵質である。瓦当と平瓦の接合に際し、凸面側に厚く粘土を附加しているため顕は明確ではない。

唐草文12類（図版81 5724）

かなり単純化された文様の唐草文軒平瓦である。焼成は須恵質である。瓦当と平瓦の接合部は横方向のナデで仕上げられる。平瓦は薄手のものである。

唐草文13類（図版81 5725）

唐草文軒平瓦である。12類と同文の可能性もあるが、残存部分からは判断できない。焼成は須恵質である。

唐草文14類（図版81 5726）

均正唐草文軒平瓦である。唐草文の周囲に界線をめぐらせる。高さ5.8cmほどである。焼成は須恵質であり、灰色を呈する。胎土中には炭粒を含む。接合部は横方向のナデで仕上げる。

唐草文15類（図版81 5727）

唐草文軒平瓦である。文様の端は周縁部に接し、端が切れている。焼成は軟質であり、灰白色を呈する。

唐草文16類 (図版81 5728)

均正唐草文軒平瓦である。高さ3.9cmほどである。焼成は須恵質であり、青灰色を呈する。

唐草文17類 (図版81 5729)

均正唐草文軒平瓦である。焼成は須恵質である。胎土中に炭粒を含む。同文の瓦が神出古窯址群宮ノ裏支群で出土している。

唐草文18類 (図版81 5730)

均正唐草文軒平瓦である。平瓦との接合は上下に粘土を附加しておこなう。接合部は横方向のナデで仕上げる。焼成は須恵質である。接合される平瓦は幅20.7cm、厚さ1.4cmほどのものである。

唐草文19類 (図版81 5731)

偏行唐草文軒平瓦である。高さ4.5cmである。焼成は軟質であり灰白色を呈する。接合部は横方向のナデで仕上げる。接合する平瓦は凸面に平行条線のタタキ目が残るもので、厚さ1.4cmのものである。

唐草文20類 (図版82 5732~5735)

偏行唐草文軒平瓦である。唐草文は大きく崩れしており、記号化が著しい。幅16.5~17cm、高さ3.3cmほどである。焼成は須恵質であり、表面に自然釉がかかるものが多い。接合部は横方向のナデで仕上げられる。平瓦は幅15.5cm、厚さ1.5cmほどのものであり、6本/cmほどの粗い布目痕が残るものが多い。

唐草文21類 (図版82 5736~5739)

偏行唐草文軒平瓦である。文様は唐草文20類を左右反転したものである。幅16.5cm、高さ4~4.5cmである。焼成は須恵質であり、表面に自然釉がかかるものが多い。接合部は横方向のナデで仕上げられる。接合される平瓦は厚さ1.3cmほどのものである。

半截華文1類 (図版83 5740~5742)

中心に下向きの半截華文を配し、その左右に唐草文を加えたものである。焼成は軟質であり、表面は黒く爐されている。接合部は横方向のナデで仕上げる。同文の瓦が京都の尊勝寺、法住寺殿、三木の久留美古窯址群柳谷支群で出土している。

半截華文2類 (図版83 5743~5744)

凸線によって表現された華文を上下反転させて3ないしは4単位繰り返すものである。焼成は須恵質であり、表面に自然釉がかかるものがある。接合部は横方向のナデで仕上げる。接合する平瓦は厚さ1.2cmほどのものである。

半截華文 3類 (図版83 5745~5747)

面的に表現された華文を上下反転させて3単位半を連続的に配するものである。焼成は須恵質である。接合部は横方向のナデで仕上げられる。平瓦は幅23cm、厚さ1.6cmのものである。

蓮華文 (図版83 5748)

中心に半截した蓮華文をおくものである。焼成は須恵質である。同文のものが神出古窯址群宮ノ裏支群で出土している。

剣頭文 (図版83 5749)

凸線によって表現された剣頭文を並べるものである。焼成は須恵質。接合部は横方向のナデで仕上げる。

3. 丸 瓦

丸瓦は大きさにより小型（全長30cm未満）と大型（全長30cm以上）に大きく分類する。大きさ、調整などの要素から小型は9類に、大型は6類に細分できる。

小型1類 (図版84 5750)

全長21~22cm、幅11~12cm、厚さ1.3cmの丸瓦である。焼成は須恵質である。凸面は基本的に横方向のナデで仕上げる。凹面は6本/cm程度の密度の粗い布目痕が残る。また前後端を横方向に、両側面を縦方向にそれぞれ幅1cmほどヘラケズリする。玉縁に釘孔があくものがある。

小型2類 (図版84 5751)

大きさ、製作技法は1類と共通する点が多いが、胎土中に炭粒が多く含まれているとの凹面の布目痕が縦方向のナデによって完全に消されている点が異なる。

小型3類 (図版85 5752)

全長23.4cm、幅12.0cm、厚さ0.9cmの丸瓦である。焼成は須恵質であり、胎土中に炭粒を多く含む。凸面は横方向を基本とするナデで仕上げられる。凹面は6本/cm程度の密度の粗い布目痕が残るが、一部縦方向のナデで消されている。前端および両側面にはヘラケズリを施し、玉縁凹面側は全て横方向にヘラケズリを施す。

小型4類 (図版85 5753)

全長24~25cm、幅12cm、厚さ1.5cmの丸瓦である。焼成は須恵質である。凸面は基本的に横方向のナデで仕上げる。凹面は前端部のみ幅1cmほどで横方向のヘラケズリを施す。側面も縦方向のヘラケズリで仕上げられる。

小型5類（図版86 5754）

大きさなど基本的な特徴は小型4類と同じである。玉縁凹面側を横方向のナデで仕上げる点が異なる。

小型6類（図版86 5755）

全長26cm、幅12cm、厚さ1.1cmの丸瓦である。焼成は須恵質である。凸面は横方向のナデで仕上げる。凹面は糸切り痕と粗い布目痕が残る。前端部に幅1cmほどのヘラケズリを施す。側面は縦方向のヘラケズリを施す。

小型7類（図版87 5756）

全長25.8cm、幅12cm、厚さ1.2cmの丸瓦である。焼成は軟質であり、凸面はイブシがかかり黒色、凹面は灰白色を呈する。凸面は横方向のナデで仕上げる。凹面には粗い布目痕が残る。前端部と側端部にはヘラケズリが施される。側面も縦方向のヘラケズリで仕上げられる。

小型8類（図版87 5757）

全長25cm、幅11.8cm、厚さ1.3cmの丸瓦である。焼成は軟質であり灰白色を呈する。凸面には3～4本/cmの平行条線のタタキが入る。凹面は細かい布目痕を縦方向にナデ消す。前後端部、側端部にはヘラケズリが施され、側面もヘラケズリで仕上げられる。

小型9類（図版88 5758）

全長27cm、幅11cm、厚さ1cmの丸瓦である。焼成は軟質である。凸面は後部約3分の1の範囲に横方向のナデを施し、あとは縦方向のナデを施す。凹面は糸切り痕と布目痕が残り、側面にヘラケズリを施す。

大型1類（図版88 5759）

全長34.2cm、幅13.0cm、厚さ1.5cmの丸瓦である。玉縁の段差が小さい。焼成はやや軟質である。凸面は前後端部に横方向のナデを施し、他の部分には縦方向のナデを施す。凹面には糸切り痕と布目痕が残る。

大型2類（図版89 5760）

全長不明、幅13.0cm、厚さ2.0cmの丸瓦である。玉縁の段差が小さい。焼成は軟質。凹面には粗いヘラケズリが施される。

大型3類（図版89 5761～5762）

全長、幅ともに不明。焼成は軟質である。凸面は横方向のナデで仕上げ、凹面には布目痕が残る。

大型 4 類 (図版89 5763)

全長不明、幅14.0cmの丸瓦である。焼成は軟質である。凸面後端部に横方向のヘラケズリを施す。凹面には糸切り痕と布目痕が残る。側端部と側面にはヘラケズリを施す。後端部にも狭い範囲であるがヘラケズリを施す。

大型 5 類 (図版90 5764~5765)

全長32.0cm、幅15~16cm、厚さ1.5cmの丸瓦である。焼成は須恵質。凸面は横方向のナデで仕上げる。凹面には糸切り痕と布目痕が残るが、一部縦方向のナデで消されている。前後端部と側端部にはヘラケズリを施す。

大型 6 類 (図版91 5766~5767)

全長34.2cm、幅15.0cm、厚さ1.5cmの丸瓦である。焼成は須恵質である。凸面は前後端部に横方向のナデを施し、他の部分は不定方向のナデを施す。凹面には糸切り痕と布目痕が残る。前端部にはヘラケズリを施す。5767は凹面に「大」の線刻がある。

4. 平 瓦

平瓦は大きさにより小型（30cm未満）と大型（30cm以上）に大きく分ける。大きさ、調整などの要素により小型が5類に、大型が6類に分類できる。

小型 1 類 (図版92 5768)

全長23~24cm、幅15~16cm、厚さ1.2cmの平瓦である。焼成は須恵質。凸面は縦方向のナデで仕上げる。凹面は細かい布目痕を一部ナデ消している。側面はヘラケズリの後にナデで仕上げる。

小型 2 類 (図版92 5769)

全長26cm、幅16.4~17.4cm、厚さ1.2cmの平瓦である。焼成は須恵質。凸面は縦方向のナデで丁寧に仕上げる。不明瞭であるが繩タタキの痕跡が残る。凹面には9本/cmの粗い布目痕が残る。

小型 3 類 (図版93 5770)

全長25.8cm、幅15.7cm、厚さ1.0cmの平瓦である。焼成はやや軟質であり、胎土には炭粒・砂礫を多く含む。凸面には縦方向のヘラケズリが施され、短辺の片側だけに横方向のナデを施す。凹面には7本/cmの粗い布目痕が残る。全体に粗雑な造りの瓦である。

小型 4 類 (図版93 5771)

全長26cm、幅15.5~17.3cm、厚さ1.0~1.5cmの平瓦である。焼成は軟質であり、一部黒くイブシがかかる。凸面には平行条線に×を加えたタタキが入る。タタキ目は軽くナデ消されている。端部の片側のみにヘラケズリが施される。凹面には10本/cmの布目痕が残るが、丁寧にナデ消されており一部分が残るのみである。ナデを端部は横方向に、他は縦方向に施す。

小型 5 類 (図版94 5772)

全長不明、幅17.3cmの平瓦である。焼成は須恵質。凸面には×のタタキが入る。かなりナデ消されているが痕跡は明瞭である。凹面には7本/cmの粗い布目痕が残る。側端部を面取りしている。

大型 1 類 (図版94 5773)

全長30.7cm、幅20.0cm、厚さ1.4cmの平瓦である。焼成は須恵質である。凸面は縦方向に幅の広いヘラケズリを施したのちに、縦方向のナデで仕上げる。短辺の片側のみ幅2cmの範囲を強く横方向にナデする。凹面は縦方向に丁寧にナデて仕上げる。凸面同様、短辺の片側のみ幅3cmの範囲を強く横方向になで、段が形成されている。

大型 2 類 (図版95 5774)

全長不明、幅22.5cm、厚さ1.5cmの平瓦である。焼成は軟質であり灰白色を呈する。凹面は黒くイブシがかかる。凸面には4本/cmの平行条線のタタキが入り、縦方向のナデで消されている。凹面には9本/cmの布目痕が残る。縦方向にかなり強くナデ消されているが、完全に平滑にはなっていない。長辺の凹面側に面取りが施されている。

大型 3 類 (図版95 5775)

全長29.8cm、幅19.6cm、厚さ1.4cmの平瓦である。全長が30cmに満たないが、規格としては大型の範疇に入るものであるので、大型に分類した。焼成は須恵質である。凸面には×のタタキが入る。縦方向に強くナデ消されているが、単位は明瞭に読み取れる。凹面には9本/cmの布目痕が残る。縦方向に強くナデられており、短辺の両端部に残るのみである。短辺の一端にワラ状のものの圧痕が残る。

大型 4 類 (図版96 5776)

全長32.5cm、幅23.5~24.0cm、厚さ1.5~1.6cmの平瓦である。焼成は須恵質である。凸面には4条/cmの縦タタキが入り、ナデはほとんど施されていない。凹面には10本/cmの細かい布目痕が残り、ナデは軽く施されるのみである。凹面側の各端部にはすべて面取りが施されている。

大型5類 (図版97 5777)

凸面に平行条線のタタキが入る平瓦であるが、細部の違いによりa・bの2種類に細分できる。拓本・断面図を掲載しているのはb類である。a類は全長35.5cm、幅は不明、厚さ1.3cmの薄手の造りのものであり、焼成は軟質である。凸面には4本/2cmの平行条線に×を加えたタタキが入る。ナデは顕著ではない。凹面には6本/cmの粗い布目痕が残り、軽くナデ消されている。b類は全長31.8~33.5cm、幅21.5~22.5cm、厚さ1.8cmの厚手の造りのものであり、焼成は須恵質である。凸面には4本/2cmの平行条線に×を加えたタタキが入り、部分的に強くナデ消されている。凹面には14本/cmの細かい布目痕が残り、縦方向のナデで消されている。

大型6類 (図版98 5778)

全長34.7~35.5cm、幅23.5~24.5cm、厚さ1.8~2.0cmの平瓦である。焼成は須恵質である。凸面は縦方向のナデで仕上げられる。凹面には9本/cmの布目痕が残るが、ナデによって消されており不明瞭になっている。凹面側の全側端部に面取りが施される。

5. 鬼 瓦

鬼瓦は2種類出土している。大部分が細かい破片であり、完形のものはない。

鬼瓦1類 (図版99 5779~5781)

鬼面文で外縁に珠文を配する鬼瓦である。鬼面は立体的に表現されており、目・頬・鼻が大きく突出する。推定で高さ33cm、幅24cm、最大厚7cmである。焼成は須恵質であり、表面にはイブシがかかる。範は3つに分割されており、合わせ目の痕跡が明瞭に残る。

鬼瓦2類 (図版99 5782~5784)

鬼面文で外縁に珠文を配する鬼瓦である。鬼面は立体的に表現されている。頬・牙・脚の一部のみの出土であるのでその全形は不明である。焼成は須恵質である。

註 (1)遺構毎の瓦の出土数量は別表にまとめてある。表7参照。

(2)ナア・ケズリなどの調整の方向は、瓦の長軸方向に並行するものを「縦方向」、直交するものを「横方向」と呼称している。

瓦出土遺構一覧

柱穴(建物以外)	5659・5664 SK85009 5704 SE85001 5751 SG85001 5742・5775 SD85003 5768
SG85002	5656~5658・5660~5662・5669・5672~5679・5682・5685・5689~5692・5697・5708・5711 5714~5715・5719~5721・5725・5731~5734・5737~5739・5741・5744・5752~5754・5756~5758 5760~5762・5765・5770~5772・5777・5779~5780
SD85001	5663・5667~5668・5670~5671・5673~5674・5680~5681・5684・5686~5687・5698~5701・5706 5710~5712・5726・5743・5745・5763~5764・5766~5767・5769・5773・5776・5778・5781・5787
包含層	5665・5675~5678・5683・5688・5693~5696・5702~5703・5705・5707・5709・5713・5716~5718 5722~5724・5727~5730・5735~5736・5740・5746~5750・5755・5759・5782~5783

第4節 木 器

辻ヶ内地区では土坑・溝・池から中世の木器が多く出土している。工具・農具・紡織具・服飾具・容器・食事具・遊戯具・祭祀具・部材等様々な種類の木器があるが、各遺構毎に出土遺物の個別の説明をしていく。なお各木器の名称は基本的に奈良国立文化財研究所発行の『木器集成図録 近畿古代編』に拠っている。

1. SK85009出土の木器（図版100 5001～5003）

SK85009からは木器がまとまって出土している。種類は部材、祭祀具である。5001は肘木の一種とみられる。二方柾の柱材であり、木裏を2cm削る。先端から23cmのところに材を組み合わせるための刺り込みを入れる。また心側には2箇所、方形の穴を作る。長さ75.0cm、幅12.5cm、厚さ10.0cmである。樹種はヒノキである。

5002は火焔である。柾目板を加工している。2枚1対の部品を組み合わせていたものの片方である。下端に台に固定するための突起がある。高さ14.6cm、最大幅5.3cm、厚さ0.5cmである。樹種はヒノキである。

5003は呪符木簡である。柾目板であり、先端を尖らせる。片面に墨書きがあり、「鬼」の字を3個、4個、5個、6個、7個と5段に重ね、その下に「急々如律令」の文字を配する。各「鬼」字の段の間には2条の線を入れる。最上部にも墨書きがあるが、文字は判読できない。長さ29.2cm、幅3.9cm、厚さ0.3cmである。樹種はヒノキである。

2. SK85008出土の木器（図版100～102 5004～5007）

5004～5007は建築部材をとった後の原材の残りの部分、「鼻切り」である。5004は板材である。板目板であり、長さ72.4cm、幅68.0cm、厚さ5.5cmである。樹種はクスノキである。5005は心持ち材であり、幸引用の紐を通す孔と溝を細工する。角は面取りされており、表面には手斧で削られた痕跡が残る。紐通しの孔は4面にあくが、相接する2面の孔はL字形に貫通している。先端部は一部焦げている。長さ75.0cm、幅38.6cm、厚さ26.6cmである。樹種はケヤキである。5006と5007はともに板目板材である。5006は両面から穿孔した紐通しの孔があり、表面には手斧ではつた痕跡がある。長さ44.0cm、幅37.0cm、厚さ5.5cmである。樹種はヒノキである。5007も両面から穿孔した紐通しの孔があるが、心側の孔は溝を掘った後に、裏側の孔と貫通させている。先端部は面取りされる。表面には手斧ではつて整形した痕跡が残る。長さ70.5cm、幅48.0cm、厚さ12.2cmである。樹種はクスノキである。

3. SE85001出土の木器（図版103～106 5008～5037）

SE85001からは井戸枠材のはが容器・食事具・部材が出土している。5008は円形曲物の底板である。柾目板を加工する。約半分を欠くが、直径18.4cm、厚さ0.6cmである。樹種はアスナロである。5009も曲物の底板である。一側に樹皮が貫通しており、何枚かの板をはぎ

合わせて1枚にしていたようである。使用しているのは柾目板である。長さ20.6cm、幅2.5cm、厚さ0.4cmである。樹種はヒノキである。5010～5015は箸である。両端が尖り、表面は丁寧に面取りしている。樹種はヒノキ・コウヤマキである。

5016～5025は建築部材を切断した角材である。ほとんどが継手仕口するための割り込みもしくは枘が加工されている。5016は二方柾の材であり、矩折り目違い継ぎのための割り込みがある。長さ6.5cm、長辺7.5cm、短辺6.5cmである。樹種はカヤである。5017も継手のための割り込みがある。樹種はスギである。5018は二方柾の材であり、相欠き仕口のための割り込みがある。長さ31.5cm、一辺6.8cmである。樹種はカヤである。5019は二方柾の角材であり、表面には手斧によるはつり痕、両端面には鋸による挽き目痕が残る。長さ32.1cm、長辺7.0cm、短辺6.0cmである。樹種はカヤである。

5020は3枚組仕口のための割り込みを入れた心持ちの角材である。角は面取りされ、丸みを帯びる。長さ18.8cm、幅8cm、厚さ5.1cmである。樹種はハイノキである。5021も3枚組仕口のための割り込みを入れた角材であるが、二方柾の材である。表面には手斧によるはつり痕が残る。長さ20.5cm、幅7.5cm、厚さ4.9cmである。樹種はシイ属である。5022は二方柾の角材であり、相欠き仕口のための割り込みを入れる。2面に長さ6cm、幅1.8cmの枘穴を穿つ。表面には手斧のはつり痕が、端面には鋸の挽き目が残る。長さ38.0cm、一辺7.0cmである。樹種はカヤである。5023は3枚組仕口のための割り込みをいたれた心持ちの角材である。表面には手斧のはつり痕が残る。長さ46.5cm、幅8.3cm、厚さ5.2cmである。樹種はハイノキである。5024は5018・5022と同様、相欠き仕口のための割り込みを入れた四方柾の角材である。一面に一辺2.4cmの枘穴を穿つ。表面には手斧によるはつり痕が残る。長さ37.3cm、一辺7.9cmである。樹種はカヤである。5025は四方柾の角材であるが、断面形は台形である。表面には手斧によるはつり痕が残る。長さ53.8cm、幅8.6cm、厚さ5.8cmである。樹種は二葉マツである。

5026～5029はSE85001の底に井戸側の最下段の横樋として組まれていた部材である。5026・5027は三枚組仕口のために両端に割り込みを入れた二方柾の角材である。いずれも表面に手斧によりはつり痕が残る。5026が長さ129.4cm、幅10.2cm、厚さ5.6cmであり、5027が長さ129.4cm、幅10.0cm、厚さ5.5cmである。樹種はいずれも二葉マツである。5028・5029は三枚組仕口のための突起を造り出した二方柾の角材である。いずれも表面に手斧によるはつり痕が残る。5028が長さ129.0cm、幅9.9cm、厚さ5.8cmであり、5029は長さ129.8cm、幅10.2cm、厚さ6.0cmである。樹種はいずれもヒノキである。

5030～5037は板材である。5030は板目の板材であり、表面には手斧によるはつり痕が残る。長さ90.0cm、幅27.6cm、厚さ3.8cmである。樹種はモミである。5031は板目の板材である。断面形は中央が厚く、両側が薄い凸レンズ状である。長さ192.4cm、幅14.5cm、厚さ2.3cmである。樹種はスギである。5032は板目の板材である。表面に針状のもので引っ掛けた「キ」の記号がある。長さ102.6cm、幅14.2cm、厚さ2.4cmである。5033は板目の板材であるが、方孔を穿つ。長さ77.4cm、幅10.0cm、厚さ0.4cmである。5034は皮付の板目板材である。長さ130.6cm、幅12.6cm、厚さ2.4cmである。樹種はスギである。5035は板目の板材である。長さ138.0cm、幅9.8cm、厚さ2.5cmである。樹種はスギであ

る。5036は幅狭の板目の板材である。長さ132.5cm、幅6.2cm、厚さ1.4cmである。樹種はスギである。5037は板目の板材である。表面には手斧によるはつり痕が残る。長さ137.8cm、幅26.6cm、厚さ4.0cmである。樹種はモミである。

3. SG85001出土の木器（図版107～108 5038～5056）

SG85001からは夥しい量の土器とともに木器も多量に出土した。木器の種類は工具・容器・食事具・遊戯具・祭祀具・部材と様々である。5038は将棋の駒である。板目板を加工している。表には「桂馬」、裏面には「金」と墨書きされている。高さ3.9cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmである。樹種はヒノキである。5039は独楽である。心持ち材を加工している。高さ5.3cm、直径2.7cmである。樹種はムクノキである。5040は台脚（猫脚）である。上方に台部に固定するための納を作りだす。高さ2.3cm、上部幅1.7cm、厚さ1.0cmである。樹種はヒノキである。5041は漆を塗った上に金箔を押したものである。片面に3条の凸線を彫刻する。小破片であるので何かは不明であるが、仏具であろうか。高さ1.8cm、幅4.7cm、厚さ0.9cmである。樹種はヒノキである。

5042は円盤に脚がつくものである。片面に同心円が三重に墨書きされる。用途は不明である。高さ6.7cm、円板部の直径3.4cm、厚さ0.5cmである。樹種はヒノキである。5043・5044は墨書きのある板材である。5043は先端部が細くなる板目の板に8文字以上が墨書きされる。文字は判読できない。長さ31.2cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmである。樹種はモミである。5044は板目の板材の片面に墨書きされている。片側が折れているので、本来はもう少し幅広の板であったようである。長さ9.0cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmである。樹種はツガである。

5045は付け木である。先端部が黒く焦げる。長さ13.3cm、幅1.4cm、厚さ2.2cmである。樹種は二葉マツである。5046は刷毛である。先端部を薄く削り、小さな孔が穿たれる。先端部には漆が付着する。長さ7.1cm、先端部の幅1.5cm、厚さ0.3cmである。樹種はヒノキである。5047～5049は漆塗りされた柾目板の木片である。何の一部かは不明である。5047が長さ3.9cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、5048が長さ3.2cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm、5049が長さ3.2cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmである。樹種はヒノキである。5050は方形曲物の底である。樹皮によって複数の柾目板を矧ぎ合わせる。長さ9.7cm、幅5.3cm、厚さ0.5cmである。樹種はモミである。

5051は先端部が尖った板目の板材である。長さ27.0cm、幅4.2cm、厚さ0.6cmである。樹種はモミである。5052は片側に鋸歯状の切り込みを入れたものである。用途は不明。長さ27.4cm、幅2.0cm、厚さ0.4cmである。樹種はヒノキ樹皮である。5053は漆塗りの挽物椀である。横木取りで、柾目である。内外面に黒色の漆を塗る。表面には成形時のろくろ目が残る。口径16.3cm、高さ4.6cm、底径4.6cm、厚さ0.5cmである。樹種はケヤキである。5054は片側に切り込みを入れた板材である。用途は不明である。長さ4.8cm、幅1.4cm、厚さ0.7cmである。樹種は二葉マツである。

5055は杓子形木器である。柄は途中で屈曲し、身に続く。身の部分に窪みがないので、未製品であろう。柄の長さ29.1cm、幅2.7cm、厚さ1.6cm、身の長さ10.1cm、幅8.5cm、厚さ3.3cmである。樹種は二葉マツである。5056は下駄である。板目材の木表を台の上面に

あてる。前壺は中央にあけられ、後壺は後歯の前にあける。歯は磨耗が著しい。長さ21.0cm、幅10.3cm、高さ2.5cmである。樹種はクスノキである。

4. SG85002出土の木器 (図版108・112 5057~5062・5083・5084)

SG85002からも少量ではあるが木器が出土している。出土しているのは容器・部材である。5057は栓である。高さ2.0cm、直径3.3cmである。5058は円形曲物の底板である。柾目板を加工する。直径13.8cm、厚さ0.5cmである。樹種はヒノキである。5059・5060は建築材の断片である。5059は枘を作りだす。長さ11.8cm、幅10.8cm、厚さ9.1cmである。樹種はヒノキである。5060は中央に孔をあけた角材である。61は棒状のものであるが、用途は不明。長さ32.1cm、直径1.3cmである。樹種はヒノキである。5062は大型の方形曲物の底板である。柾目板を加工する。樹皮によって数枚の板を矧ぎあわせる。また側板とは樹皮によって結合する。長さ30.5cm、幅13.3cm、厚さ0.6cmである。樹種はモミである。

5083は建築材である。二方柾の角材である。上面および両側面に132.5cmの間隔をおいて、幅10.0cmの凸部が認められる。これはこの部分に渡り頸仕口で材が組み合わされていた際に、風蝕を受けなかった部分が凸部として残ったものである。この材は長さ、太さからみて、建物の梁材であろう。長さ220.0cm、幅12.0cm、厚さ11.5cmである。樹種はカヤである。

5084は大型の杭である。橋の支脚であろうか。先端部は工具で粗く削られ、断面形が八角形になる。長さ176.5cm、直径18.0cmである。先端から65cm以上の部分は腐食が著しく、これより先が地中に打ち込まれていたと考える。樹種はクスノキである。

5. SD85001出土の木器 (図版109~112 5063~5082・5085)

居館を囲む堀SD85001からは大量の木器が出土している。工具・農具・紡織具・服飾具・容器・祭祀具・部材などその内容は多様である。5063は心持ち材を加工して、先端に傘状の凸部を作りだしたものである。用途は不明である。長さ7.8cm、直径2.1cmである。樹種はカキノキである。5064は柾目材を加工して、先端部を尖らせたものである。用途は不明である。長さ11.5cm、幅2.0cm、厚さ0.8cmである。樹種はヒノキである。5065は木鍤である。心持ち材を粗く加工する。長さ15.8cm、直径4.2cmである。樹種は二葉マツである。

5066は板目板を加工した方形曲物の底板である。長さ30.6cm、幅9.4cm、厚さ0.8cmである。樹種はモミである。5067は方形曲物の底板である。側板との結合ための樹皮を通す孔がある。長さ30.4cm、幅4.2cm、厚さ0.4cmである。樹種はヒノキである。5068は鞘である。棒状の材を削り抜く。長さ15.8cm、幅2.7cm、厚さ1.8cmである。樹種は二葉マツである。

5069・5070は下駄である。5069は板目材の木表を台の上面にあてる。前壺は中心から左へずれているようで、この破片には痕跡が無い。後壺は後歯の前にあけられる。歯は前後ともに磨滅が著しい。長さ17.9cm、幅4.1cm、高さ2.8cmである。樹種はヒノキである。5070は後歯より後部を欠く。板目材の木表を台の上面にあてる。前壺は中心にあけられ、後壺は後歯の前にあく。前歯の右側面に墨書きがあるが、判読できない。歯は全く磨滅しておら

ず、未使用の可能性もある。長さ13.8cm、幅11.3cm、高さ5.4cmである。樹種はコウヤマキである。5071は船形である。半裁した丸木をくり抜いて作った丸木船形である。船首は大きく上方にもちあがり、先端が尖る。船尾も若干もちあがり、隅丸方形に作られている。舷側の3箇所に相対する溝を切り欠く。棧をわたしていた痕跡であろうか。長さ31.0cm、幅4.6cm、船底から船首先端までの高さ7.7cmである。樹種はヒノキである。中世においては建物の梁の上に船形をおき、建物を大海にみたてて火災除けのまじないとすることが行われており、これもそのようなまじないの道具であろうか。

5072は紡錘車である。柵目板を加工して作る。直径7.4cm、厚さ1.1cmである。樹種はケスノキである。5073は両端を切り落とした柵目の板材である。先端部を斜めに削ぐ。用途は不明である。長さ44.0cm、幅3.1cm、厚さ0.8cmである。樹種はモミである。5074は棒状のものである。湾曲した心持ち材の先端を加工する。用途は不明である。長さ62.0cm、直径3.0cmである。樹種はモミである。

5075・5076は板塔婆である。5075は板目板の上部に2段の切り込みを入れる。墨書きは認められない。下半部を欠損する。長さ38.2cm、幅6.8cm、厚さ1.2cmである。樹種はモミである。5076も板目板の上部に2段の切り込みを入れ、先端を尖らせる。墨書きは認められない。これも下半部を欠く。長さ33.5cm、幅8.9cm、厚さ0.9cmである。樹種はモミである。

5077は建築部材である。形態からみて高欄の斗束であろう。二方柵の角材を加工する。上部は架木を受けるために弧状に加工され、下部には地覆に固定するための枘を設ける。地覆上から架木下までの高さは24.0cmである。全高29.0cm、長辺10.8cm、短辺9.2cmである。樹種はヒノキである。5078も建築部材であろう。薄い板目板である。1.4×1.0cmの方孔を穿つ。長さ54.6cm、幅4.6cm、厚さ0.6cmである。樹種はツガである。5079も建築部材である。形態からみて飛檻垂木であろうか。二方柵の角材を加工し、先端部へゆくほど幅を狭める。木負と組合わせる部分に割り込みをいれ、固定のために鉄製の釘を貫通させる。長さ47.7cm、幅4.8~6.8cm、高さ6.2cmである。樹種はコウヤマキである。

5080~5082・5085も建築部材である。5080は板目材であり、片方は斜めに切り落とされる。長さ97.5cm、幅10.2cm、厚さ3.2cmである。樹種はコウヤマキである。5081も板目板である。表面は腐食が著しい。これも片方は斜めに切り落とされる。長さ89.0cm、幅19.6cm、厚さ3.2cmである。樹種はコウヤマキである。5082も板目板である。木裏側は平らに整形されるが、木表側は弧状に加工されている。一端に仕口のための割り込みを入れる。2箇所に153cmの間隔で当たり型があり、片側には鉄製の釘が貫通する。長さ373.5cm、幅12.0cm、厚さ4.2cmである。樹種はカヤである。5085は断面形はY字形である。木の節がそのまま残る。長さ131.5cm、幅14.0cmである。樹種はコウヤマキである。

6. 柱穴内出土の木器（図版113 5086~5090）

掘立柱建物SB85002の柱穴内からは、礎板と柱根が出土している。5086・5089はP205出土の柱根と礎板である。5086は心持ちの丸太材の皮を剥ぎ、表面を手斧で丁寧に仕上げる。ほとんど腐食は進んでおらず、35cm以上地中に埋没していたようである。上部は機械掘削時に重機でひっかけたために破損している。長さ49.2cm、直径14.8cmである。樹種はコ

ウヤマキである。5089は板目材の小片を利用している。木裏を上に向けて置かれていた。長片9.3cm、短片8.5cm、厚さ3.0cmである。樹種はモミである。

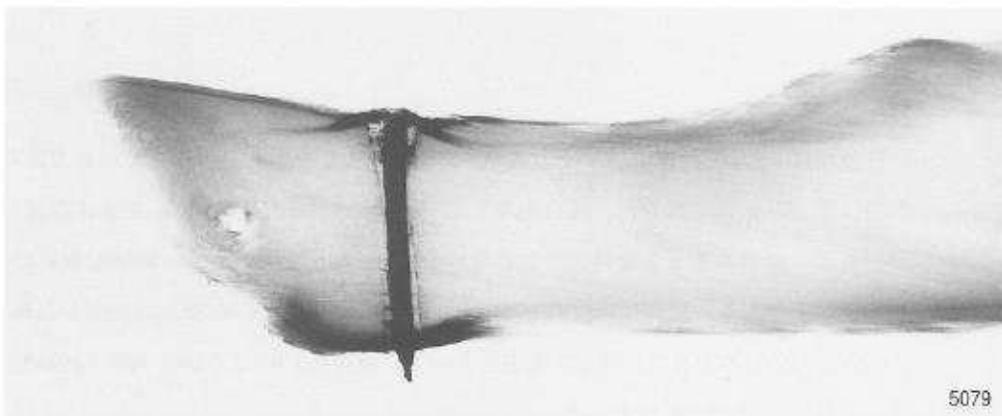
5087はP209出土の柱根である。心持ちの丸太材を加工する。表面は手斧によって丁寧に加工されている。下端から20cm以上の所から上は腐食が著しい。長さ40.8cm、直径14.2cmである。樹種はヒノキである。5088はP202出土の柱根である。心持ちの丸太材を加工する。表面の腐食が著しい。長さ20.5cm、直径13.5cmである。樹種はヒノキである。5090はP204出土の礎板である。板目材の小片を利用する。木表を上に向けて置かれていた。長さ11.7cm、幅7.9cm、厚さ2.3cmである。樹種はモミである。

以上が辻ヶ内地区出土の中世の木器である。図面・写真を掲載しなかった遺物の中でとくに注意すべき遺物もあるので、若干触れておく。ひとつは木の削りカス（木っ端）の出土である。各調査区の各遺構内にほぼ満遍なく認められた。特にSD85001、SG85001・85002からは多量に出土している。樹種は針葉樹（スギもしくはヒノキか）である。幅3～5cmほどのものが大部分を占める。手斧による削りカスであると考える。もうひとつは竹材の出土である。いずれも長さ1m未満のものである。これもSD85001、SG85001・85002から多く出土している。建物の屋根や壁の材であろうか。

各遺物の樹種同定は京都大学名誉教授島地謙氏に依頼した。樹種同定の結果については、別表にまとめている（表2・3）。また遺物は全て、P.E.G.による保存処理をおこなっている。遺物の計測値、観察結果はいずれも処理前のものである。

参考文献

奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿古代編』1985年



挿図6 X線写真

第5節 金属器

金属器関係の遺物として、鉄器の他にふいごの羽口もここで取り扱う。

1. 鉄 器 (図版114・115)

鉄器の中には、鉄釘・金具・工具・容器・農具・武器・武具・鍛金具があり、23点を図示した。

鉄 釘 (5001~5011)

5001・5002は断面が長方形で、頭部をL字に折り曲げるタイプである。復元長は7cmを超える。5001は現存長7.1cm、幅1.3×0.9cmで、6区の土坑SK85006から出土した。5002は先端が折れ曲がっており、復元長が約7.5cm、幅1.1×0.5cmで、6区の井戸SE85001内最下層から出土した。

5003・5004は断面が正方形で、頭部をL字に折り曲げるタイプである。全長は6~7cmに収まる。5003は現存長6.4cm、幅0.5cmである。1区から出土した。5004は完形で全長6.0cm、幅0.5cmである。5区から出土した。

5005・5006は断面が正方形で、頭部がT字形を呈するタイプである。全長は4~5cmに収まる。5005は完形で全長5.0cm、幅0.4cmである。第1次調査で出土した。5006は完形で全長4.3cm、幅0.6cmである。1区の池SG85001から出土した。

5007~5011は頭部や先端を失った断片である。断面は正方形を呈するものが多い。5007・5008は1区の鍛冶炉SX85001、5009は6区の柱穴P208、5010は6区の土坑SK85006から出土した。

金 具 (5012~5014)

5012は幅0.9×0.4cmの扁平な金具で、両端を欠失しており、現存長7.3cmである。図の下端は曲がりかけており、上端は肥厚していてその先は不明である。用途は特定できないが、あるいは鍔のような金具かもしれない。5013は幅0.9×0.6cmの扁平な金具の端部で、用途は不明である。現存長は3.9cmである。5012・5013は1区の池SG85001から出土した。

5014はL字形の金具で、両端を欠失している。現存長3.0×2.0cm、幅0.5cmである。6区の土坑SK85006から出土した。

工 具 (5015~5017)

5015は長さ5.4cm、幅1.6×0.8cmの握り部分の破片で、下端から径3.5mmの軸部が伸びようとしている。何らかの工具と考えておく。7区から出土した。

5016は鑿とみられる。断面形は丸みを帯びた正方形で、重量感がある。上端はやや平坦で、下端は尖り気味となる。全長5.9cm、幅1.5cmである。6区から出土した。

5017は楔とみられる。断面形は厚みのある長方形で、上端がやや平坦となっている。全長

4.8 cm、幅 1.5×1.0 cm である。1区から出土した。

容 器 (5018)

5018は復元径約16 cm の弧状を呈する断片である。端部を折り曲げている点から、何らかの容器の蓋と考えておく。高さ1.1 cm、厚さ0.6 cm である。6区から出土した。

農 具 (5019)

5019は馬鍔の歯とみられる。頭部は叩かれて、やや潰れしており、先端に向かって直線的に細くなっている。先端を欠失しており、現存長13.8 cm、頭部付近の幅 1.9×1.1 cm である。第1次調査で出土した。

武器・武具 (5020・5021)

5020は厚さ約5 mm の薄い鉄片で、刀身の断片と考えられる。腐食が進行しており、両端・両側縁を欠失している。割れ口は層状となっており、鍛造品であることを物語っている。現存長6.5 cm、現存幅2.7 cm で、6区の堀 SD85001下層から出土した。

5021は厚さ1 mm のごく薄い鉄板で作られた、小札の断片と考えられる。辛うじて三辺が残っており、断面形は中央が盛り上がる弓形を成している。幅1.7 cm、現存長4.9 cm で、端部から3.2 cm のところに、円孔を1つ開けている。1区の池 SG85001から出土した。

鍍金具 (5022・5023)

5022は円形の笠金具をもった鉄で、両端を欠失しているため天地は不明である。金具は大小三重になっている。小さい方の金具は直径 1.2×1.0 cm、厚さ2 mm、大きい方は現存径 2.7×2.3 cm、厚さ3 mm 程の金具2つで、木質状のものを挟み込んでいる。1区の池 SG85001から出土した。

5023は花菱形の飾金具をもった鉄で、頭部が環状となっている。頭部径9 mm、鉄の断面径3 mm である。飾金具は菱形の辺の中ほどを弧状に刺り込んだ花菱形を呈し、一辺の長さは1.4 cm 前後、厚さ1.5 mm である。6区の土坑 SK85006から出土した。

2. ふいごの羽口 (図版115)

羽 口 (5024・5025)

いずれも羽口の先端部分で、熱を受けて赤変しており、外面にはガラス質の物質が融着している。管状の土製品で、外径の軸と内径の軸が若干ずれており、角度をもたせているものとみられる。

5024は三片が接合した。外径は9.4 cm、内径は 3.6×3.0 cm で、内孔の断面は梢円形を呈する。5025は接合しないものの、同一個体の二片がある。外径は7.8 cm、内径は現存部で2.4 cm を測り、やはり梢円形のようである。両者とも1区の池 SG85001から出土した。

第6節 石 器

辻ヶ内地区から出土している石器は約20点である。ここでは図および写真で示した16点について、1) 中世の遺構から出土した石器、2) 時期不明（遺構によって時期が決定できないか遺構から遊離した）の石器、の順に記述する。記述は、出土点数が少ないため、用途にもとづく分類は行わず器種ごとに行う。器種・法量・石材・出土遺構とその時期などは表4にまとめて示す。

1. 中世の遺構から出土した石器（図版116 5001～5004）

5001は凝灰岩と思われる細粒の石材を素材とした砥石で、使用されている4面のうち表面側が最もよく使用されている。1区のSG85001周辺の柱穴から出土した。

5002～5004は打ち欠きのある礫である。5区の池SG85002から多量の瓦などに混じって出土しており、中世のものと判断した。長径20cm前後の扁平な円礫の一端を小さく打ち欠いただけの簡易な作りのものである。用途は判らないが、3点出土していることから偶然の所産とは考えにくい。

2. 時期不明の石器（図版117・118 5005～5016）

石鎌・楔形石器などのサヌカイト製小型剥片石器と磨製石庖丁未製品・大型蛤刃石斧などは、辻ヶ内地区で検出された遺構の時期から判断して、大半は弥生時代中期のものと考えて大過ないであろう。ただ、中世など本來的な時期でないと考えられる遺構から出土しているためここにまとめた。

石鎌（5005～5007）には基部を欠損した1点と、未製品と思われるもの2点が見られる。5006は周辺部を急角度の粗雑な二次加工がめぐり、5007はかなり厚みがあり左右非対称であることから未製品とした。

削器（5008）としたものは、横長剥片の打面部を中心に表裏両面から浅い二次加工を施したものである。

楔形石器（5009～5011）は5009の側面に典型的な剪断面が認められる。5010の上下方向の剥離は素材剥片の打面および折面を剥離の打面としている。5011は剥離の進行が著しく、素材の形状がわからなくなっている。

大型蛤刃石斧（5012）は比較的鋭利な状態をとどめた刃部である。KM14トレンチの旧河道SR55001から出土した。

磨製石庖丁の未製品（5013）は板状の礫の周辺部のみに細かな打ち欠きがなされている。

砥石（5014～5016）は板状の礫を素材としたもので、中世の包含層あるいは1区東側の堀SD85001、1区の池SG85002から出土したが、時期の比定が困難であることからここにまとめた。5015・5016は使用により表面の中央部付近が不整円形に浅くすり減っており、裏面にも同様なすり減りの兆候が認められる。

表2 江ヶ内地区出土木製品樹種同定一覧表(1)

報告番号	資料番号	木器番号	出土地区	出土遺構	器種名	樹種	時期	備考
5001	d143	TU1-42	1区	SK85009	軒木	ヒノキ	縄文時代	
5002	d177	TU1-30	1区	SK85009	火道	ヒノキ	縄文時代	
5003	d172	TU1-56	1区	SK85009	呪符木簡	ヒノキ	縄文時代	
5004	d52	TU1-15	1区	SK85008	鼻削り	クスノキ	縄文時代	
5005	d53	TU1-16	1区	SK85008	鼻削り	ケヤキ	縄文時代	
5006	d70	TU1-41	1区	SK85008	鼻削り	ヒノキ	縄文時代	
5007	d71	TU1-40	1区	SK85008	鼻削り	クスノキ	縄文時代	
5008	d106	TU6-34	6区	SE85001	円形曲物	アスナロ	縄文時代	
5009	d105	TU6-33	6区	SE85001	円形曲物	ヒノキ	縄文時代	
5010	d167	TU6-28f	6区	SE85001	箸	ヒノキ	縄文時代	
5011	d165	TU6-28d	6区	SE85001	箸	ヒノキ	縄文時代	
5012	d163	TU6-28b	6区	SE85001	箸	ヒノキ	縄文時代	
5013	d162	TU6-28a	6区	SE85001	箸	ヒノキ	縄文時代	
5014	d169	TU6-60a	6区	SE85001	箸	ヒノキ	縄文時代	
5015	d164	TU6-28c	6区	SE85001	箸	コウヤマキ	縄文時代	
5016	d96	TU6-18	6区	SE85001	建築部材	カヤ	縄文時代	
5017	d94	TU6-16	6区	SE85001	建築部材	スギ	縄文時代	
5018	d91	TU6-13	6区	SE85001	建築部材	カヤ	縄文時代	
5019	d92	TU6-14	6区	SE85001	建築部材	カヤ	縄文時代	
5020	d93	TU6-15	6区	SE85001	建築部材	ハイノキ	縄文時代	
5021	d98	TU6-20	5区	SE85001	建築部材	シイ属	縄文時代	
5022	d95	TU6-17	6区	SD85001	建築部材	カヤ	縄文時代	
5023	d100	TU6-22	5区	SE85001	建築部材	ハイノキ	縄文時代	
5024	d97	TU6-19	6区	SE85001	建築部材	カヤ	縄文時代	
5025	d99	TU6-21	6区	SE85001	建築部材	二葉マツ	縄文時代	
5026	d101	TU6-23	6区	SE85001	井戸材	二葉マツ	縄文時代	
5027	d103	TU6-25	6区	SE85001	井戸材	二葉マツ	縄文時代	
5028	d102	TU6-24	6区	SE85001	井戸材	ヒノキ	縄文時代	
5029	d104	TU6-26	6区	SE85001	井戸材	ヒノキ	縄文時代	
5030	d87	TU6-6	6区	SE85001	建築部材	モミ	縄文時代	
5031	d88	TU6-7	6区	SE85001	建築部材	スギ	縄文時代	
5032		TU6-5	6区	SE85001	建築部材	スギ	縄文時代	
5033	d90	TU6-10	6区	SE85001	建築部材	ツガ	縄文時代	
5034	d146	TU6-1	6区	SE85001	建築部材	スギ	縄文時代	
5035	d147	TU6-2	6区	SE85001	建築部材	スギ	縄文時代	
5036	d85	TU6-3	6区	SE85001	建築部材	スギ	縄文時代	
5037	d86	TU6-4	6区	SE85001	建築部材	モミ	縄文時代	
5038	d173	TU1-29	1区	SG85001	舟杭脚	ヒノキ	縄文時代	墨書(桂馬)
5039	d63	TU1-31	1区	SG85001	独脚	ムクノキ	縄文時代	
5040	d175	TU1-8	1区	SG85001	台脚	ヒノキ	縄文時代	
5041	d47	TU1-10	1区	SG85001	装飾品	ヒノキ	縄文時代	
5042	d176	TU1-7	1区	SG85001	用途不明	ヒノキ	縄文時代	漆・金箔 墨書
5043	d62	TU1-28	1区	SG85001	木簡	モミ	縄文時代	墨書
5044	d69	TU1-38	1区	SG85001	木筒	ツガ	縄文時代	墨書
5045	d280	TU1-52	1区	SG85001	付け木	二葉マツ	縄文時代	漆
5046	d174	TU1-9	1区	SG85001	接刷毛	ヒノキ	縄文時代	
5047	d64	TU1-33	1区	SG85001	漆塗木片	ヒノキ	縄文時代	
5048	d64	TU1-33	1区	SG85001	漆塗木片	ヒノキ	縄文時代	
5049	d54	TU1-33	1区	SG85001	漆塗木片	ヒノキ	縄文時代	
5050	d57	TU1-22	1区	SG85001	方形曲物	モミ	縄文時代	
5051	d144	TU1-49	1区	SG85001	用途不明	モミ	縄文時代	
5052	d55	TU1-19	1区	SG85001	用途不明	ヒノキ樹皮	縄文時代	
5053	d44	TU1-3	1区	SG85001	挽物碗	ケヤキ	縄文時代	
5054	d145	TU1-50	1区	SG85001	用途不明	二葉マツ	縄文時代	
5055	d60	TU1-25	1区	SG85001	杓子	二葉マツ	縄文時代	
5056	d45	TU1-4	1区	SG85001	下駄	クスノキ	縄文時代	
5057		TU1-48	1区	SG85002	栓	ヒノキ	縄文時代	
5058	d59	TU1-24	1区	SG85002	円形曲物	ヒノキ	縄文時代	
5059	d77	TU5-4	5区	SG85002	建築部材	ヒノキ	縄文時代	
5060		TU1-32	1区	SG85002	建築部材	—	縄文時代	
5061	d79	TU5-6	5区	SG85002	棒	ヒノキ	縄文時代	
5062	d48	TU1-11	1区	SG85002	方形曲物	モミ	縄文時代	
5063	d75	TU5-2	5区	SD85001	用途不明	カキノキ	縄文時代	
5064	d114	TU8-1	8区	SD85001	用途不明	ヒノキ	縄文時代	
5065	d58	TU1-23	1区	SD85001	木鍵	二葉マツ	縄文時代	
5066	d116	TU8-4	8区	SD85001	方形曲物	モミ	縄文時代	
5067	d56	TU1-21	1区	SD85001	方形曲物	ヒノキ	縄文時代	
5068	d61	TU1-26	1区	SD85001	鞘	二葉マツ	縄文時代	
5069	d160	TU8-2	8区	SD85001	下駄	ヒノキ	縄文時代	
5070	d107	TU6-36	6区	SD85001	下駄	コウヤマキ	縄文時代	
5071	d76	TU5-3	5区	SD85001	船形	ヒノキ	縄文時代	
5072	d46	TU1-6	1区	SD85001	筋跡車	クスノキ	縄文時代	
5073	d51	TU1-14	1区	SD85001	板材	モミ	縄文時代	
5074	d78	TU5-5	5区	SD85001	棒	モミ	縄文時代	
5075	d42	TU1-1	1区	SD85001	板塔婆	モミ	縄文時代	
5076	d43	TU1-2	1区	SD85001	板塔婆	モミ	縄文時代	
5077	d54	TU1-17	1区	SD85001	斗束	ヒノキ	縄文時代	
5078	d117	TU8-6	8区	SD85001	建築部材	ツガ	縄文時代	
5079	d259	TU1-51	1区	SD85001	飛燈垂木	コウヤマキ	縄文時代	
5080	d50	TU1-13	1区	SD85001	建築部材	コウヤマキ	縄文時代	釘

表3 江ヶ内地区出土木製品樹種同定一覧表(2)

報告番号	資料番号	木器番号	出土地区	出土遺構	器種名	樹種	時期	備考
5081	d49	TU1-12	1区	SD85001	建築部材	コウヤマキ	鎌倉時代	
5082	d115	TU8-3	8区	SD85001	建築部材	カヤ	鎌倉時代	
5083	d74	TU5-1	5区	SG85002	建築部材	カヤ	鎌倉時代	
5084	d73	TU1-47	1区	SG85002	杭	クスノキ	鎌倉時代	
5085	d72	TU1-46	1区	SD85001	建築部材	コウヤマキ	鎌倉時代	
5086	d110	TU6-40	6区	SB85002	柱模	コウヤマキ	鎌倉時代	
5087	d109	TU6-39	6区	SB85002	柱模	ヒノキ	鎌倉時代	
5088	d113	TU6-43	6区	SB85002	柱模	ヒノキ	鎌倉時代	
5089	d111	TU6-41	6区	SB85002	檻板	モミ	鎌倉時代	
5090	d112	TU6-42	6区	SB85002	檻板	モミ	鎌倉時代	
未掲載	d171	TU1-5a	1区	SK85009	箸	モミ	鎌倉時代	
未掲載	d170	TU1-35	1区	SG85001	箸	ツガ	鎌倉時代	
未掲載	d65	TU1-36a	1区	SG85001	箸	コウヤマキ	鎌倉時代	
未掲載	d66	TU1-36b	1区	SG85001	箸	コウヤマキ	鎌倉時代	
未掲載	d67	TU1-36c	1区	SG85001	箸	コウヤマキ	鎌倉時代	
未掲載	d68	TU1-36d	1区	SG85001	箸	コウヤマキ	鎌倉時代	
未掲載	d261	TU1-53	1区	SD85001	建築部材	クリ	鎌倉時代	
未掲載	d262	TU4-9	4区	SD85001	付け木	ツガ	鎌倉時代	
未掲載	d263	TU4-10	4区	SD85001	付け木	ツガ	鎌倉時代	
未掲載	d80	TU5-7	5区	SD85001	板	ツガ	鎌倉時代	
未掲載	d81	TU5-8	5区	Pit66	檻板	ケヤキ	鎌倉時代	
未掲載	d82	TU5-10	5区	Pit1	檻板	ケヤキ	鎌倉時代	
未掲載	d83	TU5-11	5区	Pit2	檻板	コウヤマキ	鎌倉時代	
未掲載	d84	TU5-13	5区	Pit68	檻板	クスノキ	鎌倉時代	
未掲載	d89	TU6-8	6区	SE85001	板	モミ	鎌倉時代	
未掲載	d166	TU6-28e	6区	SE85001	箸	ヒノキ	鎌倉時代	
未掲載	d168	TU6-29	6区	SE85001	箸	モミ	鎌倉時代	
未掲載	d108	TU6-38	6区	包含層	円形曲物	ヒノキ	鎌倉時代	
未掲載	d148	TU6-60b	6区	SE85001	箸	ヒノキ	鎌倉時代	
未掲載	d149	TU6-60c	6区	SE85001	箸	ヒノキ	鎌倉時代	
未掲載	d150	TU6-60d	6区	SE85001	箸	ヒノキ	鎌倉時代	
未掲載	d151	TU6-60e	6区	SE85001	箸	コウヤマキ	鎌倉時代	
未掲載	d152	TU6-60f	6区	SE85001	箸	ヒノキ	鎌倉時代	
未掲載	d153	TU6-60g	6区	SE85001	箸	ツガ	鎌倉時代	
未掲載	d154	TU6-60h	6区	SE85001	箸	ヒノキ	鎌倉時代	
未掲載	d155	TU6-60i	6区	SE85001	箸	ヒノキ	鎌倉時代	
未掲載	d156	TU6-60j	6区	SE85001	箸	ヒノキ	鎌倉時代	
未掲載	d157	TU6-60k	6区	SE85001	箸	モミ	鎌倉時代	
未掲載	d158	TU6-60l	6区	SE85001	箸	ヒノキ	鎌倉時代	
未掲載	d159	TU6-60m	6区	SE85001	箸	モミ	鎌倉時代	
未掲載	d118	TU8-8	8区	SD85001	建築部材	ツガ	鎌倉時代	
未掲載	d161	TU8-23	8区	SD85001	杭	モミ	鎌倉時代	

表4 石器一覧表

No.	器種	出土遺構	法量				石材	時期
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)		
5001	砥石	1区柱穴	110.0	58.0	27.5	279.0	凝灰岩?	鎌倉時代
5002	打ち欠きのある礫	5区SG85002	167.0	124.0	49.5	1540.0	花崗岩?	鎌倉時代
5003	打ち欠きのある礫	5区SG85002	165.0	138.5	55.0	1750.0	花崗岩	鎌倉時代
5004	打ち欠きのある礫	5区SG85002	184.0	118.0	37.0	1340.0	花崗岩	鎌倉時代
5005	石鎌	4区西側SD85001	17.5	12.0	2.5	0.6	サヌカイト	
5006	石鎌	5区SG85002	49.0	21.0	4.0	4.9	サヌカイト	
5007	石鎌	1区SG85001	40.0	26.5	8.0	8.2	サヌカイト	
5008	削器	1区弥生包含層	73.0	31.5	3.0	7.3	サヌカイト	
5009	楔形石器	4区弥生包含層	26.0	24.0	8.0	5.7	サヌカイト	
5010	楔形石器	1区弥生包含層	34.5	44.0	14.0	22.3	サヌカイト	
5011	楔形石器	4区中世洪水砂層	47.0	26.0	4.0	8.4	サヌカイト	
5012	大型蛤刃石斧	KM14トレンチ旧河道	48.0	67.5	37.0	133.0		
5013	磨製石庖丁未成品	4区SD85003	87.0	59.0	11.0	70.3	花崗岩	
5014	砥石	4区中世洪水砂層	95.5	57.5	24.0	166.0	花崗岩	
5015	砥石	1区SG85002	120.5	90.0	30.0	480.0	花崗岩	
5016	砥石	1区東側SD85001	208.5	181.0	3.0	1450.0	花崗岩	

*1) 石材の名称は担当職員の経験的判断による。

第3部 居住地区の調査

第1章 調査の概要

第1節 概 要

第1部すでに述べたように、居住地区では昭和60年度に確認調査を行い、昭和61年度に全面調査を行った。

全面調査は田中特定土地区画整理事業予定地と国道175号線とを結ぶ都市計画道路市道北玉津環状線の予定地を対象とし、調査区として居住1区を設定した。居住1区は田中集落の里道を挟んで、辻ヶ内1区の東延長線上にあたる位置関係となる。

居住1区（図版119）

調査区内はほとんどが洪積段丘上であるため、土層の堆積は薄く、古墳時代～近世の遺構がほぼ同一の面で見つかった。また現状では4段の水田となっているため、それぞれの水田面の山側（東側）は削平を受けており、遺構の分布が疎らとなっている。

見つかった遺構には古墳時代後期・中世・近世のものがある。全体的に、古墳時代の遺構は調査区の東半部に集中し、近世の遺構は西半部に多いという傾向が指摘できる。

古墳時代後期の遺構には、堅穴住居跡6棟がある。この他、多数の柱穴も見つかったが、住居跡・建物跡を復原することはできなかった。

近世の遺構には、掘立柱建物跡1棟、井戸1基の他、土坑・溝などがある。遺物は調査区全体から出土している。

この他、中世に属する柱穴および遺物も若干出土している。

第2節 土層断面図

北壁土層断面図（図版120）

調査区が4段の水田面に分かれており、それぞれの土層は連続しないが、堆積が薄く、単純なため、基本土層として第1～9層を設定する。

第1層は現在の水田耕作土である。第2層は各段落ち部の畦畔の盛土である。第3層は黄褐色のシルト質の土で、現耕作土の床土となっている。第4層は現在の畦畔の下に隠れている、過去の畦畔の盛土である。第5・6層は古墳時代～近世の遺物を含む土壤層である。この第5・6層を除去した面で、遺構を検出している。第7層は遺構の埋土である。遺構を掘り込む基盤となっている第8・9層は洪積層（大阪層群）で、中疊～大疊から構成されており、旧河道に近い第8層では極細砂が堆積している。

第2章 古墳時代の遺構

第1節 概 要

遺構は主に、調査区の東半部である最上段から2段目の水田面に分布する。

見つかった遺構はいずれも古墳時代後期に属するもので、竪穴住居跡6棟と柱穴などがある。遺構面の深度が浅いため、遺存状況はあまり良くない。特に各水田面の東側は大きく削られており、掘り込みの深い柱穴しか検出できていない。竪穴住居跡の分布状況からみて、この柱穴のうちの何割かは住居跡に伴うものと考えられるが、床面が失われているため、復原することはできなかった。

第2節 竪穴住居跡

SH75001 (図版121)

2段目の水田面に位置している。SH75001に切られしており、北辺部のみ遺存している。方形プランで、東西方向の長さ3.7m、検出面からの深さ15cmである。

SH75002 (図版121)

2段目の水田面に位置している。平面は正方形で、4本の主柱穴をもつ。南辺中央に、壁際からはみ出す形で土坑を設置し、土坑の周囲から多くの土器が出土している。壁の立ち上がりに沿って周壁溝がめぐっているが、南辺の土坑までは達していない。規模は一辺5.8m、検出面からの深さ20cmである。南辺の土坑は直径80~90cm、床面からの深さ30cmである。

出土遺物には須恵器杯(5792)、土師器短頸壺(5793~5796)・高杯(5797~5803)などがある。

SH75003 (図版121)

2段目の水田面に位置している。調査区のコーナー部分であったため、住居跡の北辺と西北隅しか調査できず、柱穴などは見つかっていない。方形プランで、北辺中央に、壁際からはみ出す形で土坑を設置している。土坑の周囲から多くの土器が出土している。検出面から床面までの深さは25cm、土坑は直径約1m、床面からの深さ20cmである。

出土遺物には須恵器杯(5785)、土師器杯(5786)・碗(5787)・製塩土器(5788・5789)・甕(5790)・瓶(5791)などがある。

SH75004 (図版122)

最上段の水田面に位置している。SH75005に切られており、北辺部のみ遺存している。検出できた範囲は、西北隅付近と柱穴1箇所のみである。平面は方形プランで、検出面からの深さ10cmである。

出土遺物には須恵器高杯(5804)などがある。

SH75005 (図版122)

最上段の水田面に位置している。平面は長方形で、主柱穴4本のうち3本まで検出できた。周壁溝・土坑などは見つからなかった。規模は南北方向が5.0m、東西方向が3.5m、検出面からの深さ20cmである。

出土遺物には須恵器杯(5805)などがある。

SH75006 (図版122)

最上段の水田面に位置している。SH75005に西辺部を切られている。住居跡の東半部と北辺部中央に設けられた造り付けのカマドを検出した。床面で柱穴をいくつか検出したが、住居跡に伴うものかどうかは不明である。カマドは大部分が削られており、東側の土手部が部分的に遺存していたのみである。カマドの燃焼部は床面から15cmほど掘り込まれていた。住居跡の規模は確定できないが、およそ南北方向5m、東西方向4m程度に復原できる。検出面からの深さは20cmである。

出土遺物には須恵器壺(5806)などがある。

第3章 近世の遺構

第1節 概要

遺構は主に、調査区の西半部である2段目から4段目の水田面に分布する。見つかった遺構には掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝などがある。

第2節 掘立柱建物跡

SB95001 (図版123)

2段目の水田面に位置している。梁行2間×桁行3間の建物跡で、桁方向はN50°Eを向いている。柱間は梁方向が1.6~1.7m、桁方向が1.4~1.6mで、面積は約15m²である。柱穴の掘り方は不整形のものが多く、深さは深いもので45cmを測る。

遺物は柱穴から須恵器高杯(5807)が出土しているが、そこではSH75002と切り合っているところから、混入品と考えられる。付近の遺物の出土状況からみて、近世の建物跡と判断しておく。

第3節 井戸

SE95001 (図版124)

3段目の水田面に位置している。付近に遺構が少ないので、削平が大きかったことを窺わせ、井戸の上部も同様に削り取られているものとみられる。掘り方の直径は1.2m、現存の深さは2.6mである。掘り方の内面に拳大から人頭大までの角礫を積み上げて、井戸側としている。井戸側の内径は70~90cmである。

井戸の中からは特に遺物は出土していないが、石の積み方や付近の遺物の出土状況からみて、近世のものとしておく。

第4節 土坑

2段目および4段目の水田面付近で、土坑が集中的に繰り返し掘り込まれている。土坑内からは生活雑器が出土しており、ゴミ捨て用の穴と考えられる。

第5節 溝

2~4段目の水田面で、数本の溝を検出した。中でもSD95002・95003は平行にめぐらされており、互いに関係をもつ水路であろう。

第4章 遺物

第1節 古墳時代～中世の土器

豊穴住居跡 SH75003出土の土器（図版125 5785～5791）

5785は須恵器で、他は全て土師器である。5785は底部を欠損した杯身である。口径10.5cm、器高は推定4.5cm。受け部はほぼ水平に伸び、口縁部はやや内傾して高く立ち上がる。底部の約3分の2の範囲に回転ヘラケズリを施し、その他の部分は回転ナデで仕上げる。5786は杯である。体部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部は内傾しながらやや外反する。内外面ともに回転ナデで仕上げられる。5787は椀である。底部は不明瞭な平底をなし、口縁部はわずかに内弯する。外面は剥離のため調整は不明である。内面はイタナデで仕上げる。

5788・5789は製塙土器である。いずれも二次焼成による器面の荒れが著しい。底部を欠くが、コップ形の丸底のものであろう。5790は厚手の壺である。やや長目の丸底の体部に短い口縁がつく。口縁部端は強く水平に折れ曲がる。体部外面には粗いハケが施され、内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。口縁部はヨコナデで仕上げる。5791は大型の壺の底部である。小破片であるが間を十字に残した4孔があくと思われる。内面はヘラケズリする。

豊穴住居跡 SH75002出土の土器（図版125 5792～5803）

5792は須恵器で他は全て土師器である。5792は杯身である。受け部は短く水平に伸び、口縁部は内傾して立ち上がる。口径12.8cm、器高4.6cmである。底部は約2分の1の範囲に回転ヘラケズリを施す。他の部分は回転ナデで仕上げる。5793～5795は小型の壺である。5693は平底の体部に外傾する口縁がつく。体部と口縁部の境は、外面はなだらかに連続するが、内面は強く屈曲し稜をなす。器表は磨滅が著しく、調整は不明である。5794は丸底の体部に外傾する口縁がつく。頭部の締まりが弱いため鈍重な印象を受ける。口縁と体部の境はなだらかに連続する。器表は磨滅が著しく、調整は不明である。5795は球形の体部に長く伸びた口縁がつく。器壁は薄く、精良な作りである。外面に縦方向のハケメが観察される。5796は壺である。平底の壺の肩部に1孔があく。口縁は体部と比して器壁が薄く、短く立ち上がる。

5797～5803は高杯である。5797は椀形の杯部に縁が外反する円錐形の脚部がつくものである。杯部内面は横方向、杯部および脚部の外面は縦方向のハケで仕上げられる。脚部内面にはシボリメと指頭圧痕が観察できる。5798は屈曲して立ち上がる杯部に円錐形の脚部がつく。杯部の屈曲は弱く、屈曲部は稜をなさない。器表の磨滅が著しく、調整は不明である。5799も屈曲して立ち上がる杯部である。屈曲部の稜は弱い。これも器表の磨滅が著しく、調整は不明である。5800は屈曲が強く、口縁の立ち上がりが長い杯部である。屈曲部は明確に段をなす。内面には縦方向のヘラミガキが施される。5801は明瞭な段をもつ杯部に縁部が外反する円錐形の脚部がつく。杯部は内面は底部を横方向、口縁部を縦方向のヘラミガキで

仕上げる。外面は縦方向のハケの痕跡が残り、段の部分には横方向のヘラミガキが施される。脚部外面は横方向のハケを施した後に、縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面にはシボリメとユビナデが観察できる。5802も脣曲部に段を有する杯部である。口縁が長く立ち上がる。調整は不明である。5803はゆるやかにラッパ形に開く脚部である。外面には縦方向のハケの痕跡が残り、内面には指頭圧痕と粘土紐接合痕が観察できる。

堅穴住居跡SH75004~6出土の土器（図版126 5804~5806）

5804はSH75004出土の須恵器高杯である。脚部には円孔を四方にあける。脚部端は肥厚し強くふんばる。外面にはカキメを施す。

5805はSH75005出土の土師器碗である。平底気味の底部をもつ。器面調整は不明である。

5806はSH75006出土の須恵器壺である。低い高台をもち、体部中位に沈線を2条入れ、その間に刻み目を施す。内外面ともに回転ナデで仕上げるが、内面底部付近にあて具痕が残る。底部、肩部には自然釉がかかる。

柱穴・包含層出土の土器（図版126 5807~5814）

5807は柱穴出土の須恵器有蓋高杯である。脚部には方形の透孔を3方にあける。杯部底には2分の1の範囲に回転ヘラケズリを施す。他の部分は回転ナデで仕上げる。

5808~5814は包含層出土の土器である。5808は須恵器の杯蓋である。宝珠つまみをもち内面にはかえりをもつ。天井部は2分の1の範囲に回転ヘラケズリを施す。5809は須恵器の杯身である。底部には回転ヘラ切りの痕跡が認められる。5810は土師器の小壺である。頸部直下に2条の沈線を入れる。内面、外面ともにナデで仕上げられる。5811は須恵器の大甕である。口縁部は上方につまみ上げられ面をもつ。外面は上半部に格子状タタキが、下半には平行タタキがほどこされる。口径27.5cm、推定高52.5cmである。5812は須恵器の碗である。外面に1条の沈線が巡る。内外面ともに回転ナデで仕上げる。口径15.8cm、高さ5.0cmに復元できる。5813は土師器の小皿である。底部は回転糸切り痕が残り、内外面ともに回転ナデで仕上げられる。5814は土師器の鍋と考えられる。内外面ともにハケで仕上げる。

第2節 近世の土器・陶磁器

居住1区では、土師質・瓦質・無釉陶器・施釉陶器・染付磁器などの近世陶磁器が出土している。ここでは、土坑・溝（SK95001～95004／SD95001／95002）などの遺構より出土したものを中心に報告する。

土製品（図版127）

土 鉢（5830）

外面は指頭によるナデ仕上げである。全長3.5cm。最大幅3.2cmである。

土師質土器（図版127）

小 皿（5815）

手づくね成形で、外面体部は指押さえ、外面口縁部・内面はヨコナデ調整を施す。口縁端部には煤が付着する。口径復元値で10.5cm、器高1.4cmである。

土 鍋（5816・5818・5826・5831）

5816・5818・5826の培培の一群と、5831の鍋がある。5816は口縁が比較的直線的に立ち上がり、端部を丸く收めている。口縁部内外面は、ヨコナデ調整、外面底部は未調整である。外面底部と口縁部の境は面取り様のナデ調整が施される。口径は復元値で26.6cm、残存高は6.8cmである。5818は口縁部が内弯し、端部の内側に平坦な面をもつ。口縁部内外面ともにヨコナデ調整。外面底部は未調整である。口縁部内外面には未貫通の孔が各面2孔認められる。口径は28.7cm、残存高8.8cmである。外面底部は煤が付着する。5826は口縁部が短く内弯し、外面口縁部と体部との境には、指押さえの痕跡を残す。口縁部内外面ともにヨコナデ調整。外面底部は未調整である。口径32.6cm、器高9.5cmである。

5831は口縁部に鰐部様の凸帯をもつ鍋である。口縁部内外面共にヨコナデ調整、外面体部は斜位のタタキ、内面体部はユビナデがそれぞれ施される。口径は復元値で17.6cm、残存高6.0cmである。

瓦質土器（図版127）

香 爐（5819）

三足の脚部をもつ香炉である。口縁端部は内側に肥厚し、内外面共にヨコナデが施される。口径は復元値で12.4cm、器高5.0cmである。

無釉陶器（図版127）

丹波焼擂鉢（5821）

外面口縁部は回転ナデ、体部下位はヨコナデを施す。内面には6本一単位の擂目を施す。口径は復元値で36.0cm、器高16.0cmである。

施釉陶器（図版127）

碗（5822・5824・5829）

「京焼風陶器」、ないしは「京焼系陶器」と呼称されている透明釉を施した製品である。

5822・5829は外面底部がアーチ状に抉られた「具器手」と呼ばれる底部をもつ碗で、高台端部は露胎である。5822が口径が復元値で10.6cm、器高7.4cm。5824は底径4.2cm、残存高3.1cmである。5824は外面体部下位から高台部にかけて露胎である。口径は復元値で9.2cm、器高は6.3cmである。

皿（5825・5827）

内面蛇ノ目釉ハギの皿で、いずれも高台部が露胎である。5825は口縁部が外反する皿で、透明釉を施す。高台径は6.2cm、残存高4.6cmである。5827は内面に緑色の釉、外面に透明釉を施した所謂「緑釉唐津」と呼称される皿である。口径17.2cm、器高5.2cmである。

壺（5820）

外面体部上半に褐釉を施した壺である。内面および外面体部下半から底部にかけて露胎である。胴部最大径は復元値で24.2cm、底部径10.4cm、残存高22.2cmである。

磁器・染付け（図版127）

面子（5817・5828）

磁器碗の高台部周縁を打ち欠いて作った面子である。5817が最大幅4.6cm、厚さ1.6cm。5828が最大幅5.3cm、厚さ1.3cmである。

仏飯具（5823）

外面に草花文を呉須描きした仏飯具である。底部は蛇ノ目高台様の作りで露胎である。高台径3.9cm、残存高4.5cmである。

瓶（5832）

外面に草花文を呉須描きした瓶である。高台端部は露胎である。底径は復元値で7.0cm、残存高は10.3cmである。

第4部 小 結

空

第1章 辻ヶ内地区居館出土の土器について

第1節 方形居館について

1. 占地・範囲

居館の敷地は幅5m、深さ1.4m以上の堀で方形に区画されていた。南側の堀は検出していないものの、その範囲は東西が約1町、南北も1町以上の規模を有している。南北方向の堀の方位はN16°Eで、周囲の条里制地割の方向とはほぼ一致している。ただし堀の通る位置は本来の条里境である溝SD85010から東へ約15mほどずれている。4区の土層断面図（図版8）の検討から、溝SD85010は居館より以前にあったとみられ、従って居館はわざわざ条里制地割を平行移動させた形で占地していることが判る。図版5の周辺の条里制地割に示したように、このずれの範囲は南北方向で最大280m続き、明石川の旧河道にまで達している。可能性としては、居館の南端はここまで延びていることも考えられる。

2. 施設

居館内に見つかった主な遺構には、池・建物跡・井戸・土坑・鍛冶炉などがある。また見つからなかったものの、その存在が想定できるものとしては、土壘・門・築山・墓などがある。

土壘 土壘は完全に削平されていてその痕跡も捉えられなかつたが、堀を掘削した土の処分、堀の内側にある遺構の空白地帯などから、その存在が裏付けられる。例外として土坑SK85008があるが、これは鼻切りの廃棄土坑であることから、土壘構築以前に埋め戻されたと理解できる。調査した範囲では、居館への入口となる門や橋は見つからなかつたが、1区東側の堀では角礫を階段状に並べてあつたり、1区西側の堀では杭を打ち並べてあつたのが見つかっている。

池 敷地の中で最も広い範囲を占めるのが池で、検出した池が全てつながるとすると、その面積は2000m²を超えるとみられる。堀で囲まれた敷地の面積は、調査した範囲に限れば、約7000m²である。ここからまた土壘の分を差し引いて考えると、池の占める面積は調査範囲内の有効敷地面積の、実に3分の1にも及ぶことになる。池は西端の通り水SD85004・滝口から水を取り入れ、曲線的な汀線で大きな円弧を描いている。北岸は出島状をなしており、周囲に落ち込んだ角礫とともに、築山の存在を窺わせる。1本のみであるが橋脚も検出しておらず、池の中央部付近に東西方向の橋が架けられていたのであろう。洲浜については、削平を受けていることもあって、はっきりした痕跡は認められなかつた。ただ、池の落ち際からは少量の栗石が出土している。また池の改修はほとんど行われた形跡がなかつた。一部、瓦葺建物SB85001南側の土坑SK85002に伴う盛土が認められたのみである。これは居館の継続期間が短いことにもよると思われる。池や堀の埋土からはマツの球果などが出土しており、庭園内の植栽の一端が判る。また想像を逞しくすれば、多角形の土坑SK85010

／85011は庭園に置かれた石造物の痕跡の可能性もある。同時代の庭園の実例と比較することによって、居館内の景観を復原することも可能であろう。

- 建 物** 建物跡には瓦葺のSB85001と掘立柱のSB85002／85003がある。SB85003が若干角度を西へ振るが、居館外の建物跡SB85004も含めて、概ね条里制地割の方向に沿って建っている。SB85001の周囲からは鬼瓦・軒瓦を含む大量の瓦が出土しており、瓦葺の建物があったことは疑いないであろう。柱穴が見つからないことから、礎石建物であったと考えられるが、削平のため一石も残っていなかった。居館内で建物の造作がさかんに行われたであろうことは、鼻削り（5004～5007）や多量の木材の削りカス（木っ端）の出土から窺える。出土した木器の中には、肘木（5001）・高欄の斗束（5077）・飛檻垂木（5079）といった建築部材や火焔（5003）・仏具の断片（5041）・板塔婆（5075・5076）などがあり、お堂のような建築物や墓地があったと考えられる。
- 雜舍群** 居館の西側にあたる辻ヶ内1区の西側と6区周辺では、掘立柱建物跡SB85002／85003・井戸SE85001・鍛冶炉SX85001～85003の他、多数の土坑・柱穴が集中しており、生活や生産に関連した雜舍群であったと考えられる。また呪符木簡の出土した土坑SK85009や土師器小皿（5513～5532）を埋納した土坑SK85007があり、祭祀行為が行われた痕跡も見受けられる。
- 広 場** 逆に、5区西端部・4区の辺りには遺構の空白部が目立ち、広場的な空間を想定することができる。

3. 年 代

出土した土器には土師器・須恵器の他、少量の中国製磁器・国産陶器・瓦器などがある。このうち当地での年代觀をよく表すのは須恵器である。これは東播系須恵器と総称される中世須恵器で、神出古窯址群・魚住古窯跡群・久留美古窯跡群などいくつかの產地が知られている。このうち当遺跡と関係が深いのは距離的に最も最も近い神出古窯址群で、そこで編年觀を援用したいと思う。なお瓦については、後章で詳述する。

- 須恵器** 須恵器には供膳具の椀・小皿、調理具の片口鉢、貯蔵具の甕・壺の他、雑具として盤・燭台などがある。
- 椀** 椓は高台と見込みの凹みがほとんど消失している。底径が比較的小さく、体部が直線的に開くものと、体部と底部の境が不明瞭で、体部が緩く開くものの2種があり、時期差を感じられる。
- 小 皿** 小皿は体部があまり立ち上がりらず、器高の低い小皿Aがほとんどである。
- 片口鉢** 片口鉢Aは体部が直線的に開き、口縁部を断面三角形に肥厚させる。端部は上方にややつまみ上げるが、上下の拡張は著しくない。
- 以上のような特徴は、これまでに公表されている編年案の神出Ⅱ期第2段階にあてはまるもので、12世紀末～13世紀初頭の年代を与えることができる¹⁰。
- 出土した土器からみると、居館の存続期間はあまり長いとは言えず、非常に限られた時期に限定することができる。

4. 居館の性格

この居館については文書・伝承などがまったく残っておらず、文献からのアプローチは困難な状況である。そこで考古学的な成果や関連する遺跡から、居館の主の人物像・居館建設の動機となる背景を探る手掛かりを提示してみたい。

まずこの時期に、方1町以上の規模をもち、深い堀をめぐらし、広大な池や瓦葺建物を配するような居館は、都や平泉・鎌倉といった大都市以外では、あまり例のないものである。その占地にあたってわざわざ条里制地割をずらしている点からも、この居館の主が明石川流域で並々ならぬ力を有していることが知られる。これだけの居館が文書にも伝承にも残っていないのは、存続期間が短かったことに加えて、主が寺社領の関係者ではなく、国司に連なる人間であったためとの見方も可能である。

二ノ郷・徳政地区 そこで周辺の遺跡（図版3）に目をやると、玉津田中遺跡の二ノ郷・徳政地区⁽¹⁾ および居住遺跡⁽²⁾ には掘立柱建物群が存在し、辻ヶ内地区の居館と密接な関係を有すると考えられる。ただし二ノ郷・徳政地区の建物群の存続期間は11世紀～13世紀にわたっており、辻ヶ内地区の居館の前後の時期を含んでいる。

二ツ屋遺跡 辻ヶ内地区の居館よりも一段階古い時期の居館が、東方約1kmの二ツ屋遺跡⁽³⁾ で見つかっている。ここでも堀・建物跡・池・井戸などが検出され、瓦を含む多数の土器が出土している。玉津田中遺跡と至近距離であり、辻ヶ内地区の居館と入れ代わるように廃絶しているという点でも、注目すべき遺跡である。

吉田南遺跡 明石川の下流には吉田南遺跡⁽⁴⁾ がある。古代～中世にかけて、明石川流域の拠点となる大遺跡である。12～13世紀頃の遺跡の全容は明らかとなっていないが、これまでの確認調査で瓦積みの井戸などが見つかっており、大きな施設があったことは間違いない。

神出古窯址群 玉津田中遺跡から北約7kmに、瓦・土器の生産地である神出古窯址群がある。玉津田中遺跡で出土した瓦の同范・同文品は南支群⁽⁵⁾・宮ノ裏支群⁽⁶⁾などで焼かれている。また他の消費地で見られない須恵器の盤・燭台といった特殊品が神出・東遺跡⁽⁷⁾ から出土している点からも、両遺跡の結びつきを読み取ることができる。

播磨国はもともと瓦の產出国であった。神出古窯址群産の瓦も京の六勝寺などで使われているのが判っている。瓦の運搬ルートは明石川を経由したに間違いなく、上に挙げた遺跡はその中継地としての役割を果たした可能性が高い。これらの遺跡の経営には、当然国司に連なる人物が関与したであろう。

註 (1)森田 稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開—神出古窯址群を中心に—」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 1986年

(2)兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡』第1分冊（兵庫県文化財調査報告 第135-1冊）1994年

(3)神戸市教育委員会『居住遺跡発掘調査概要』1984年

(4)神戸市教育委員会編『二ツ屋遺跡現地説明会資料』1992年

(5)兵庫県教育委員会『吉田南遺跡（足田地区）・北王子遺跡』（兵庫県文化財調査報告 第149冊）1995年

(6)平成6年度に兵庫県教育委員会が調査を行った。

(7)神戸市教育委員会『神出遺跡』『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』1983年

(8)神戸市教育委員会『神出・東遺跡』『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』1994年

神戸市教育委員会 須藤 宏氏より御教示いただいた。

第2節 出土土器の統計分析

1. 統計分析の方針

辻ヶ内地区では計430箱にのぼる土器・瓦が出土した。特に池SG85001は夥しい量の土器で埋め尽くされたような状況であった。ただし出土する土器の大多数は土師器の杯・小皿であり、それ以外の器種についても限られた種別の範囲内であった。このような場合には、統計処理による分析が有効と考え、各器種別の個体数の算出を行った。

分析の対象として、居館内で特に多くの土器が出土した下記の5つの地点を選んだ。

A 地点：1区池 SG85001

B 地点：1区池 SG85002

C 地点：5区池 SG85002（瓦葺建物跡SB85001周辺の包含層も含む）

D 地点：1区堀 SD85001（東側）

E 地点：1区堀 SD85001（西側）

これらの地点を選んだ理由は、統計上有意義な結果をもたらすに充分な土器量が得られるということと、同じ居館の中でも地点によって大きく異なる結果が出る見通しをもっていたためである。

2. 統計処理の方法

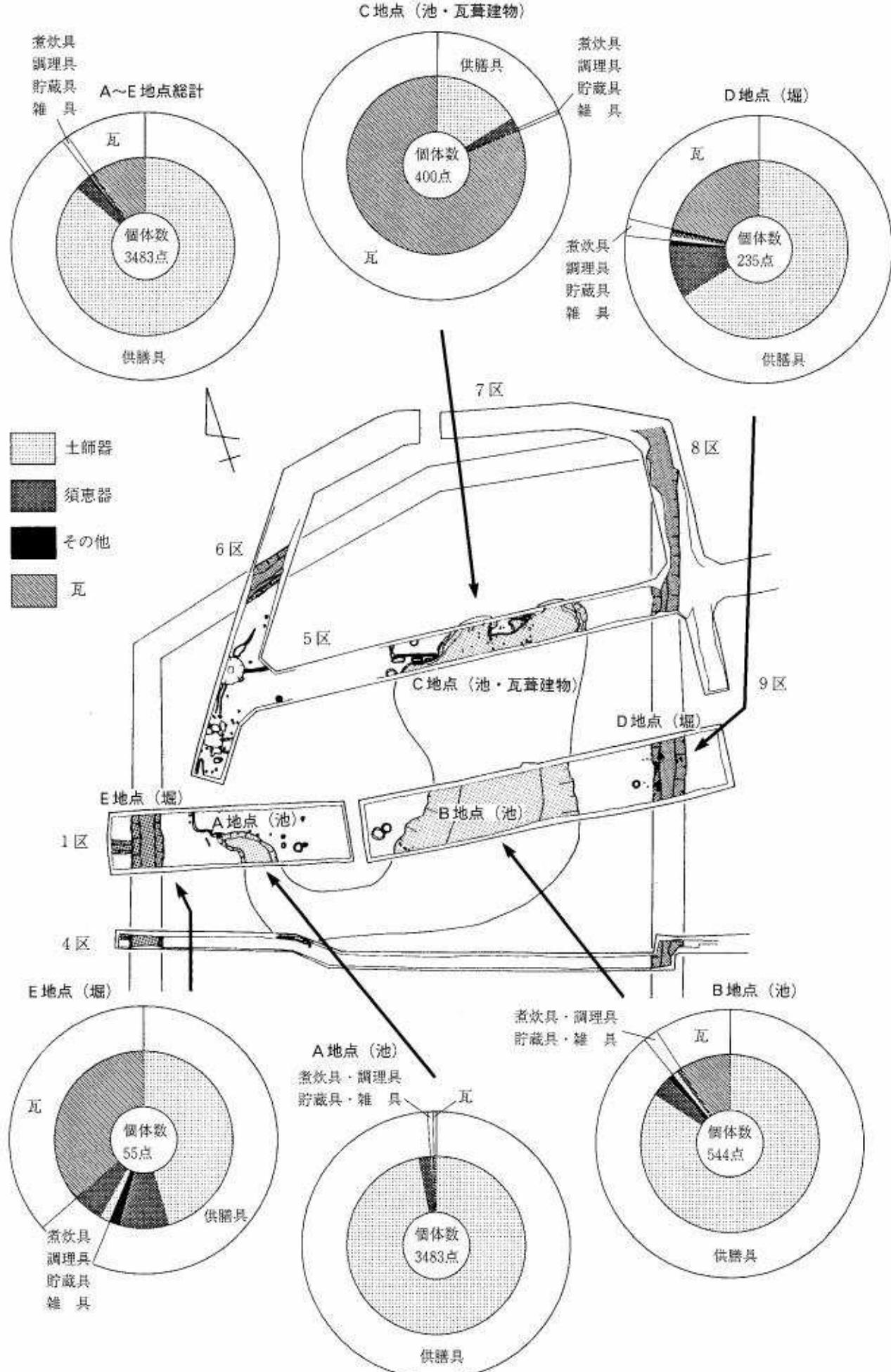
土器の個体数の算出方法にはいくつかあるが、今回は「口縁部計測法」を採用した^①。これは1)まず半径5mmおきに描いた同心円を15°ずつ放射状に24分割する。2)土器の口縁部を口径に合った円周上に置いて、口縁の残存度数を測る。3)度数を器種別に集計し、合計を24で除したものを個体数とするものである。

この方法によれば、体部や底部では判別の困難な杯と小皿のような器種が、口径で区別できるという利点がある。なお器種の区分は第2部第10章第1節で示した器種分類に基づいているが、統計作業の段階では細分が確立していなかったり、小片で判別が困難であったりしたため、大きな分類の段階で止めている。

一方、瓦については「四隅カウント法」を行った。これは丸瓦や平瓦の四隅をカウントする方法である。ただし軒瓦の場合は瓦当面側は接合部の両端でカウントしているが、玉縁側は破片のみでは丸・平瓦と区別できないという問題点を有している。また鬼瓦については鱗部でもってカウントしており、「二隅カウント法」となる。

3. 統計の結果

上記の方法でA~E地点の土器・瓦の口縁部や隅の度数を集計したのが表5である。そのうち欄に網かけをしているのが、それぞれの器種の中での最大値を示している。また※印は口縁部以外の破片が存在することを意味している。集計表の中身を検討してみると、供膳具の土師器と須恵器ではA地点が他を圧倒している。しかしそれ以外の器種ではA・B地点に拮抗しているものが多くみられる。また瓦についてはC地点が群を抜いているのが注



挿図 7 A～E 地点の器種構成

表5 土器・瓦口縁度数集計表

用 途 種 別	供 贈 具												小 計				
	土 師 器						須 惠 器		瓦 器		白 磁・青 白 磁		青 磁				
器 種	杯 A	小皿 A	皿 B	小皿 B	小皿 C	皿 D	托	椀	小 皿	椀	小 皿	碗	皿	その他	碗	その他	
A 地点(池)	36398	42739	479	1169	23	5	20	1200	651	※	0	※	※	14	10	82708	
B 地点(池)	4997	5601	74	222	11	0	0	364	118	4	3	8	5	2	0	0	11409
C 地点(池)	552	871	20	47	3	0	0	163	14	0	0	※	※	0	※	0	1670
D 地点(堀)	2075	1493	44	25	11	0	0	509	24	0	0	0	7	0	0	4	4192
E 地点(堀)	243	299	5	※	0	0	0	82	4	2	0	0	※	0	0	0	635
合 計	44265	51003	622	1463	48	5	20	2318	811	6	3	8	12	2	14	14	100614

用 途 種 別	煮 炊 具・調 理 具・貯 藏 具・雜 具												小 計			
	土 師 器						須 惠 器			瓦 器			滑 石	常 清 焼	備 前 焼	丹 波 焼
器 種	鍋	羽 笠	盤	粗製鉢	その他の	片口鉢A	片口鉢B	甕	壺	盤	鍋	石 鍋	甕	壺	甕	甕
A 地点(池)	26	55	11	40	3	56	74	22	6	10	1	5	0	※	※	309
B 地点(池)	28	12	14	0	3	36	0	3	0	12	0	※	0	※	0	108
C 地点(池)	0	4	0	0	0	0	0	6	※	0	0	0	0	0	0	10
D 地点(堀)	7	14	0	0	0	3	0	8	0	0	0	0	8	0	0	40
E 地点(堀)	1	0	0	0	0	16	10	7	0	※	0	0	0	0	0	34
合 計	62	85	25	40	6	111	84	46	6	22	1	5	8	0	0	501

用 途 種 別	屋 根 瓦						小 計	総 計
	丸 瓦	平 瓦	瓦	道 具 瓦	瓦	瓦		
器 種	軒丸瓦	丸 瓦	軒平瓦	平 瓦	鬼 瓦	その他の		
A 地点(池)	3	16	3	22	※	0	44	83061
B 地点(池)	15	27	23	130	1	0	196	11713
C 地点(池)	66	427	47	722	10	13	1285	2965
D 地点(堀)	44	25	25	91	1	1	187	4419
E 地点(堀)	0	5	1	63	1	0	70	739
合 計	128	500	99	1028	13	14	1782	102897

口縁度数カウントの方法

* 土 器 … 半径を 5 mm おきに引いた同心円を 15°ずつ 24分割し、口径の合う円周上に土器の口縁部を置いて、1/24を単位とした口縁度数を求める。

* 瓦 … 四隅をカウントする。ただし軒瓦の場合には瓦当の接合部でカウントする。
鬼瓦は縫の部分をカウントする。

※印は、口縁部以外の破片が存在することを意味する。

表6 土器・瓦等個体数集計表

用 途 種 別	供 贈 具												小 計				
	土 師 器						須 惠 器		瓦 器		白 磁・青 白 磁		青 磁				
器 種	杯 A	小皿 A	皿 B	小皿 B	小皿 C	皿 D	托	椀	小 皿	椀	小 皿	碗	皿	その他	碗	その他	
A 地点(池)	1517	1781	20	49	1	1	1	50	28	※	0	※	※	1	1	1	3450
B 地点(池)	209	234	4	10	1	0	0	16	5	1	1	1	1	0	0	0	484
C 地点(池)	23	37	1	2	1	0	0	7	1	0	0	※	※	0	※	0	72
D 地点(堀)	87	63	2	2	1	0	0	22	1	0	0	0	1	0	0	1	180
E 地点(堀)	11	13	1	※	0	0	0	4	1	1	0	0	※	0	0	0	31
合 計	1847	2128	28	63	4	1	1	99	36	2	1	1	2	1	1	2	4217

用 途 種 別	煮 炊 具・調 理 具・貯 藏 具・雜 具												小 計			
	土 師 器						須 惠 器			瓦 器			滑 石	常 清 焼	備 前 焼	丹 波 焼
器 種	鍋	羽 笠	盤	粗製鉢	その他の	片口鉢A	片口鉢B	甕	壺	盤	鍋	石 鍋	甕	壺	甕	
A 地点(池)	2	3	1	2	1	3	4	1	1	1	1	1	1	0	※	21
B 地点(池)	2	1	1	0	1	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	9
C 地点(池)	0	1	0	0	0	0	0	1	※	0	0	0	0	0	0	2
D 地点(堀)	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	5
E 地点(堀)	1	0	0	0	0	1	1	0	※	0	0	0	0	0	0	4
合 計	6	6	2	2	2	7	5	5	1	2	1	1	0	0	0	41

用 途 種 別	屋 根 瓦						小 計	総 計
	丸 瓦	平 瓦	瓦	道 具 瓦	瓦	瓦		
器 種	軒丸瓦	丸 瓦	軒平瓦	平 瓦	鬼 瓦	その他の		
A 地点(池)	1	4	1	6	※	0	12	3483
B 地点(池)	4	7	6	33	1	0	51	544
C 地点(池)	17	107	12	181	5	4	326	400
D 地点(堀)	11	7	7	23	1	1	50	235
E 地点(堀)	0	2	1	16	1	0	20	55
合 計	33	127	27	259	8	5	459	4717

個体数算出の方法

* 土 器 … 24分割でカウントした口縁度数を、24で割って、端数を切り上げる。

* 瓦 … 四隅の数を4で割って、端数を切り上げる。
鬼瓦の場合は縫の数を2で割って、端数を切り上げる。

※印は、口縁部以外の破片が存在することを意味する。

目される。

ただし土器と瓦では統計方法が異なるため、表5のままでは対比が困難である。そこでそれぞれの統計方法に従って、24・4・2の数で除して個体数を求めたのが表6である。度数の商は整数値とし、小数点以下は切り上げたため、見掛け上の較差は薄れたが、土器と瓦を通じて個体数で比較できるようになった。

この表を利用して地点別の器種構成を円グラフで示したのが挿図7である。土器の器種は用途別に分類しているが、煮炊具・調理具・貯蔵具・雑具は個体数が極端に少ないため、1つの欄にまとめている。以下、器種構成の出土傾向を地点ごとに解説する。

A 地点／1区池 SG85001

総個体数は3483点を数え、5地点全体の73%に達する大量の土器が出土した。器種構成の実に99%は供膳具であり、さらに99%中の94%が土師器杯A・小皿Aで占められている。供膳具の量があまりにも大きいため割合としては1%に満たないが、他の煮炊具・調理具・貯蔵具・雑具のほとんどの器種も出土しており、厨房用品のセットが揃っていると言える。こういったいわゆる「かわらけ」の大量集積について祭祀的な性格が認められる場合もあるが、このA地点に関しては日常雑器と混じり合っているところから、廃棄によるものと捉えておく。また瓦の出土が極端に少ないのでA地点の特徴である。

B 地点／1区池 SG85002

供膳具は全体の88%で、88%中の81%が土師器杯A・小皿Aである。煮炊具以下の器種は1%強を占め、器種の大半が出土している。瓦は9%でやや出土量が増えているが、それを除けばA地点とよく似た傾向を示している。

C 地点／5区池 SG85002（瓦葺建物跡 SB85001周辺の包含層も含む）

大量的瓦が出土しており、5地点のうちの71%がC地点からのものである。器種構成は瓦の割合が81%を占め、供膳具で18%、煮炊具以下にいたってはほとんど無いに等しい。器種構成からみると、ここで日常生活が営まれた形跡は感じられない。また瓦の内訳は軒瓦と丸・平瓦の比が1:10の割合となっており、実際に屋根に葺かれていた蓋然性を強めている。

D 地点／1区堀 SD85001（東側）

供膳具は全体の76%で、76%中の63%が土師器杯A・小皿Aである。瓦は21%あるが、その内訳は軒瓦と丸・平瓦の比が3:5となっており、軒瓦の割合が相対的に高い。煮炊具以下の器種は2%ほどである。

E 地点／1区堀 SD85001（西側）

供膳具は全体の56%で、56%中の43%が土師器杯A・小皿Aである。また瓦は36%を占め、36%中の29%が平瓦である。煮炊具・調理具・貯蔵具は全体の7%で、5地点の中で最も割合が高い。

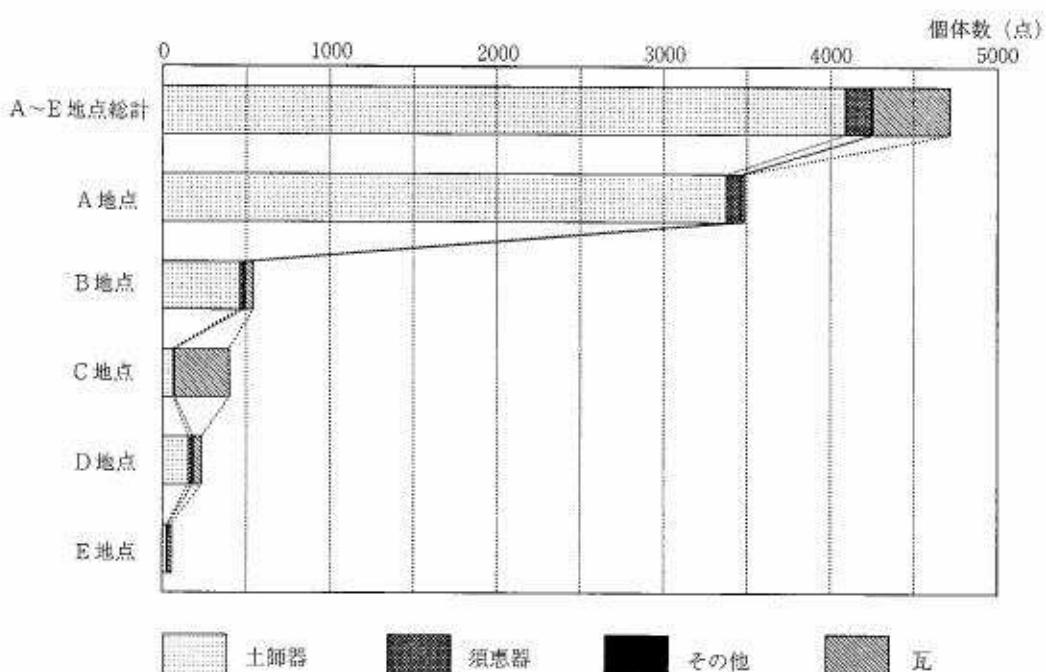
4. 統計結果の検討

集計された土器・瓦の個体数を絶対数で表したのが、挿図8である。この棒グラフを見ると一目瞭然、A地点の突出ぶりがよく判る。しかもそのほとんどを供膳具の土師器が占めるという特異な出土状況を如実に示している。

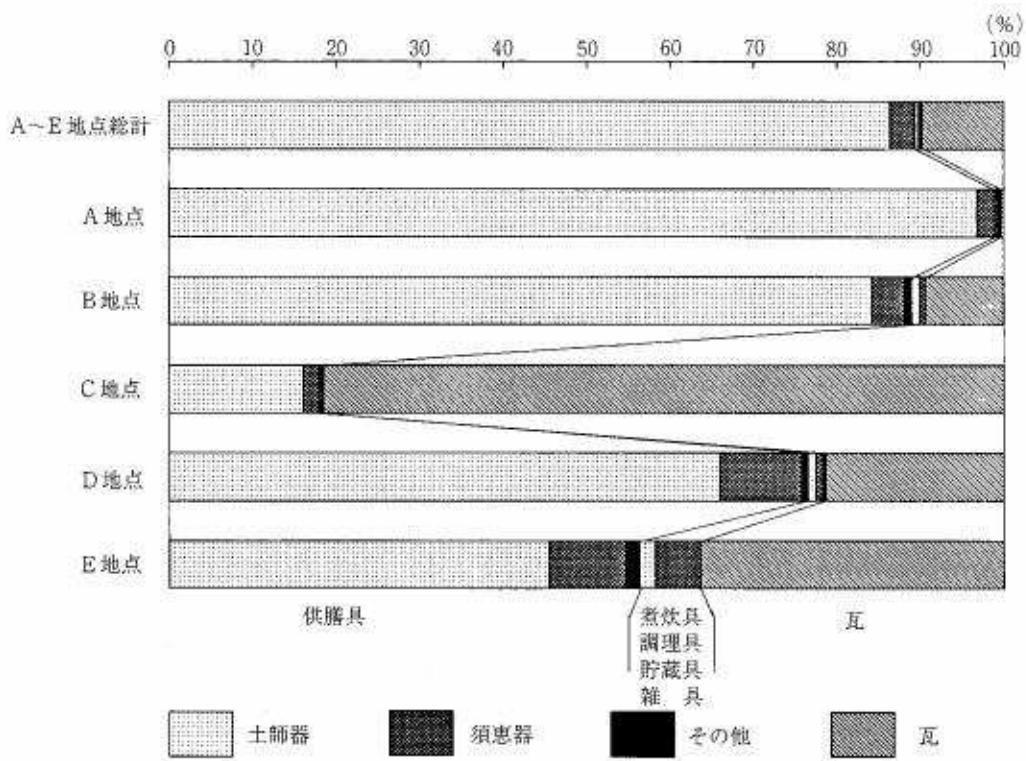
次に個体数を百分率で表して、地点ごとの器種構成の傾向を示したのが挿図9である。これによると、土師器が80%を超すA・B地点、瓦が80%を超すC地点、須恵器が10%を超すD・E地点の3つのグループに分けることができ、地点によって非常に特徴的な器種構成を示していることが判る。

A・B地点 まず土師器が80%を超すA・B地点は、他の地点に比べて瓦以外の土器の個体数が際立つて多いことが指摘できる。なおB地点については面積が大きいとも言えるが、土器の出土は西岸部に集中しており、A地点と共に通する様相が認められる。先にも述べたように、これらの土器のほとんどは供膳具であるが、中には煮炊具・調理具・貯蔵具・雑具といった日常雑器も混在している。従って出土した土器は、祭祀に伴って埋納されたものではなく、単に廃棄されたものであると判断した。これは居館の中において、A地点を中心とした範囲で土器の廃棄が集中的に行われ、特に供膳具の消費が著しかったことを物語っている。A地点の周辺には掘立柱建物・井戸・鍛冶炉といった日常の家事や生産に関連する遺構があり、土器の出土状況と符合している。その一方では池の滝口・硯符木簡の出土した土坑のような重要な遺構もあり、検討の余地を残している。なおB地点では瓦も一定量出土していて、これはC地点に近いという位置関係を反映していると考えられる。

C地点 次に瓦が80%を超すC地点は、瓦の個体数の上でも5地点中の71%を占めており、他を圧倒している。瓦の内訳は軒瓦と丸・平瓦の比率が1:10で、B地点の1:4、D地点の1:1.6よりも丸・平瓦の占める割合が高く、実際に屋根に瓦を葺いた状態に近い比率を示して



挿図8 地点別の個体数（絶対値）



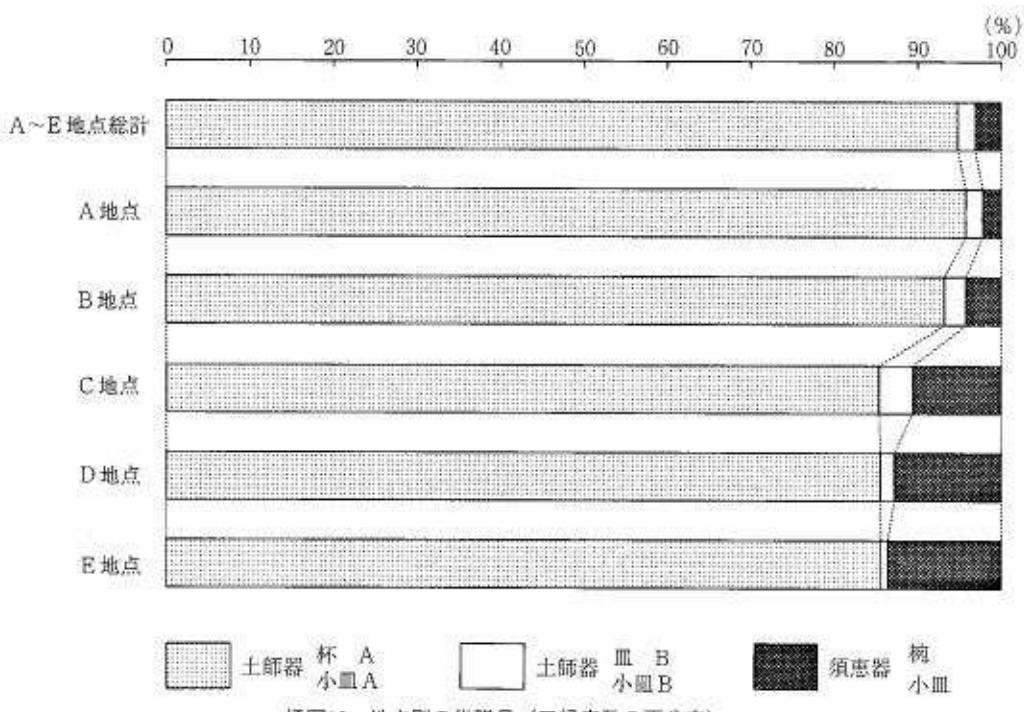
挿図9 地点別の器種構成(百分率)

いる。C地点では雨落ち状の溝も見つかっており、ここに瓦葺きの建物があったことはほぼ確実である。また日常雑器の比率が少ない点や、鬼瓦が5個体以上出土していることなどからみて、この瓦葺き建物は生活の場ではなく、お堂のような建築物であったとみられる。

D・E地点 須恵器が10%を超すD・E地点は、堀ということもあってか、他の地点ほど偏った器種構成は示していない。ただし土師器と瓦を合わせた比率はやはり80%を超えており、居館内の特殊性が表れている。またE地点は煮炊具・調理具・貯蔵具の比率が7%を超えており、5地点中の最大である。これはA地点に近いという位置関係を反映したものと考えられる。

供膳具 挿図10は出土土器全体の約90%を占める供膳具を、口縁度数の百分率で表したものである。ただしここでは出現頻度の少ないものを除外し、土師器杯A・小皿A、土師器皿B・小皿B、須恵器椀・小皿の3種の器種をピックアップした。このグラフでは土師器杯A・小皿Aが93~95%で須恵器椀・小皿が2~4%のA・B地点と、土師器杯A・小皿Aが85%で須恵器椀・小皿が10~13%のC・D・E地点の2つのグループに分けることができる。この差はA・B地点で土師器杯A・小皿Aの大量廃棄がなされたことによる。ただし土師器杯A・小皿AはC・D・E地点においても85%という高率を保っており、供膳具の大多数を占める状況が居館内で普遍的に見られることが判る。

杯A・小皿A 土師器杯A・小皿Aはロクロ成形ののち、回転糸切り技法によって切り離すという特徴をもった器種で、須恵器工人との関わりが深いと言われている。そういうった器種が大量消費のために居館内に大量に供給されている背景には、須恵器生産との直接的な関わりが考えられる。



挿図10 地点別の供膳具（口縁度数の百分率）

- 皿B・小皿B** 土師器皿B・小皿Bは手づくね成形ののち、口縁部に1段のナデを施したもので、主に平安京周辺で生産され、畿外では客体的に出土するのが一般的な器種である。器種構成の比率は1～4%の範囲に止まり、主流の器種とはなっていないが、地点による比率の変異が少なく、灯明皿など特定の用途に用いられていたとみられる。
- 楕・小皿** 須恵器楕・小皿はほとんどが神出古窯址群の製品とみられる。片口鉢・甕などは他地域へ流通する器種であるのに対し、楕や小皿は主に在地で消費される器種である。器種構成の比率は明らかに土師器杯A・小皿Aと補完的な関係にあり、同じ用途に用いられたと考えられる。

5. 小 結

この節では、居館内から出土した土器の統計処理の結果から導き出される、地点ごとの傾向について述べた。数値の操作次第では、他に様々な傾向の抽出が可能であろうが、統計結果を表5・6に掲げることで、後の課題としたい。

この統計処理を通じて強く感じられたことは、同じ居館の中であっても、地点によって出土土器の様相は大きく異なるものであるということである。つまり部分的な調査の結果を、全体に敷衍するのは危険であるということになる。また逆に点的な調査でも、出土土器のパターンから、集落や居館内における位置付けを類推することも可能である。そのためには同様な資料の蓄積が必要であろう。

この結果をもとに、同時期の掘立柱建物群がある二ノ郷・徳政地区や居住遺跡など、隣接する遺跡の資料との対比を行う予定であるが、以下は第6分冊「総括編」に譲る。

註 (1)個体数の算出方法については、宇野隆夫「第4章 遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ 一白河北殿北辺の調査一』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981年を参考にした。

第2章 辻ヶ内地区居館出土の瓦について

第1節 瓦の組み合わせについて

辻ヶ内地区出土の丸平瓦は大きさによって大小の2種類に大別できる。全長・幅を計測して作成したのが挿図11のグラフである。全長については瓦の分類の項で述べたように、丸瓦・平瓦ともにはば30cmを境にして、大小のグループに分かれる。幅については丸瓦は13cmを境に大小のグループに分かれる。平瓦は18~19cmを境に大小のグループに分かれる。このグラフに基づき、軒瓦についても大きさを基準としたグルーピングをおこなう。ただし全長については軒瓦の場合瓦当部の厚みがあるので約1cmプラスした値を境とする。その結果は以下のとおりである。

小型瓦

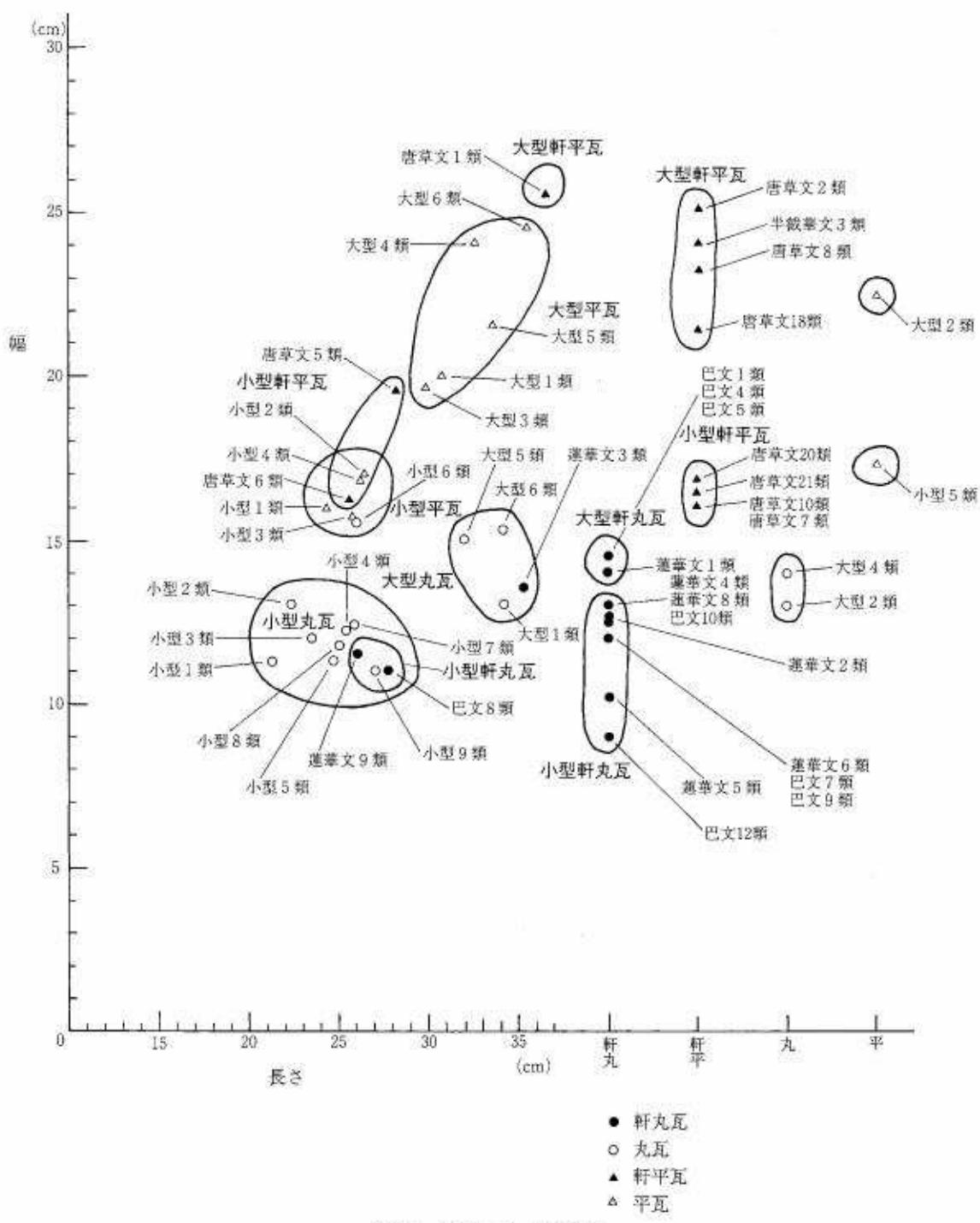
軒丸瓦—蓮華文系 2類・4類・5類・6類・8類・9類
巴文系 7類・8類・9類・10類・11類・12類
軒平瓦—唐草文系 5類・6類・7類・10類・20類・21類

大型瓦

軒丸瓦—蓮華文系 1類・3類
巴文系 1類・2類・3類・4類・5類
軒平瓦—唐草文系 1類・2類・8類・18類
華文系 3類

ここにあげなかった瓦は全長・幅ともに不明のものであり、そのサイズを計測できなかつたものである。なお全長が不明なものでも幅が計測できるものについては、幅のみを基準として分類している。

次に個々の瓦の組み合わせについて考えてみる。瓦は丸・平瓦を組み合わせて屋根を葺くものであり、サイズの著しく異なる瓦を組み合わせることはありえない。基本的には小型瓦あるいは大型瓦の内ではいずれの組み合わせも可能である。しかし焼成や調整技法上の特徴から、明らかに同一工房で製作されたものが存在する。それは軟質な焼成で平行タタキを凸面に施すものである。軒平瓦が巴文7類、軒平瓦が唐草文19類、丸瓦が小型8類、平瓦が小型4類という小型瓦の組み合わせである。この一群は際立った違いがあるために他と明確に区別できるが、他の瓦について同様な組合せを復元することは困難である。ただし大きさや出土数量からある程度の推測は可能である。小型のものでは蓮華文9類と唐草文5類が組み合う可能性があり、大型のものでは蓮華文3類と唐草文1類が組み合う可能性がある。



挿図11 瓦の長さ・幅散布図

第2節 瓦の数量的処理

1. カウントの方法 (表7)

辻ヶ内地区から出土している瓦はその種類が極めて多い。また大型の瓦と小型の瓦が混在するのも大きな特徴である。そこで遺跡内における瓦葺建物の復元、特にその位置と規模の復元のために、各出土地点ごとに数量的な処理を施した。その結果は表のとおりである。瓦の個体数のカウントは、軒瓦・鬼瓦については小破片でも1個体として各型式毎の個体数を数えている。丸・平瓦については隅の破片の数を数え、それを4で割ることにより個体数を算出している。ただし小破片の場合型式の認定が困難であるため、大型・小型という大きな分類のみにとどめている。

2. 各瓦の割合 (挿図12)

まず軒瓦と丸・平瓦の出土割合について見てみる。軒丸瓦が229点、軒平瓦が223点、丸瓦が209点、平瓦が428点、鬼瓦が42点出土している。軒瓦と丸・平瓦の個体数の算出基準が異なるので、単純な数量の比較はできないが、丸・平瓦の数に比して軒瓦の点数が多いことが留意される。

次に地区別による割合を見てみる。辻ヶ内1区では軒丸+軒平／丸+平が1.1になるのに対し、辻ヶ内5区では0.58になっている。1区よりも5区の方が軒瓦の出土割合が低いと言える。また遺構別による割合を見てみると、1区SD85001東側において軒瓦の比率が高い点と1区SD85001西側・1区SG85002において平瓦の比率が高いことが留意される。

3. 軒瓦の形式別割合 (挿図13)

軒丸瓦 次に軒瓦の出土数量の傾向についてみてみる。軒丸瓦のうち型式が明らかなものは総数229点ある。蓮華文と巴文の比率は蓮華文が53%、巴文が47%で蓮華文がやや多い。最も出土量の多いのは蓮華文9類と巴文8類であり、いずれも全体の17.5%を占める。これに続くのは蓮華文3類で12.2%、以下巴文9類、蓮華文6類、蓮華文1類、巴文7類、蓮華文8類、巴文10類という順で続く。ここまでが総数の3%以上を占めるものであり、主体となる軒丸瓦であると言える。

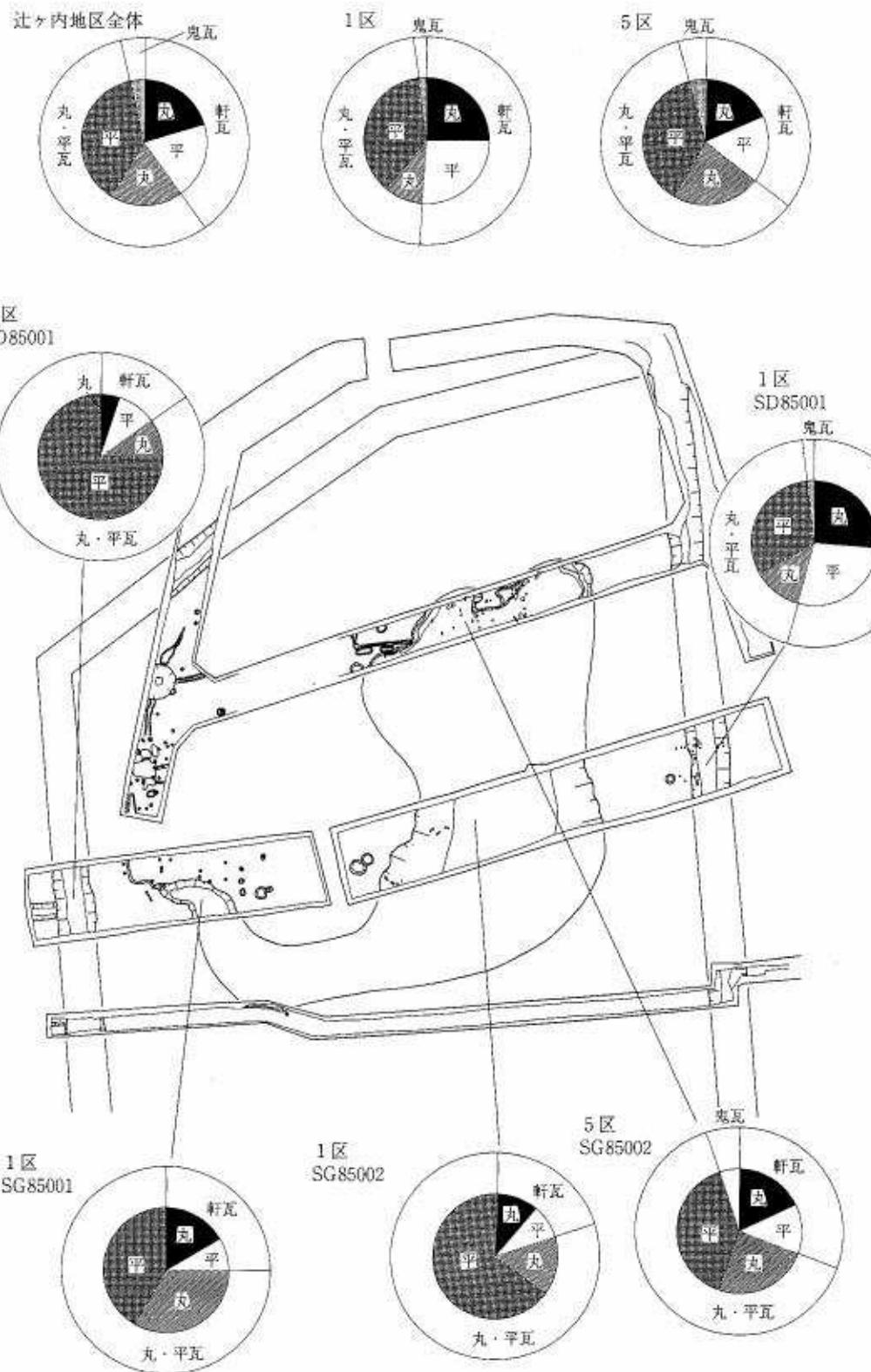
次に地区による出土傾向の違いを見てみる。軒瓦はその9割以上が1区と5区から出土しており、比較して有為な結果が得られるのはこの両者のみである。そこで1区と5区における各型式の軒丸瓦の割合を比べると、1区においては蓮華文3類、巴文8類がそれぞれ20%以上を占め主体となるのに対し、5区ではいずれも10%未満にしかならず、代わりに蓮華文9類、蓮華文6類、巴文9類がいずれも14%以上を占め主体となっている。

軒平瓦 軒平瓦は型式が明らかのものは総数223点である。全体の9割を唐草文系のものが占める。最も出土量の多いものは唐草文5類であり、全体の34.5%を占める。これに続くのが唐草文20類で16.6%、以下唐草文7類、唐草文21類、唐草文1類という順で続く。ここまでが総数の5%以上を占めるものであり、主体となる軒平瓦である。次に軒丸瓦同様、1区と5区

表7 辻ヶ内地区瓦一覧表

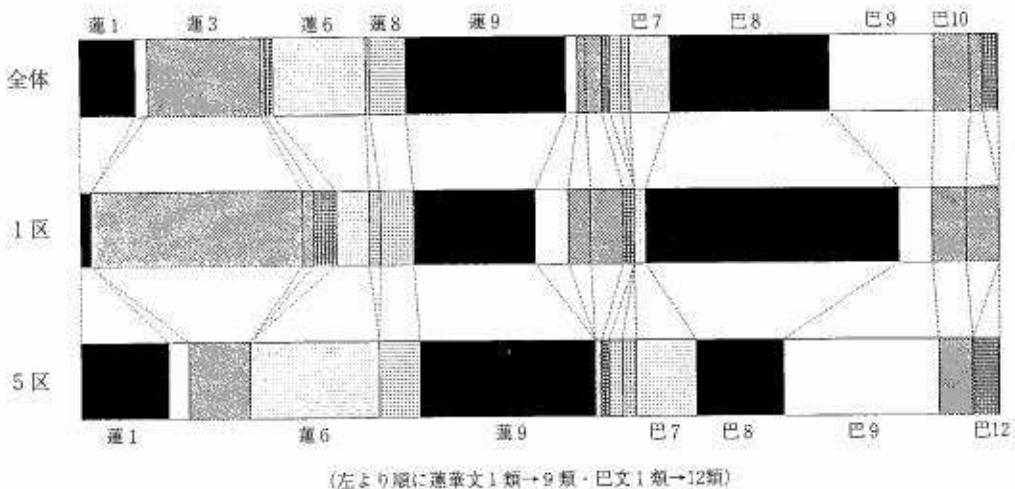
地区名 遺構名	1区					2区	3区	4区					5区					6区	7区	8区			合計			
	池1	池2	堀W	堀E	ほか合計			池1	堀W	堀E	ほか合計	池2	堀W	堀E	ほか合計	堀	ほか合計	堀	ほか合計							
種類	型式名																									
軒	連華文	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	10	0	3	13	0	0	0	0	0	0	14		
		2	0	1	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
		3	0	1	0	7	11	19	0	0	0	0	0	4	0	5	9	0	0	0	0	0	0	28		
		4	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
		5	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
		6	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	10	0	9	19	0	1	1	0	0	23		
		7	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
		8	0	1	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	2	0	4	6	0	0	0	0	0	9		
		9	1	1	0	4	5	11	1	0	0	0	0	0	19	0	7	26	2	0	2	0	0	40		
丸	巴文	1	0	0	0	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
		2	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
		3	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	4		
		4	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2		
		5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	1	1	0	0	3		
		6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	2		
		7	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	4	0	5	9	0	0	0	0	0	10		
		8	1	0	1	3	18	23	0	0	0	0	0	3	0	10	13	0	3	3	0	1	0	40		
		9	0	1	0	0	2	3	0	0	0	0	0	15	0	8	23	0	0	0	0	0	0	26		
軒丸瓦計	軒丸瓦計	10	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	4	0	1	5	0	1	1	0	0	0	9		
		11	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
		12	0	5	1	15	63	86	1	0	0	0	0	76	0	57	133	2	6	8	0	1	0	1	229	
軒	唐草文	1	0	0	0	4	7	11	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	1	1	0	1	0	15		
		2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
		3	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2		
		4	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
		5	0	2	0	7	39	48	0	0	0	0	0	7	0	21	28	1	0	1	0	0	0	77		
		6	0	1	0	1	3	5	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	7		
		7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	17	19	0	0	0	0	0	0	19		
		8	1	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
		9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2		
平	唐草文	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1		
		11	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	3		
		12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	3	0	0	0	0	0	0	3		
		13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1		
		14	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
		15	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
		16	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
		17	0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
		18	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
瓦	平瓦	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	0	15	36	0	0	0	0	0	0	37	
		20	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	9	0	8	17	0	1	1	0	0	0	18	
		21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	8	17	0	1	1	0	0	0	7	
		1	0	1	0	1	3	5	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	7		
		2	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	6	0	0	6	0	0	0	0	0	7		
		3	0	0	0	2	3	5	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	6		
		連華文	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
		劍頭文	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	2		
		軒平瓦計	1	4	2	16	67	90	0	2	0	0	0	0	54	0	70	124	1	5	6	0	1	0	1	223
丸瓦	大型	2	0	3	8	17	30	0	0	0	0	0	0	8	0	1	9	0	1	1	0	0	0	0	40	
		13	27	2	17	47	106	1	0	0	0	0	5	5405	9	238	652	0	25	25	3	0	1	1	793	
平瓦	丸瓦計	15	27	5	25	64	136	1	0	0	0	0	5	5413	9	239	661	0	26	26	3	0	1	1	833	
		1	11	0	1	23	36	0	0	0	0	0	0	22	0	2	24	0	2	2	2	0	0	0	64	
平瓦	大型	17	106	57	71	215	466	1	0	0	0	0	39	39	645	18	408	1071	0	66	66	0	0	3	3	1646
		18	117	57	72	238	502	1	0	0	0	0	39	39	667	18	410	1095	0	68	68	2	0	3	3	1710
鬼瓦	1	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	1	0	1	22	0	10	32	0	1	1	1	0	0	39	
		2	0	0	0	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
鬼瓦計	鬼瓦計	0	0	0	1	6	7	0	0	0	0	1	0	1	22	0	10	32	0	1	1	1	0	0	42	

*軒瓦・鬼瓦は破片数でカウント(型式不明なものはカウントしていない) 平瓦は隅の破片数でカウント(大型・小型の不明なものはカウントしていない) 遺構名 池1-SG85001 池2-SG85002 堀-SD85001(W-西側、E-東側)

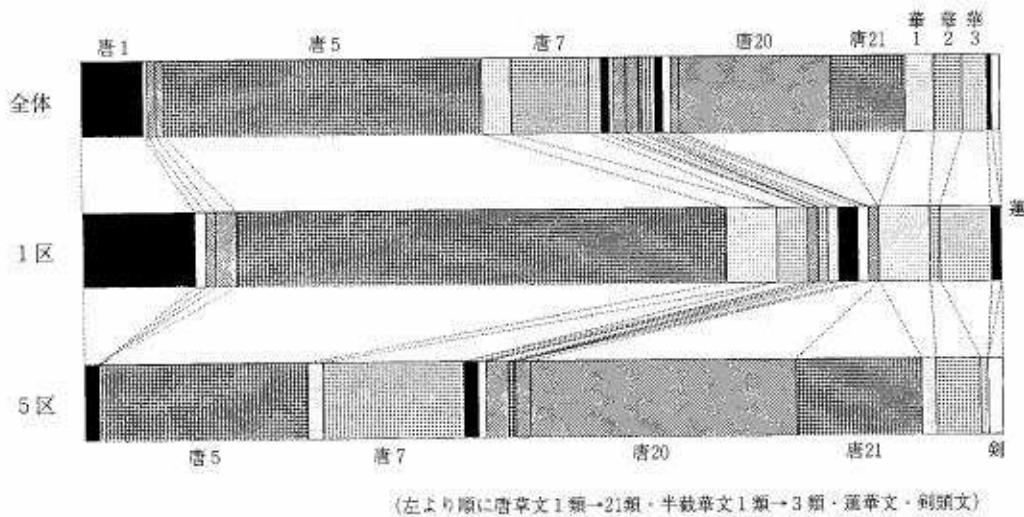


挿図12 地区・造構別瓦構成

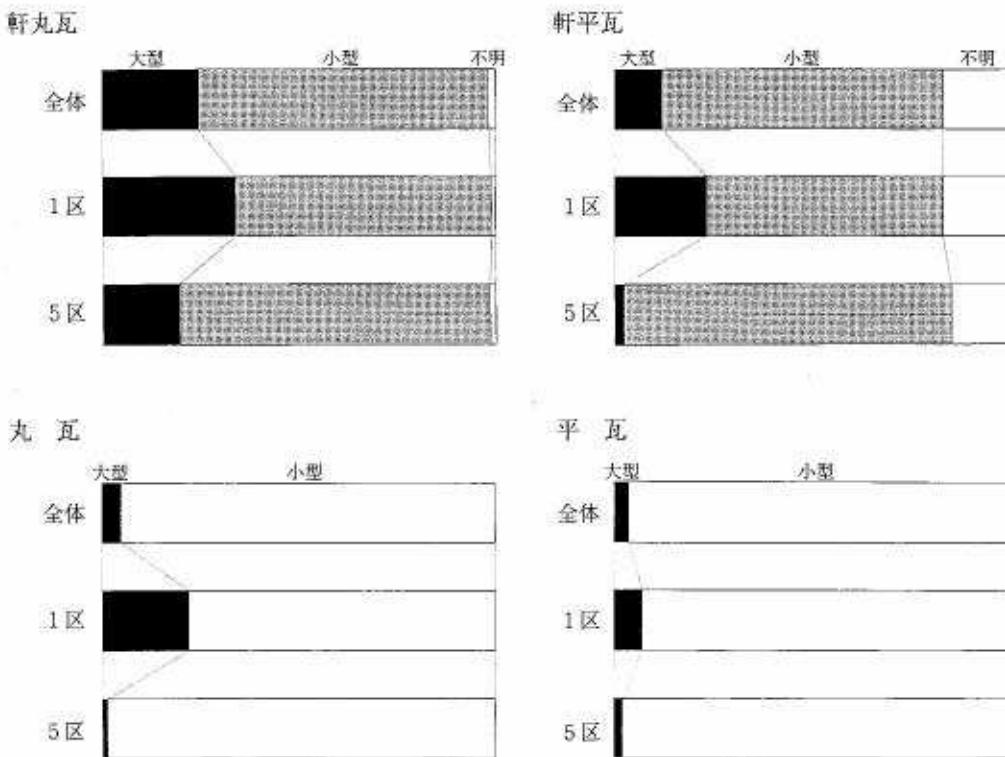
軒丸瓦



軒平瓦



挿図13 軒瓦 型式別出土構成



挿図14 瓦 大型・小型出土割合

における各型式の割合を比較する。1区においては唐草文5類が50%以上と圧倒的な割合を占める。これに続くのが唐草文1類である。この両者が主体となる瓦である。一方5区においては唐草文5類が20%以上と、この地区においても高い割合を占める。ただし1区と大きく異なるのは、1区においてはほとんど出土していない唐草文20類が30%近く、唐草文7類、唐草文21類が10%以上といずれも高い割合を占める点である。以上のように1区と5区においては、軒瓦の出土傾向に明らかな違いが認められる。

4. 大型・小型別の割合 (挿図14)

次に、丸・平瓦も含めた瓦全体について大型・小型という区別でその出土傾向を見てみる。丸瓦では大型は全体の4.8%を占めるに過ぎず、圧倒的に小型の比率が高い。平瓦でも同じ傾向が窺われ、大型は全体の3.7%に過ぎない。ただし1区と5区とでは大型・小型の比率が若干異なる。1区では大型の比率が丸瓦で22%、平瓦で7.1%と、5区の丸瓦1.3%、平瓦2.2%とという比率に比べて、大型の占める割合が高くなっている。

軒瓦における大型と小型の割合をみても、1区においては大型の軒丸瓦蓮華文3類、大型の平瓦唐草文1類がいずれも10%以上の高い比率を占めるのに対し、5区ではその両者がそれぞれ6.8%、1.6%といずれも低い割合にとどまっている。以上から瓦全体を見てみると、1区のほうが5区よりも大型の割合が高いことが明らかになった。

5. 鬼瓦の出土傾向

最後に鬼瓦の出土状況を見てみる。鬼瓦は1類と2類があるが、2類は総数の7%に過ぎず、圧倒的に1類が多い。また地区による出土数量の違いをみてみると、5区の方が1区よりも圧倒的に出土数量が多い。鬼瓦を使用していた建物が、5区の付近にあったことの反映であろうか。

第3節 瓦の生産地について

辻ヶ内地区から出土している軒瓦のうちに生産遺跡から同文あるいは同范の瓦が出土し
宮ノ裏支群 ているものがある。同文品の数が圧倒的に多いのが神戸市西区神出古窯址群の宮ノ裏支群

である¹¹。軒丸瓦では蓮華文2類・6類・7類の同文品があり、6類については同范であることを確認している。巴文9類も同文のものがある。軒平瓦では唐草文17類と蓮華文が同文

拍子ヶ池3号窯 である。神出古窯址群ではこの他、拍子ヶ池3号窯で蓮華文8類の同文品が採集されており、また平成6年度に兵庫県教育委員会が調査した南支群では軒丸瓦蓮華文9類と軒平瓦

唐草文5類の同范品が出土している¹²。

三本松瓦窯 神出古窯址群以外の生産地としては、明石市の三本松瓦窯で軒平瓦唐草文3類の同文品

久留美窯跡群 が出土している¹³。また三木市の久留美窯跡群柳谷支群で軒平瓦半截華文1類と同文のものが出土している¹⁴。

辻ヶ内地区の瓦は焼成が須恵質のものが圧倒的に多く、軒平瓦の瓦当が包み込み技法によって接合されているという東播系の瓦に共通する特徴を備えている。また同文品の類例が全て東播の窯址であるので、その产地は神出・三木を中心とした東播磨と考えられる。これらの生産地はいずれも玉津田中遺跡とは地理的に近く、神出古窯址群とは同じ明石川水系に属する。これら近在の生産地から瓦を供給されていると判断する。

第4節 瓦の時期について

辻ヶ内地区出土の軒瓦のなかには、創建時期等が明らかな消費地と同文の瓦が含まれている。これらから瓦の生産時期について考えてみる。まず蓮華文8類軒丸瓦であるが、これは神出古窯址群拍子ヶ池支群において小野市の浄土寺の創建瓦と共に伴っている¹⁵。浄土寺

法住寺殿 の創建は1192年であるので、これを前後する時期に生産されたと考えられる。次は唐草文8類軒平瓦と半截華文1類軒平瓦である。これらはいずれも京都市の法住寺殿に同文品がある¹⁶。法住寺殿は後白河上皇の御所として1161年に造営が開始され、1183年に焼失している。

東寺 また唐草文3類軒平瓦は1194年の東寺再建瓦と同文である。唐草文4類軒平瓦は神戸市兵庫区の伝雪ノ御所採集瓦¹⁷と同文である。

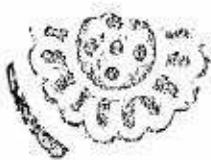
以上が同文瓦の例であるが、一つの範が長期にわたり使用されている例があることを考慮にいれても、おそらくその生産時期は12世紀後半それも第4四半期のうちに納まるもので

生産地

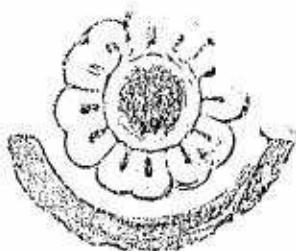
神出古窯址群
宮ノ裏支群



蓮華文2類



蓮華文6類



蓮華文7類



唐草文17類



蓮華文

南支群



蓮華文9類



唐草文5類

消費地

法住寺殿



唐草文8類



半截華文1類

東寺



唐草文3類

挿図15 玉津田中遺跡と同文・同范の瓦

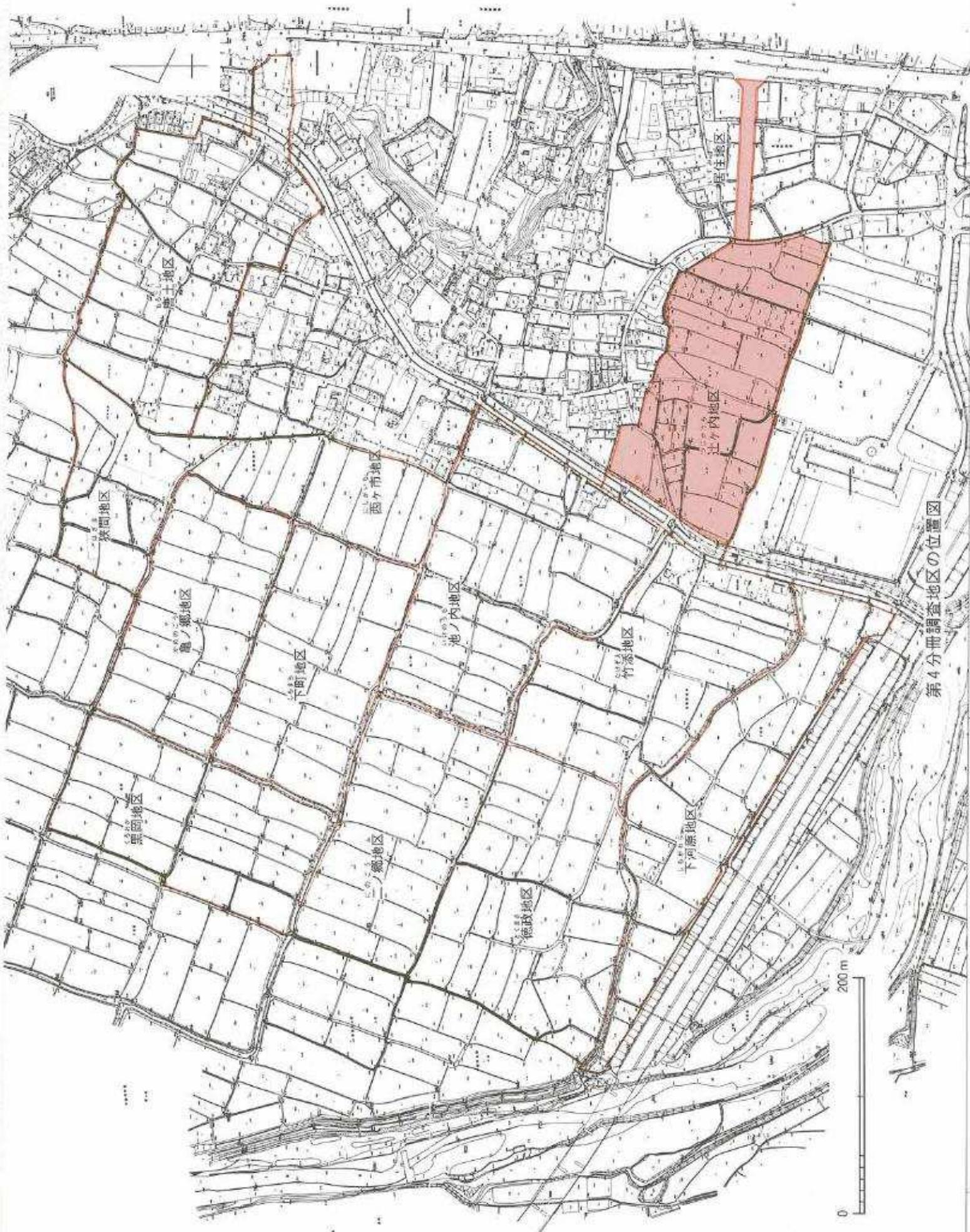
あろう。他の瓦についてはその確実な時期をおさえられないが、数少ない同文品から導き出せる年代は以上のとおりである。この年代は辻ヶ内地区出土瓦と最も多くの同文品を共有する神出古窯址群宮ノ裏支群の比定年代とも矛盾しない。すなわち吉村正規は宮ノ裏1・2号窯を12世紀中葉～後半、3・4号窯を12世紀末～13世紀初頭に⁽¹⁾、丹治康明は宮ノ裏支群を12世紀中葉以降～12世紀末に⁽²⁾、森田稔は12世紀中葉～後半に⁽³⁾ あてている。これらの時期は、須恵器の型式編年や前後の時期の窯の年代観に基づき設定されたものであり、辻ヶ内地区出土瓦の年代観を補強するものである。

ただし同範・同文の例が知られていない瓦の中には、軒平瓦唐草文20・21類のように、かなり小型化した瓦が含まれている。神出古窯址群におけるこのような小型瓦の例は老ノ口支群など13世紀前半まで下がる窯で知られている。辻ヶ内地区の小型瓦もこれらの例のように、13世紀代に下がるもののが含まれている可能性が考えられる。今後の同範・同文品の出土まで、その年代観の決定は保留せざるをえない。

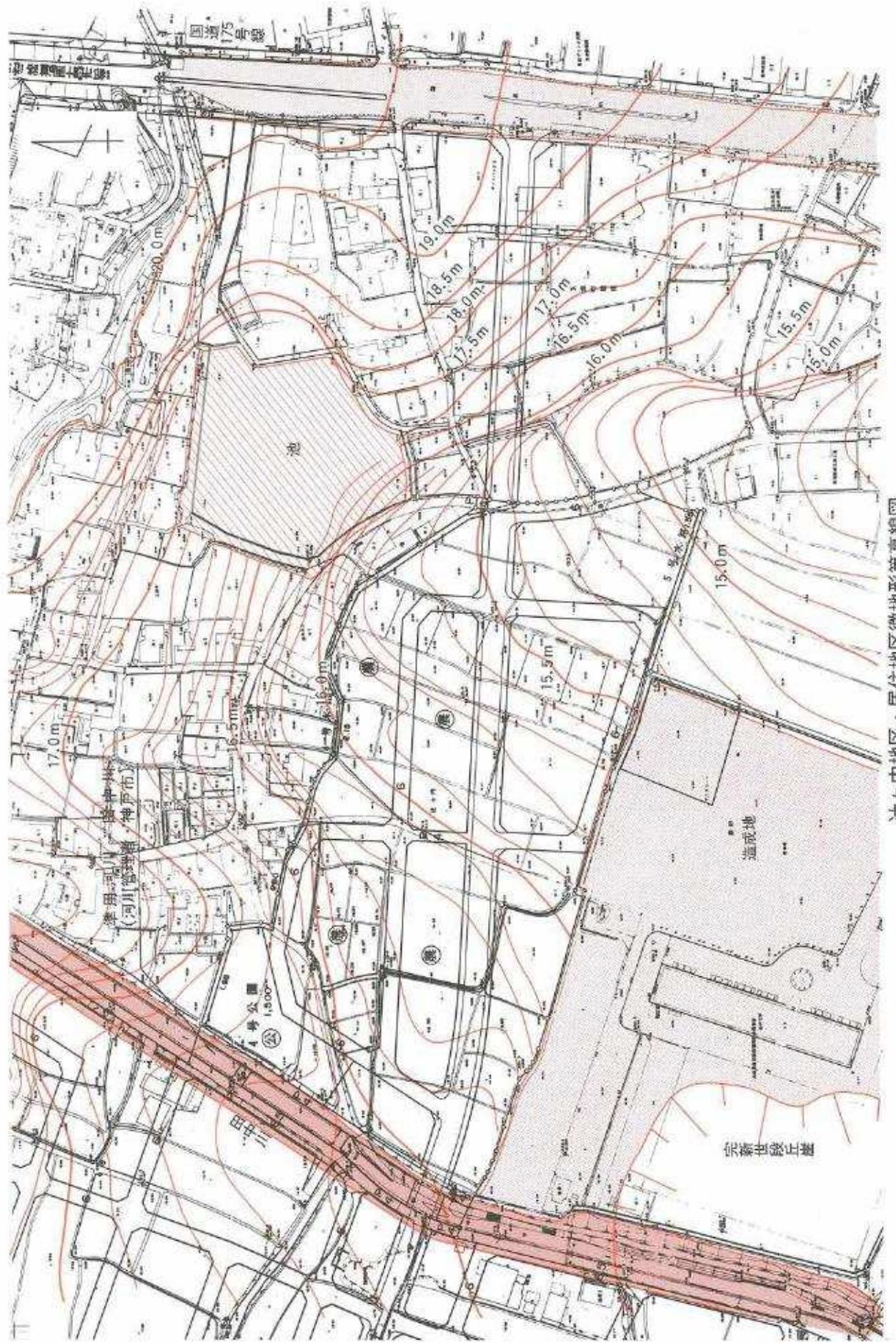
- 註 (1)神戸市教育委員会のご好意により資料を実見させていただいた。
(2)神出古窯址群出土のもののほうが範例が増えている。
(3)山下俊郎「明石市林崎三本松出土の瓦」『歴史と神戸』33-4 1994年
(4)兵庫県教育委員会編「久留美窯跡群柳谷支群発掘調査現地説明会資料」1992年
(5)真野 修氏のご教示による。
(6)考古学協会『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第13輯 1984年
(7)神戸市立博物館蔵
(8)吉村正規「平安京出土瓦とその生産－特に院政期を中心として－」『中世土器の基礎研究』Ⅲ 1987年
(9)丹治康明「東播磨における瓦生産－神出・魚住窯を中心に－」『中世土器の基礎研究』Ⅲ 1987年
⑩森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 1986年

図 版

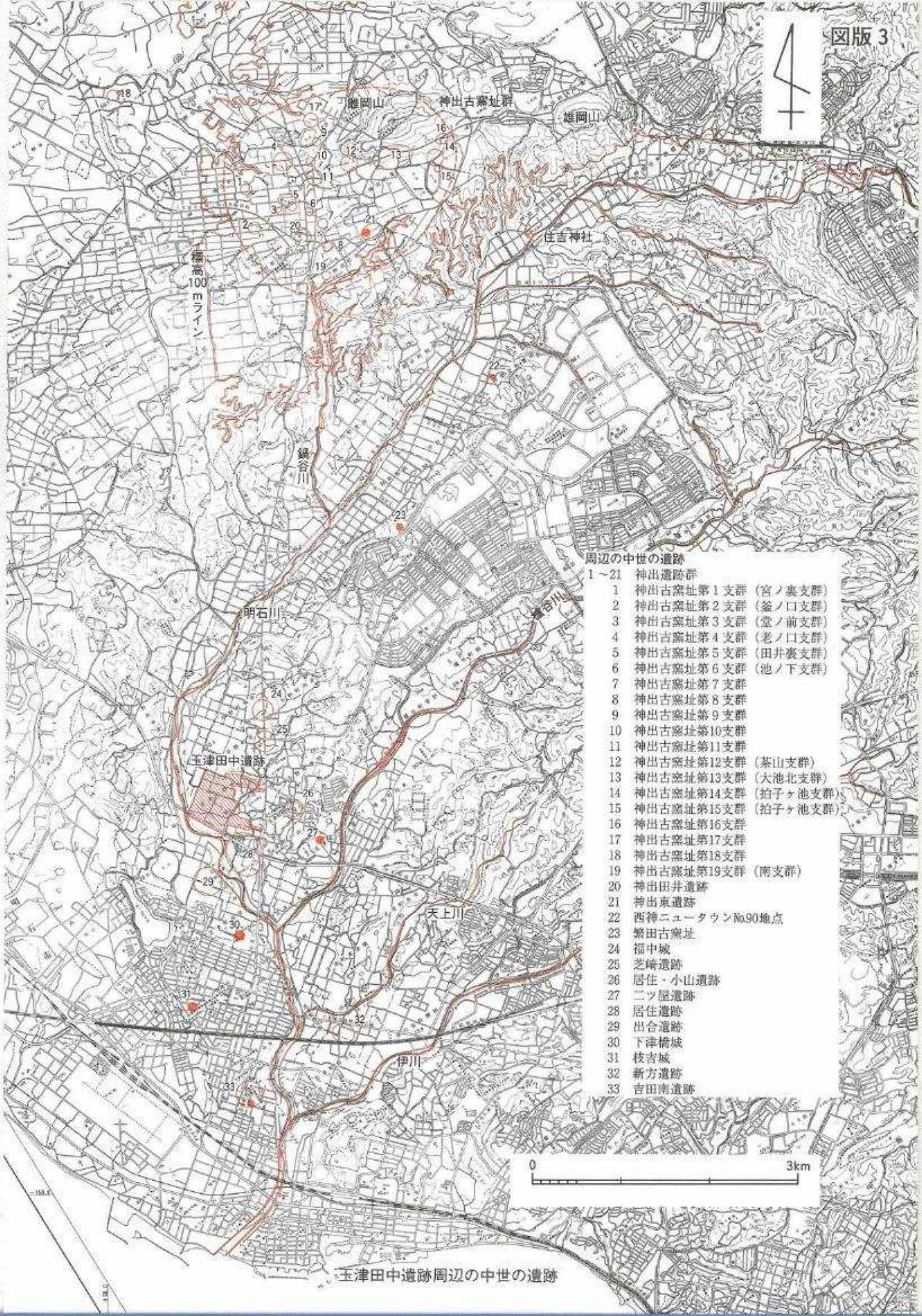
第4分冊調査地区の位置図



図版2

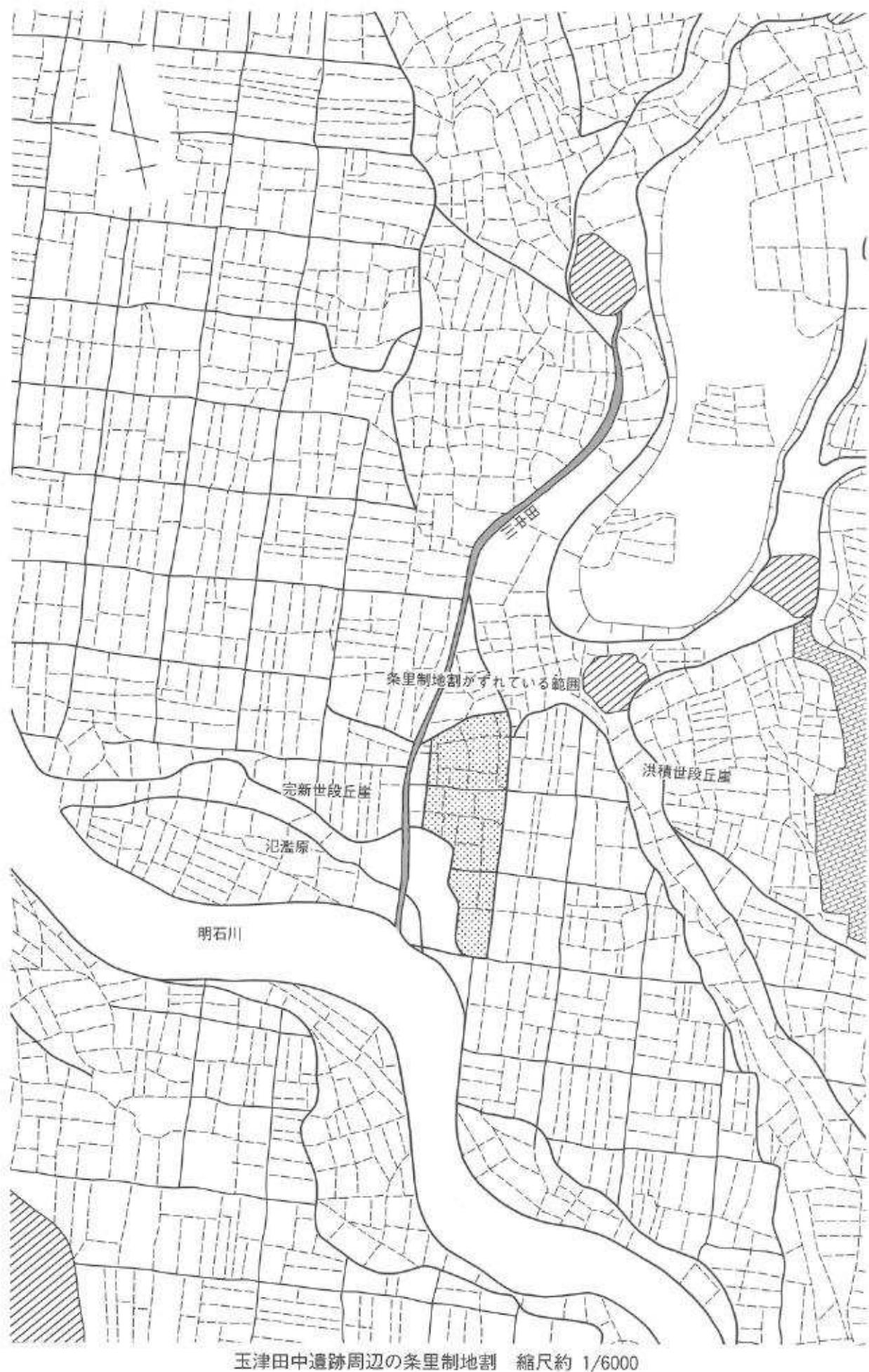


4+

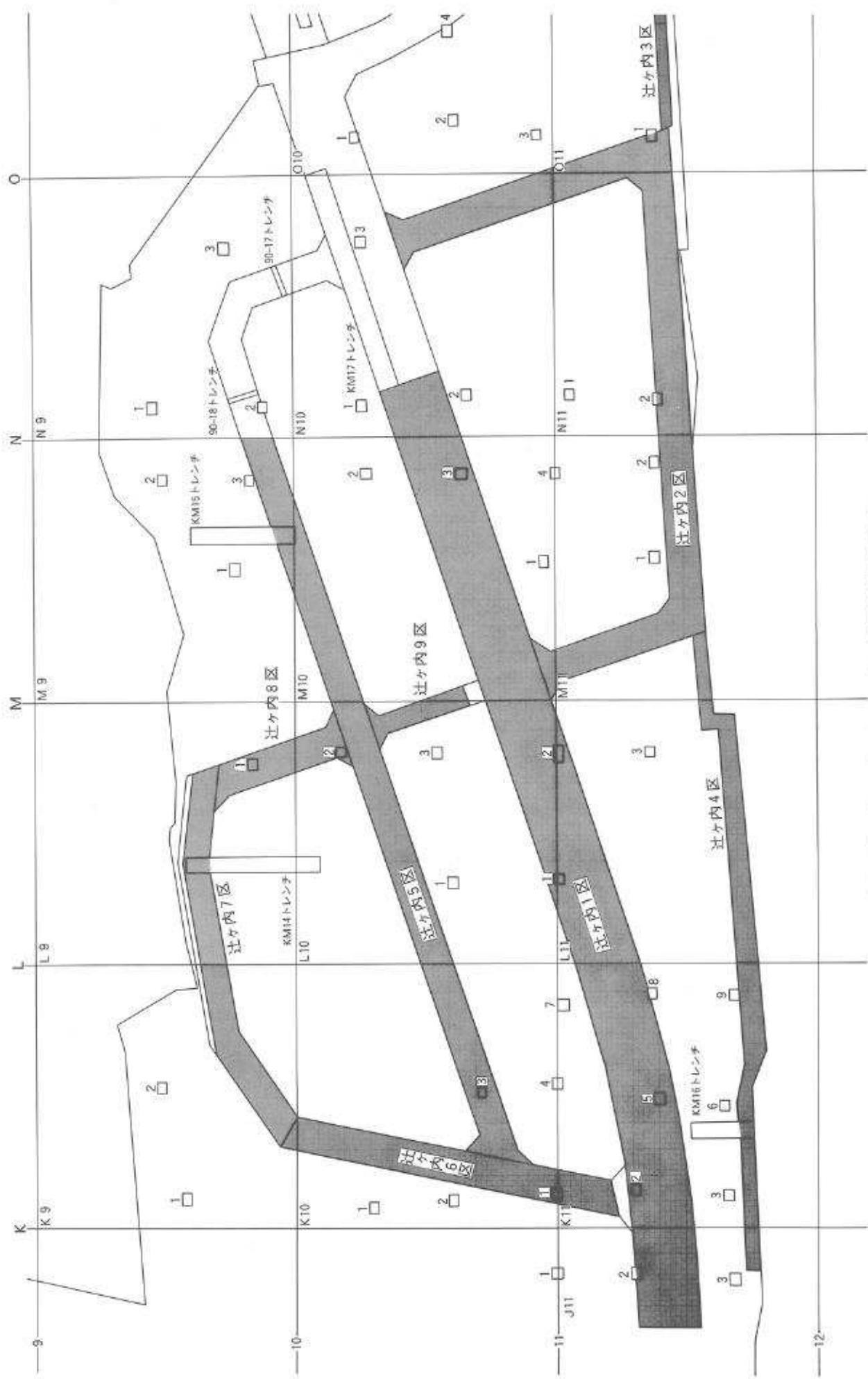


図版 4



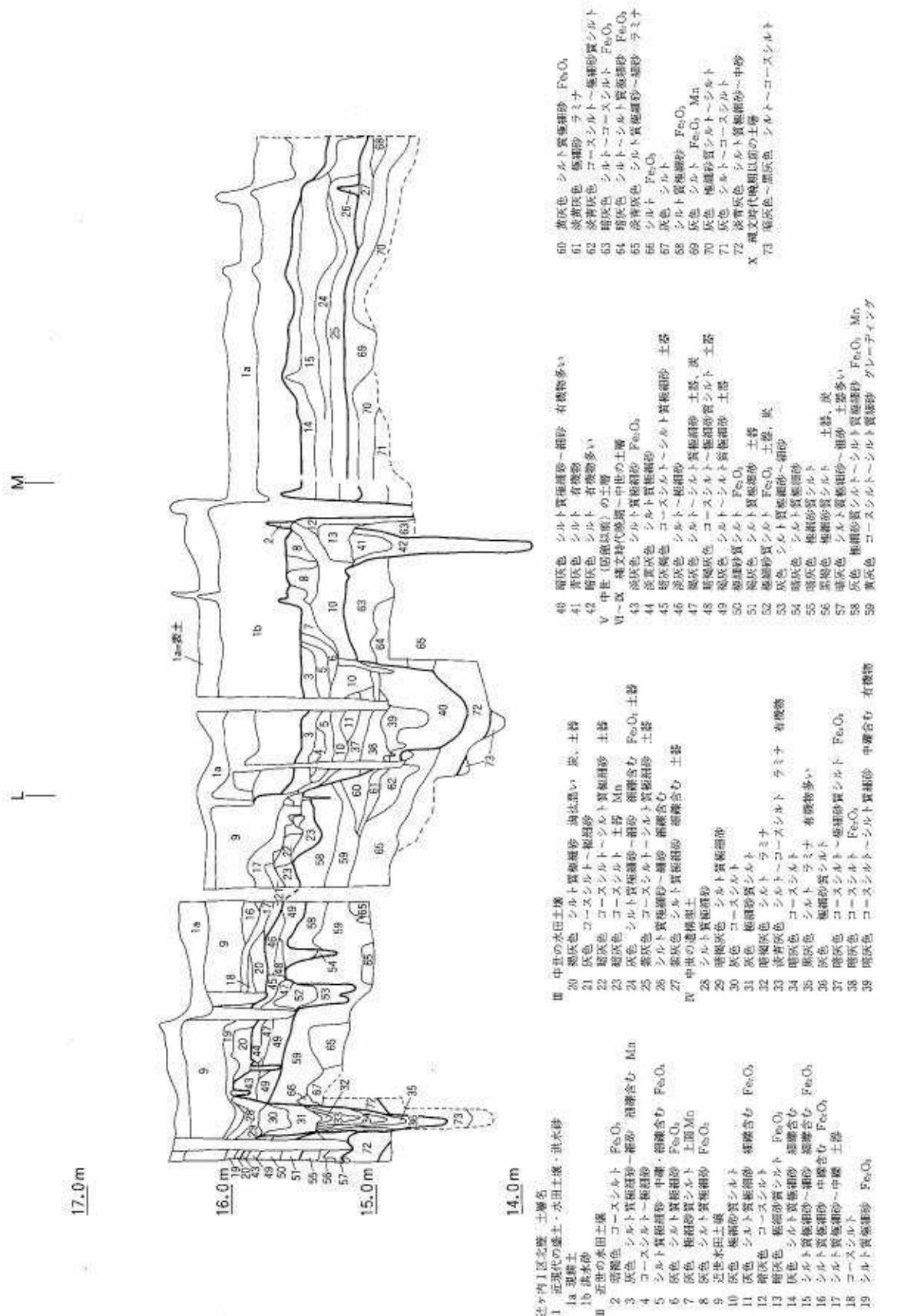


辻ヶ内地区



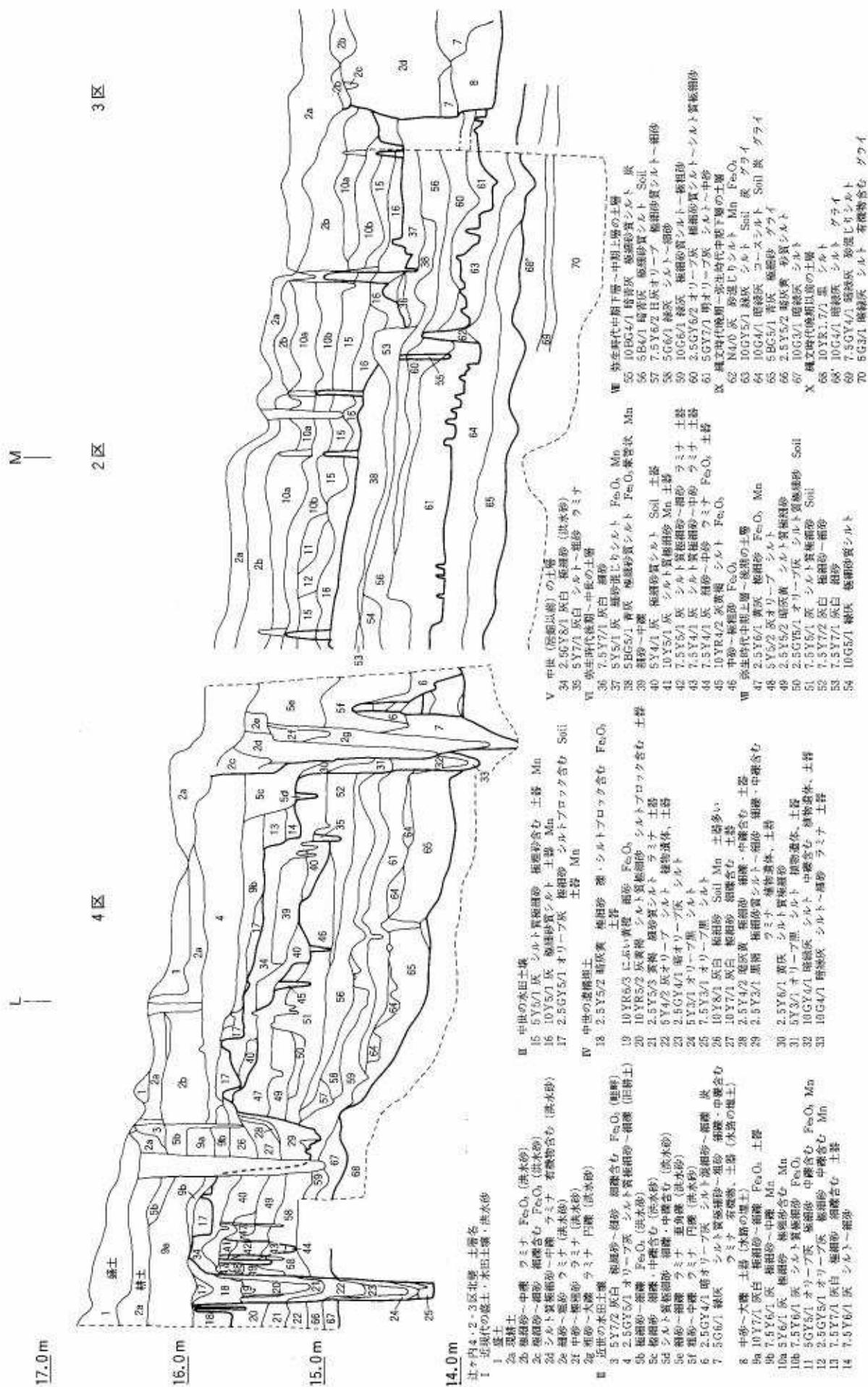
確認調査グリッド・トレンチ、全面調査区配置図

辻ヶ内地区

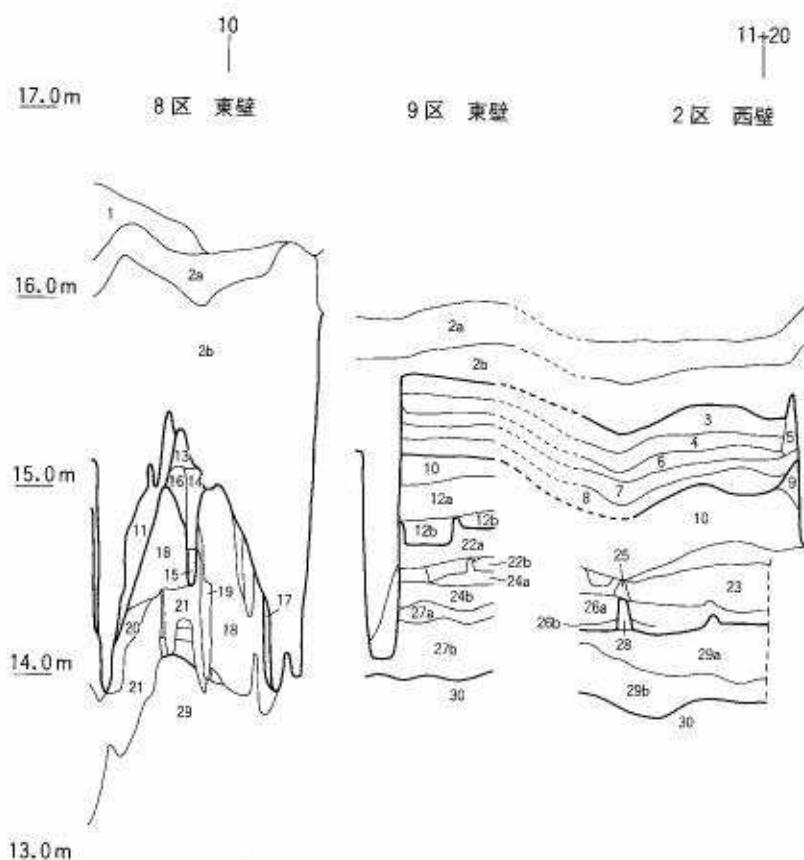


圖版 8

辻ヶ内地区



辻ヶ内地区



辻ヶ内8・9区東壁、2区西壁 土層名

I 近現代の盛土・水田土壤・洪水砂

1 盛土

2a 現耕土

2b 洪水砂

II 近世の水田土壤

3 7.5Y7/1 灰白 シルト質極細砂 細礫含む Fe₂O₃ Mn4 10Y5/1 灰 シルト質極細砂 細礫含む Soil Fe₂O₃

5 7.5Y6/1 灰 極細砂 粗砂混じり

6 10Y6/1 灰 シルト質極細砂 細礫含む Soil 土器 Fe₂O₃

7 5Y5/1 灰 極細砂質シルト 細礫含む Soil 土器

8 7.5Y4/1 灰 極細砂質シルト 細礫含む Soil 土器

III 中世の水田土壤

9 10GY5/1 級灰 シルト混じり細砂 粗砂含む (水路の畔)

10 7.5Y5/1 灰 シルト Soil Fe₂O₃

IV 中世の遺構埋土

11 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト 中礫含む 植物遺体、土器

V 中世(居館以前)の土層

VI 陈生時代後期～中世の土層

12a 7.5Y5/1 灰 極細砂質シルト Soil Fe₂O₃12b 5Y5/1 灰 極細砂 Fe₂O₃

13 N5/0 灰 シルト質極細砂 中礫含む

14 10BG5/1 青灰 極細砂

15 雅砂～中礫

16 10BG5/1 青灰 シルト質極細砂 中礫含む

17 10YR4/1 棕灰 シルト 極細砂混じり 植物遺体

VII～IX 陈生時代中期下層～後期の土層

18 10BG4/1 暗青灰 シルト質極細砂～細砂 中礫含む

19 中砂～中礫

20 2.5Y5/1 黄灰 シルト 植物遺体

21 中砂～中礫

22a N5/0 灰 シルト Soil Fe₂O₃22b 10GY5/1 緑灰 シルト質極細砂 Fe₂O₃

23 10G5/1 緑灰 極細砂質シルト

IX 繩文時代晚期～陈生時代中期下層の土層

24a N4/0 灰 シルト質細砂 Soil

24b 10GY5/1 緑灰 シルト混じり細砂 マーブル状

25 5Y5/3 黄褐 極細砂 Fe₂O₃

26a 5B5/1 青灰 極細砂混じりシルト Soil グライ

26b 5B5/1 青灰 極細砂ラミナ グライ

27a N4/0 灰 極細砂質シルト Soil グライ

27b 10GY6/1 緑灰 細砂 グライ

28 5G4/1 暗綠灰 シルト質極細砂 塵

29a 10BG4/1 暗青灰 シルト～中砂 Soil 塵 グライ

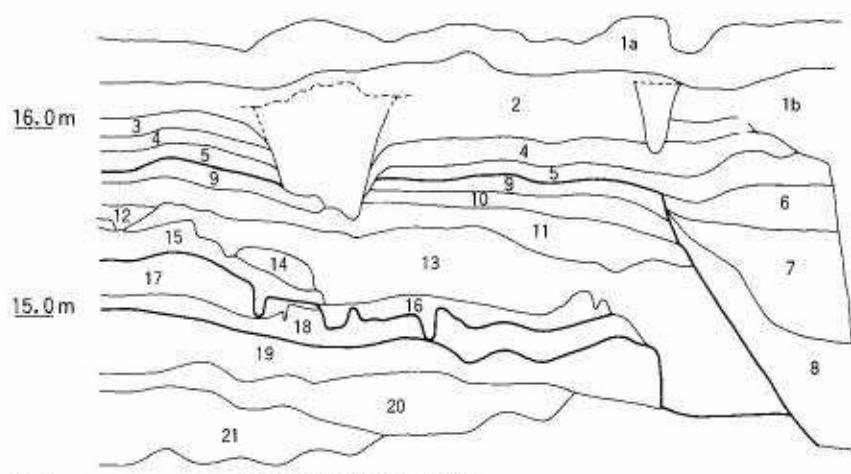
29b 5BG4/1 暗青灰 極細砂～細砂 ラミナ グライ

X 繩文時代晚期以前

30 10GY3/1 暗綠灰 シルト～ゴースシルト 有機物 グライ

辻ヶ内地区

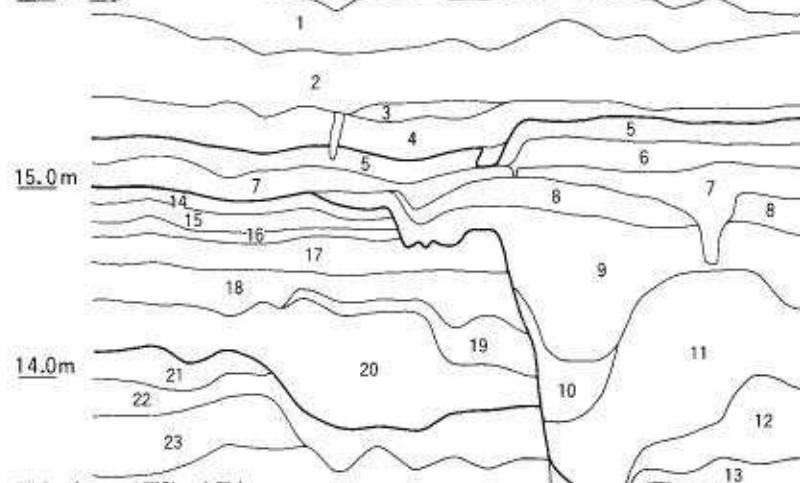
17.0m



14.0m

KM14トレンチ西壁 土層名	
I	近現代の盛土・水田土壤・洪水砂
1	現耕土
1a	洪水砂 極細砂～粗砂 中疊含む
II	近世の水田土壤
2	コースシルト 中疊含む
3	極細砂質シルト～極細砂 Fe_2O_3
4	灰色 シルト質極細砂 中疊含む Soil
5	コースシルト 中疊含む Fe_2O_3
III	中世の水田土壤
IV	中世の遺構埋土
6	コースシルト 中疊含む
7	細砂まじりシルト 中疊含む
8	シルト 植物遺体・有機物多い
9	灰色 シルト～極細砂質シルト 土器
10	シルト～シルト質極細砂 中疊含む
11	シルト質極細砂～粗砂 細礫・中疊含む 土器
12	細砂質シルト 中疊含む
V	中世（居館以前）の土層
VI	弥生時代後期～中世の土層
13	極細砂～粗砂 細礫 ラミナ Fe_2O_3
14	シルト質極細砂～粗砂 Fe_2O_3 Mn
VI～IX	縄文時代晚期～弥生時代後期の土層
15	細砂まじりコースシルト Soil Mn
16	シルト質極細砂 Soil
17	極細砂質シルト Soil Fe_2O_3 Mn
18	シルト質極細砂～極細砂 Fe_2O_3
19	極細砂～細砂 グライ
20	シルト質極細砂 Soil グライ
21	極細砂～細砂 グライ
X	縄文時代晚期以前

16.0m



14.0m

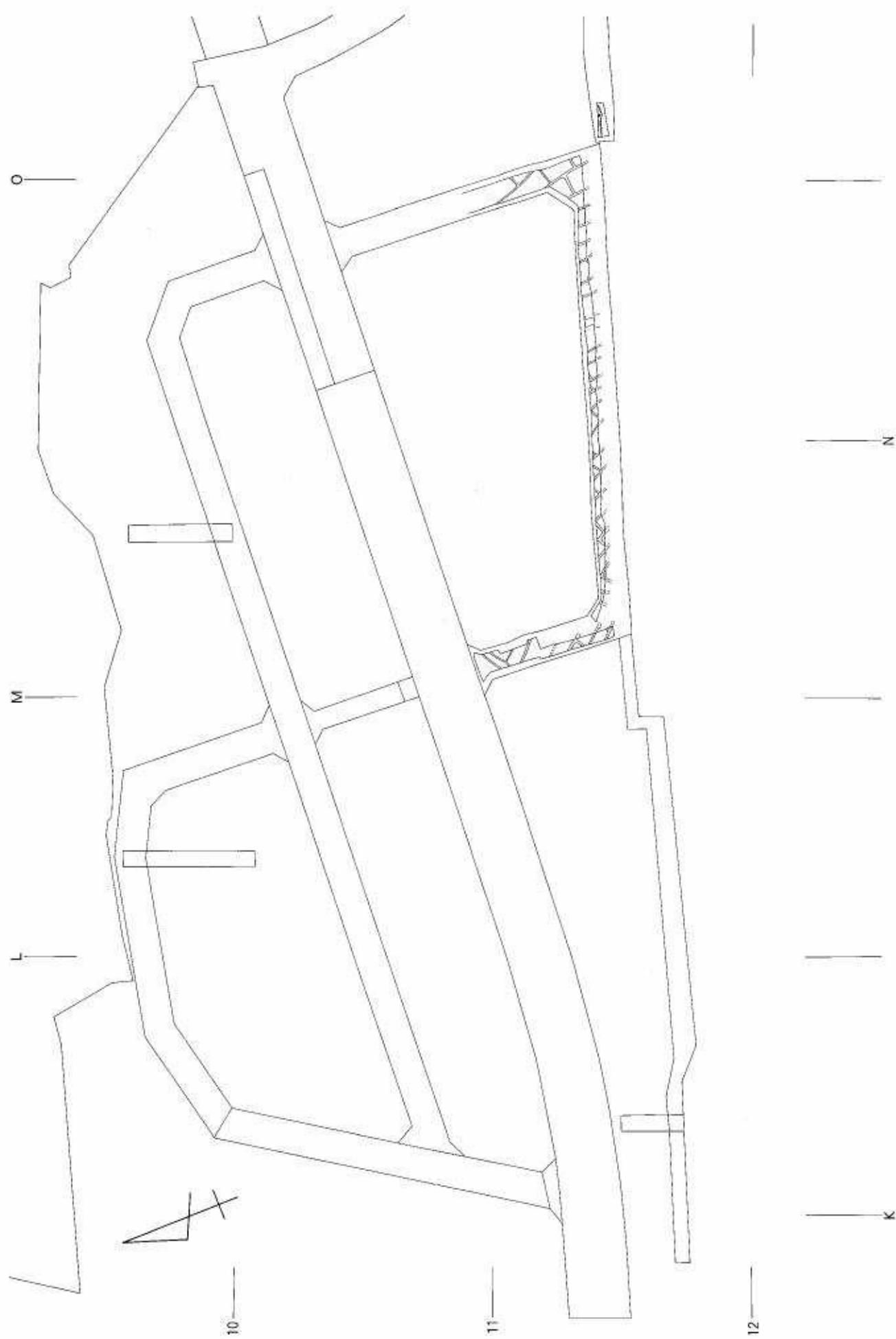
KM15トレンチ西壁 土層名	
I	近現代の盛土・水田土壤・洪水砂
1	現耕土
II	近世の水田土壤
2	近世水田土壤
3	灰色 細砂混じりシルト 中疊含む 青磁片
4	細砂混じりシルト 中疊含む Soil Fe_2O_3
III	中世の水田土壤
5	紫灰色 細砂混じりシルト質極細砂 中疊含む 淘汰悪い 土器、炭
IV	中世の遺構埋土
V	中世（居館以前）の土層
VI	弥生時代後期～中世の土層
6	青灰色 シルト質細砂～中砂 中疊含む
7	左 コースシルト～細砂混じりシルト Fe_2O_3 土器
右 青灰色 葵細砂～細砂グライ	
8	コースシルト～極細砂質シルトグライ
9	青灰色 コースシルト～シルト質極細砂 木片 グライ
10	極細砂シルト 植物遺体 グライ
11	コースシルト～シルト質極細砂 中疊 炭 グライ
12	細礫～大礫 Matrixは中砂～極粗砂
13	クレイ
VI～IX	縄文時代晚期～弥生時代後期の土層
14	シルト質極細砂
15	シルト質極細砂 Mn Fe_2O_3
16	シルト質極細砂 Mn
17	コースシルト～シルト質極細砂 グレーディング Fe_2O_3
18	青灰色 コースシルト～シルト質極細砂 グライ
19	コースシルト～シルト質極細砂 グライ
20	淡青灰色 シルト質極細砂 ラミナ グライ
21	コースシルト～極細砂質シルト グライ
22	コースシルト～シルト質極細砂 ラミナ グライ
23	シルト～極細砂 グライ
X	縄文時代晚期以前

土層断面図(4) (KM14・15トレンチ西壁) 縦1/40、横1/200

辻ヶ内地区

図版11

弥生時代中期下層全体図

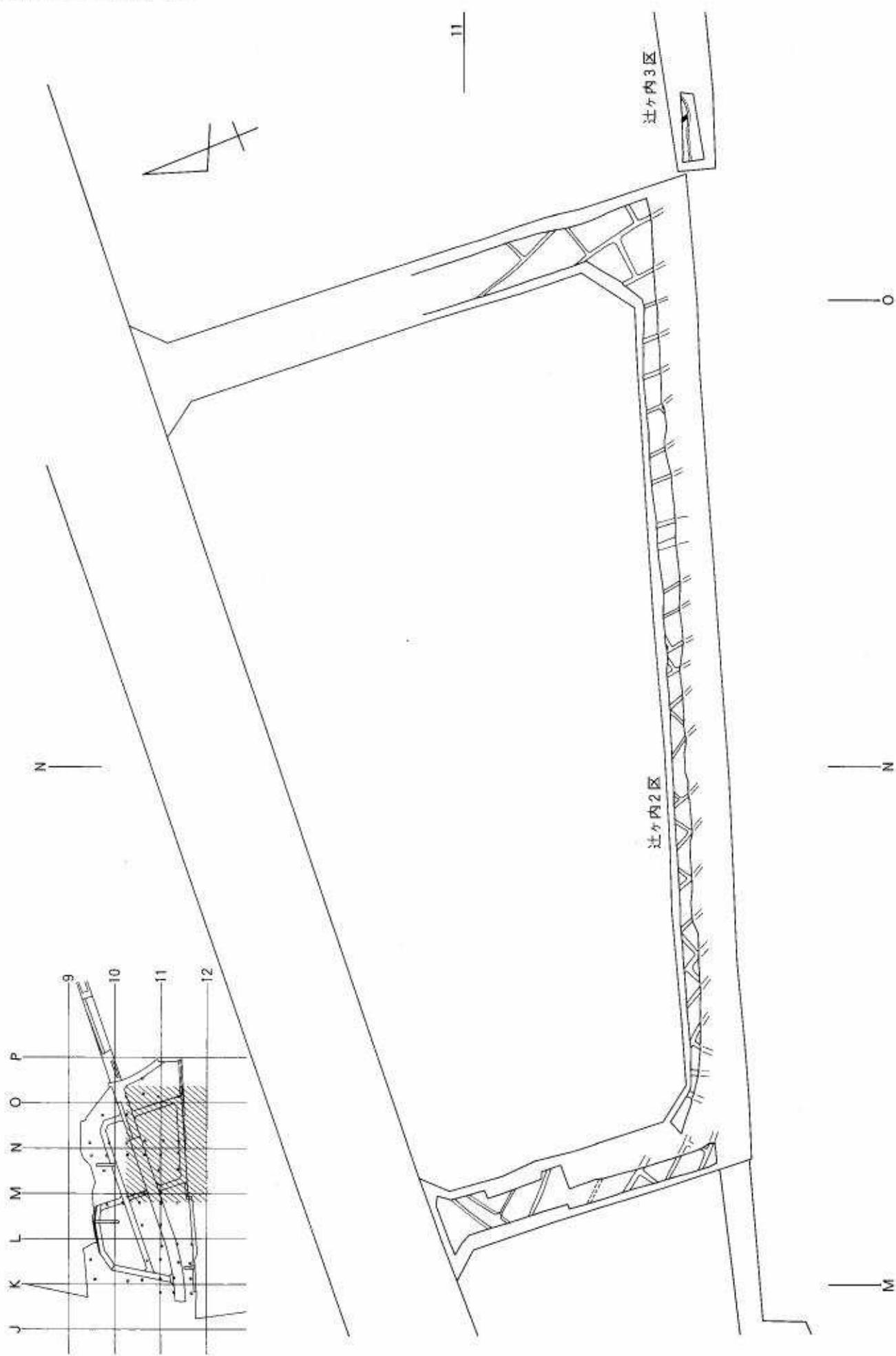


弥生時代中期下層全体図

図版12

辻ヶ内地区

弥生時代中期下層遺構平面図

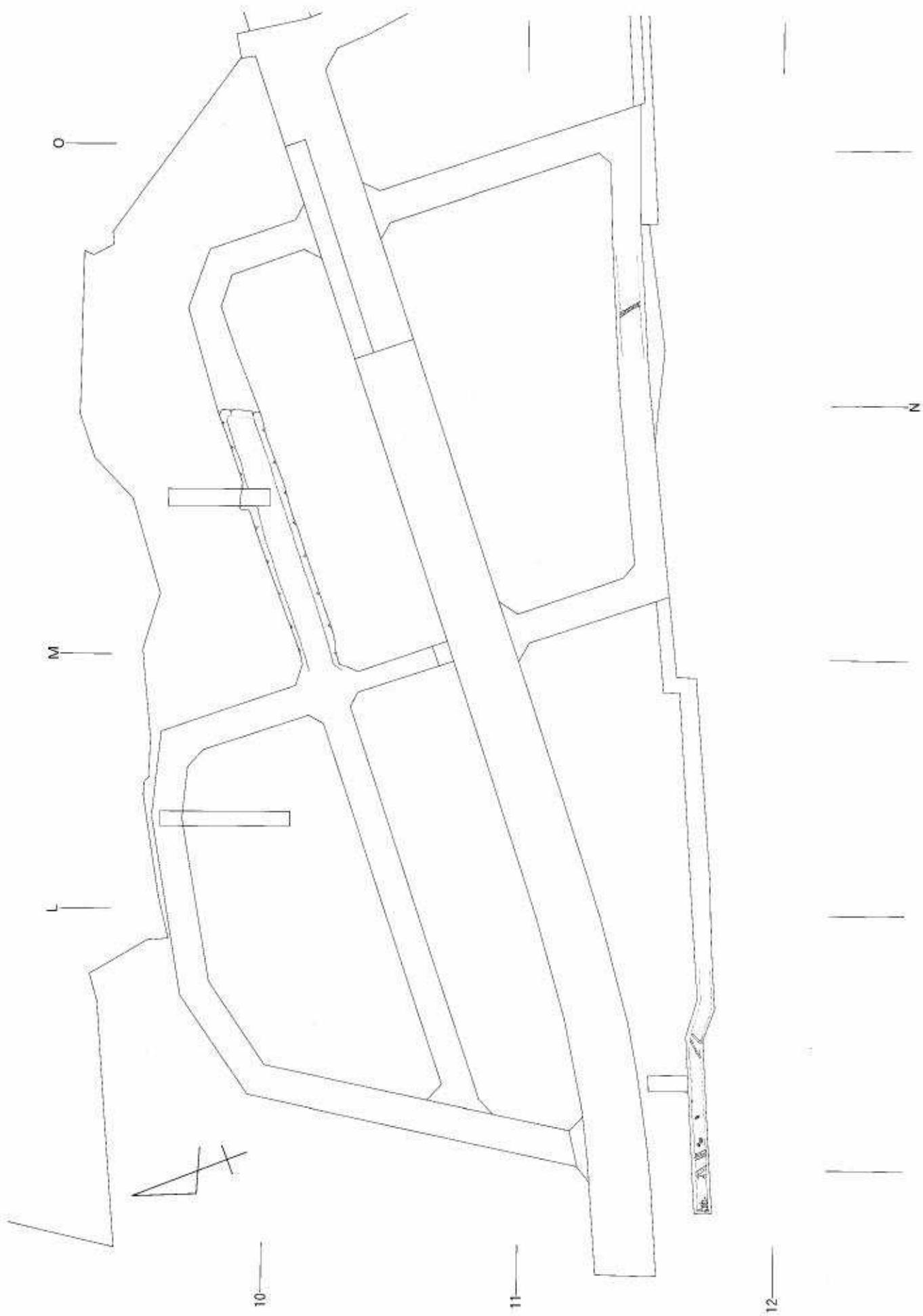


弥生時代中期下層遺構平面図

辻ヶ内地区

図版13

弥生時代中期上層全体図

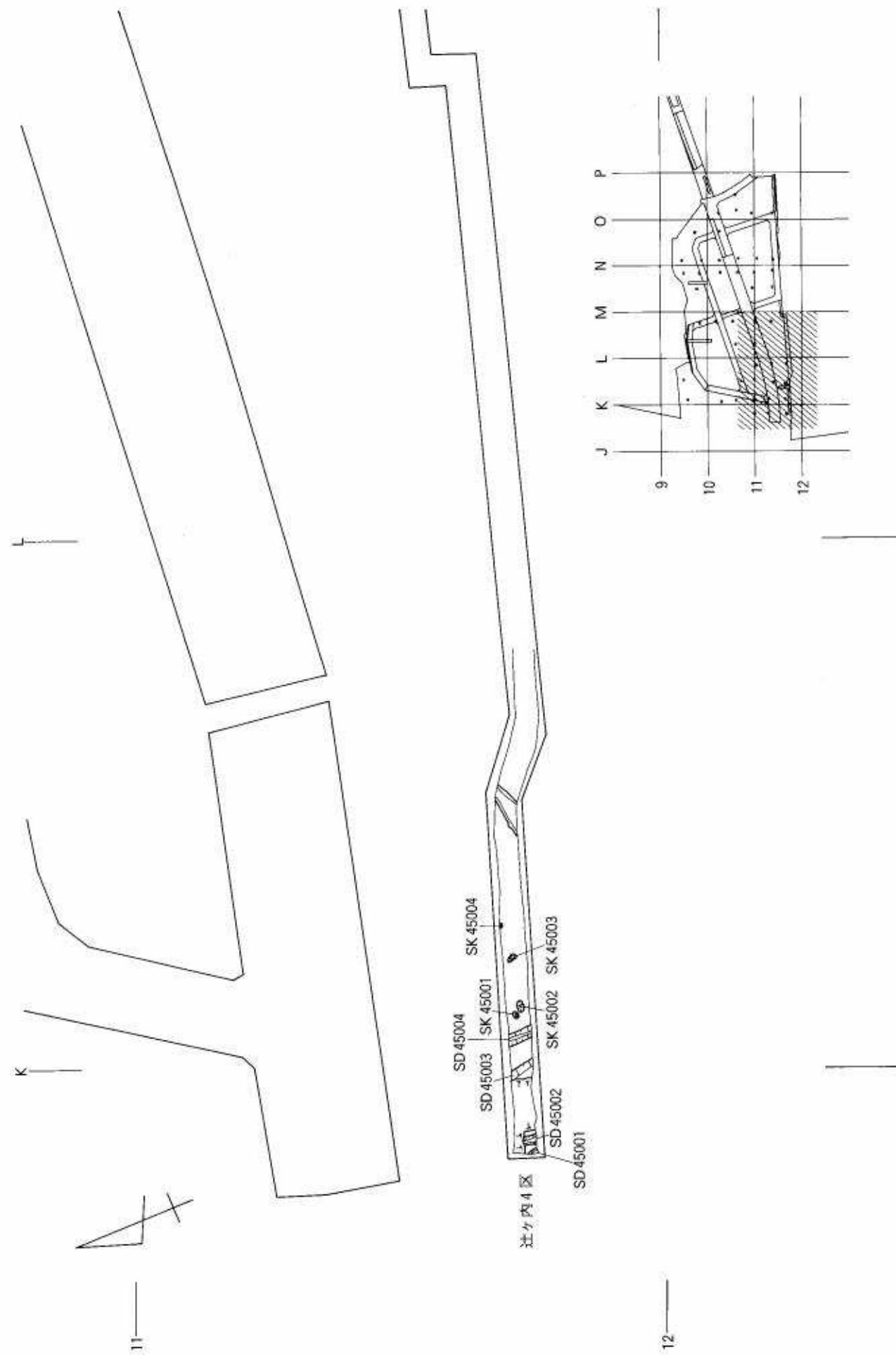


弥生時代中期上層全体図

図版14

辻ヶ内地区

弥生時代中期上層遺構平面図(1)

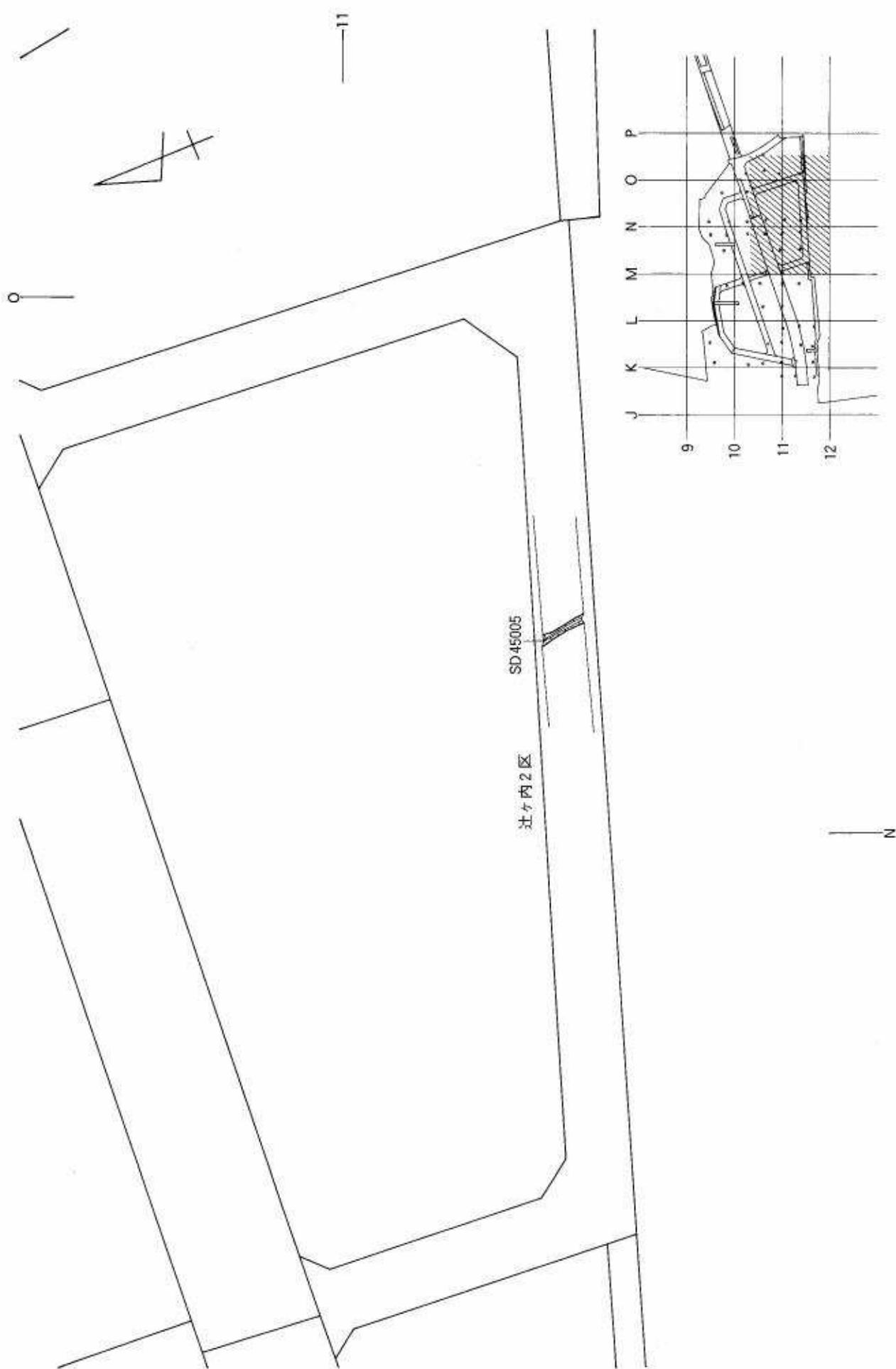


弥生時代中期上層遺構平面図(1)

辻ヶ内地区

図版15

弥生時代中期上層遺構平面図(2)

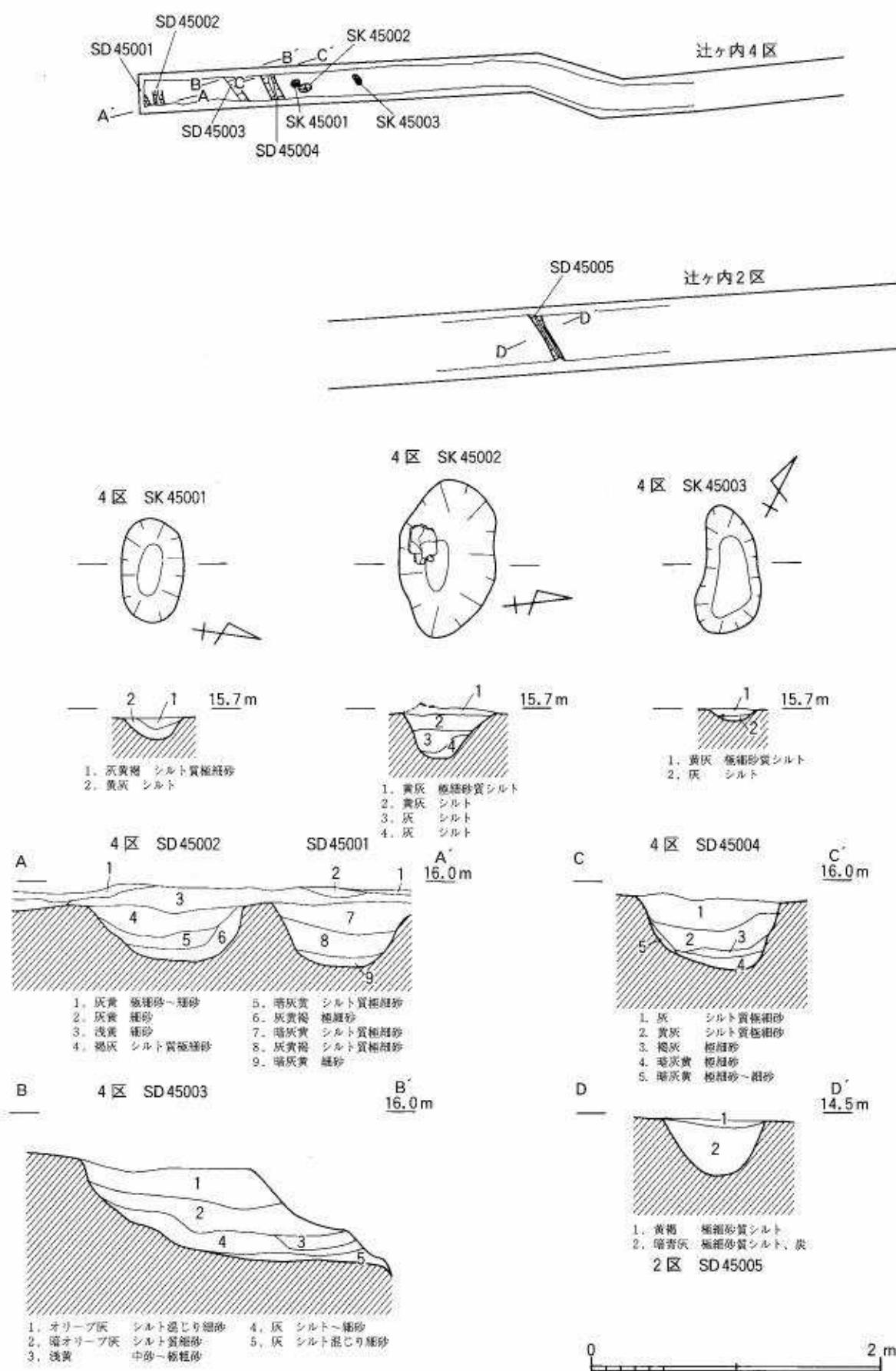


弥生時代中期上層遺構平面図(2)

図版16

辻ヶ内地区

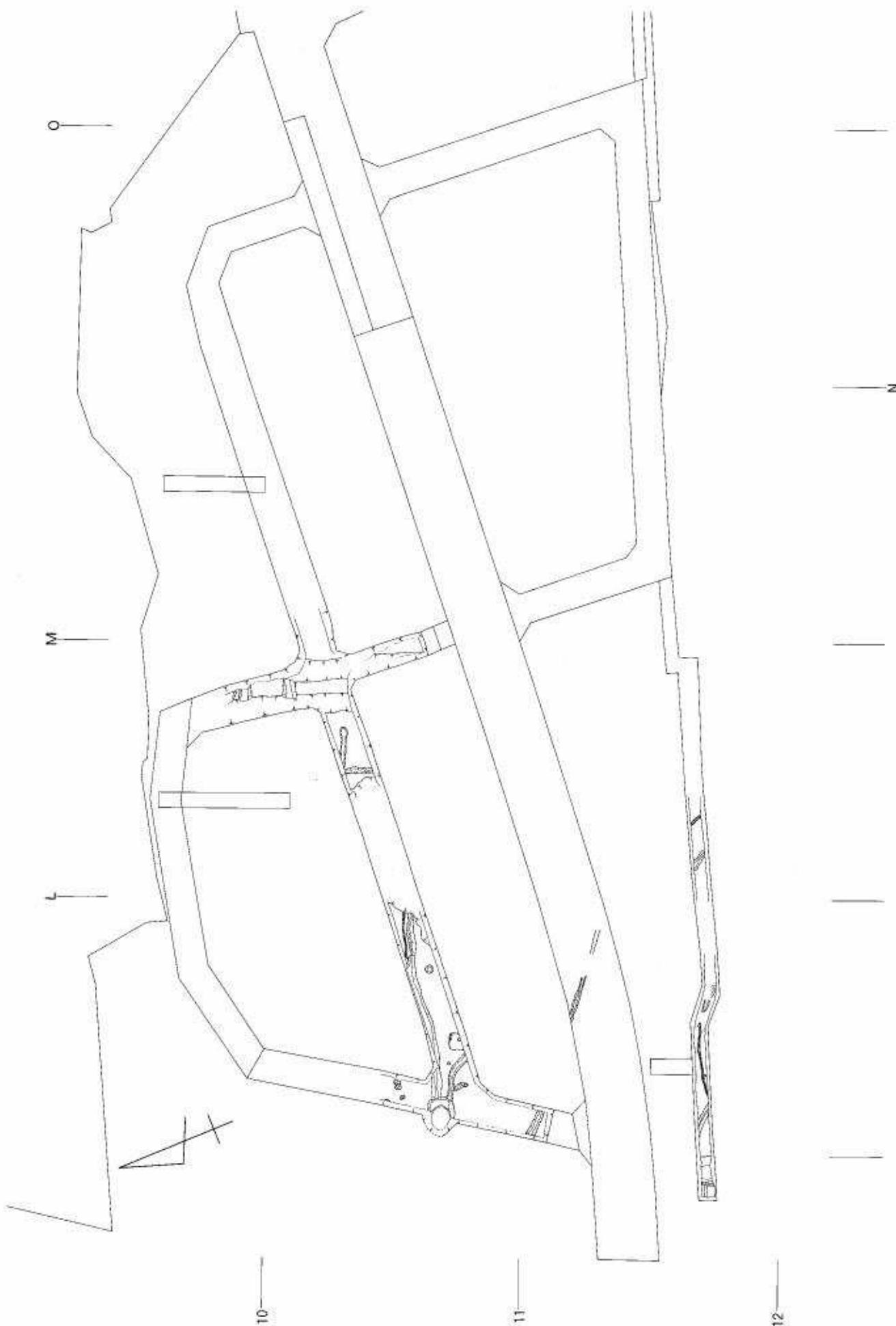
弥生時代中期上層 土坑・溝
(SK45001~45003, SD45001~45005)



辻ヶ内地区

図版17

弥生時代後期全体図

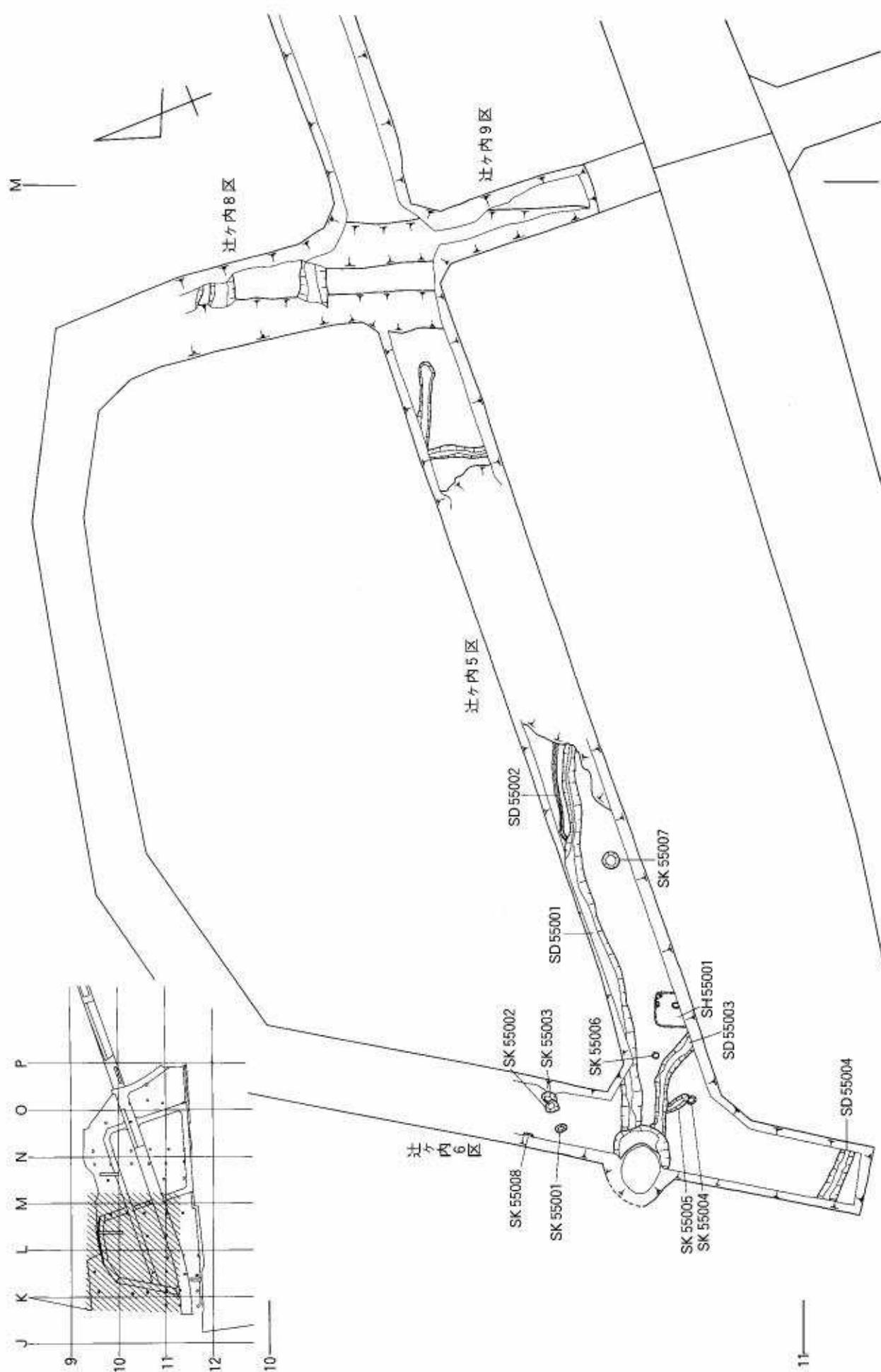


弥生時代後期全体図

図版18

辻ヶ内地区

弥生時代後期遺構平面図(1)

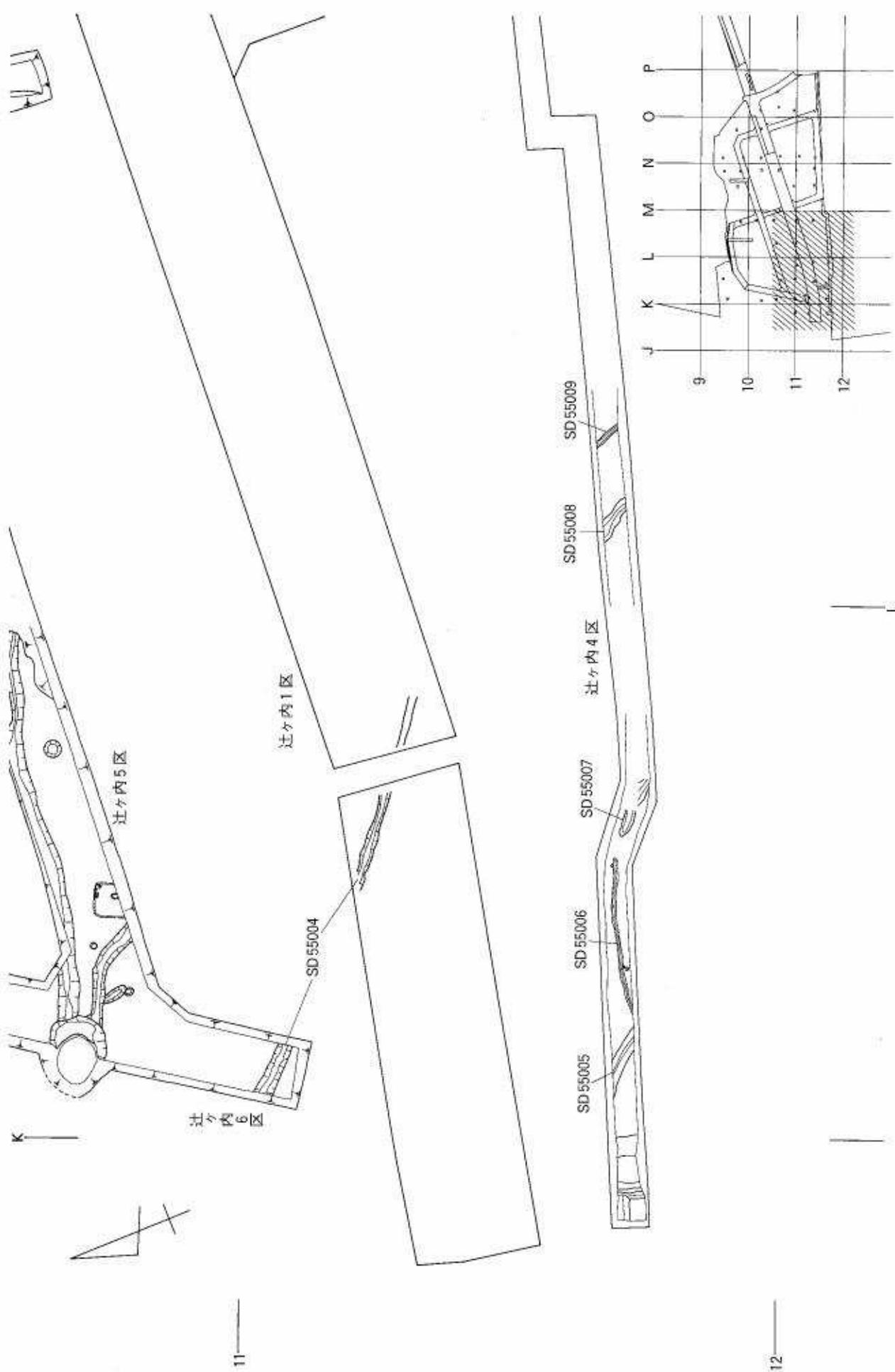


弥生時代後期遺構平面図(1)

辻ヶ内地区

図版19

弥生時代後期遺構平面図(2)

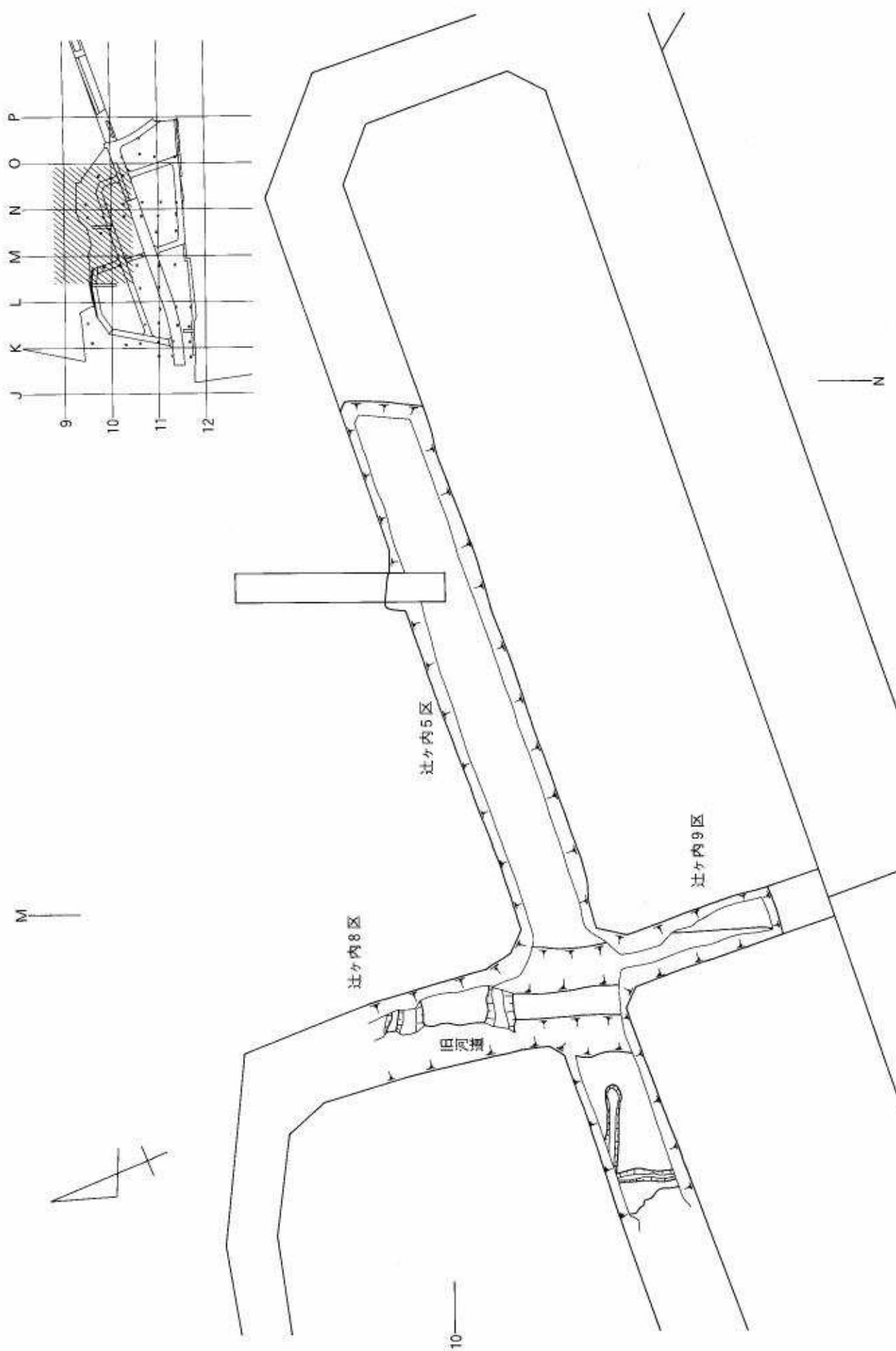


弥生時代後期遺構平面図(2)

図版20

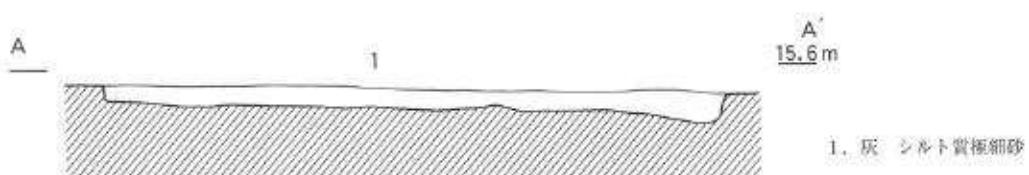
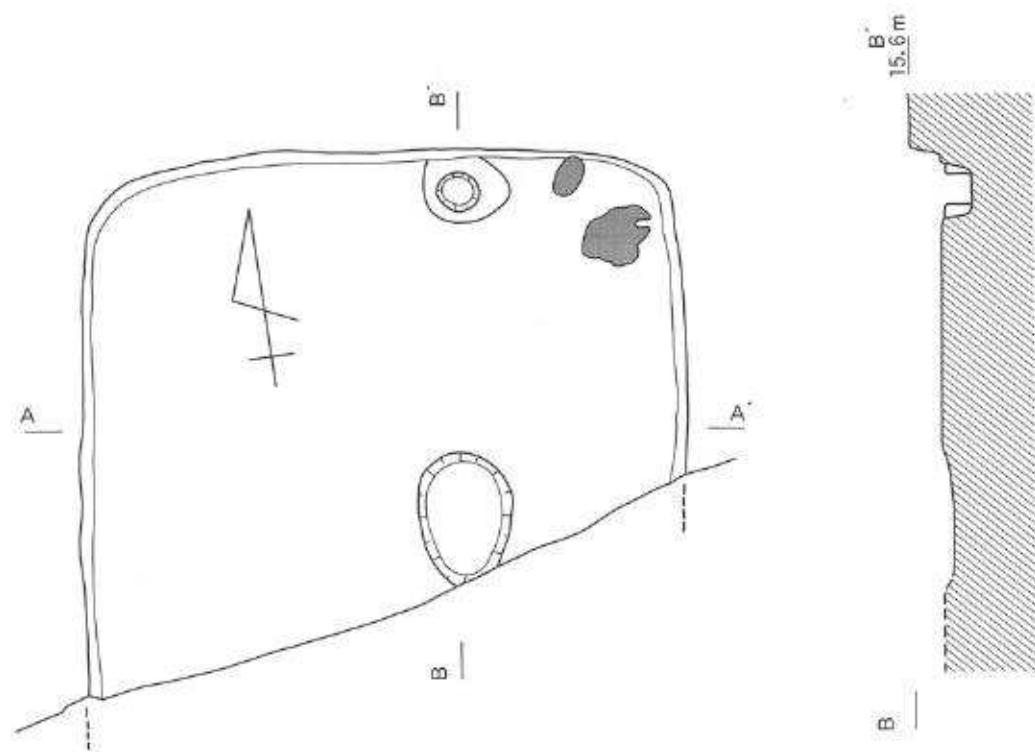
辻ヶ内地区

弥生時代後期遺構平面図(3)

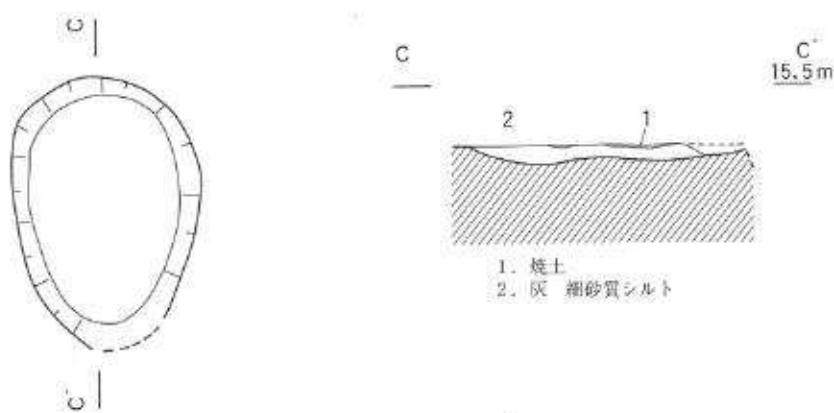


弥生時代後期遺構平面図(3)

弥生時代後期 竪穴住居跡
(SH55001)



0 2 m



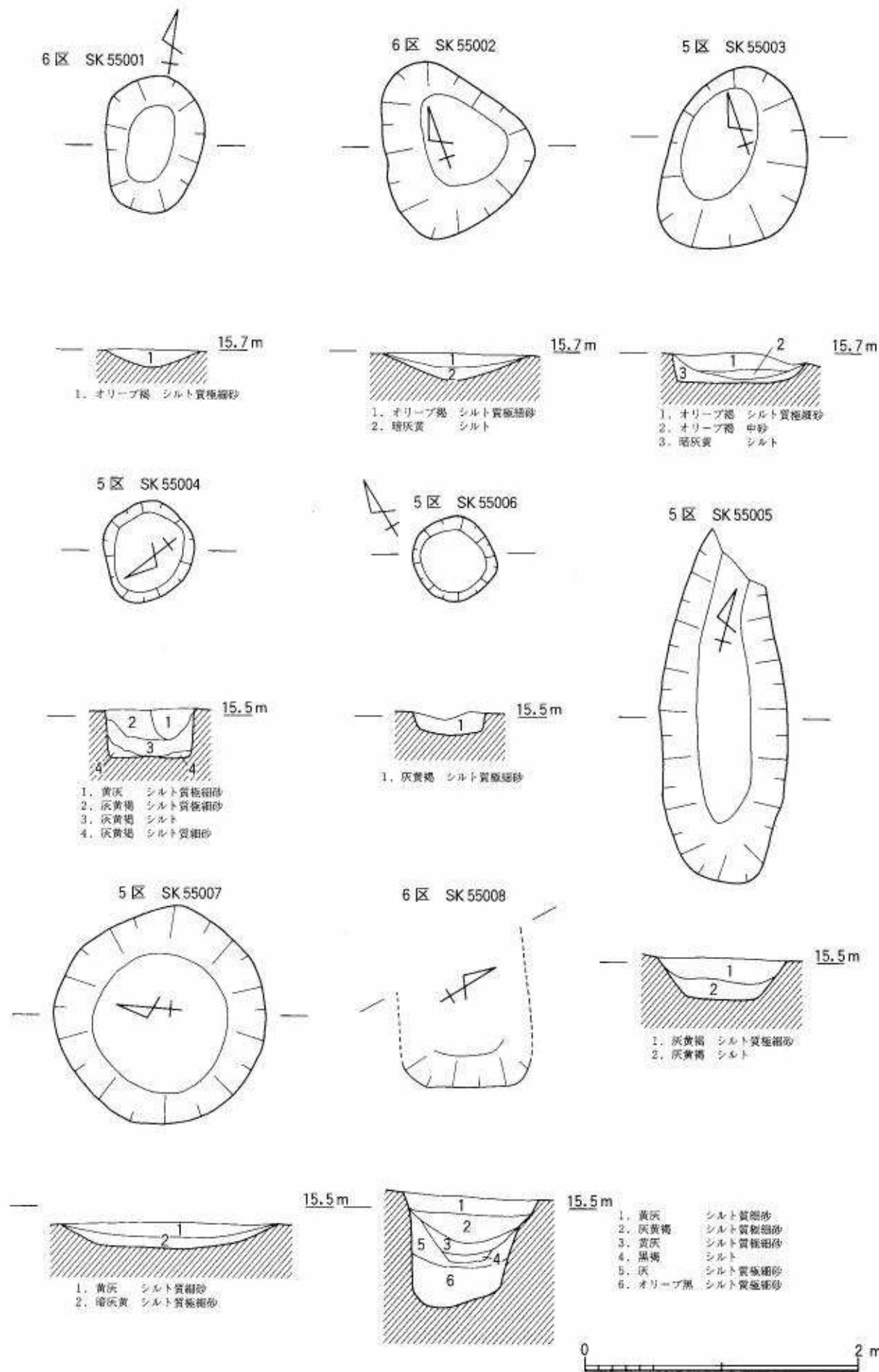
0 1 m

5区 SH55001

図版22

辻ヶ内地区

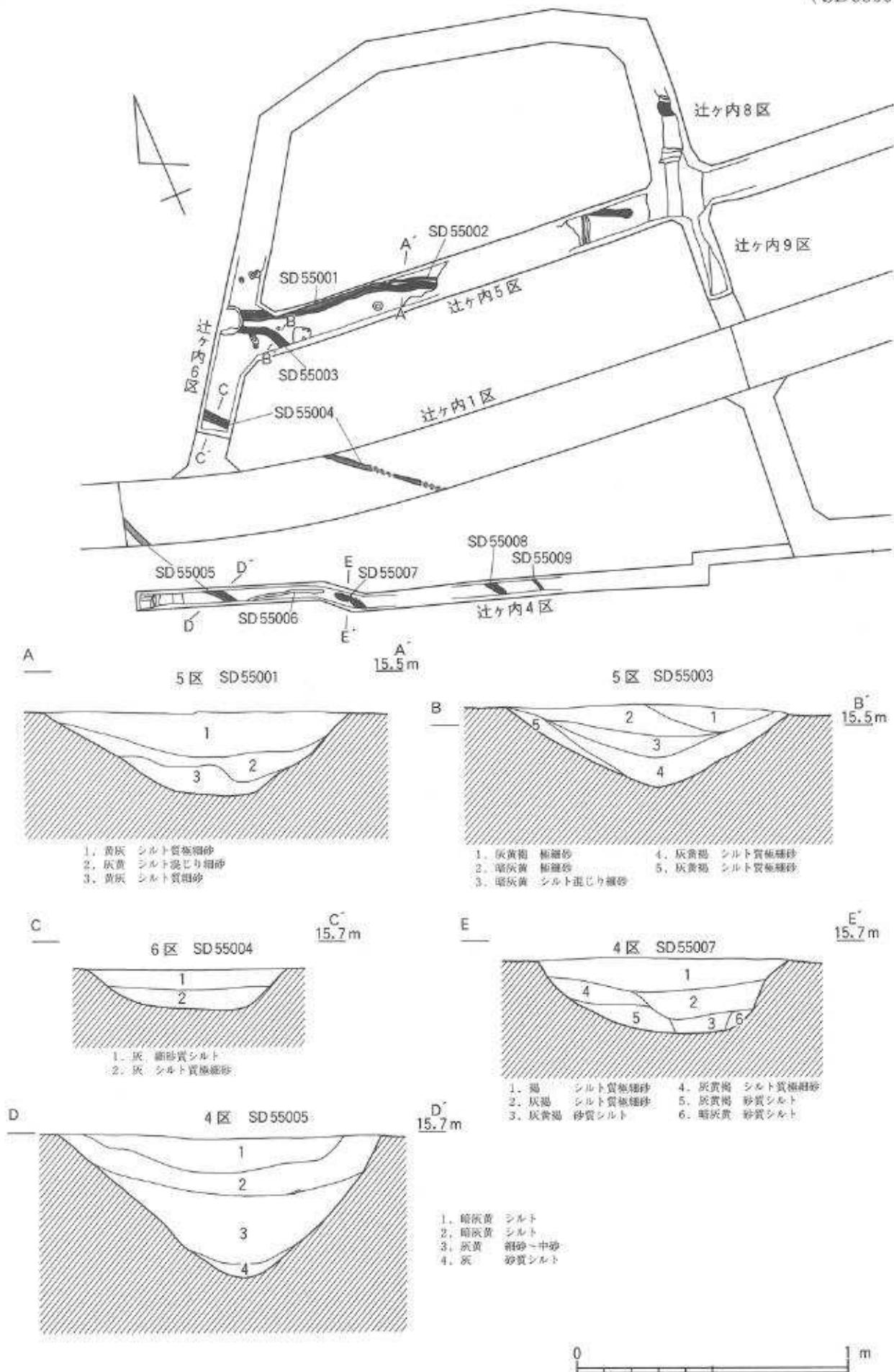
弥生時代後期 土坑
(SK55001~55008)



辻ヶ内地区

図版23

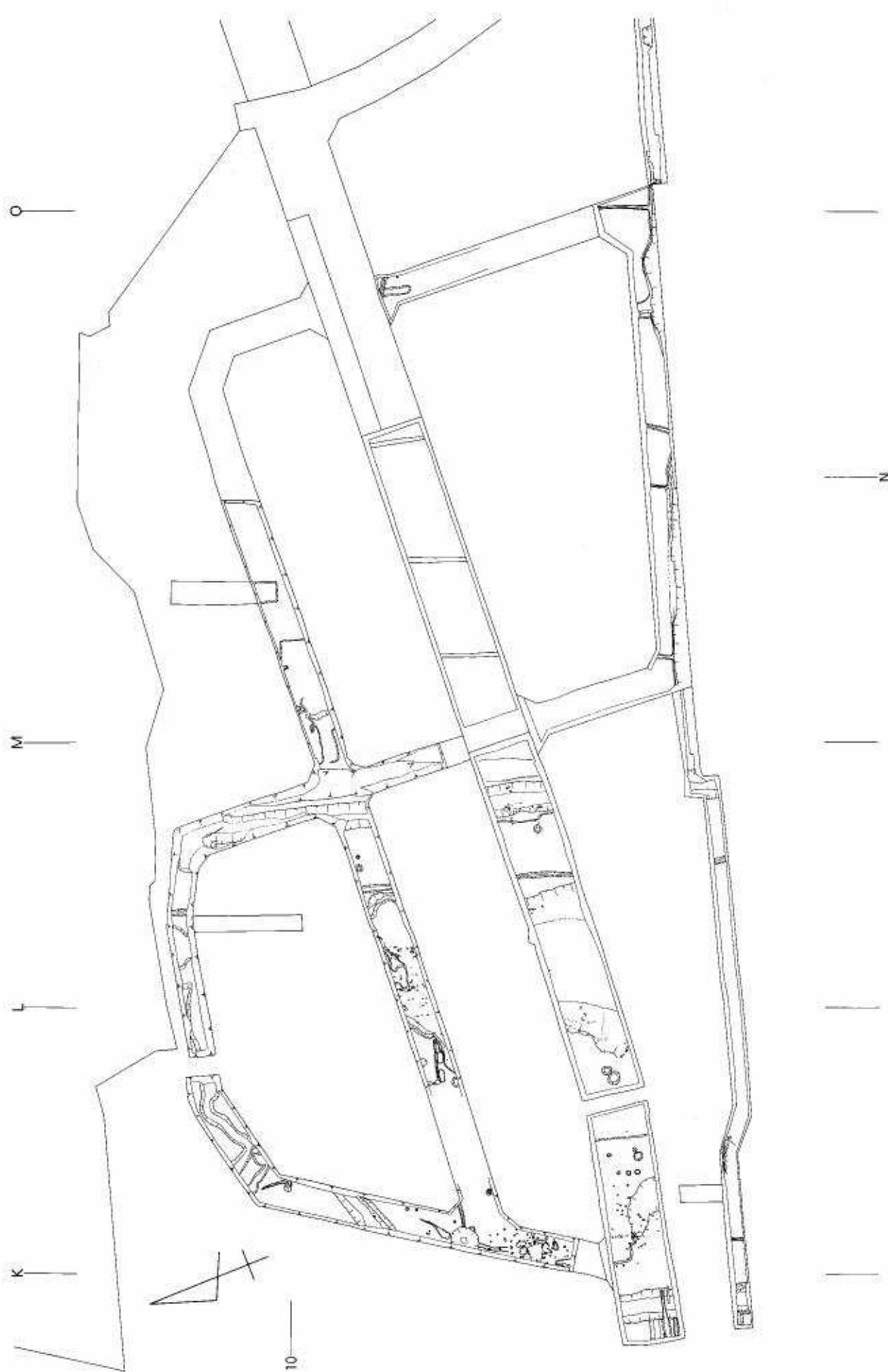
弥生時代後期 溝
(SD55001~55009)



図版24

辻ヶ内地区

中世全体図

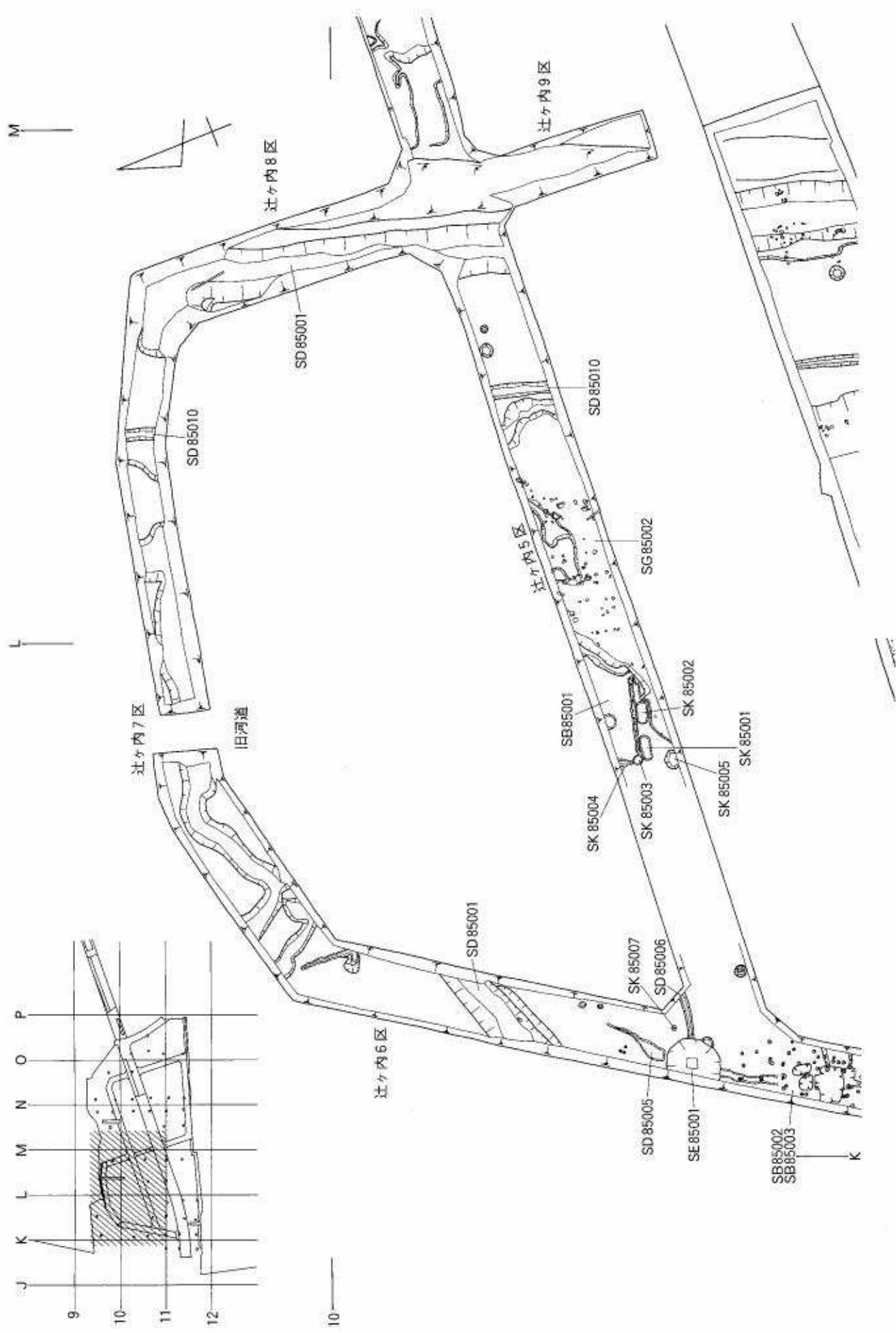


中世全体図

辻ヶ内地区

図版25

中世遺構平面図(1)

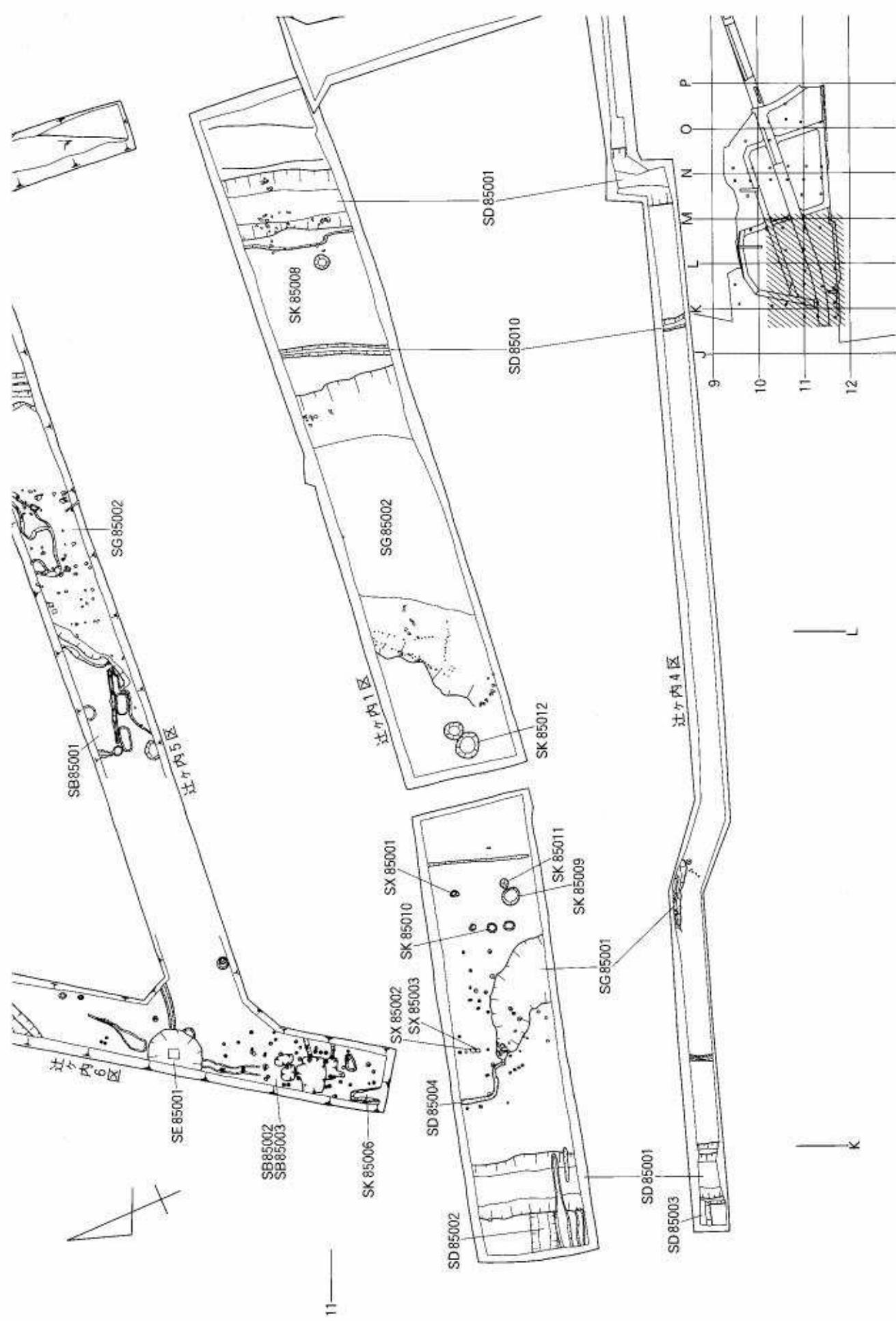


中世遺構平面図(1)

図版26

中世遺構平面図(2)

辻ヶ内地区

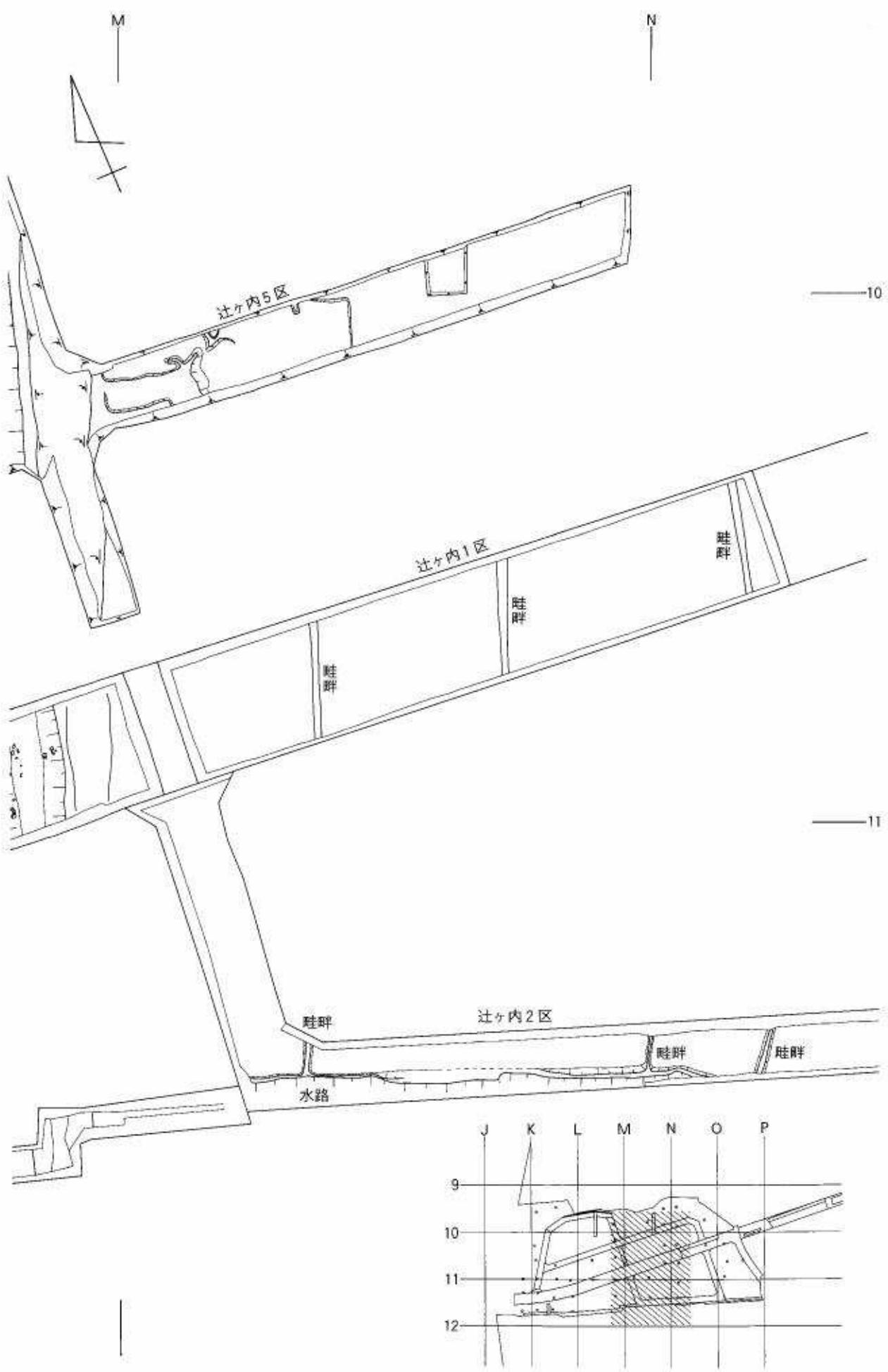


中世遺構平面図(2)

辻ヶ内地区

図版27

中世遺構平面図(3)

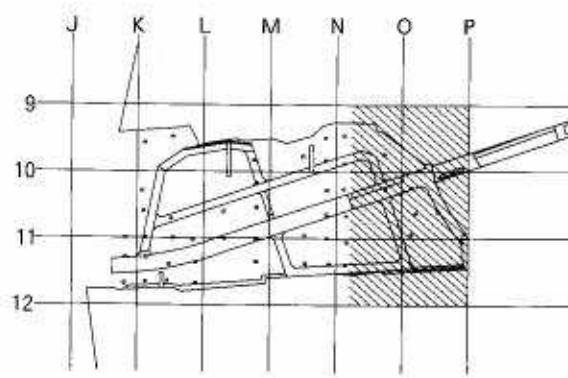
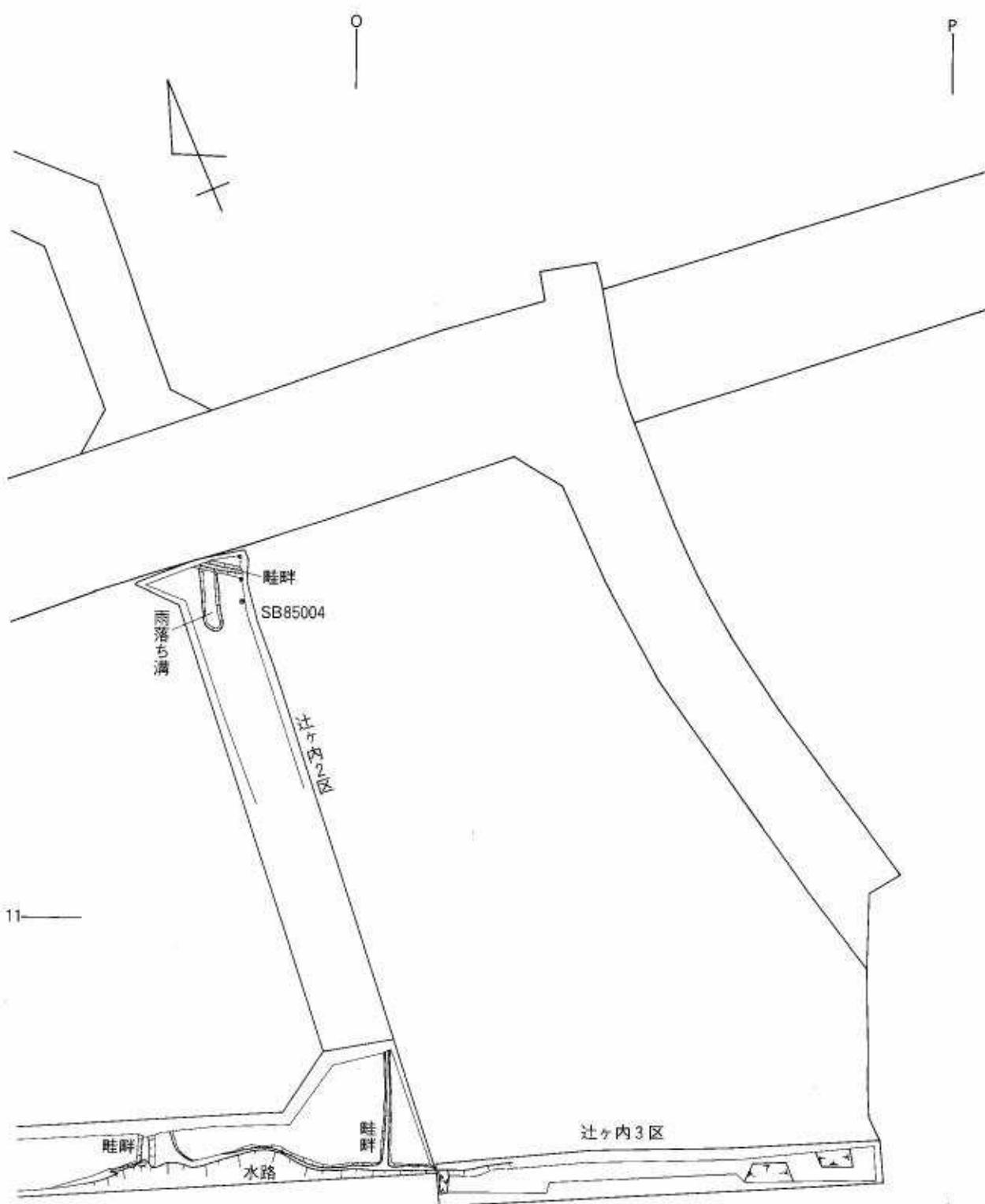


中世遺構平面図(3)

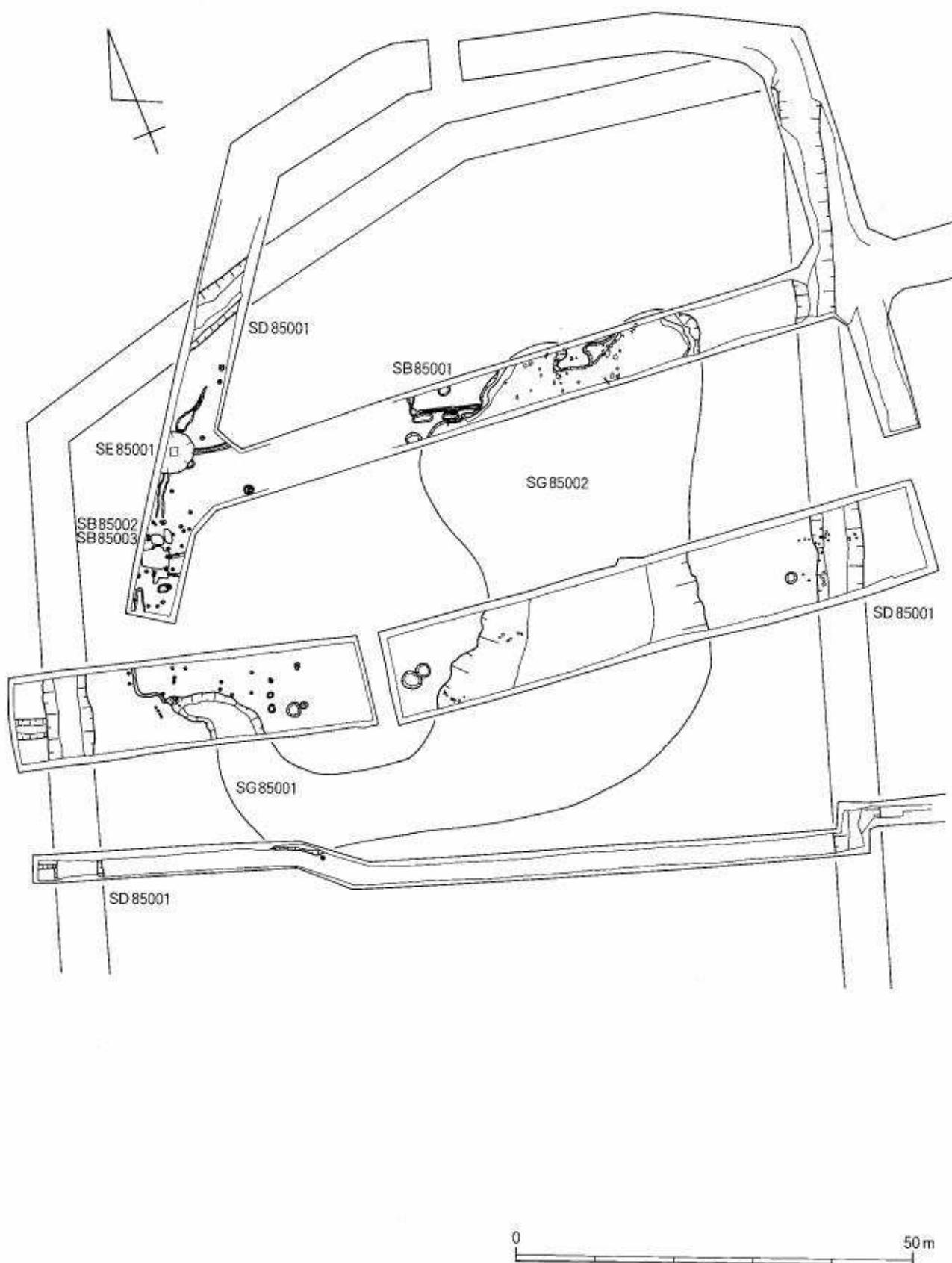
図版28

辻ヶ内地区

中世遺構平面図(4)



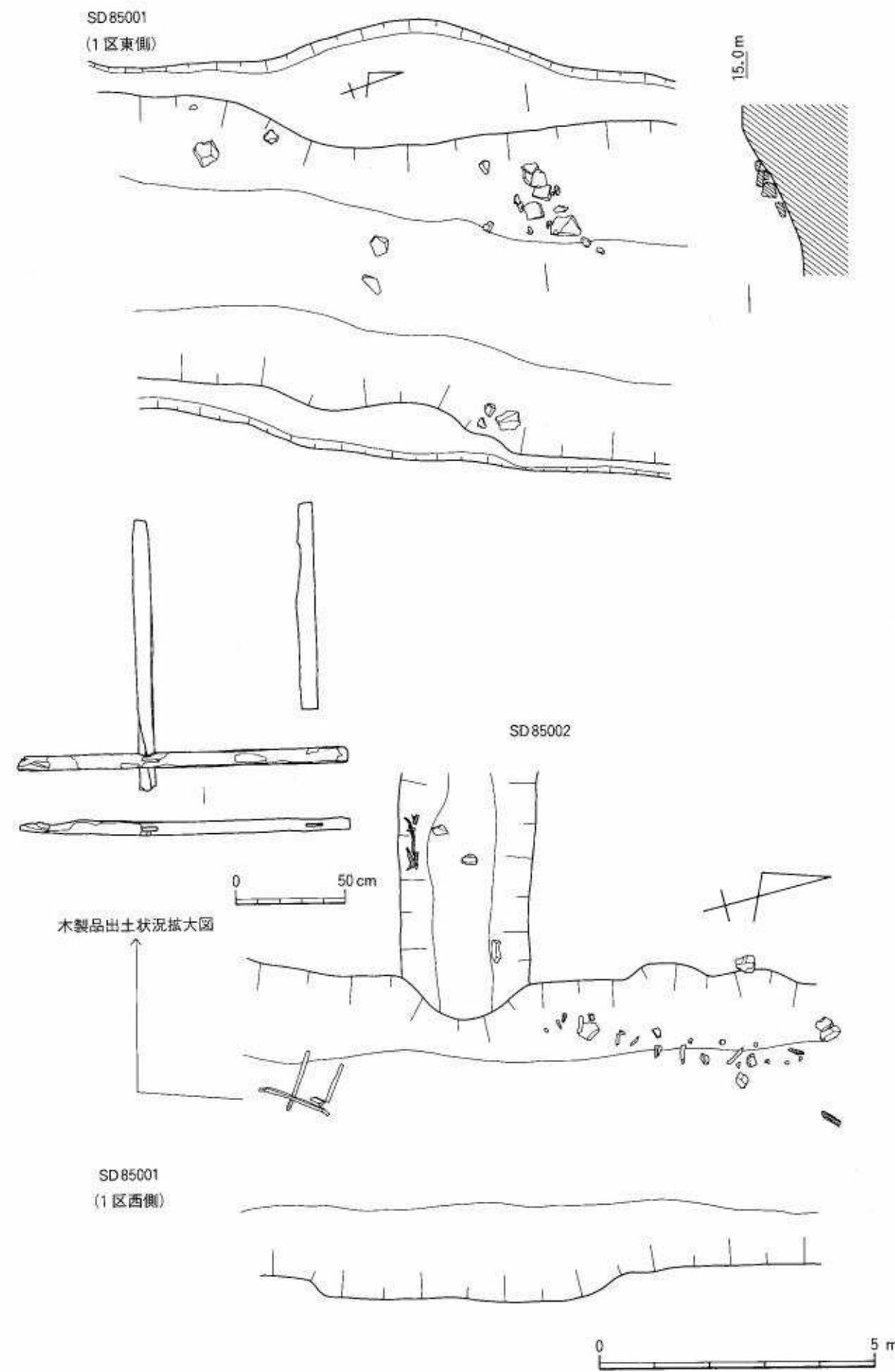
中世遺構平面図(4)



辻ヶ内地区

図版30

中世 堀(1)
(SD85001)



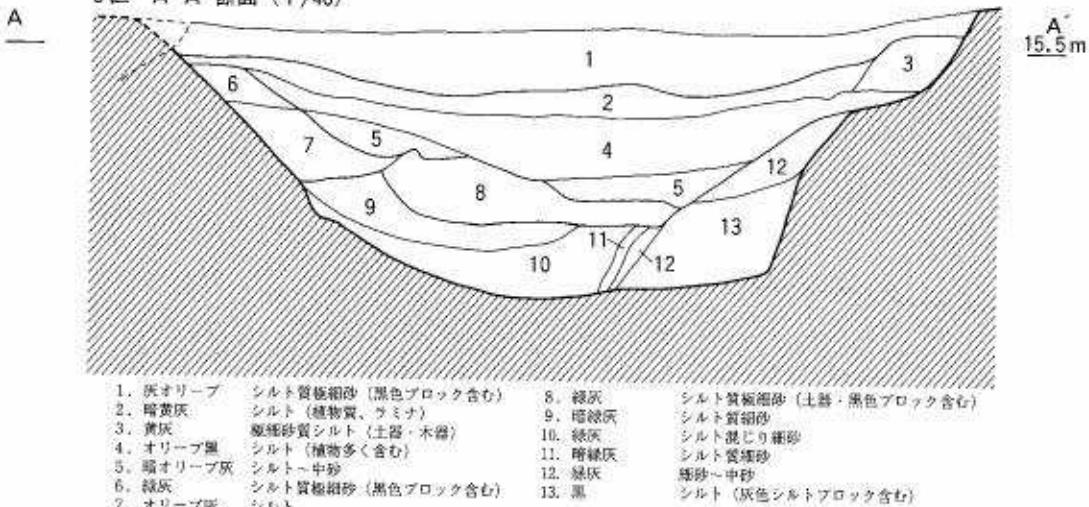
中世 堀(1)

辻ヶ内地区

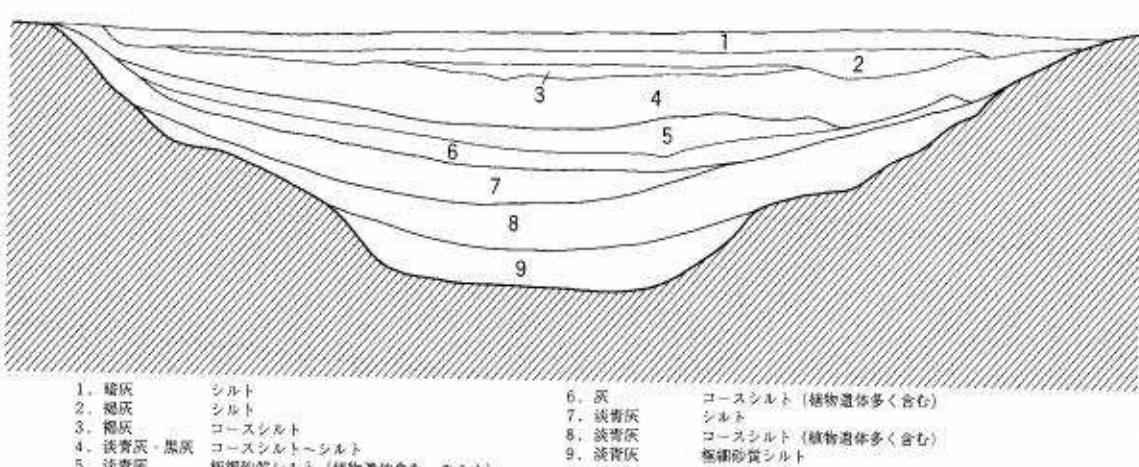
図版31

中世 堀(2)
(SD85001)

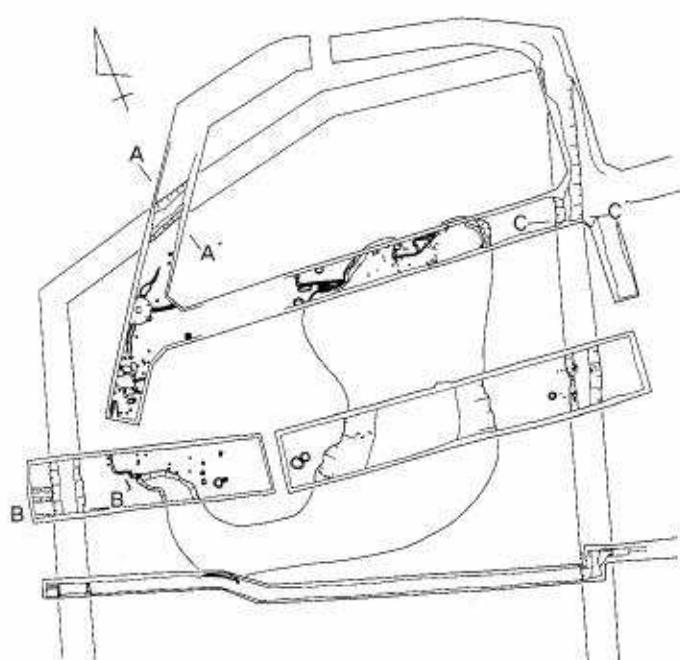
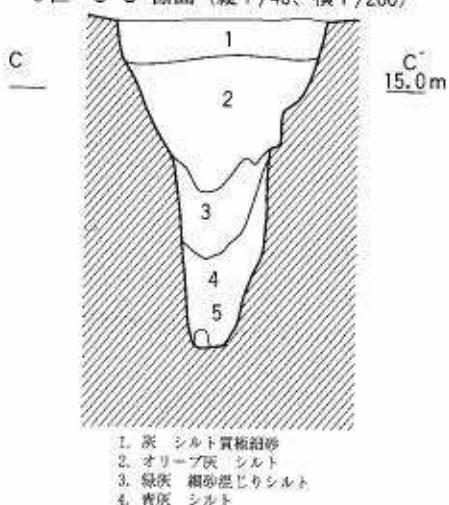
6区 A-A'断面 (1/40)



1区 B-B'断面 (1/40)



5区 C-C'断面 (縦1/40、横1/200)



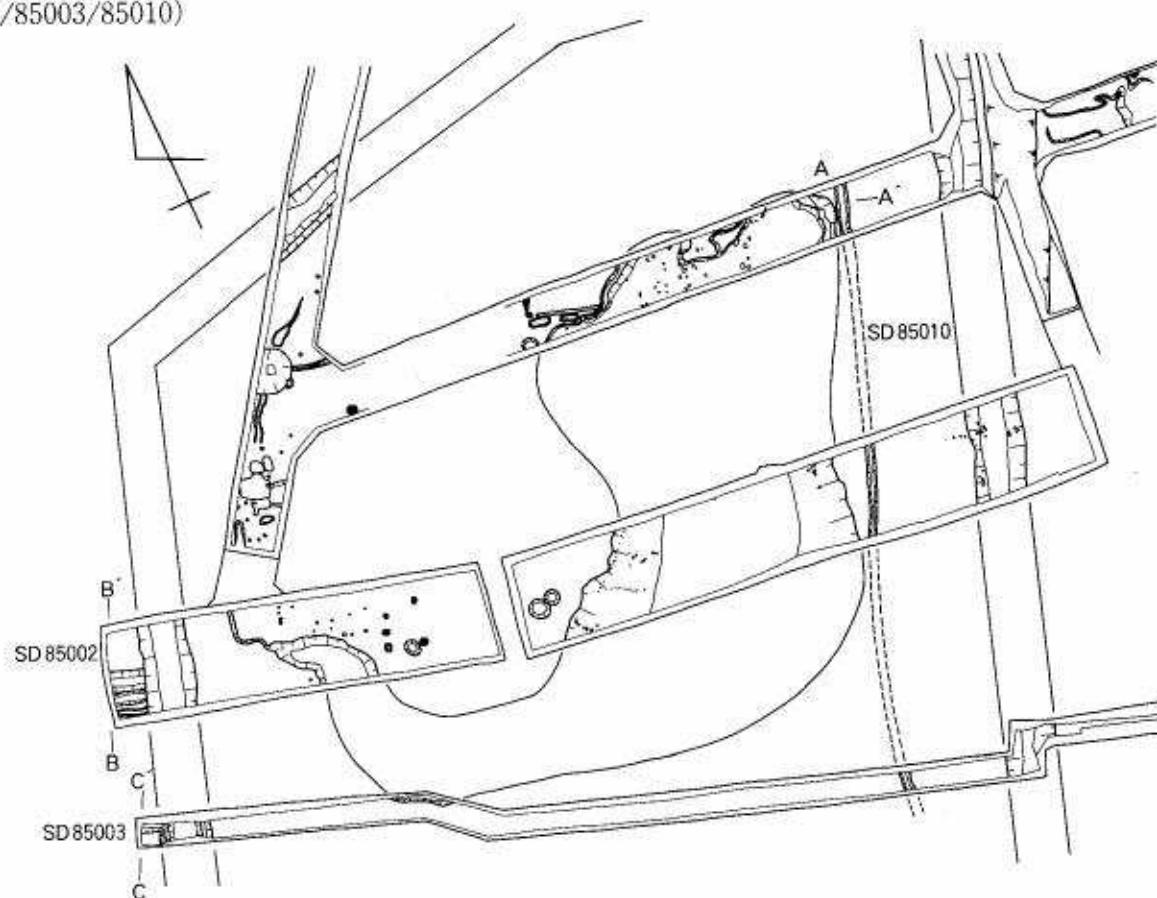
中世 堀(2)

図版32

辻ヶ内地区

中世 堀(3)

(SD85002/85003/85010)



A 5区 SD85010

A' 15.5m

1. 暗灰黃 シルト質細砂
2. 灰黃褐色 シルト
3. 黄褐色 残質シルト
4. 黄褐色 シルト質粗細砂
5. 灰 シルト混じり粗細砂

B

B' 16.0m

1. 黒灰 シルト

C 4区 SD85003

C' 16.0m

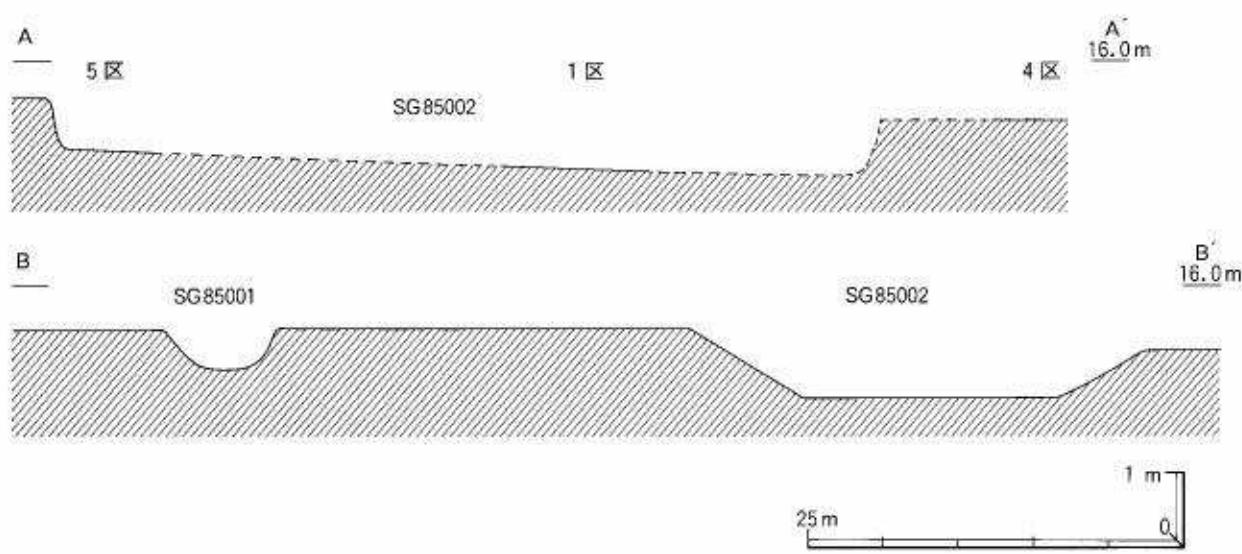
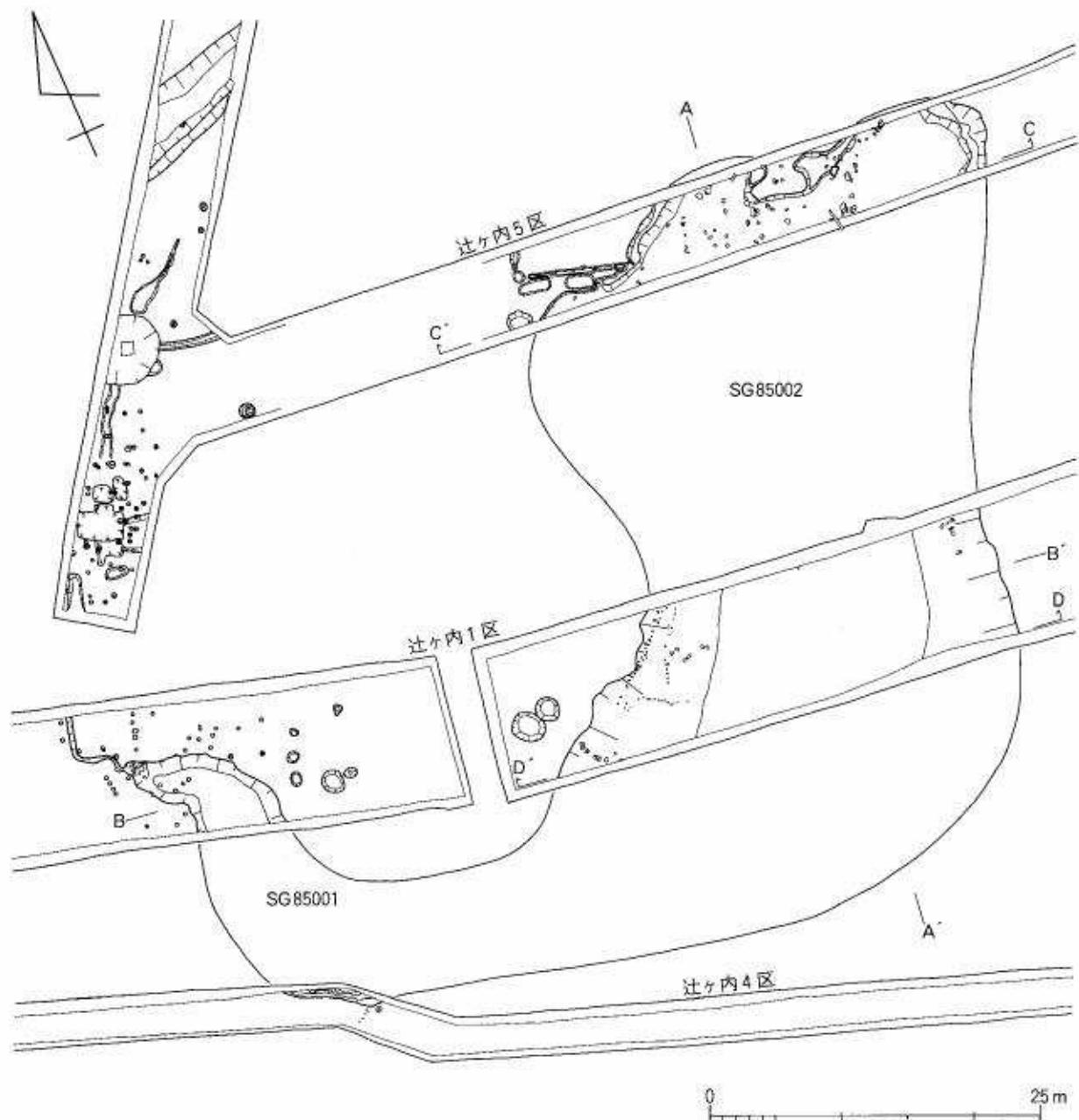
1. 暗灰黃 樹脂砂（礁・シルトブロック含む）
2. 灰オリーブ 樹脂砂（土器・シルトブロック含む）
3. 黄褐色 細砂（ラミナ）
4. 暗灰黃 シルト
5. 黄褐色 泥質シルト（ラミナ）
6. 灰 シルト
7. 灰 シルト
8. にぶい黄 混合砂～中砂

0 2 m

辻ヶ内地区

図版33

中世 池(1)
(SG85001/85002)



中世 池(1)

図版34

中世 池(2)
(SG85001)



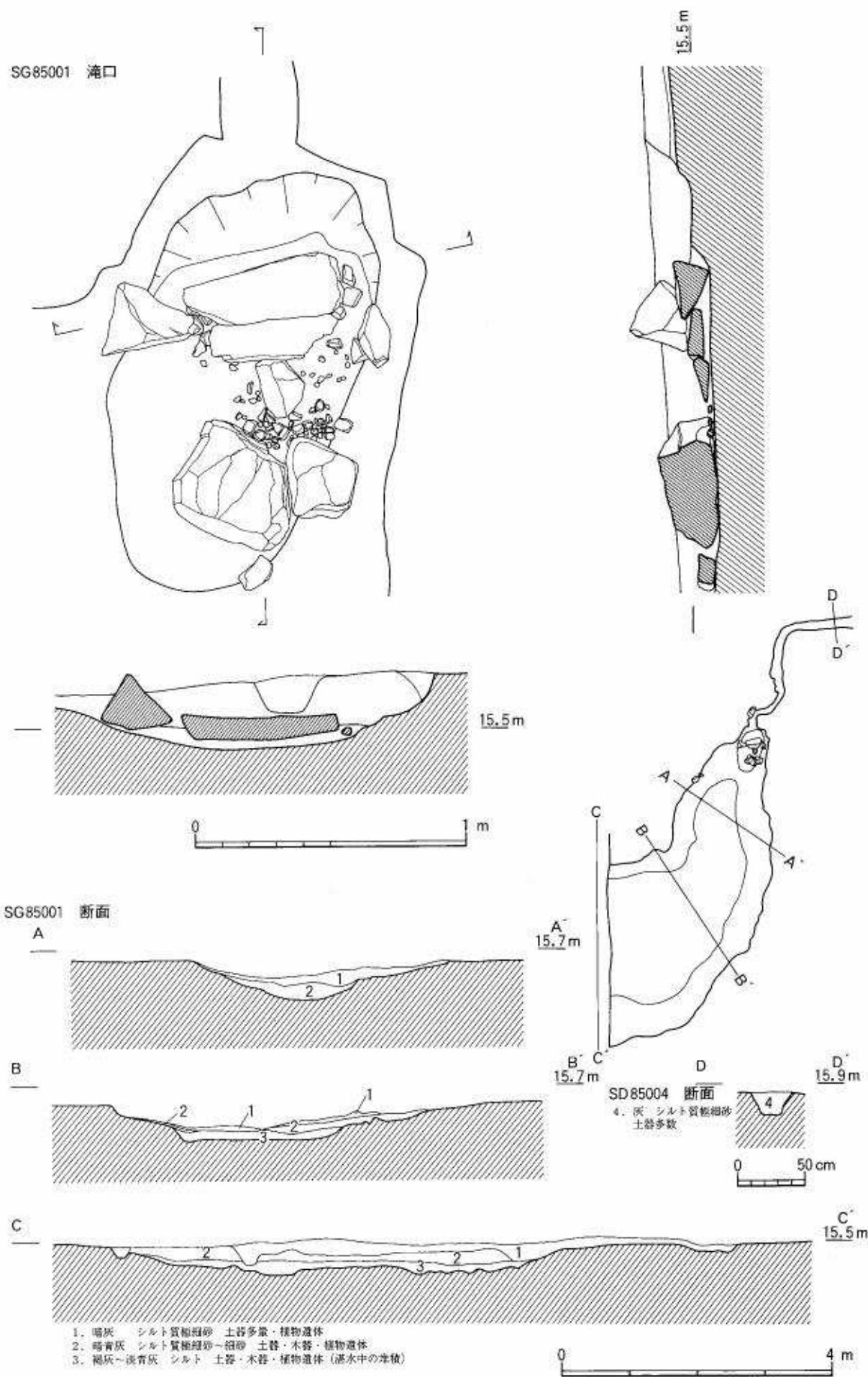
中世 池(2)



図版36

辻ヶ内地区

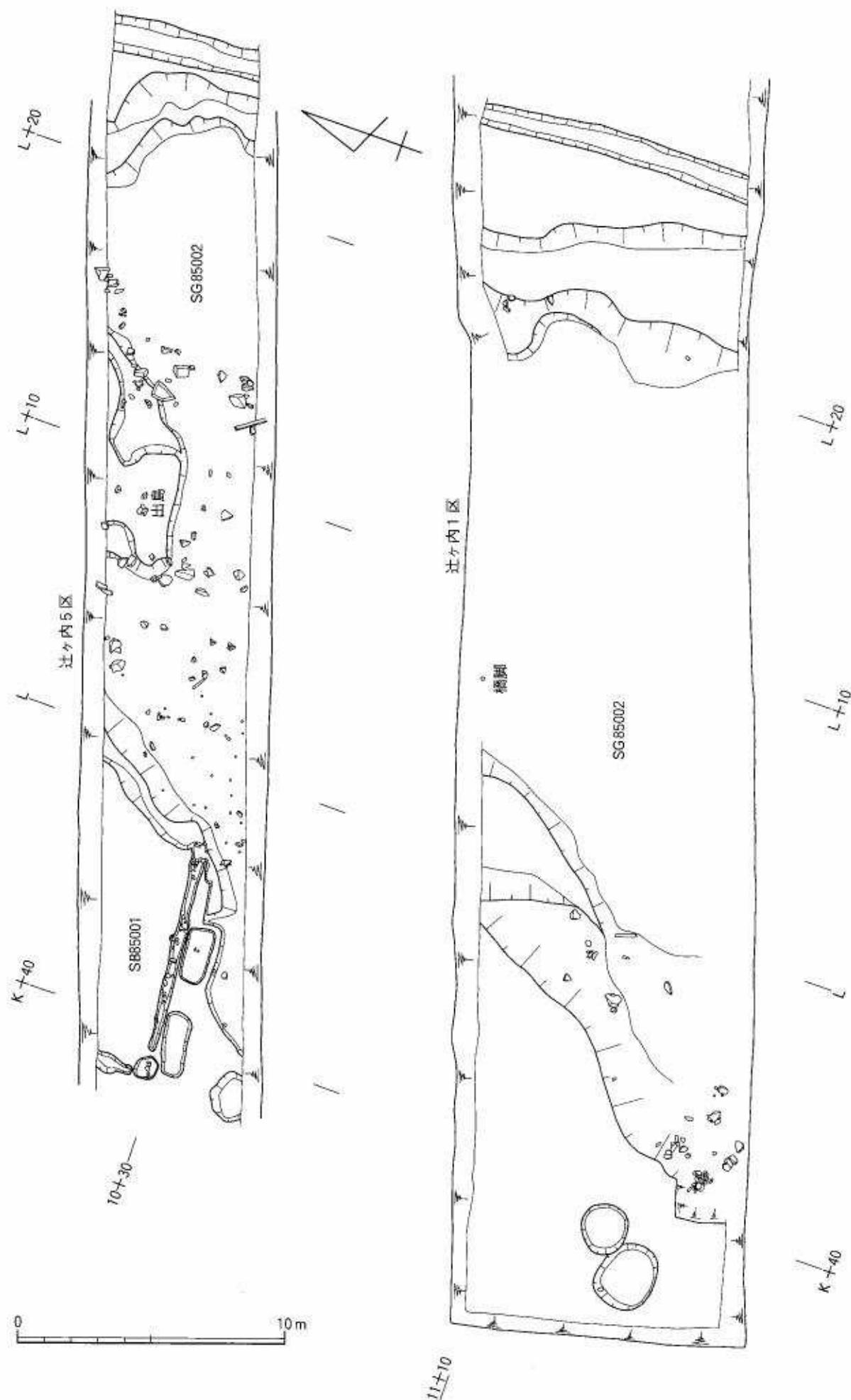
中世 池(4)
(SG85001)



辻ヶ内地区

図版37

中世 池(5)
(SG85002)

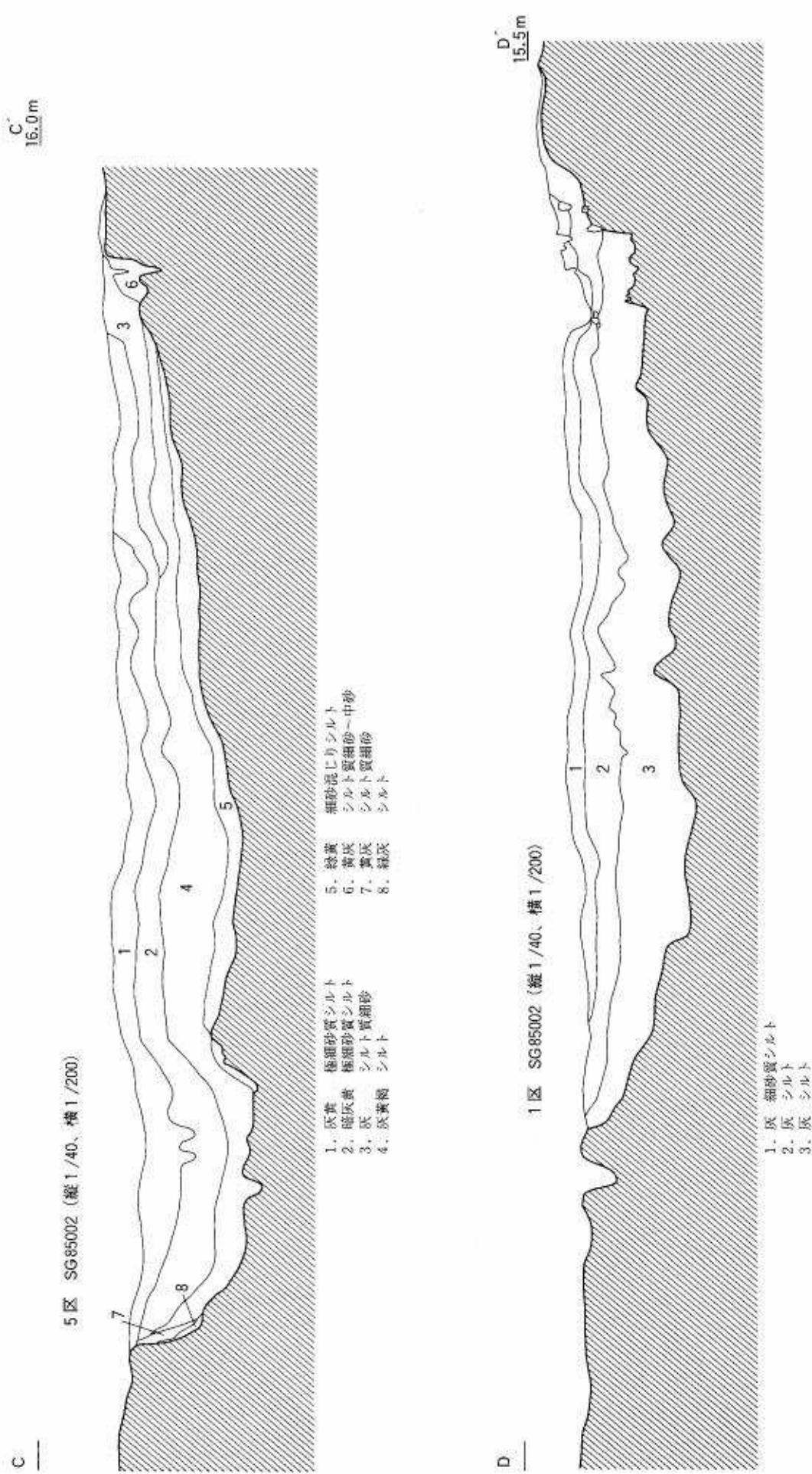


中世 池(5)

図版38

中世 池(6)
(SG85002)

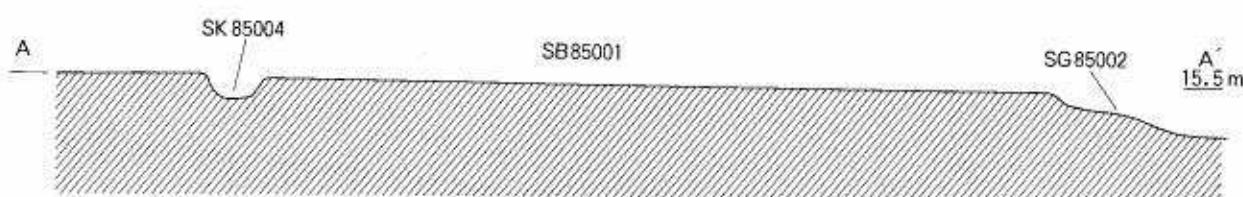
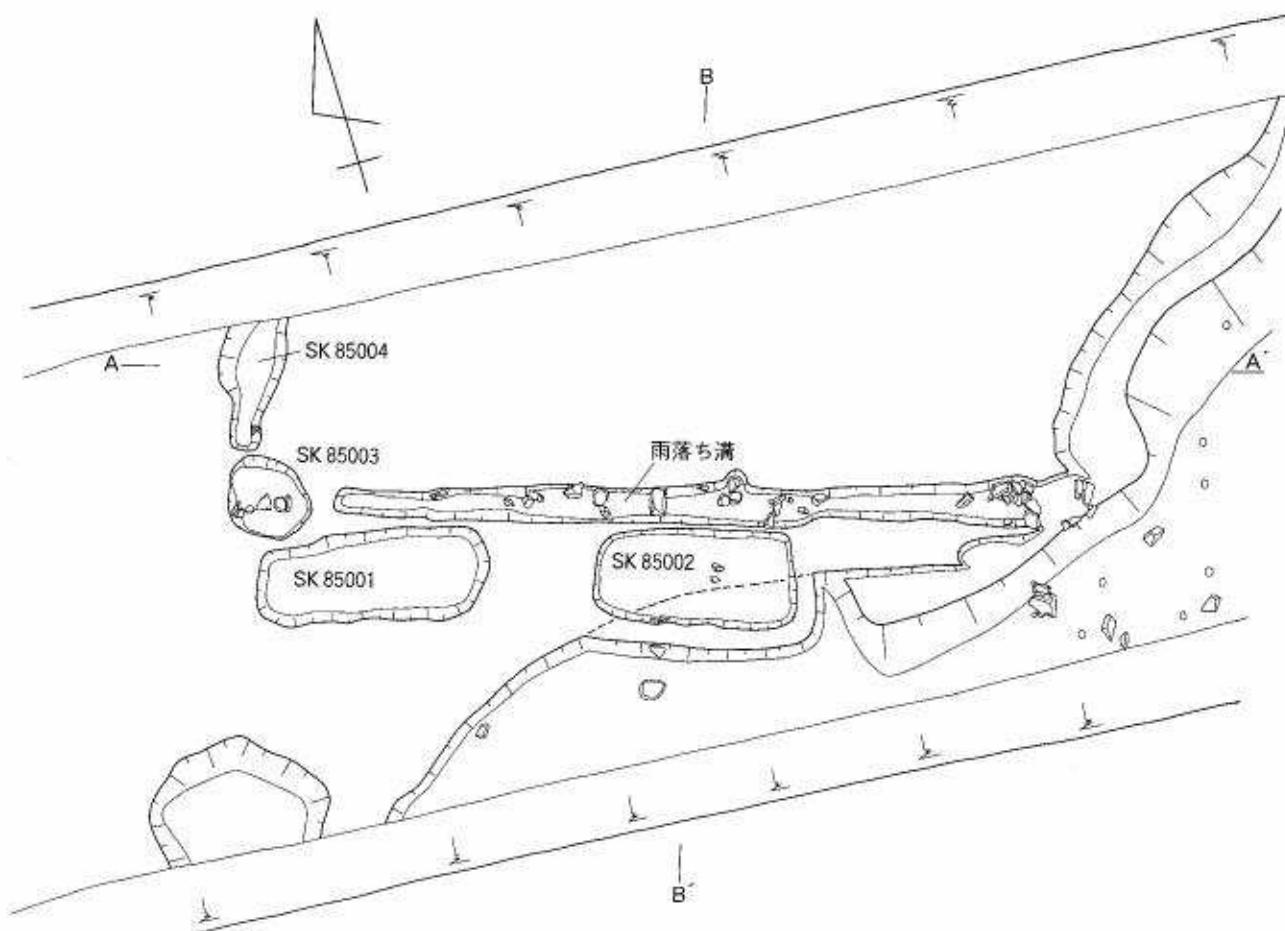
辻ヶ内地区



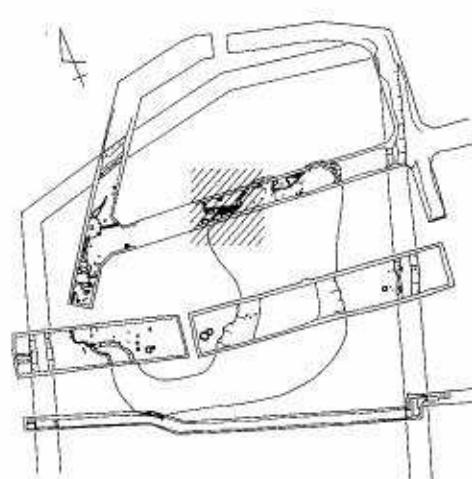
辻ヶ内地区

図版39

中世 瓦葺建物跡
(SB85001)



0 4 m



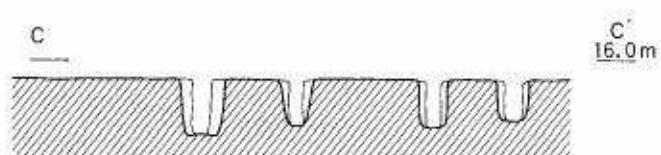
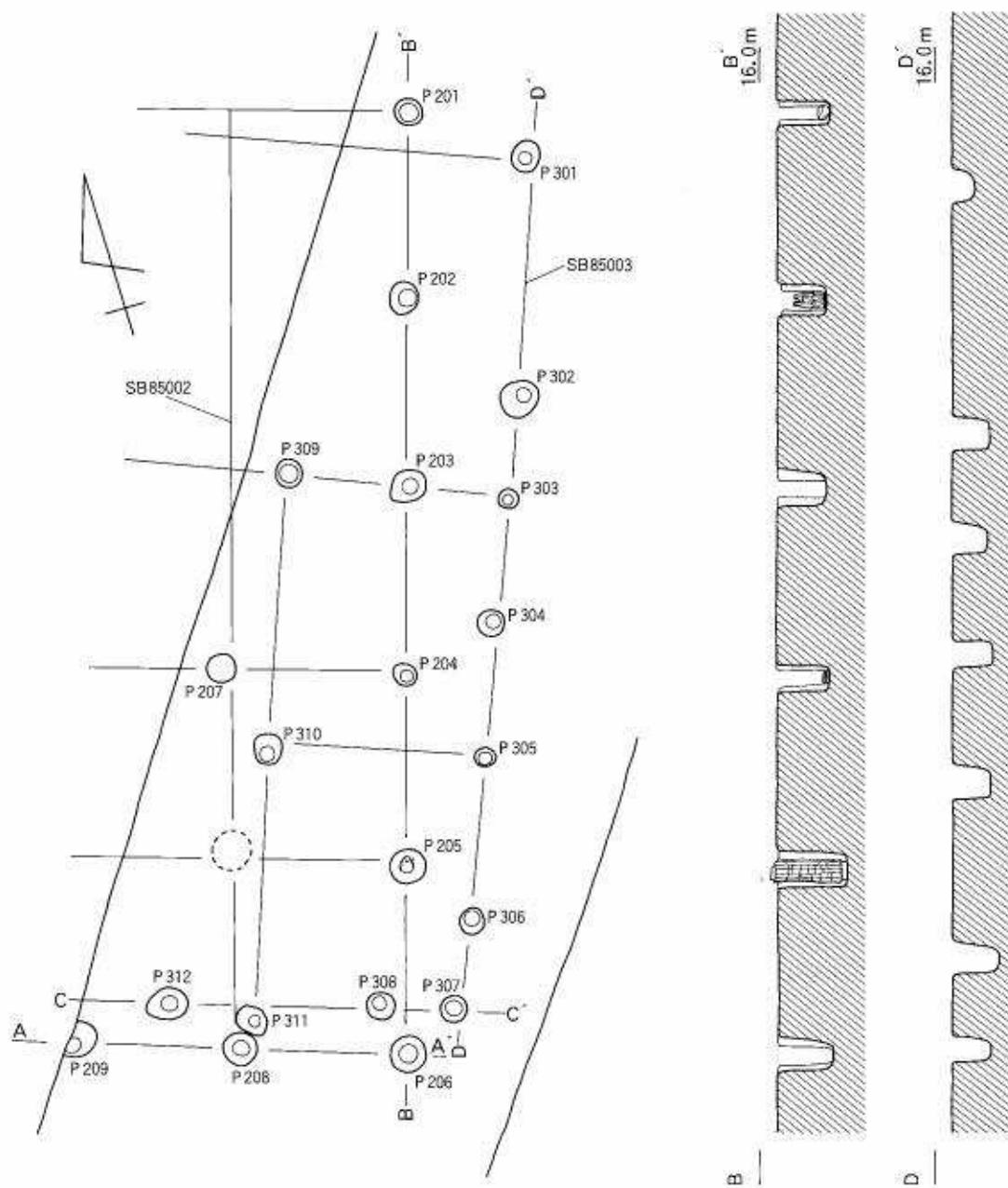
5区 SB85001

中世 瓦葺建物跡

図版40

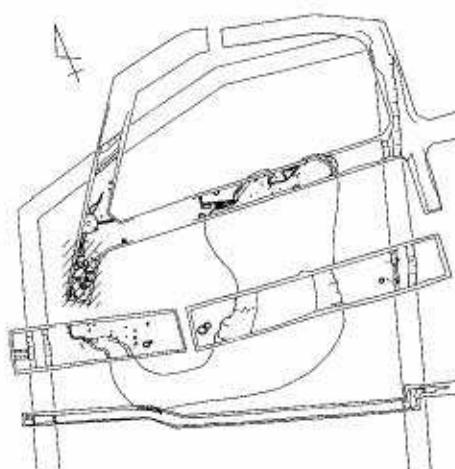
辻ヶ内地区

中世 挖立柱建物跡(1)
(SB85002/85003)



6区 SB85002、85003

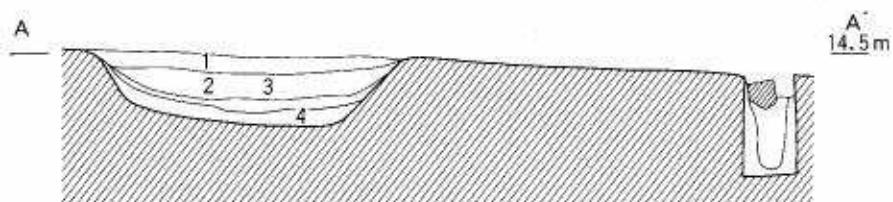
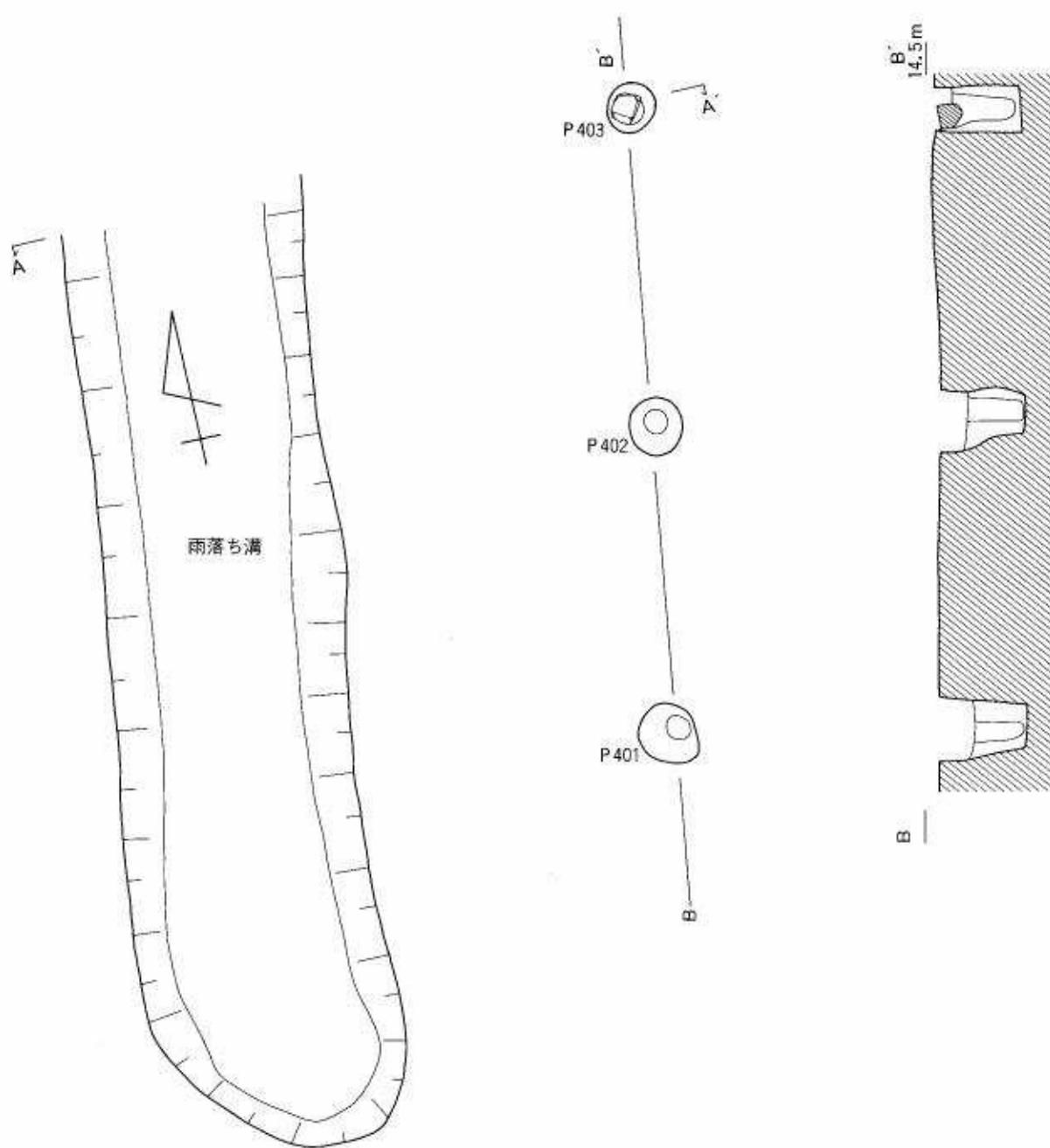
0 4 m



辻ヶ内地区

図版41

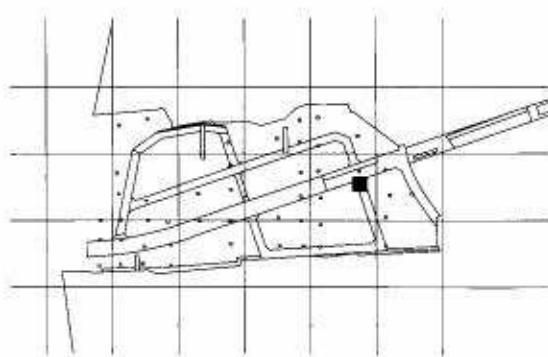
中世 挖立柱建物跡(2)
(SB85004)



- 1. 緑灰 シルト質極細砂
- 2. 緑灰 コースシルト
- 3. 緑灰 極細砂質シルト
- 4. 緑灰 シルト

2区 SB85004

0 2 m



中世 挖立柱建物跡(2)

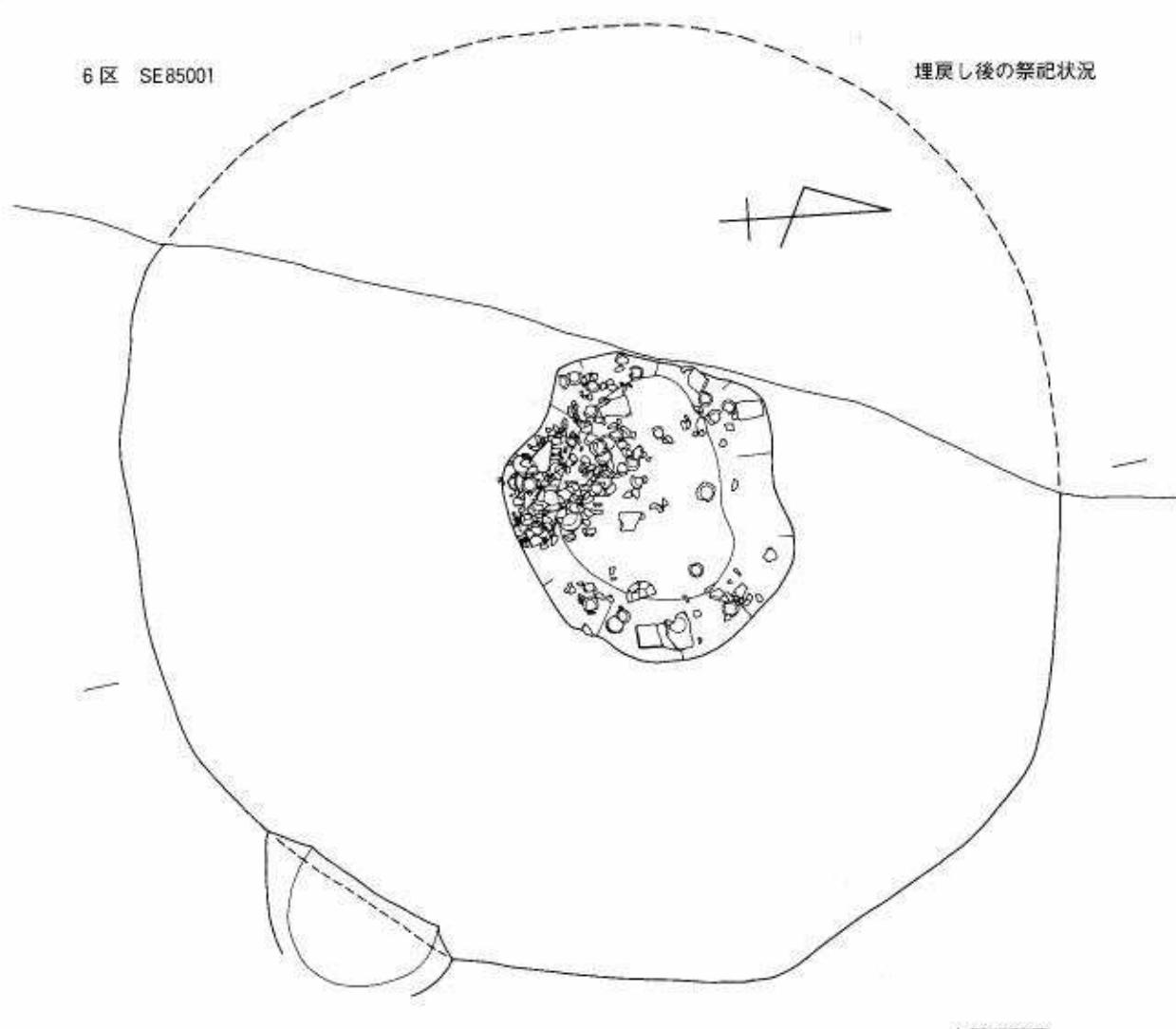
図版42

辻ヶ内地区

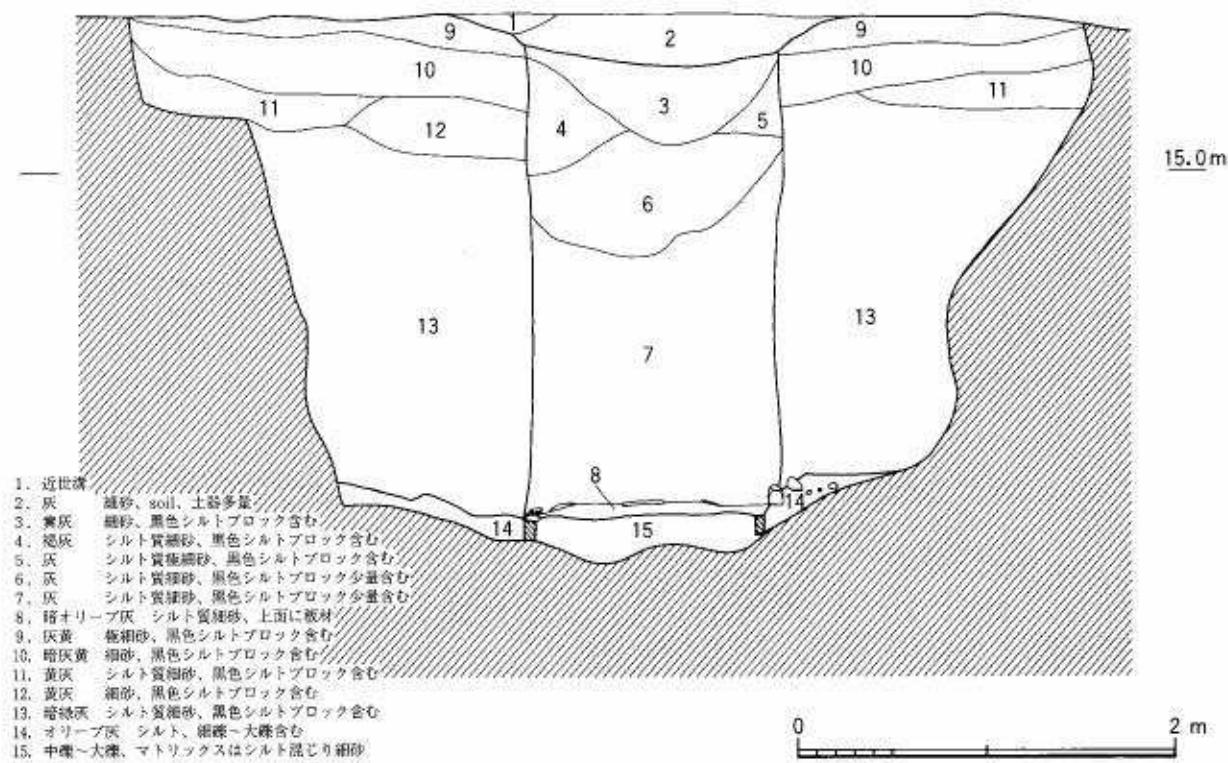
中世 井戸(1)
(SE85001)

6区 SE85001

埋戻し後の祭祀状況



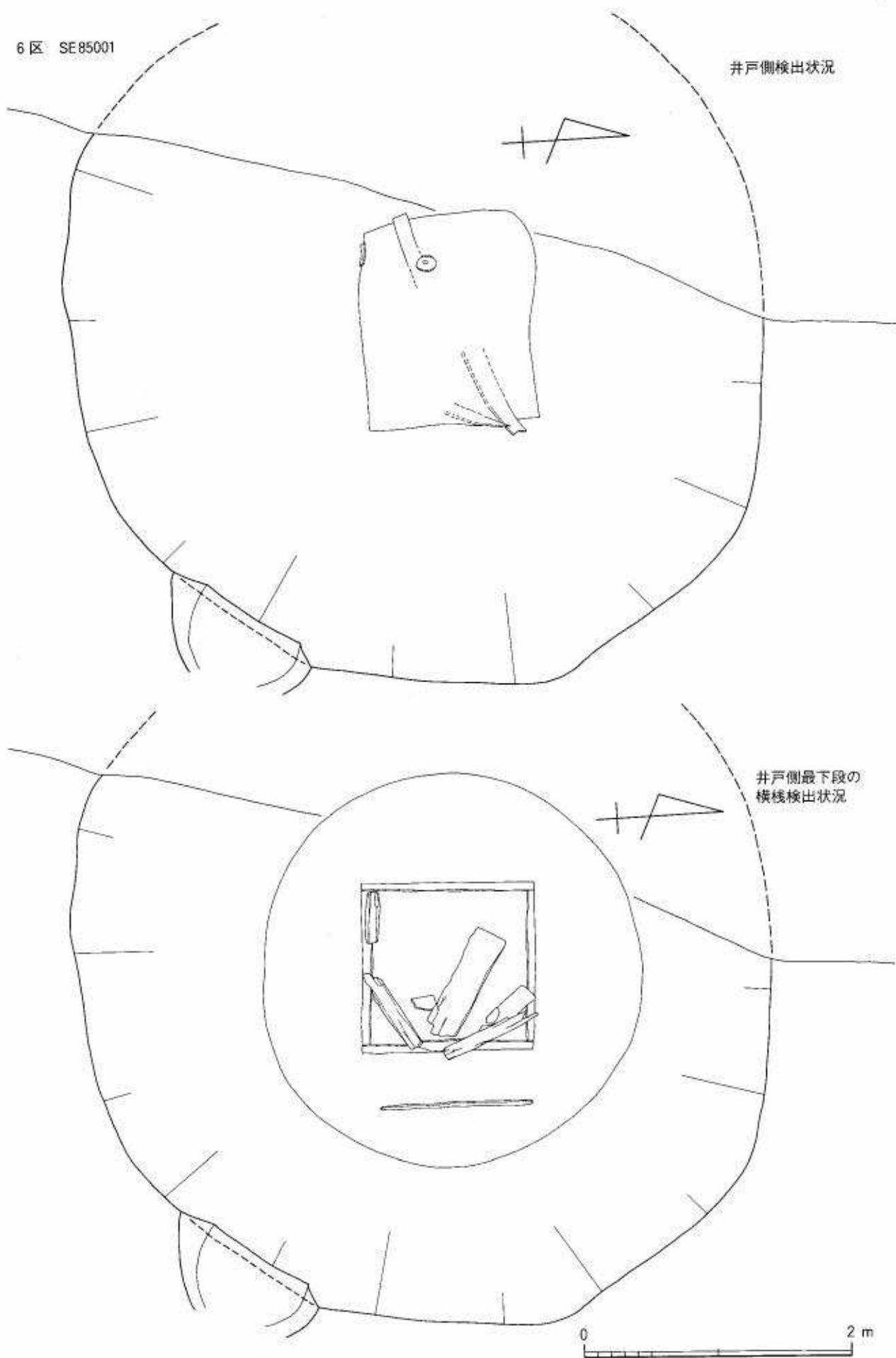
土層断面図



辻ヶ内地区

図版43

中世 井戸(2)
(SE85001)

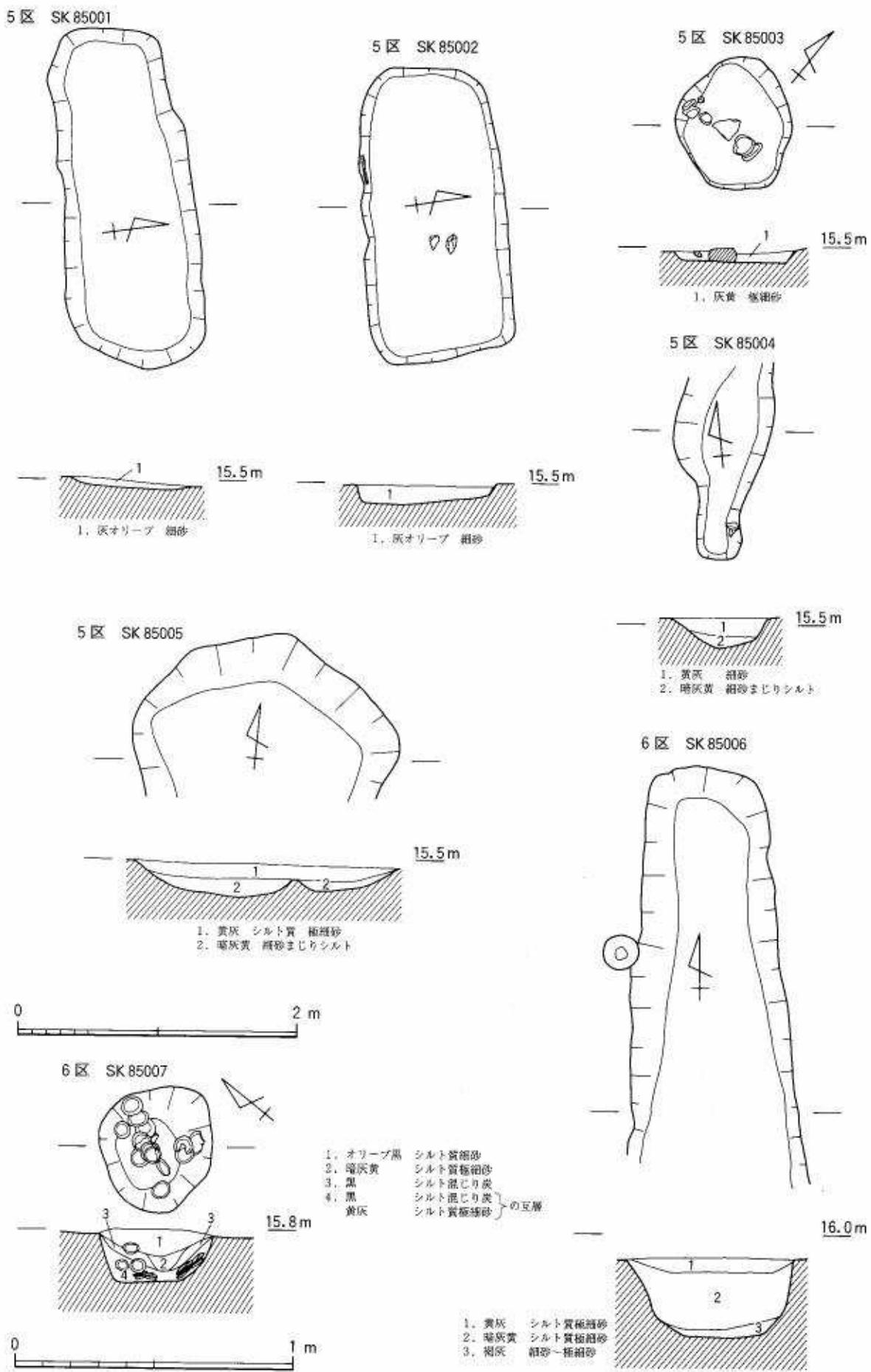


中世 井戸(2)

図版44

辻ヶ内地区

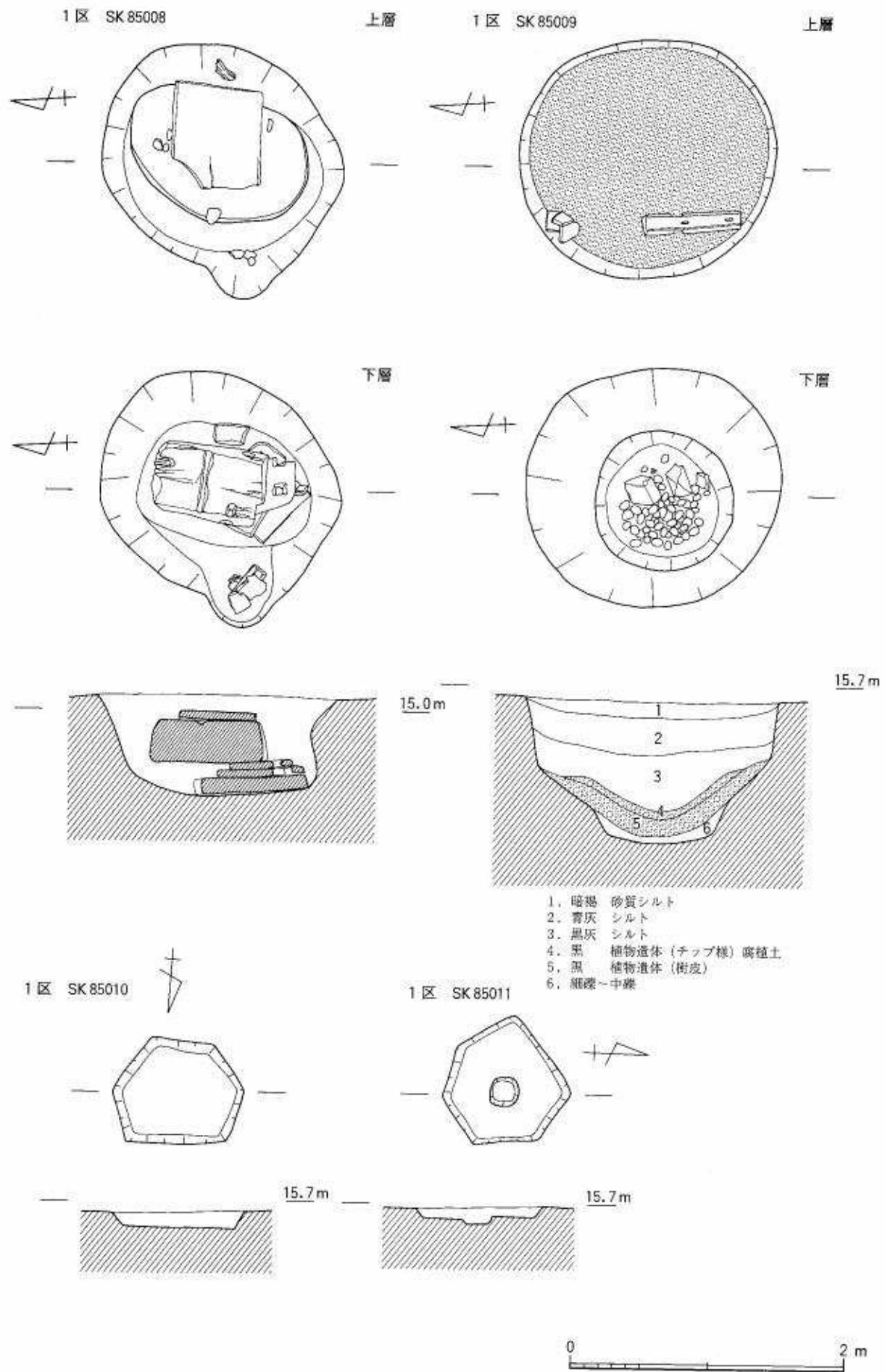
中世 土坑(1)
(SK85001~85007)



辻ヶ内地区

図版45

中世 土坑(2)
(SK85008~85011)



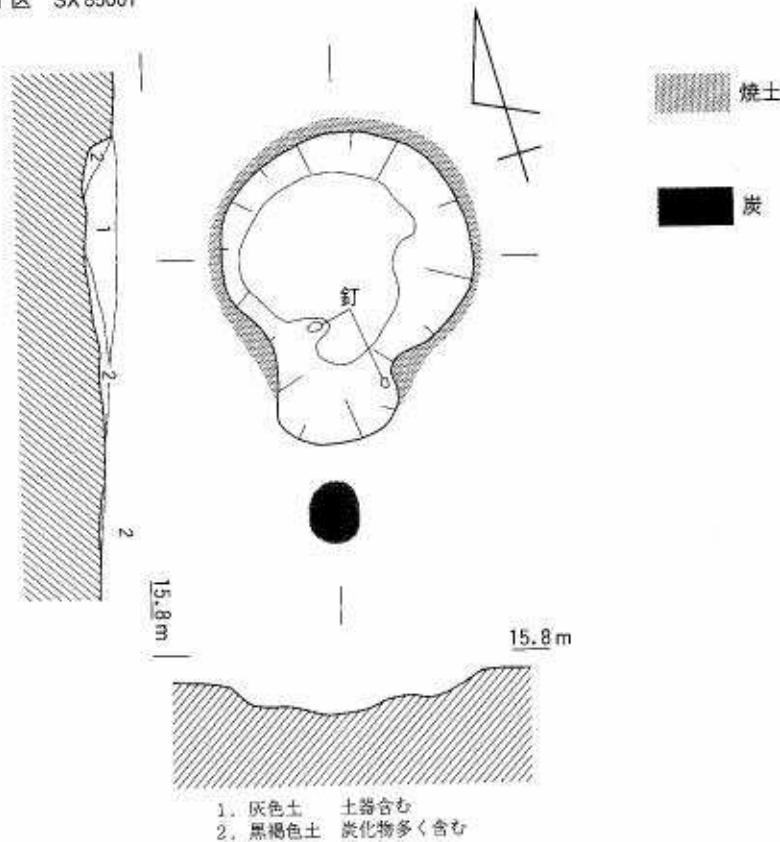
中世 土坑(2)

図版46

中世 鍛冶炉
(SX85001~85003)

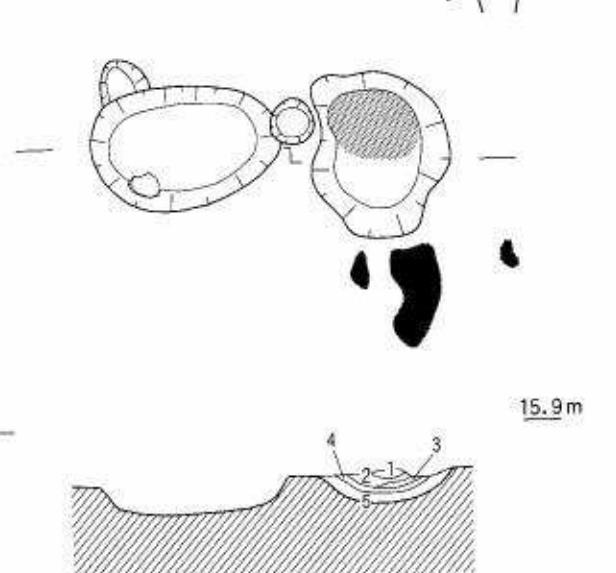
辻ヶ内地区

1区 SX85001



1区 SX85003

SX85002



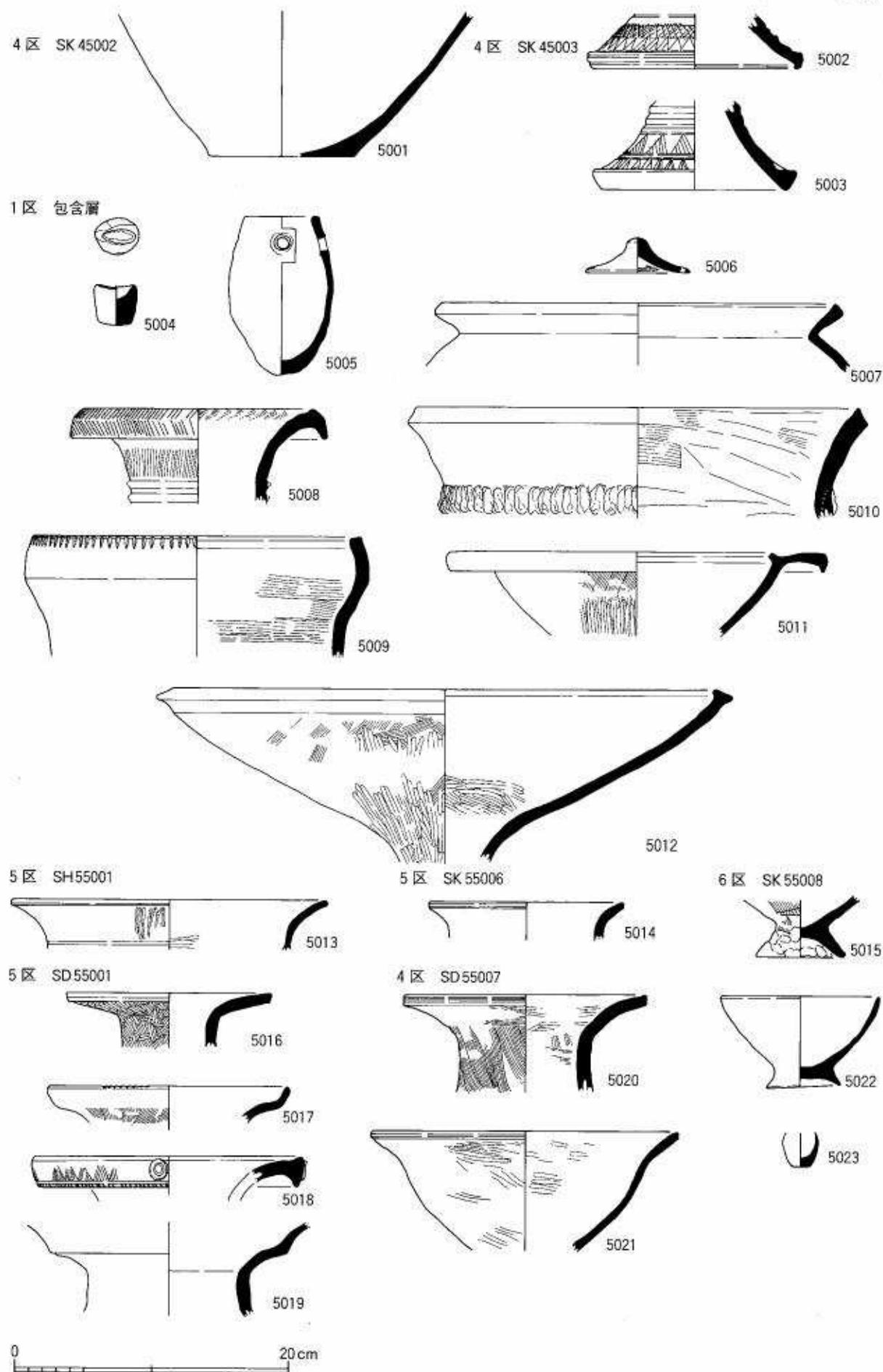
1. 茶褐色 細砂 土器含む
2. 灰 シルト質板細砂 土器含む
3. 黒褐 極細砂 炭化物多い、土器含む
4. 黒褐 極細砂 砂礫と土器含む
5. 黒褐 極細砂 炭化物多い



辻ヶ内地区

図版47

弥生時代中期、後期の遺物(1)
(土坑・溝・豊穴住居跡・包含層) 5001~5023



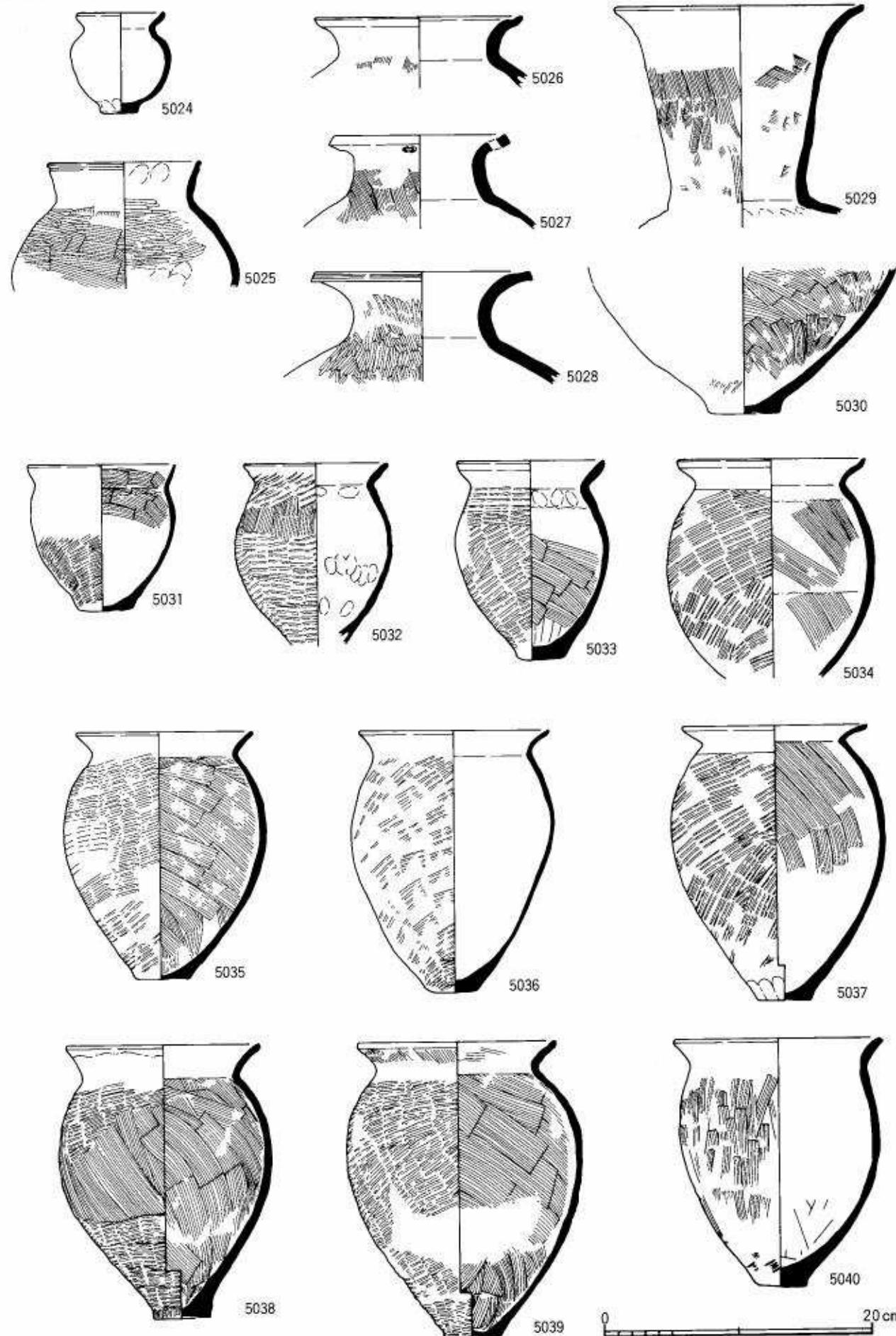
弥生時代中期、後期の遺物(1)

図版48

辻ヶ内地区

弥生時代後期の遺物(2)

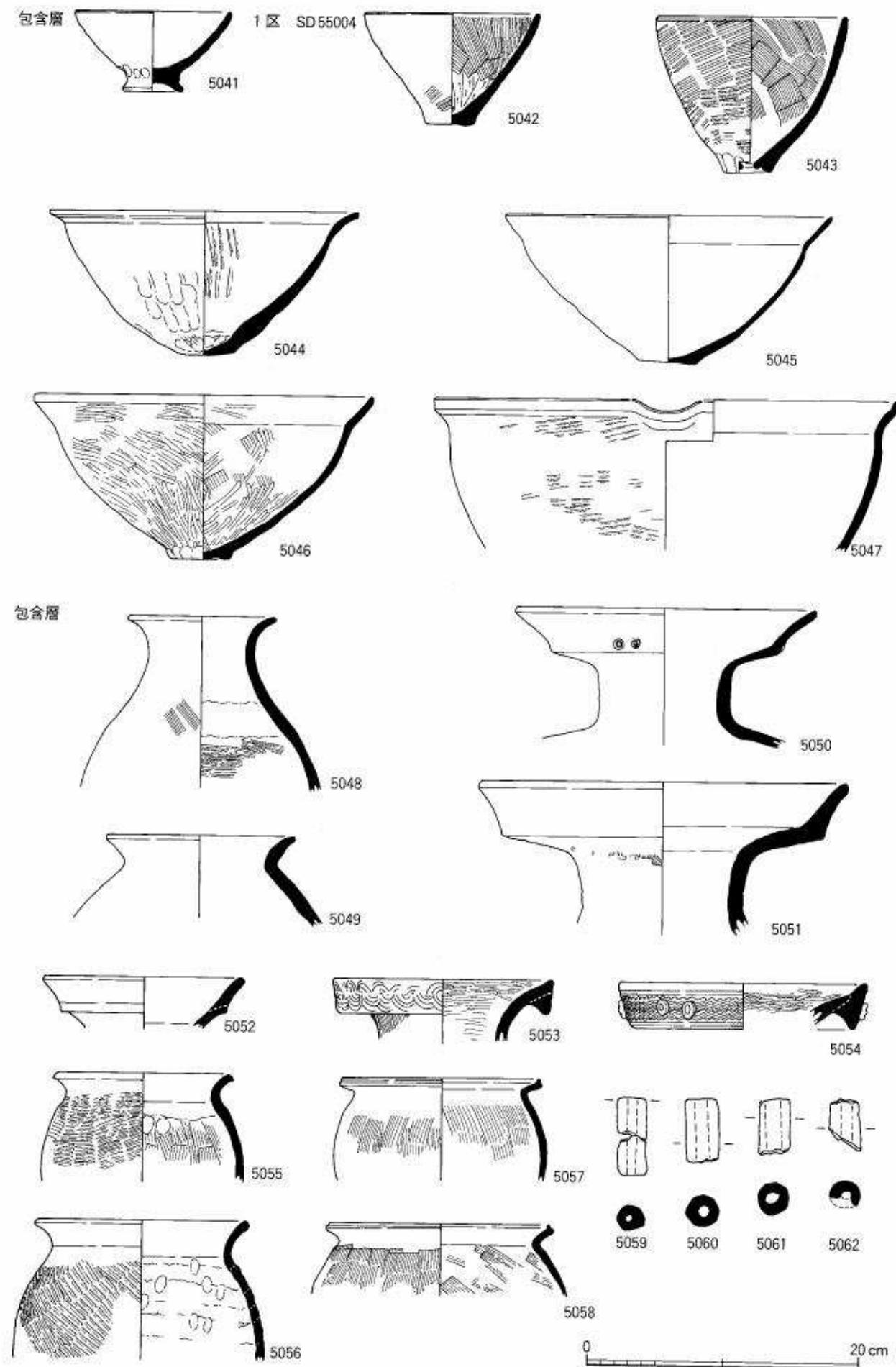
(SD55004) 5024~5040



辻ヶ内地区

図版49

弥生時代後期の遺物(3)
(SD55004・包含層) 5041~5062

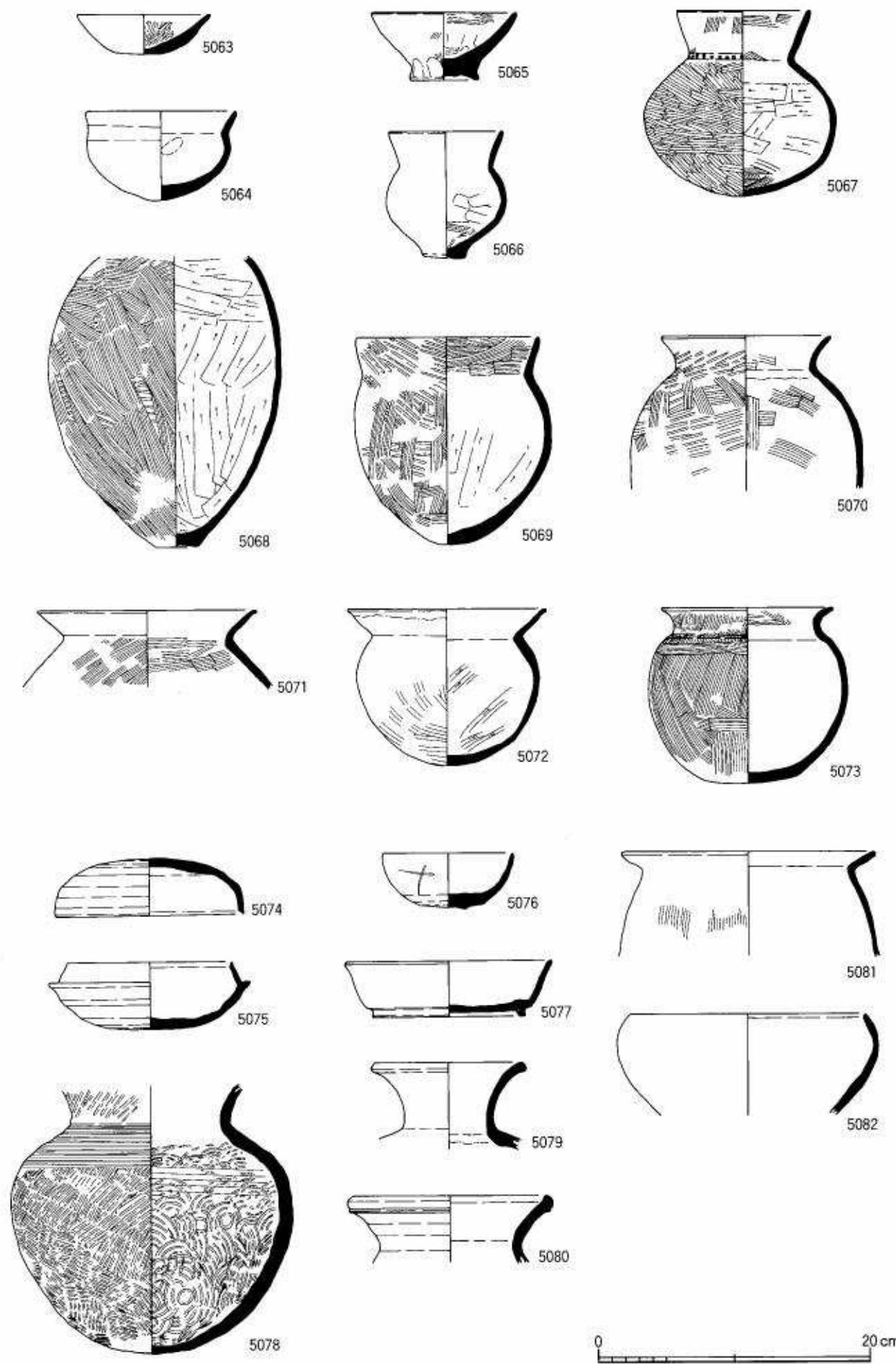


弥生時代後期の遺物(3)

図版50

辻ヶ内地区

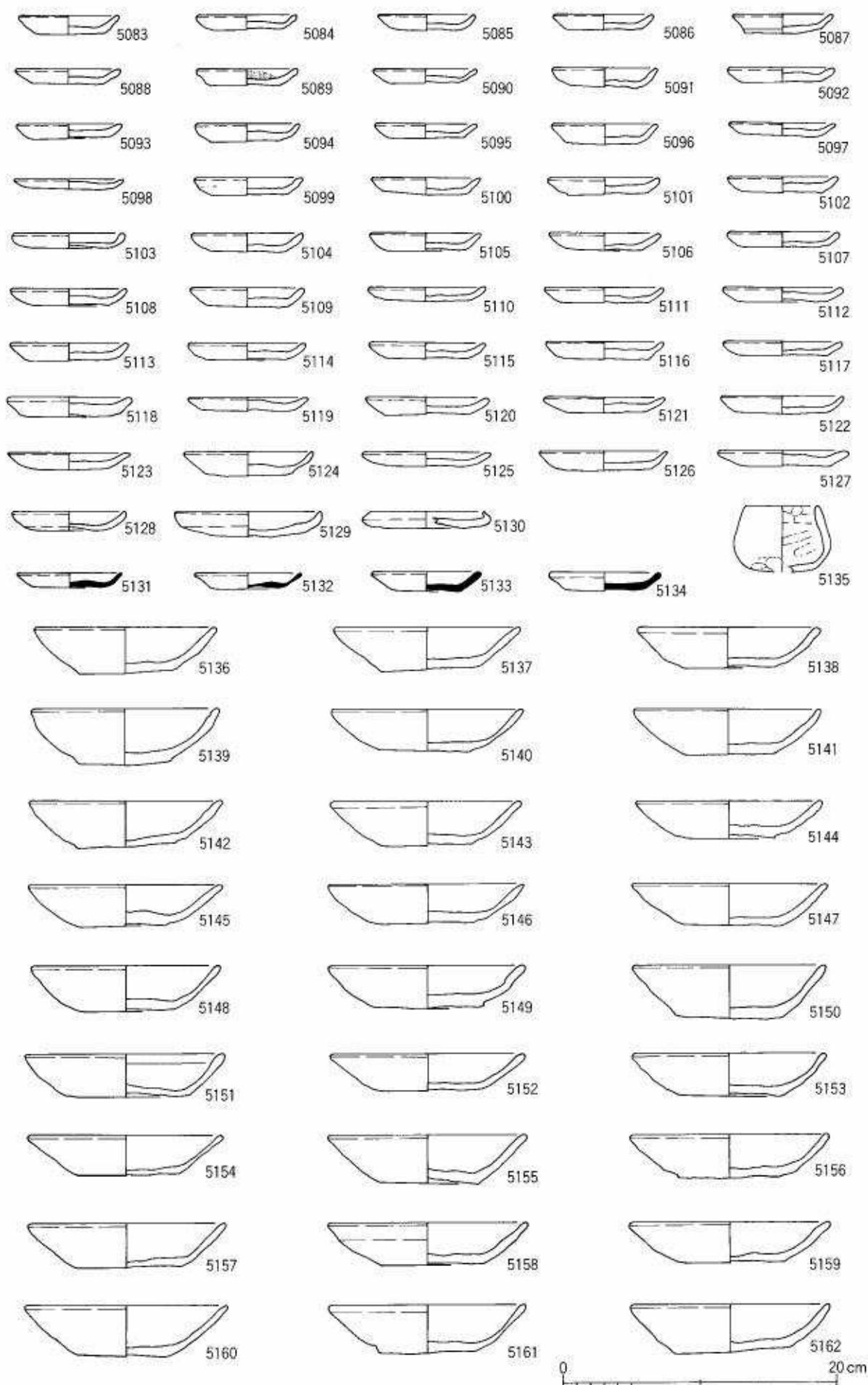
旧河道の遺物
5063~5082



辻ヶ内地区

図版51

中世の遺物(1) 土器(1)
(SD85001) 5083~5162

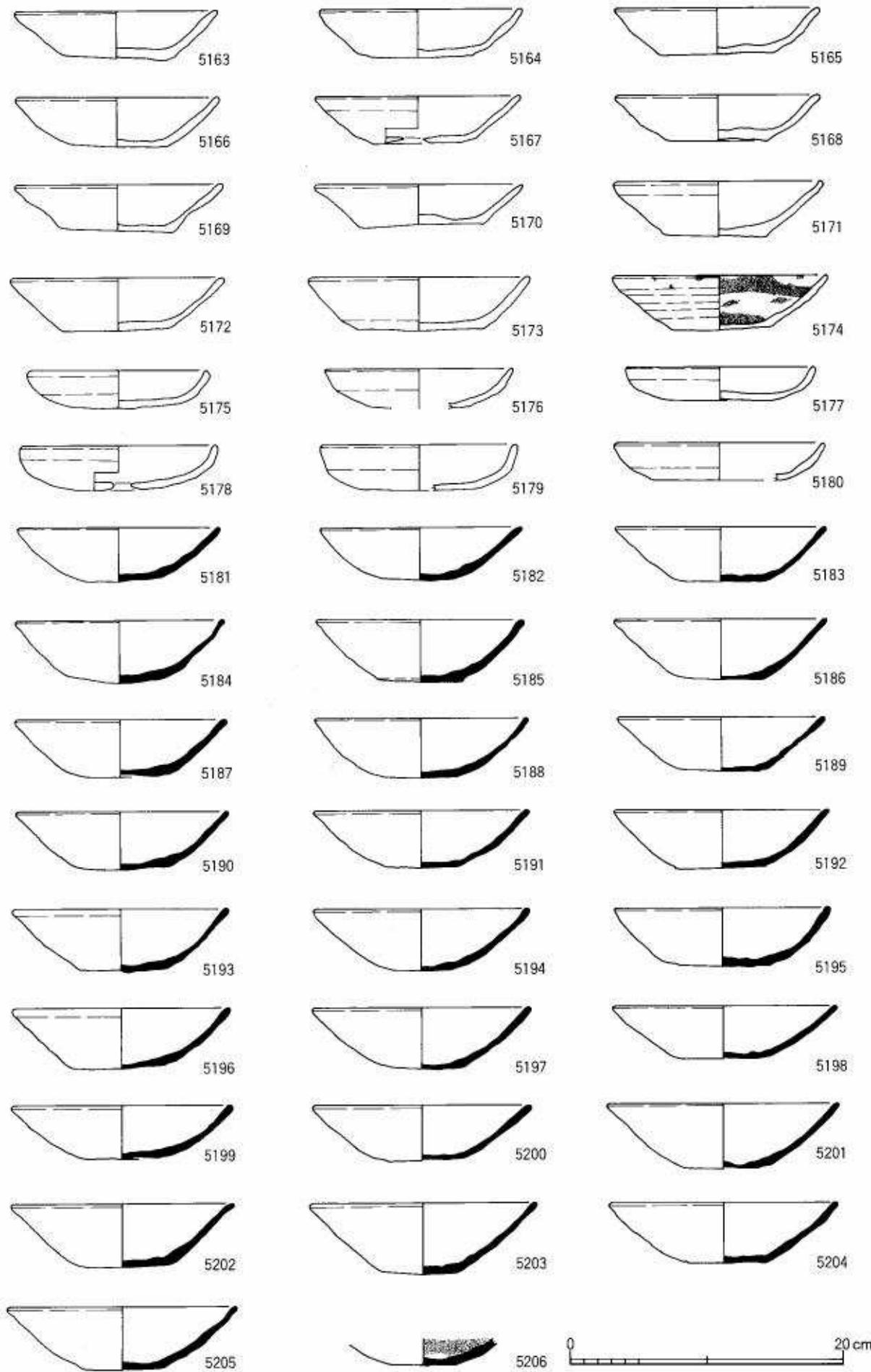


中世の遺物(1) 土器(1)

図版52

辻ヶ内地区

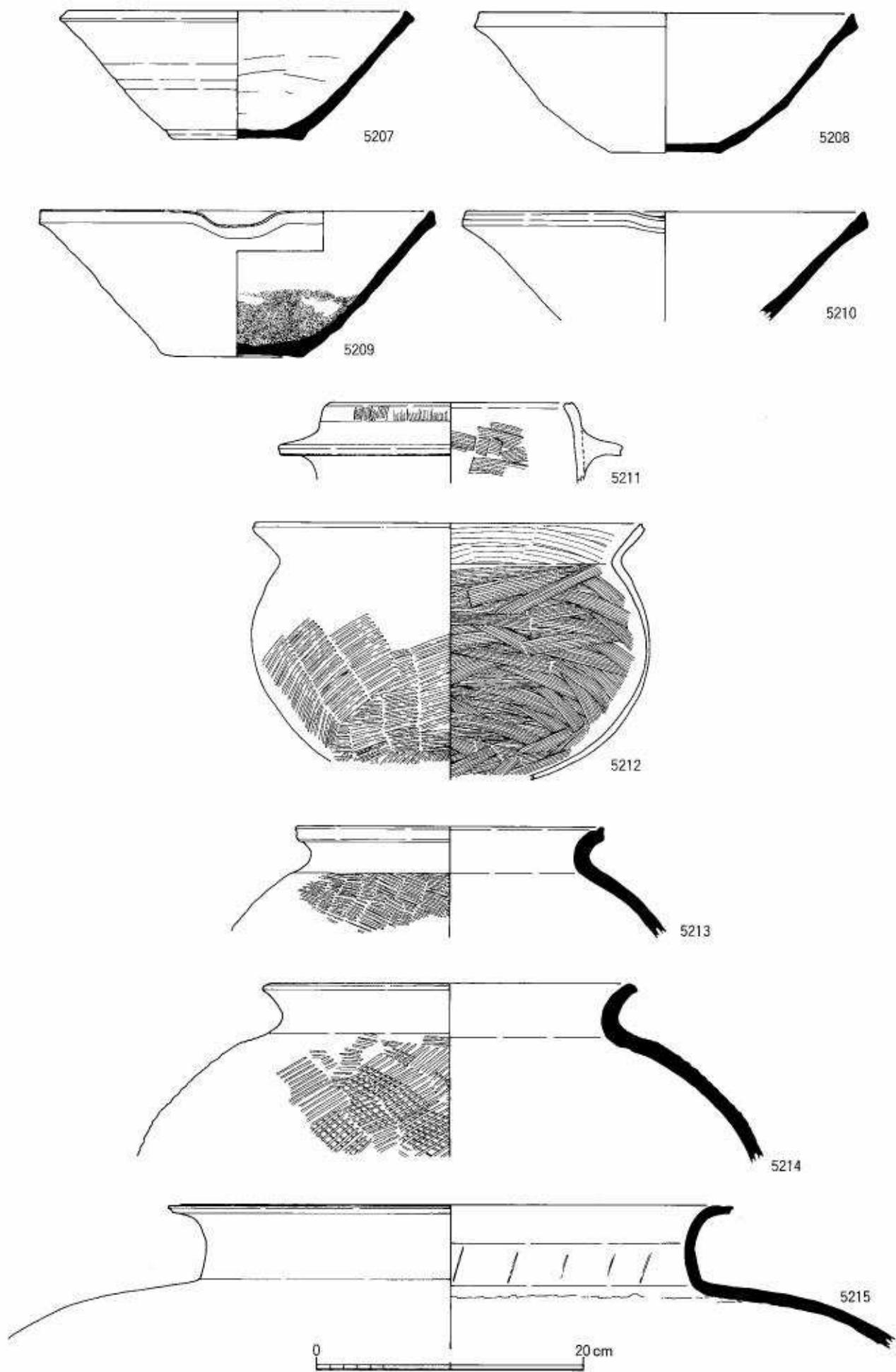
中世の遺物(2) 土器(2)
(SD85001) 5163~5206



辻ヶ内地区

図版53

中世の遺物(3) 土器(3)
(SD85001) 5207~5215

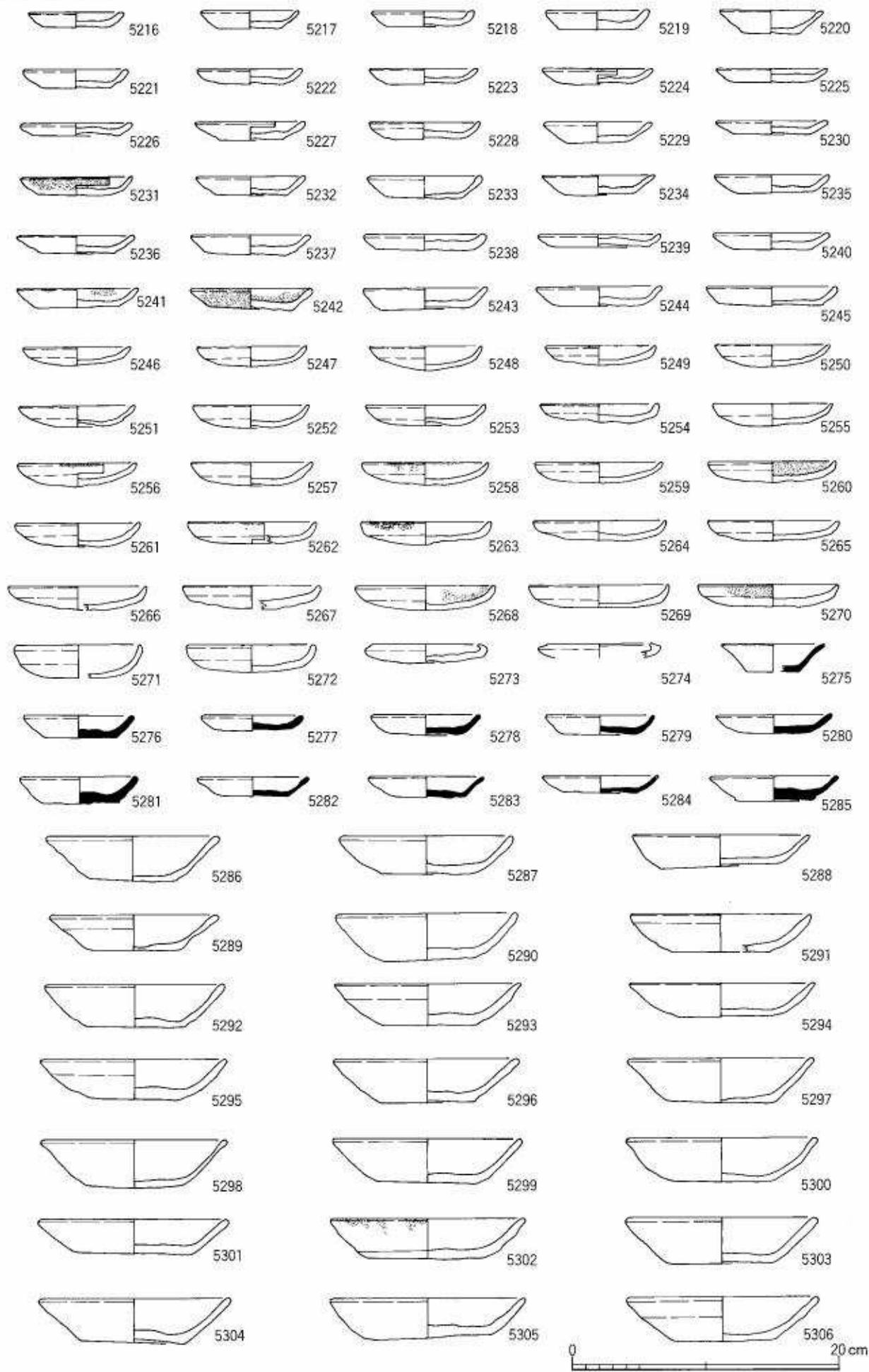


中世の遺物(3) 土器(3)

図版54

辻ヶ内地区

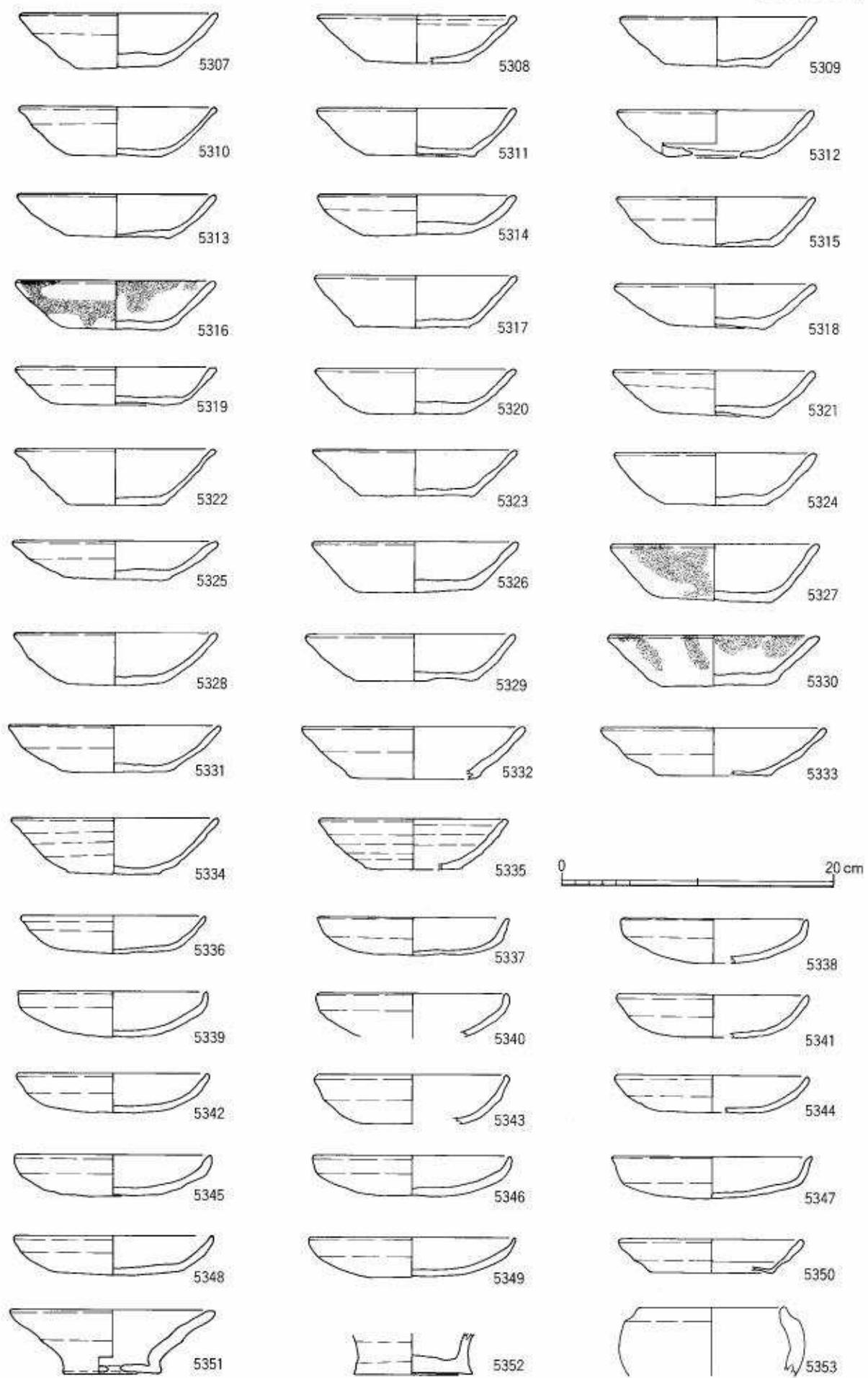
中世の遺物(4) 土器(4)
(SG85001) 5216~5306



辻ヶ内地区

図版55

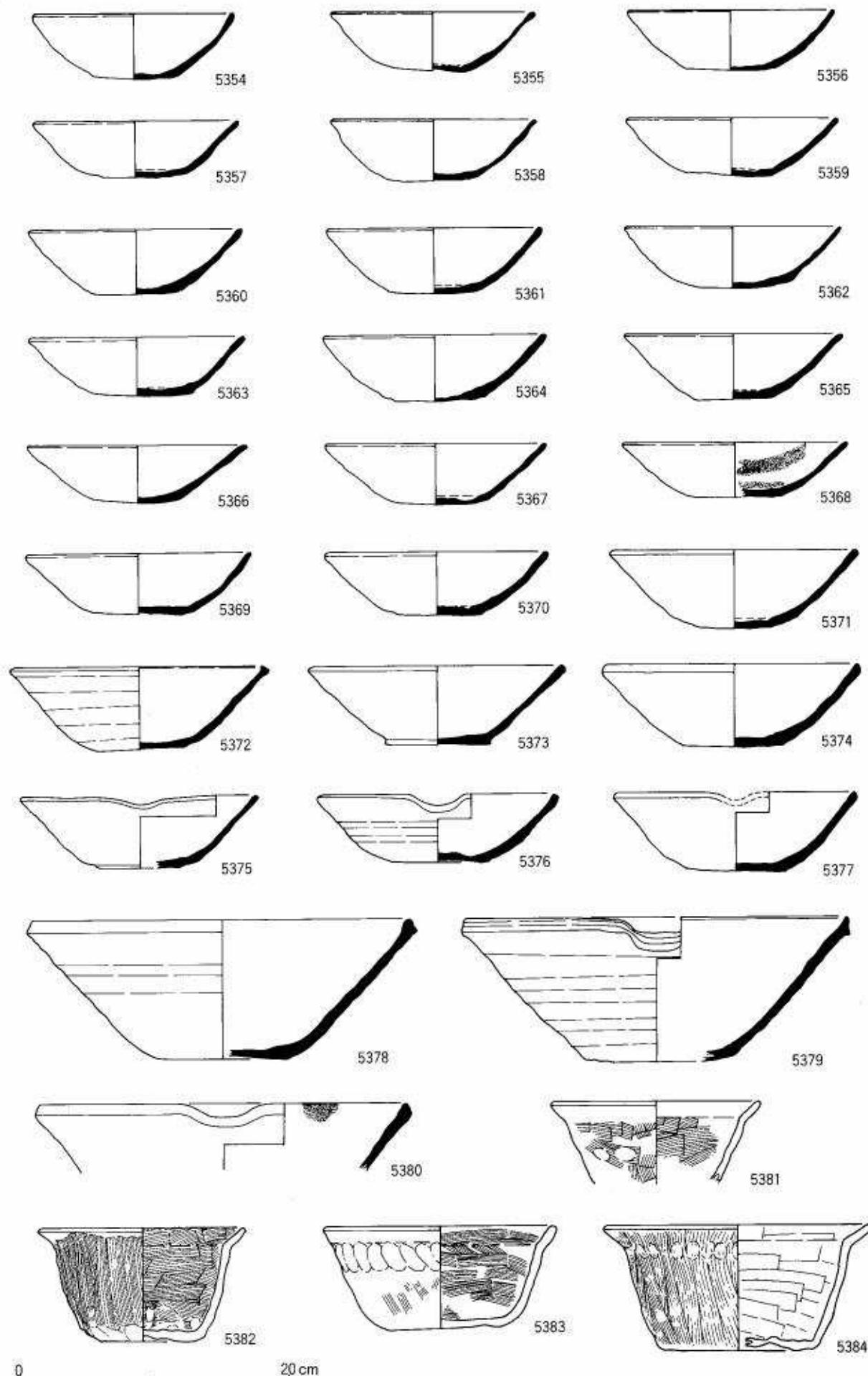
中世の遺物(5) 土器(5)
(SG85001) 5307~5353



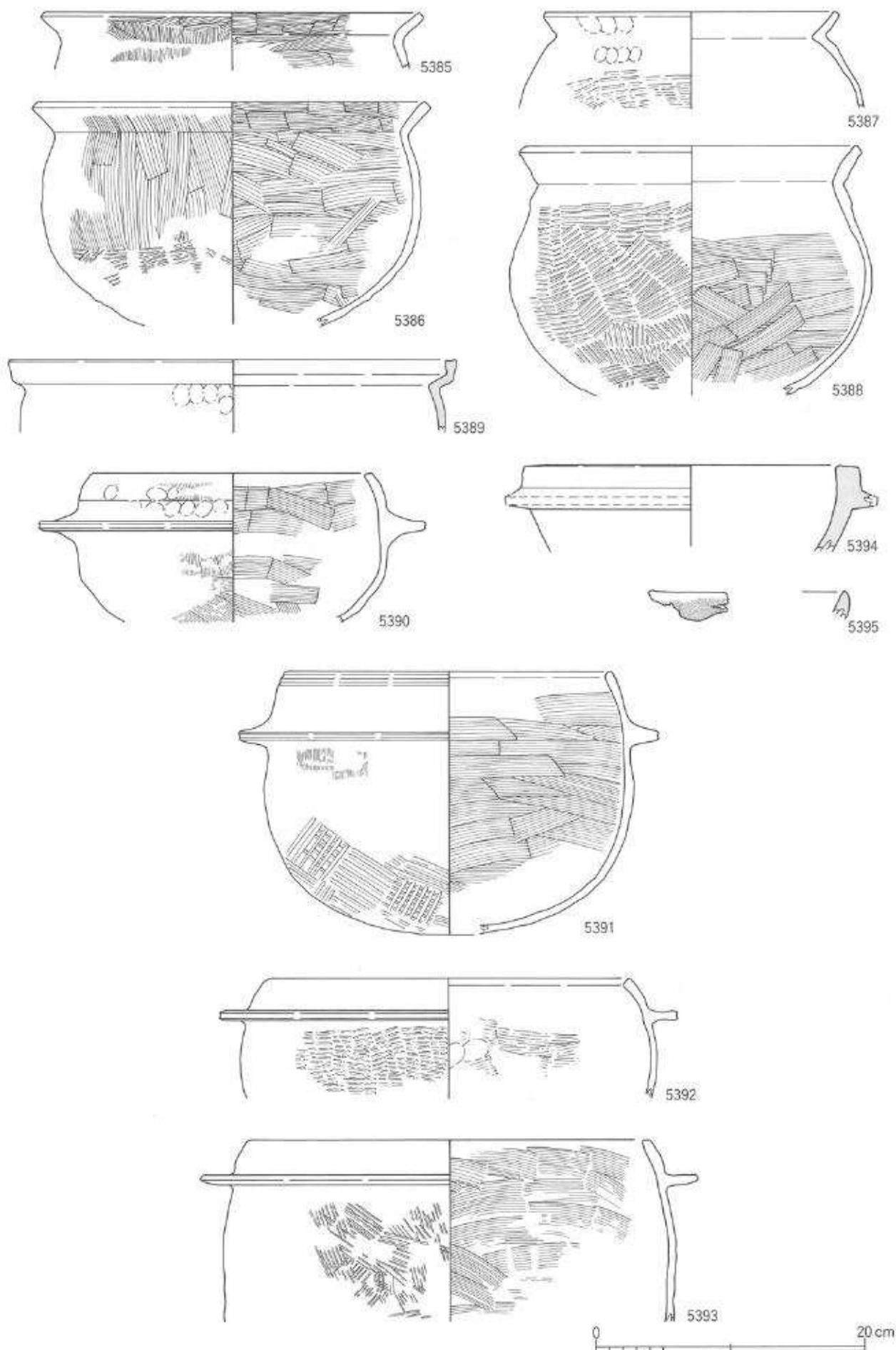
図版56

辻ヶ内地区

中世の遺物(6) 土器(6)
(SG85001) 5354~5384



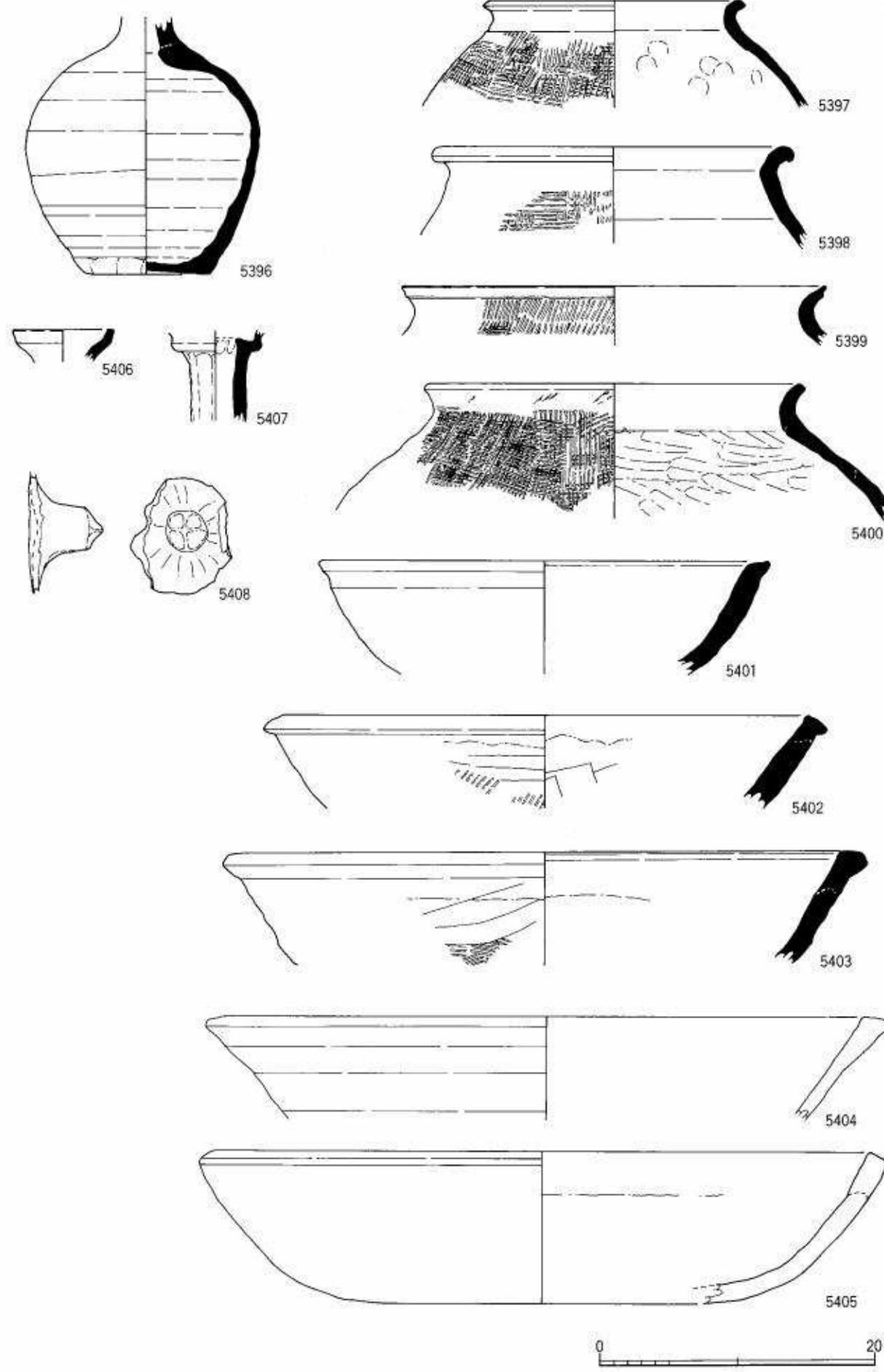
中世の遺物(7) 土器(7)
(SG85001) 5385~5395



図版58

辻ヶ内地区

中世の遺物(8) 土器(8)
(SG85001) 5396~5408

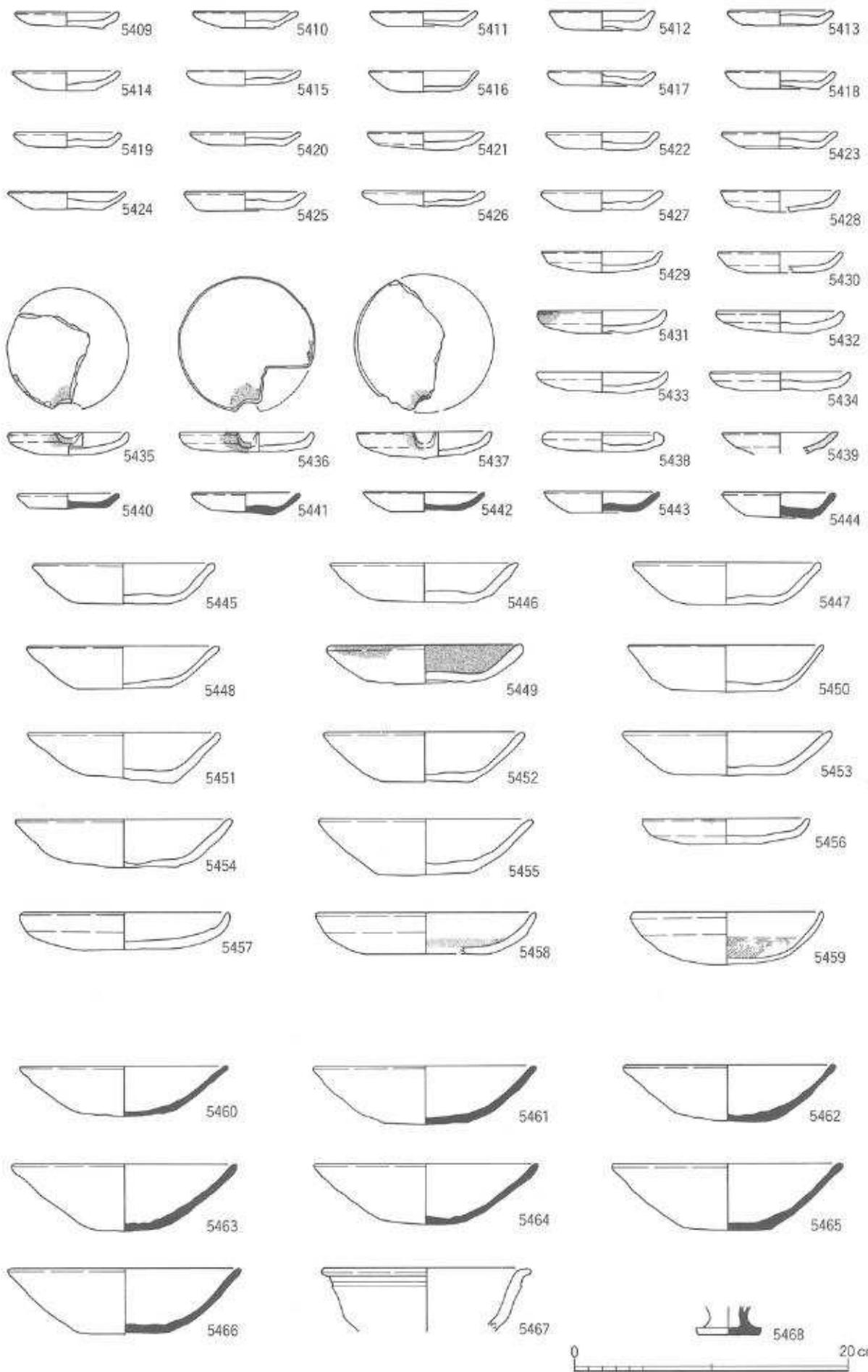


中世の遺物(8) 土器(8)

辻ヶ内地区

図版59

中世の遺物(9) 土器(9)
(SG85002) 5409~5468

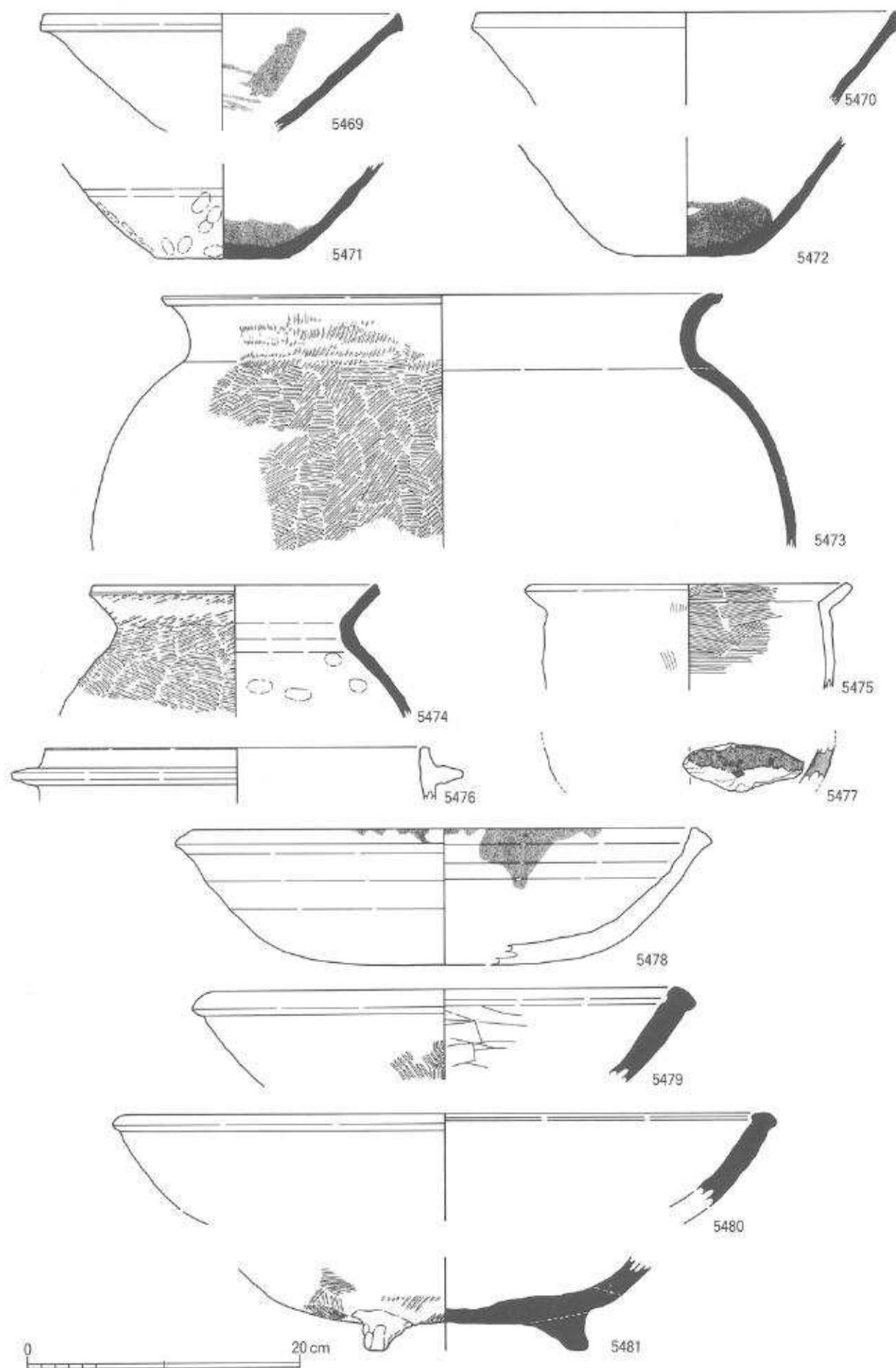


中世の遺物(9) 土器(9)

図版60

辻ヶ内地区

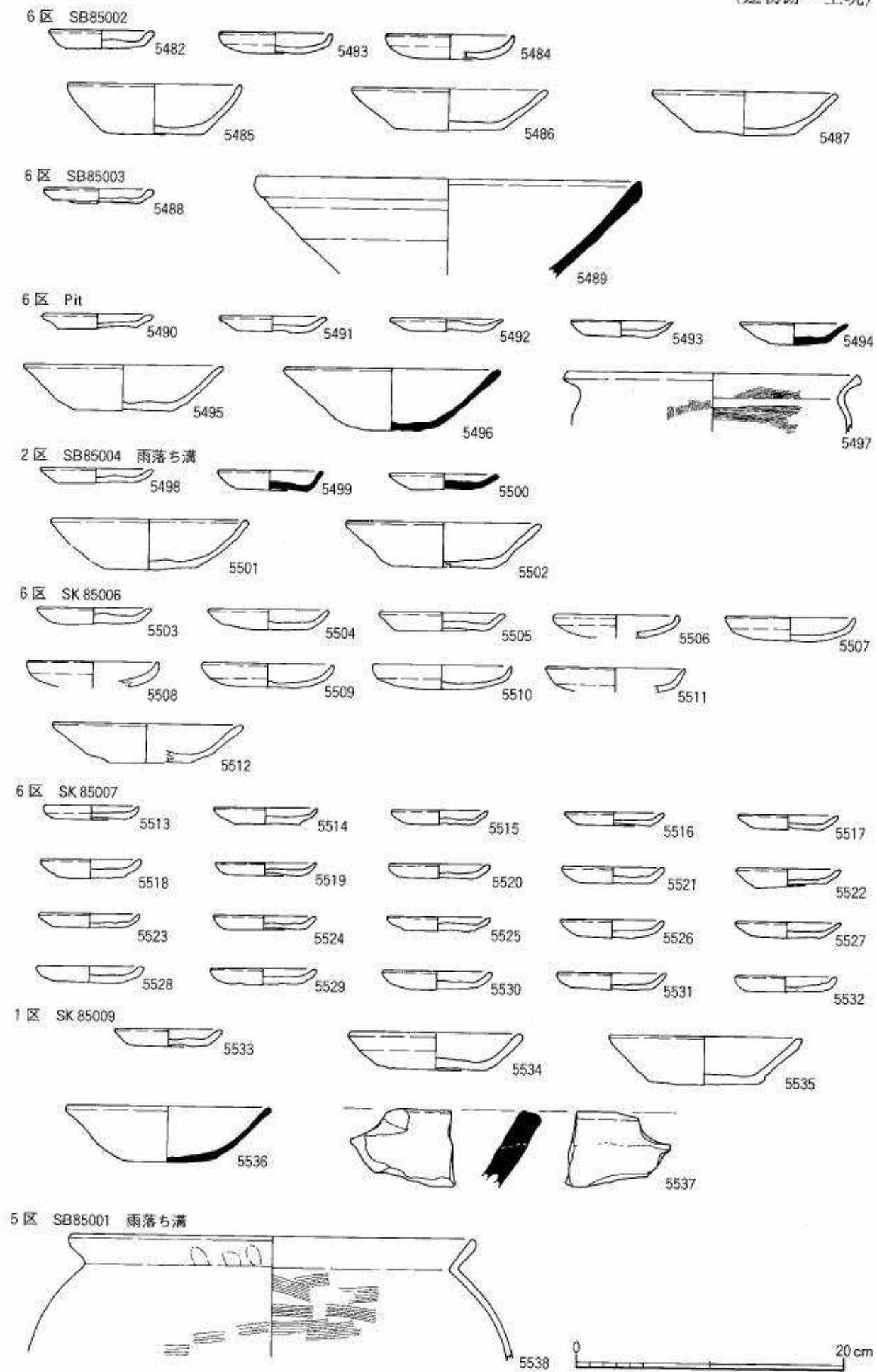
中世の遺物(10) 土器(10)
(SG85002) 5469~5481



辻ヶ内地区

図版61

中世の遺物(11) 土器(11)
(建物跡・土坑) 5482~5538



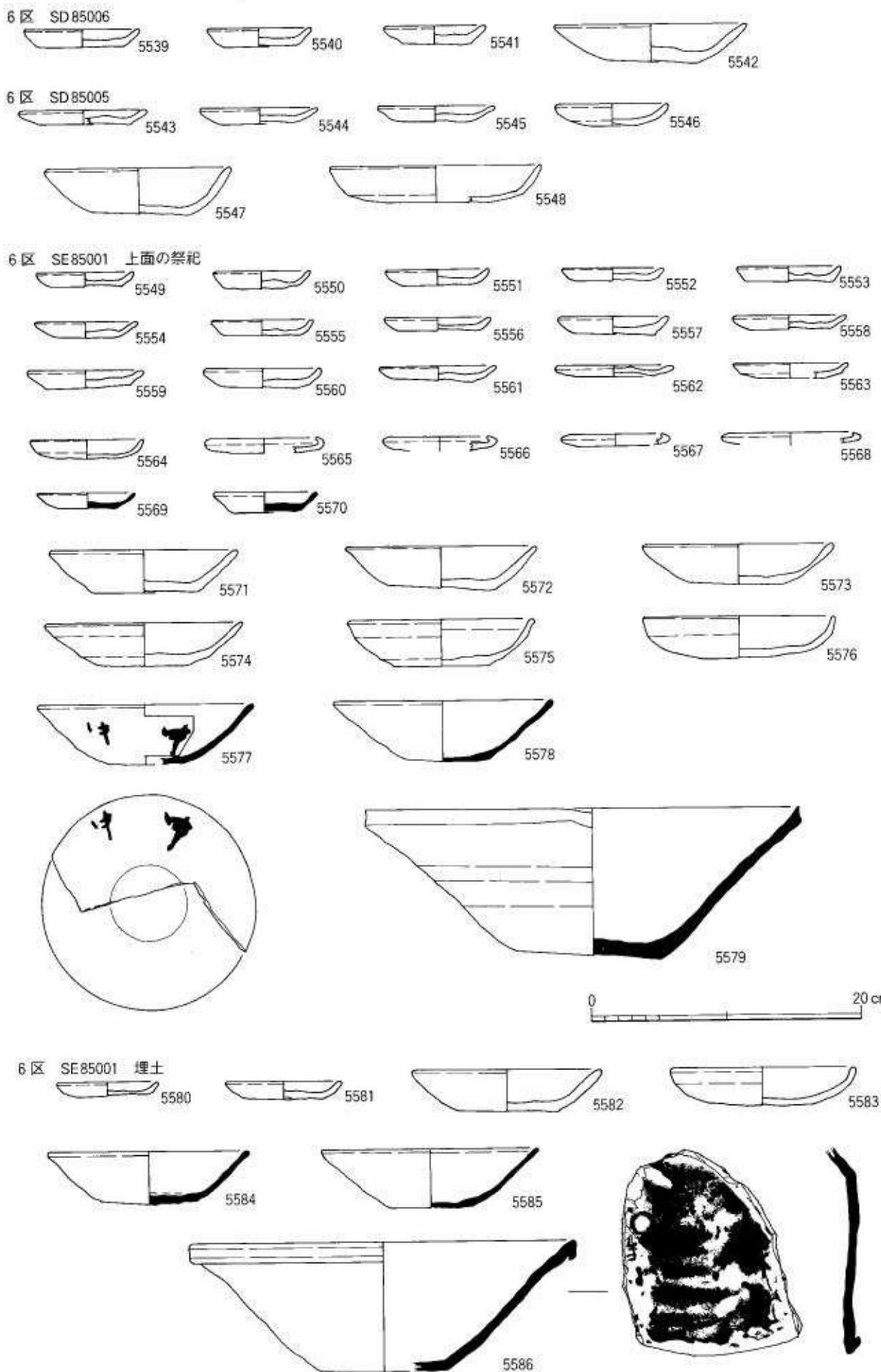
中世の遺物(11) 土器(11)

図版62

辻ヶ内地区

中世の遺物(12) 土器(12)

(溝・井戸) 5539~5586

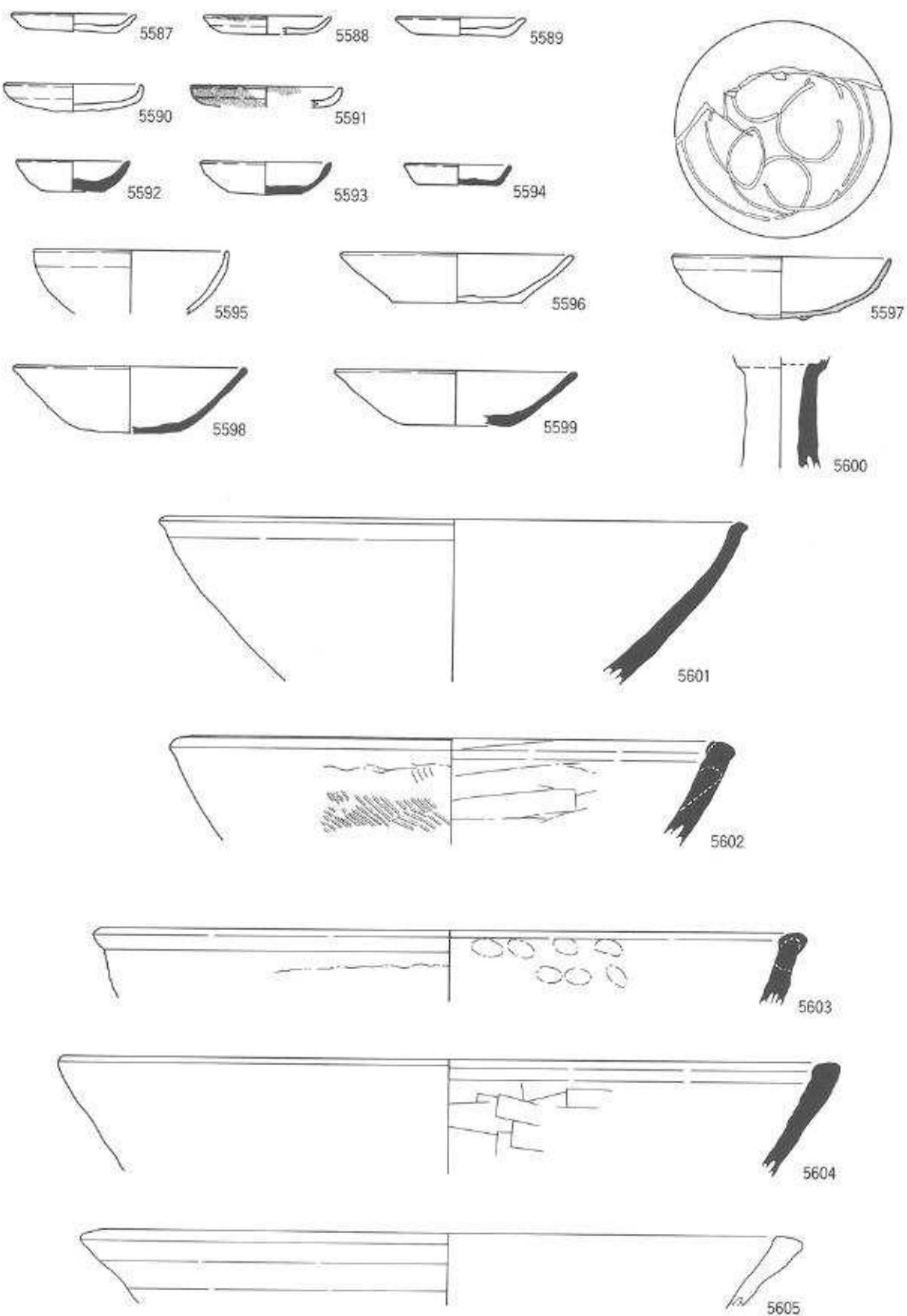


中世の遺物(12) 土器(12)

辻ヶ内地区

図版63

中世の遺物(13) 土器(13)
(包含層) 5587~5605



0 20 cm

中世の遺物(13) 土器(13)

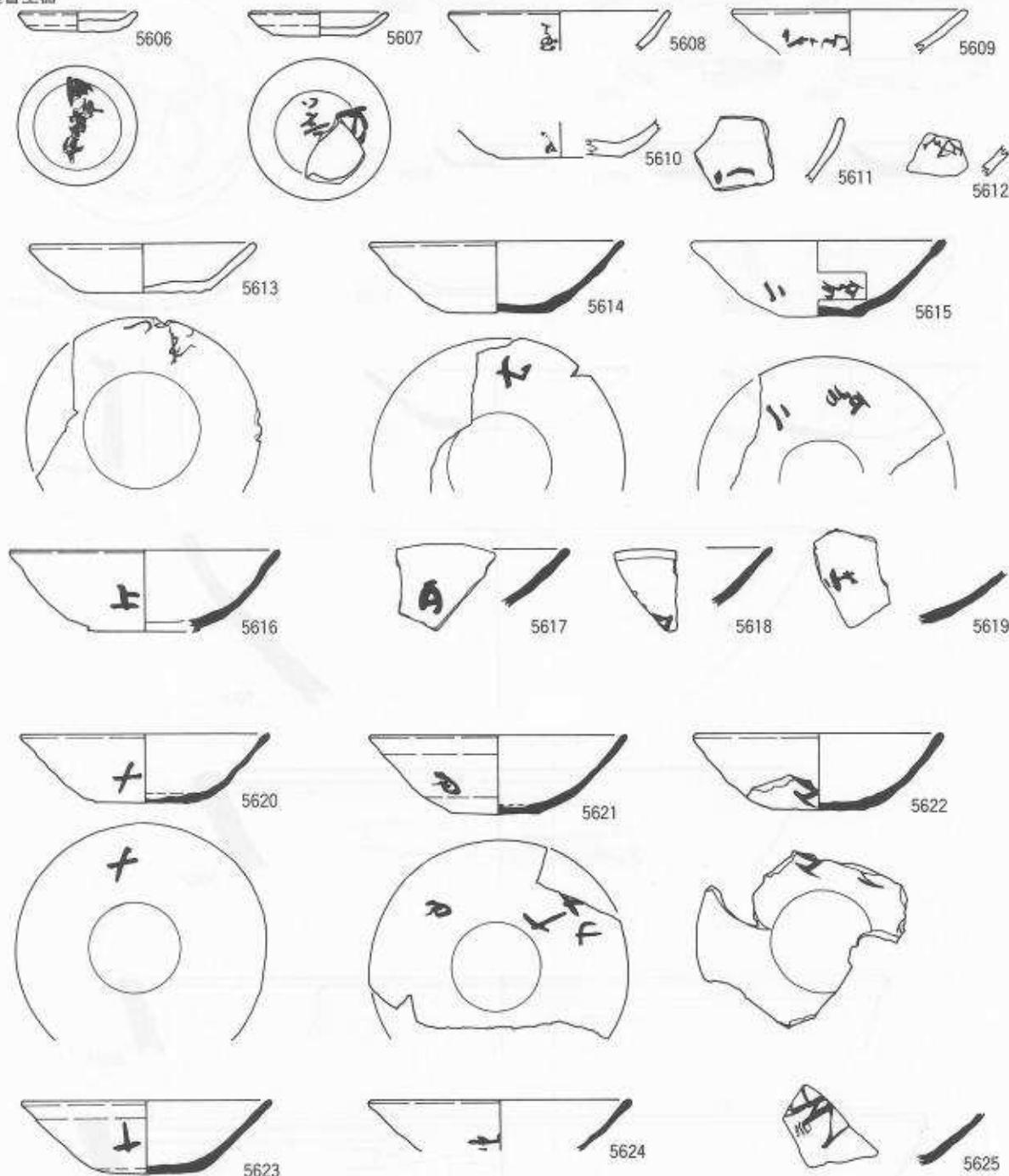
図版64

辻ヶ内地区

中世の遺物(14) 土器(14)

(墨書き土器・施釉陶器) 5606~5628

墨書き土器



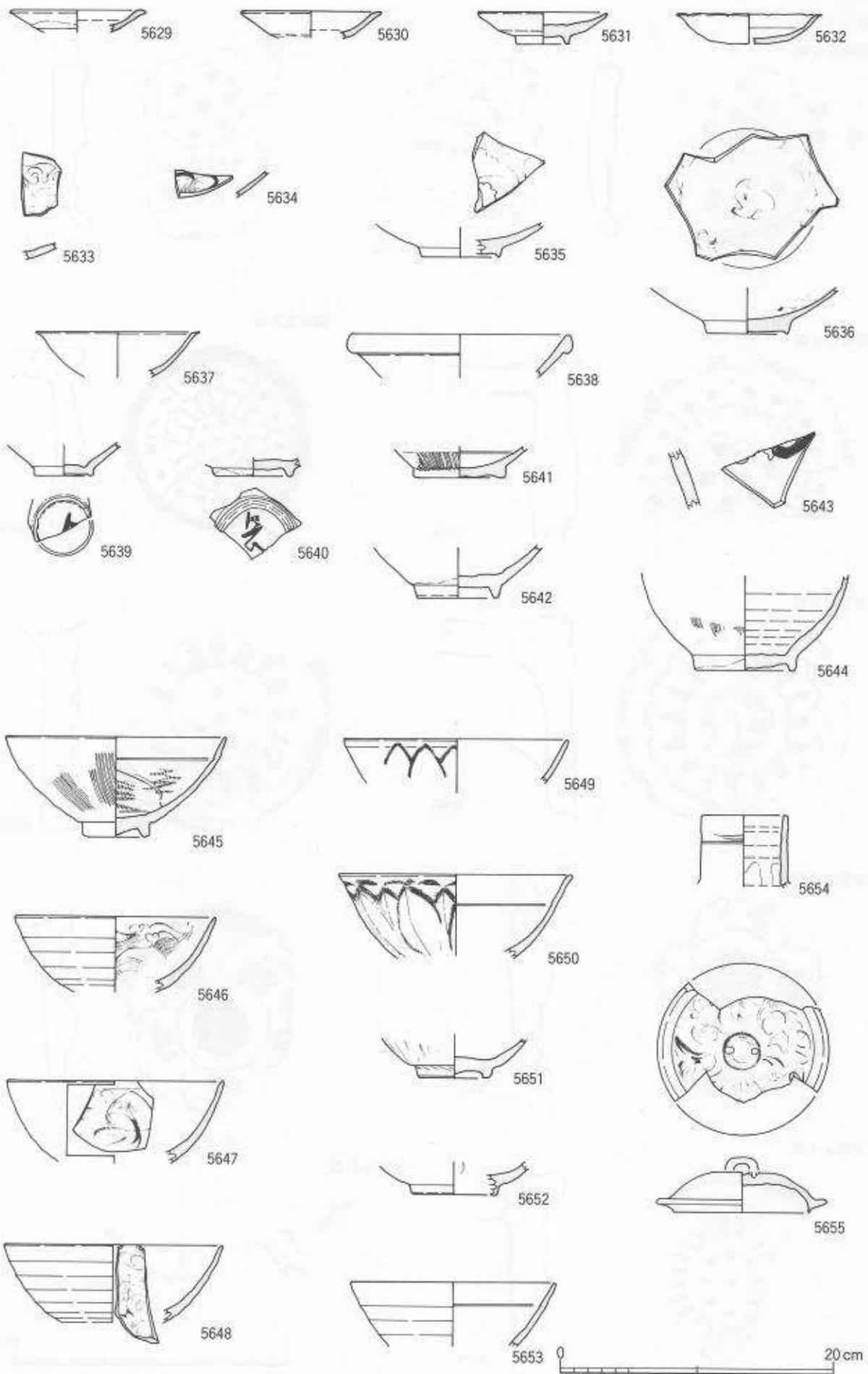
施釉陶器

0 20 cm

辻ヶ内地区

図版65

中世の遺物(15) 土器(15)
(中国製磁器) 5629~5655



図版66

辻ヶ内地区

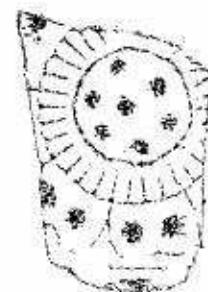
中世の遺物(16) 瓦(1)
(軒丸瓦) 5656~5665

軒丸瓦

蓮華文1類

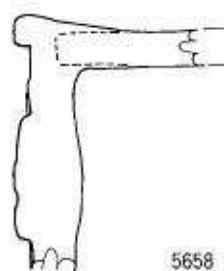
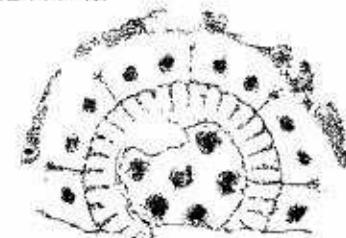


5656



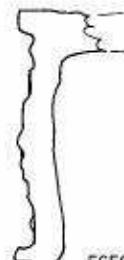
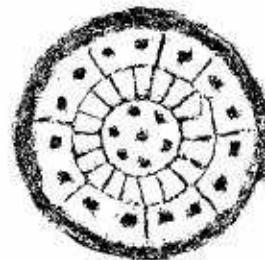
5657

蓮華文2類



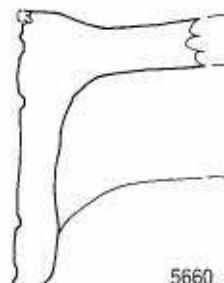
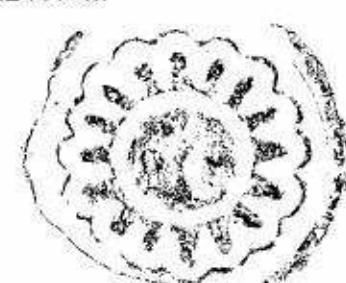
5658

蓮華文5類

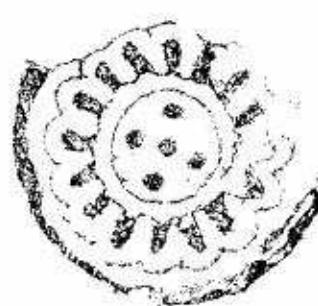


5659

蓮華文6類

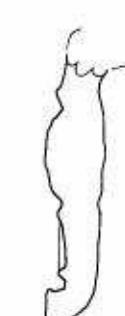
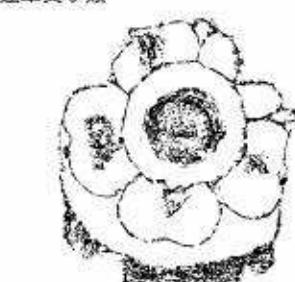


5660

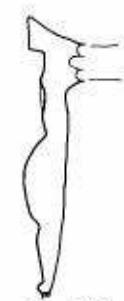
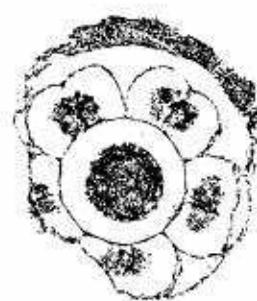


5661

蓮華文8類

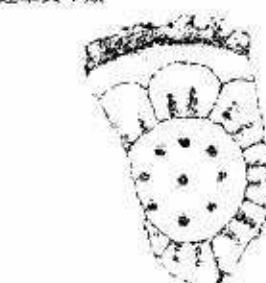


5662



5663

蓮華文4類



5664

蓮華文7類



5665

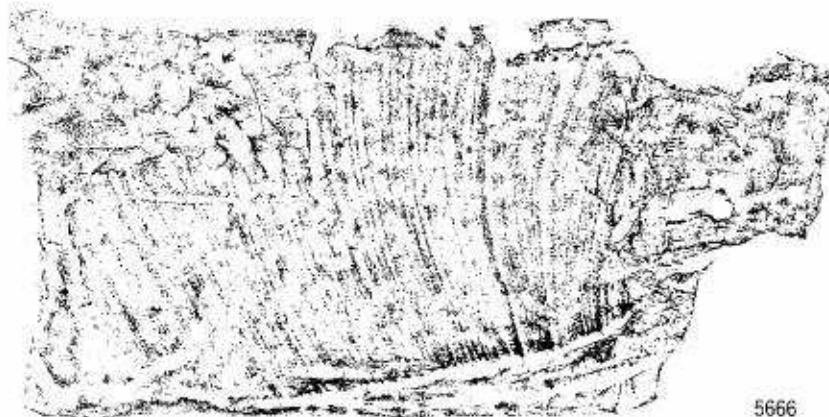
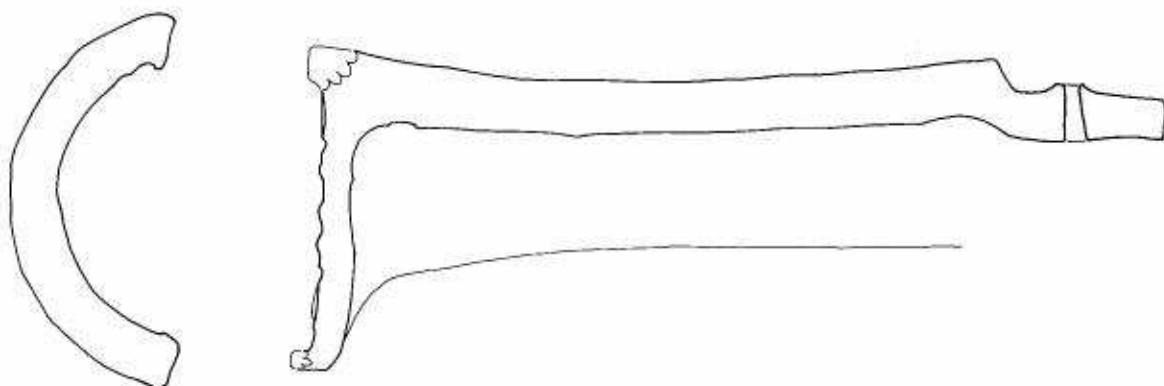
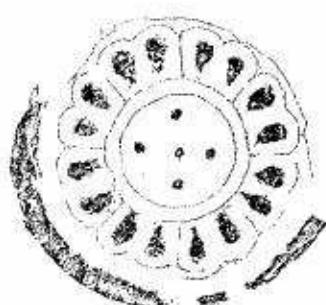


辻ヶ内地区

図版67

中世の遺物(17) 瓦(2)
(軒丸瓦) 5666

軒丸瓦
蓮華文 3種



5666



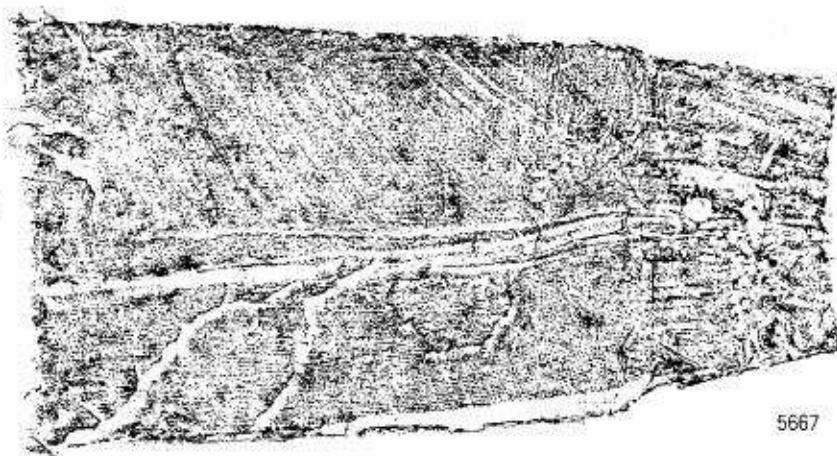
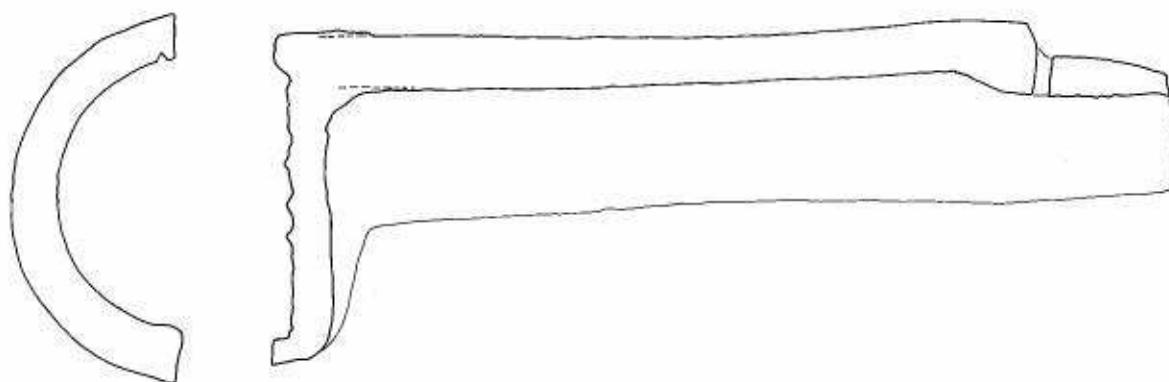
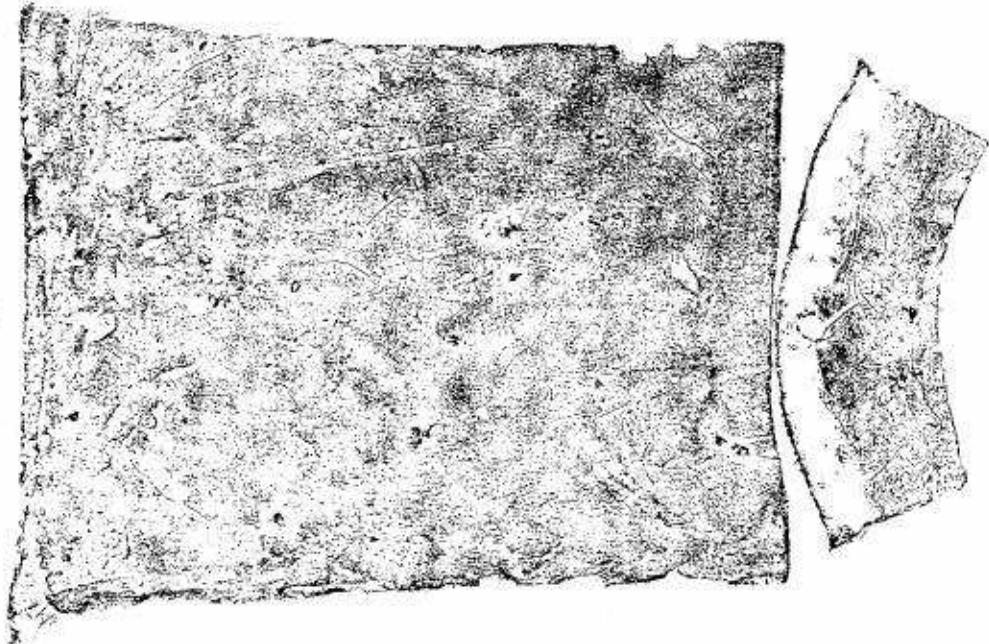
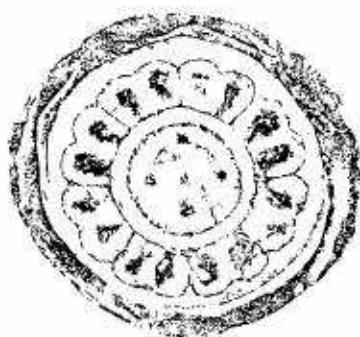
中世の遺物(17) 瓦(2)

図版68

辻ヶ内地区

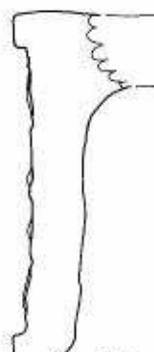
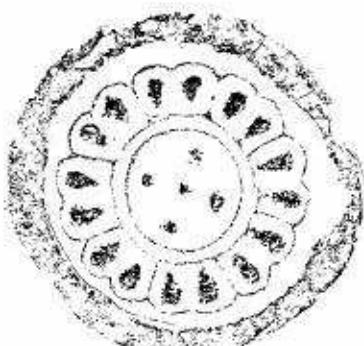
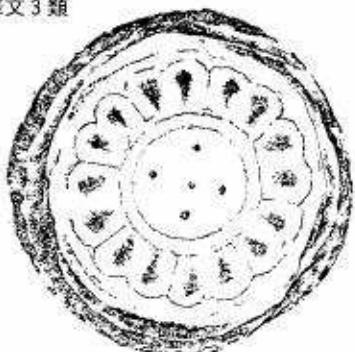
中世の遺物(18) 瓦(3)

(軒丸瓦) 5667



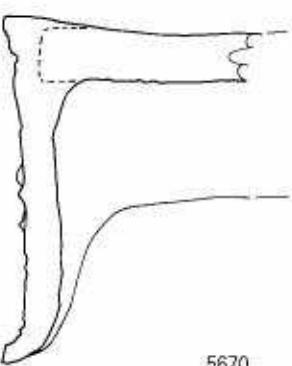
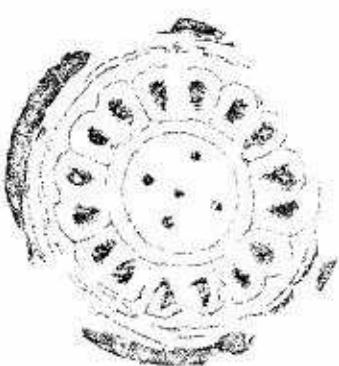
中世の遺物(19) 瓦(4)
(軒丸瓦) 5668~5672

軒丸瓦
蓮華文 3類



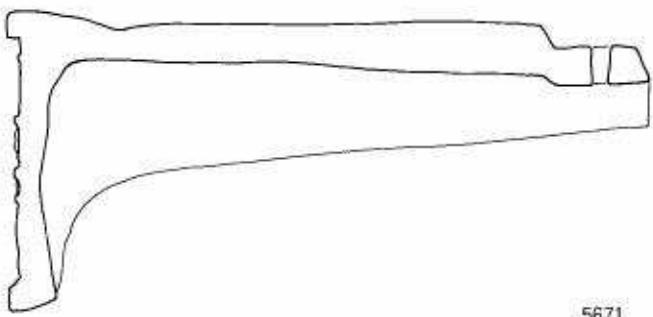
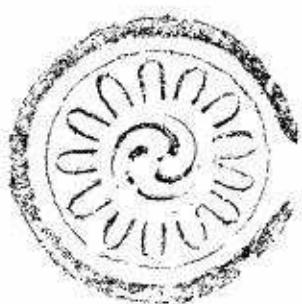
5668

5669

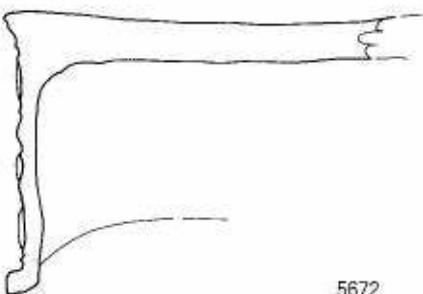


5670

蓮華文 9類



5671



5672

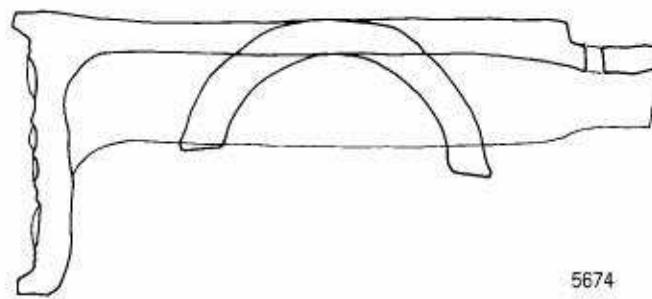
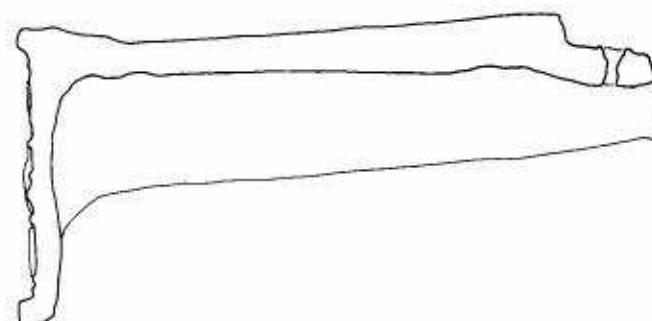
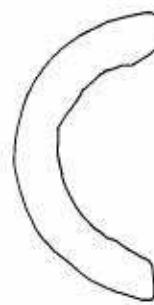
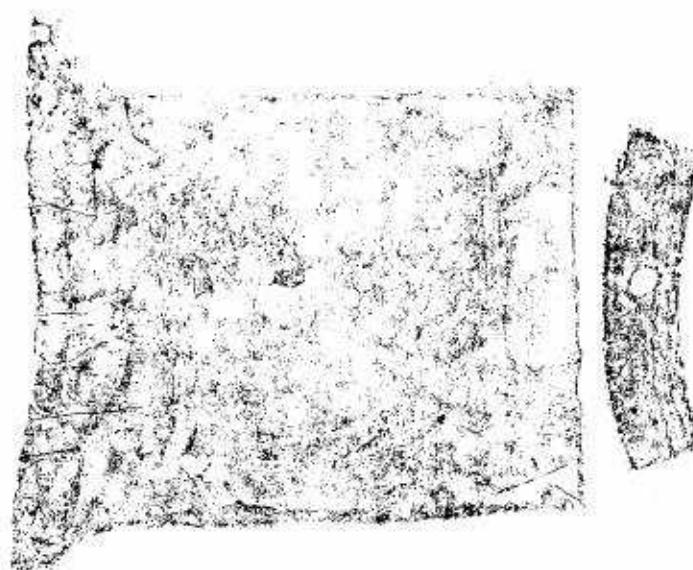
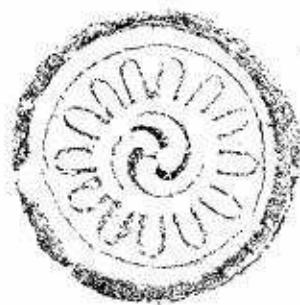


図版70

辻ヶ内地区

中世の遺物(20) 瓦(5)
(軒丸瓦) 5673~5674

軒丸瓦
蓮華文 9 類



5674



辻ヶ内地区

図版71

中世の遺物(21) 瓦(6)
(軒丸瓦) 5675~5683

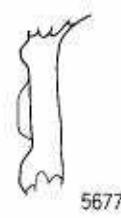
軒丸瓦
巴文1類



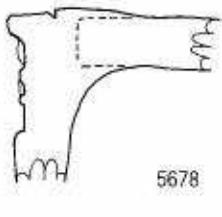
巴文2類



巴文3類



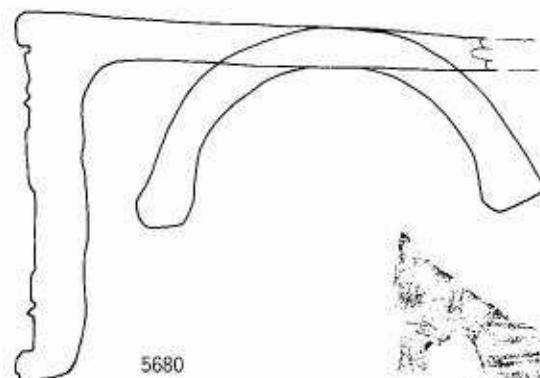
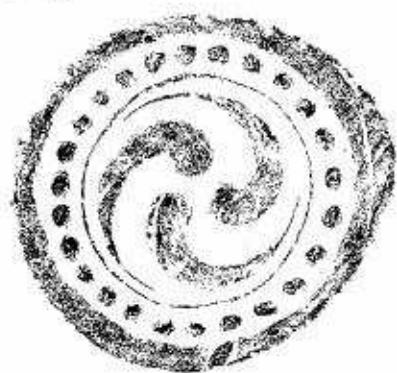
巴文4類



巴文5類

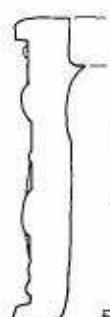


巴文6類

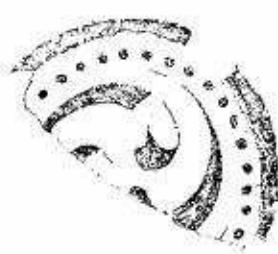
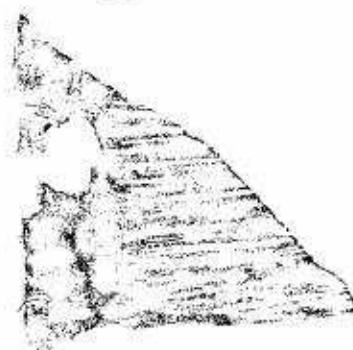


5680

巴文7類



5681



5682



5683



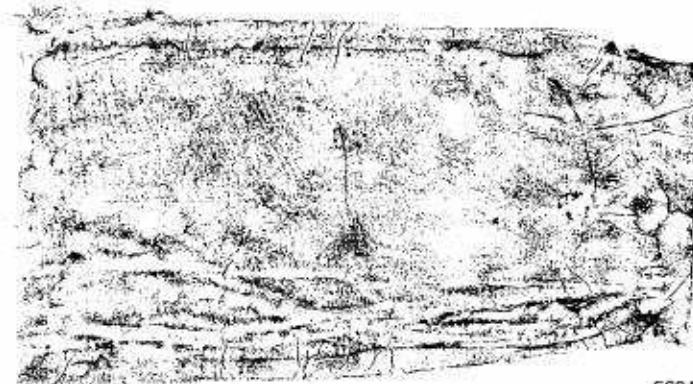
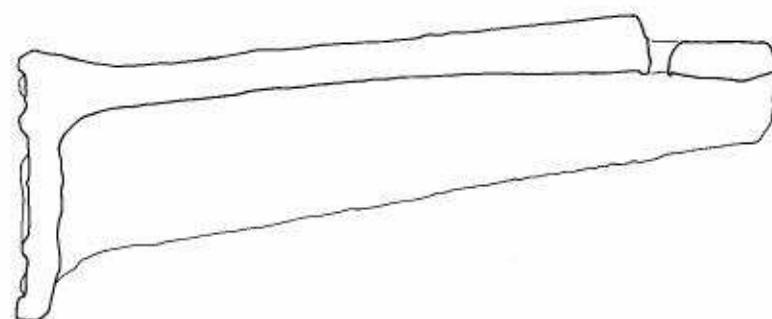
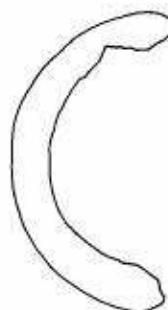
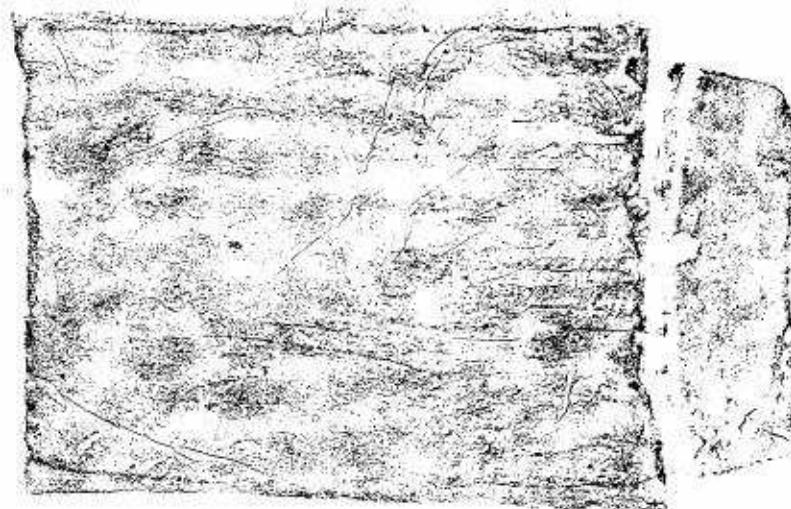
中世の遺物(21) 瓦(6)

図版72

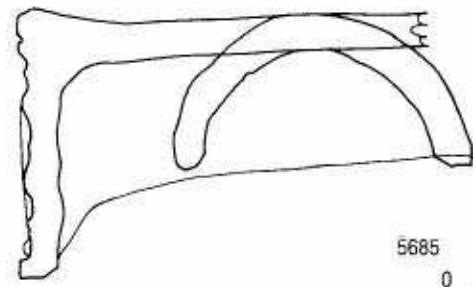
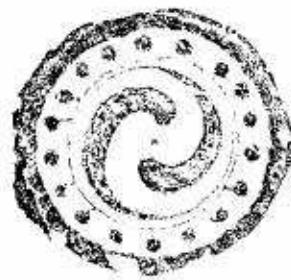
辻ヶ内地区

中世の遺物(22) 瓦(7)
(軒丸瓦) 5684~5685

軒丸瓦
巴文8類



5684



5685

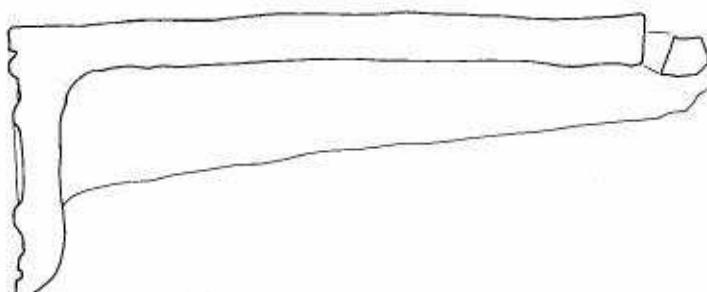
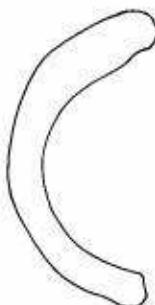
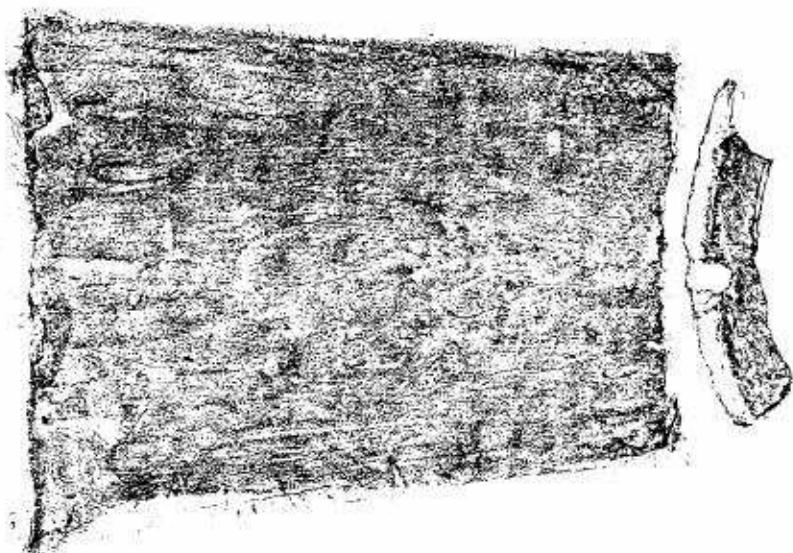
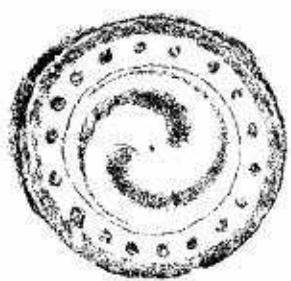


辻ヶ内地区

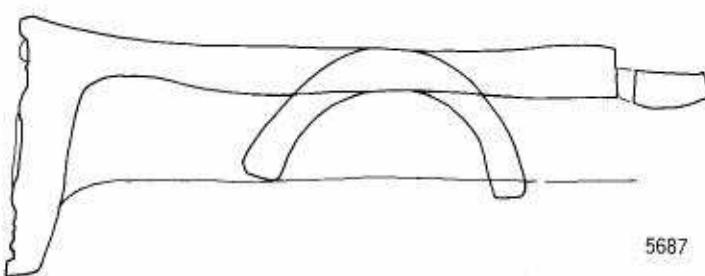
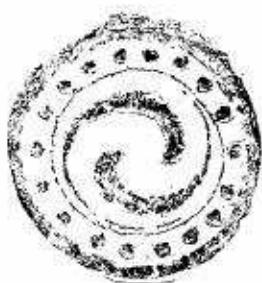
図版73

中世の遺物(23) 瓦(8)
(軒丸瓦) 5686~5687

軒丸瓦
巴文8類



5686



5687



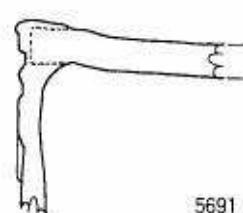
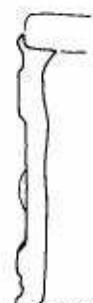
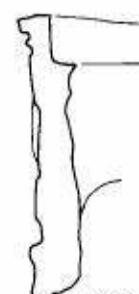
中世の遺物(23) 瓦(8)

図版74

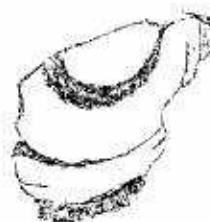
辻ヶ内地区

中世の遺物(24) 瓦(9)
(軒丸瓦) 5688~5697

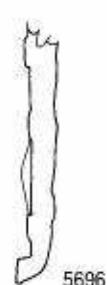
軒丸瓦
巴文9類



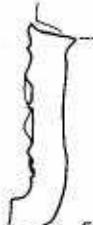
巴文10類



巴文11類

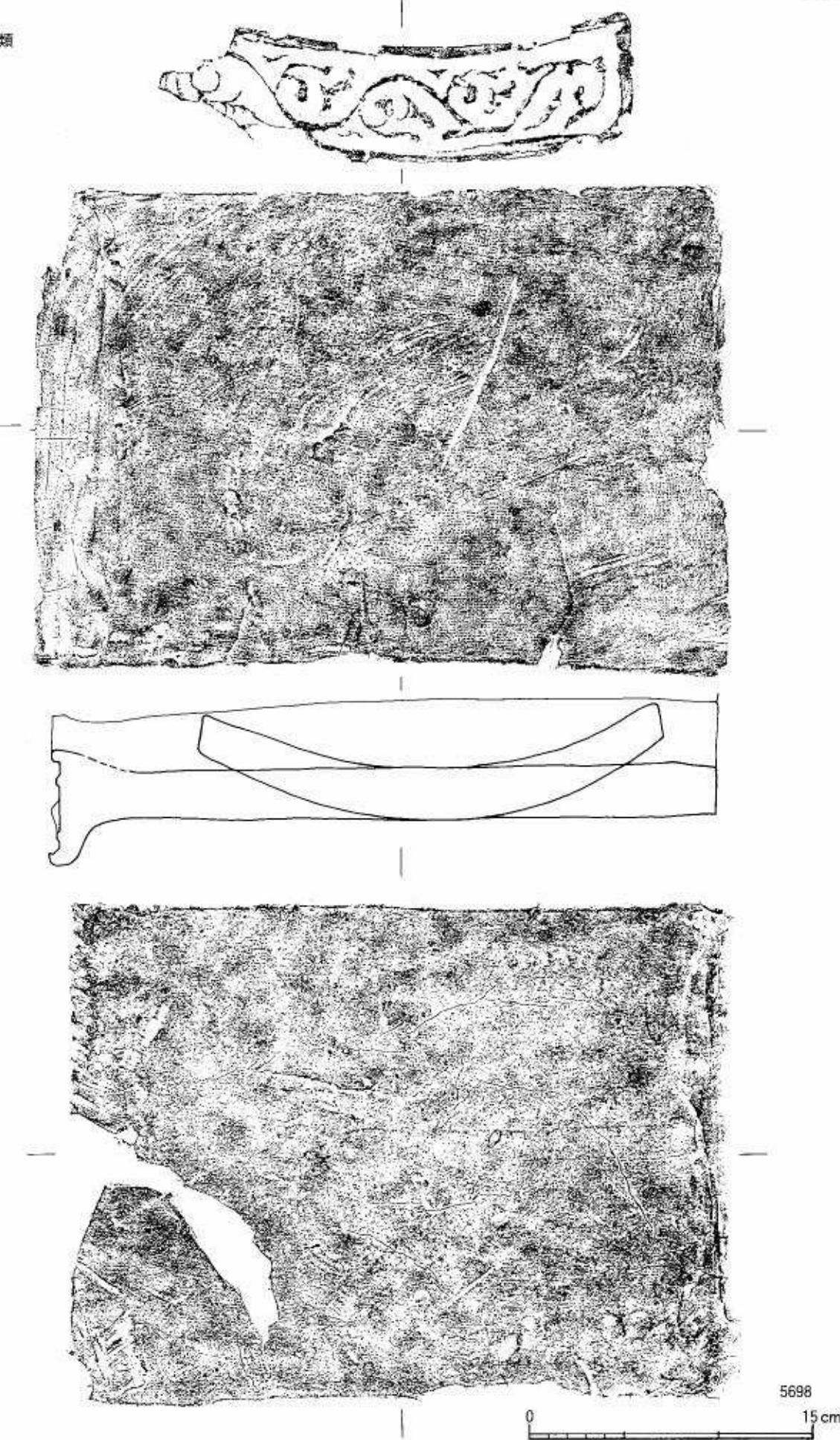


巴文12類



中世の遺物(25) 瓦(10)
(軒平瓦) 5698

軒平瓦
唐草文1類



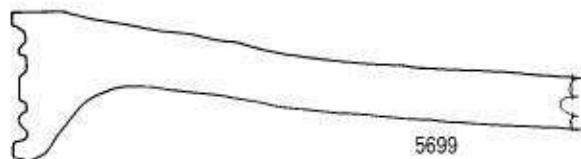
図版76

辻ヶ内地区

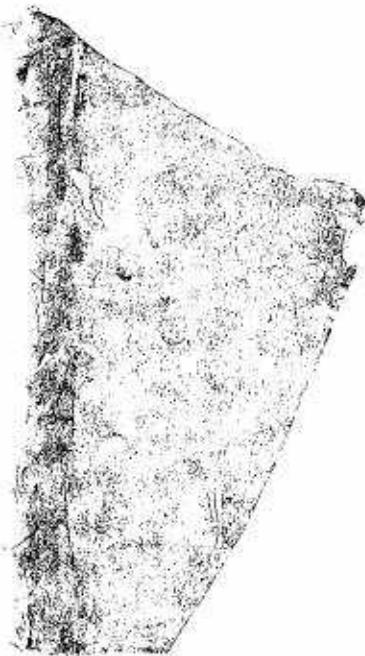
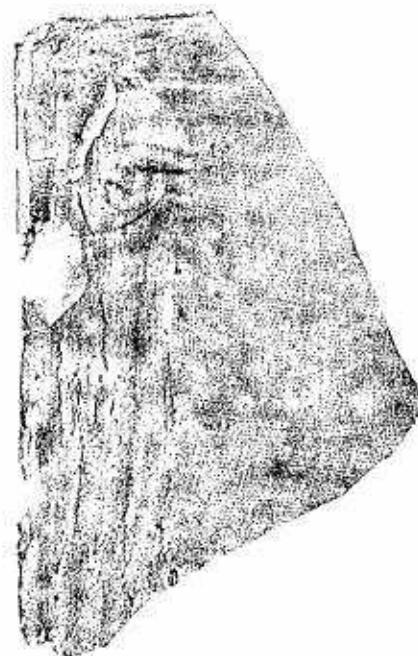
中世の遺物(26) 瓦(11)

(軒平瓦) 5699~5703

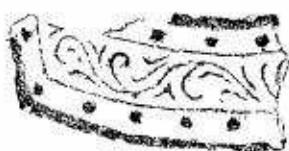
軒平瓦
唐草文1類



唐草文2類



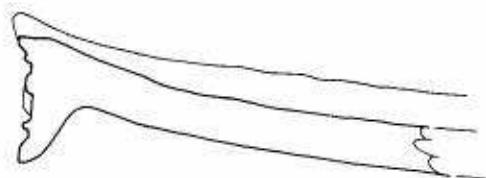
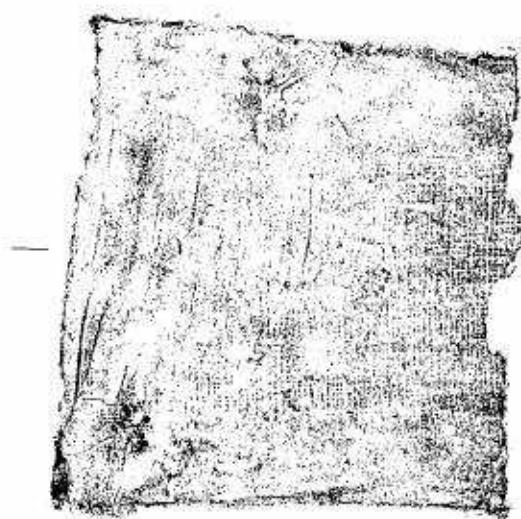
唐草文3類



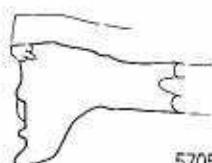
唐草文4類



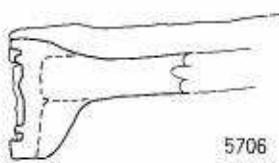
軒平瓦
唐草文5-a類



5704

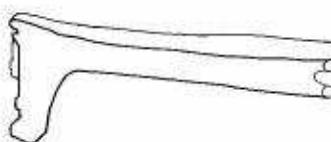


5705

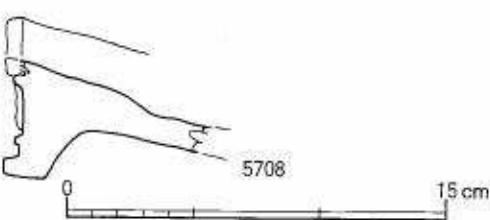


5706

唐草文5-b類



5707



5708

15 cm

図版78

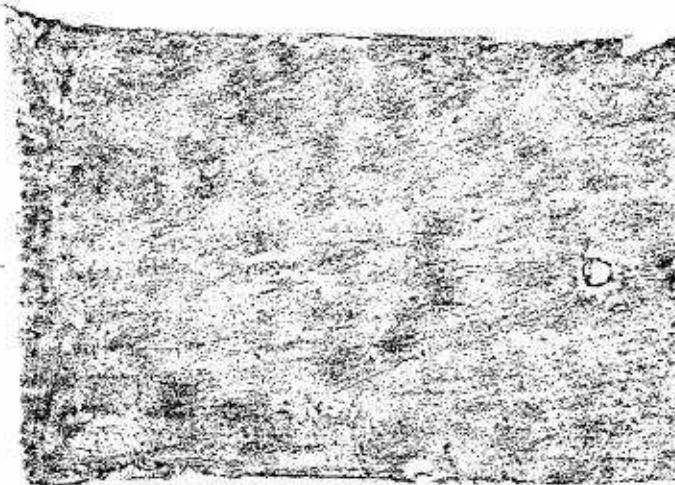
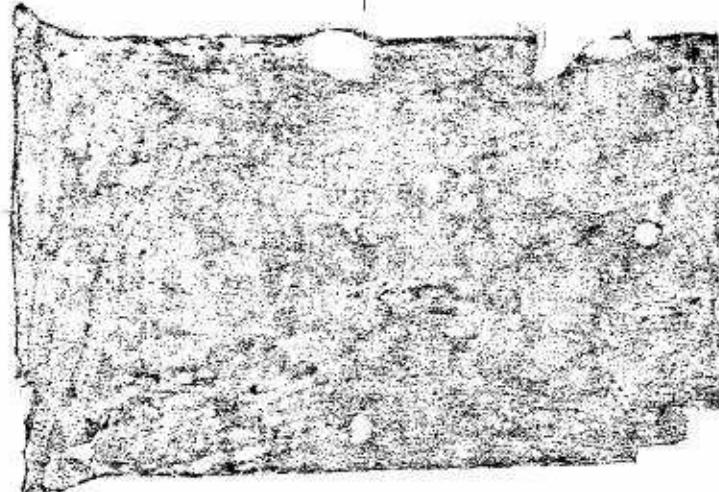
辻ヶ内地区

中世の遺物(28) 瓦(13)

(軒平瓦) 5709~5710

軒平瓦

唐草文5-b類



5709



5710



中世の遺物(28) 瓦(13)

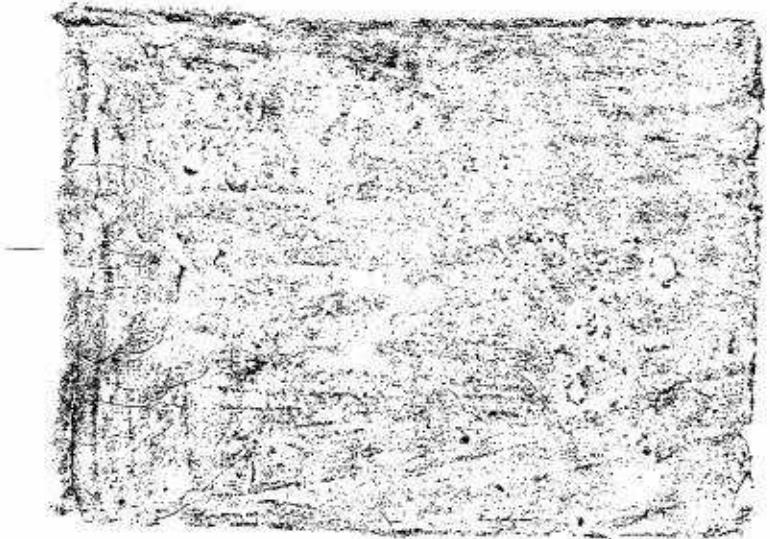
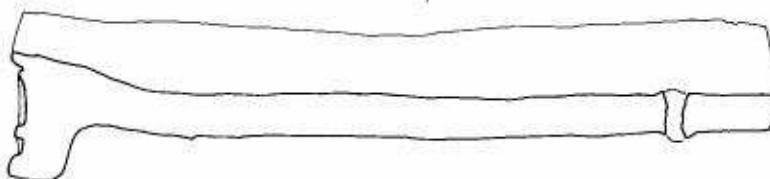
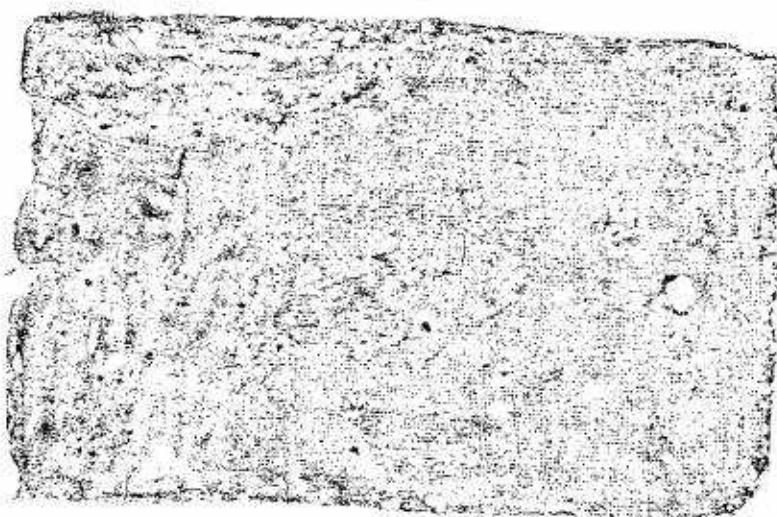
辻ヶ内地区

図版79

中世の遺物(29) 瓦(14)

(軒平瓦) 5711

軒平瓦
唐草文5-b類



5711



中世の遺物(29) 瓦(14)

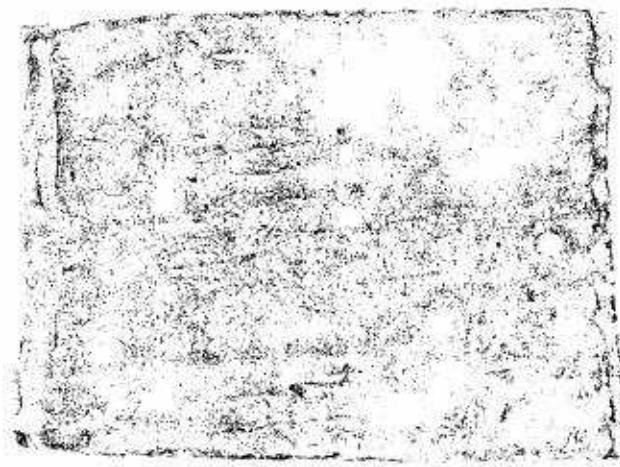
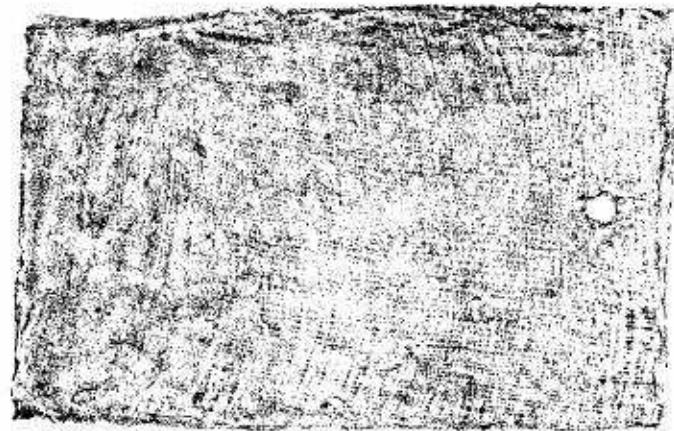
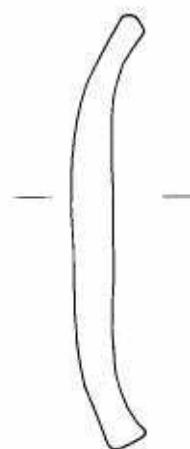
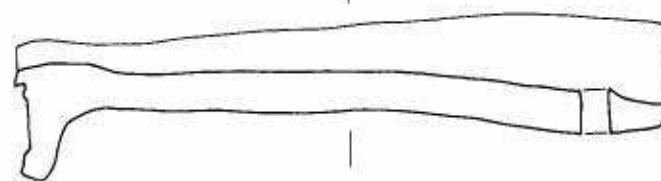
図版80

辻ヶ内地区

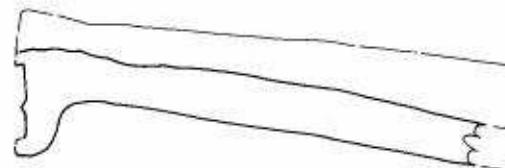
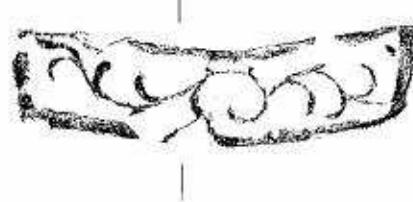
中世の遺物(30) 瓦(15)

(軒平瓦) 5712~5716

軒平瓦
唐草文 6類



5712

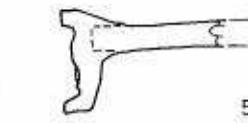


5713

唐草文 7類



5714



5715



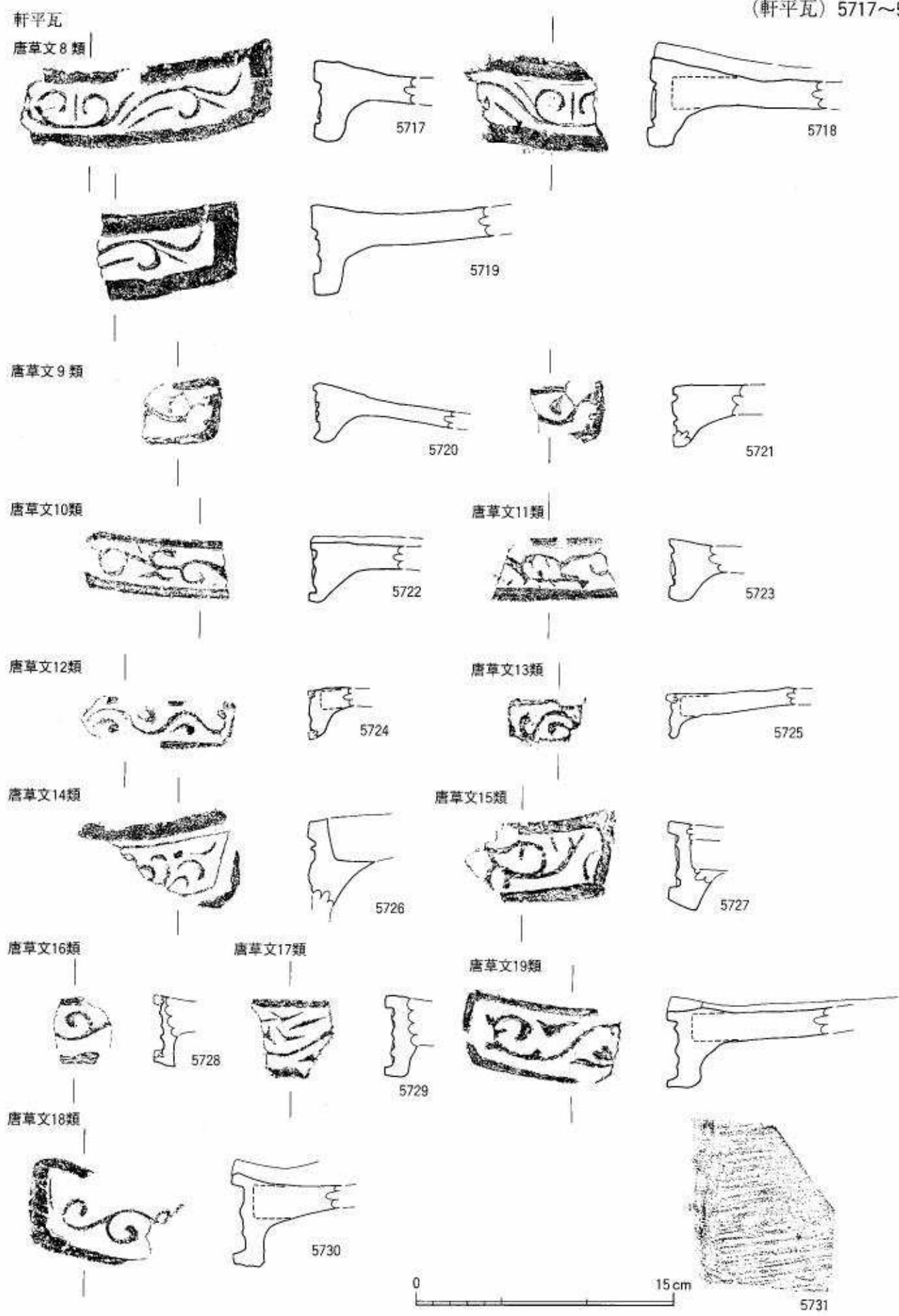
5716



辻ヶ内地区

図版81

中世の遺物(31) 瓦(16)
(軒平瓦) 5717~5731



0 15 cm

中世の遺物(31) 瓦(16)

図版82

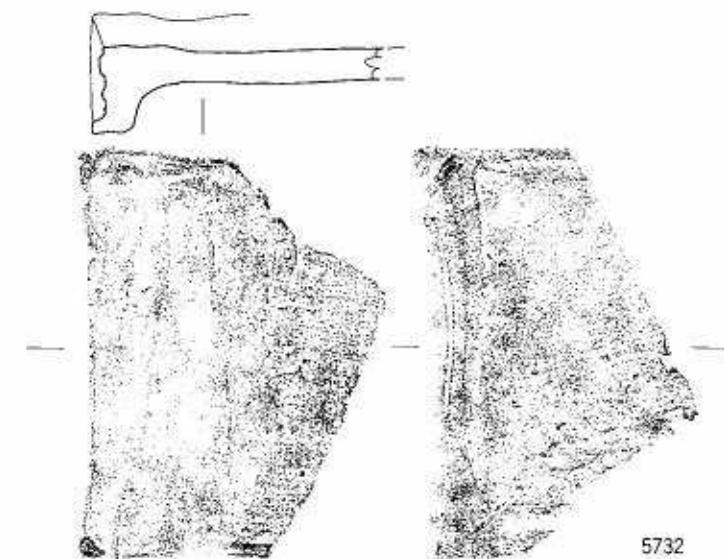
辻ヶ内地区

中世の遺物(32) 瓦(17)

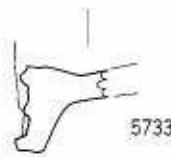
(軒平瓦) 5732~5739

軒平瓦

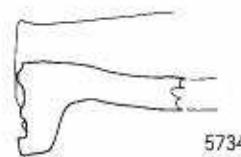
唐草文20類



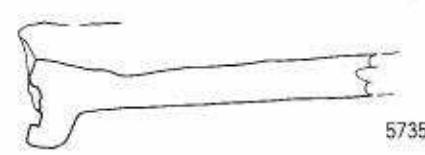
5732



5733



5734



5735

唐草文21類



5736

5737

5738



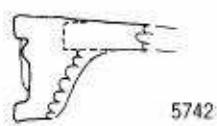
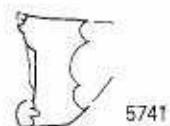
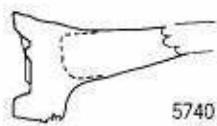
5739



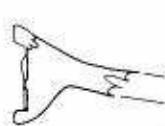
中世の遺物(33) 瓦(18)
(軒平瓦) 5740~5749

軒平瓦

半截華文1類



半截華文2類



半截華文3類



劍頭文



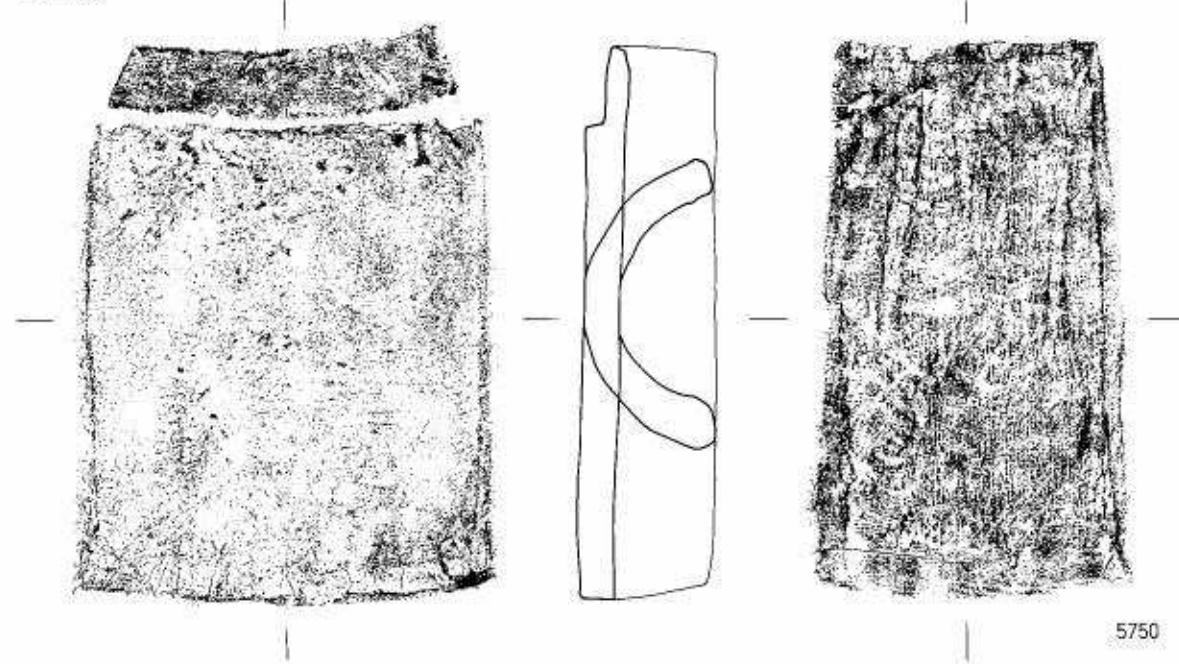
図版84

辻ヶ内地区

中世の遺物(34) 瓦(19)
(丸瓦) 5750~5751

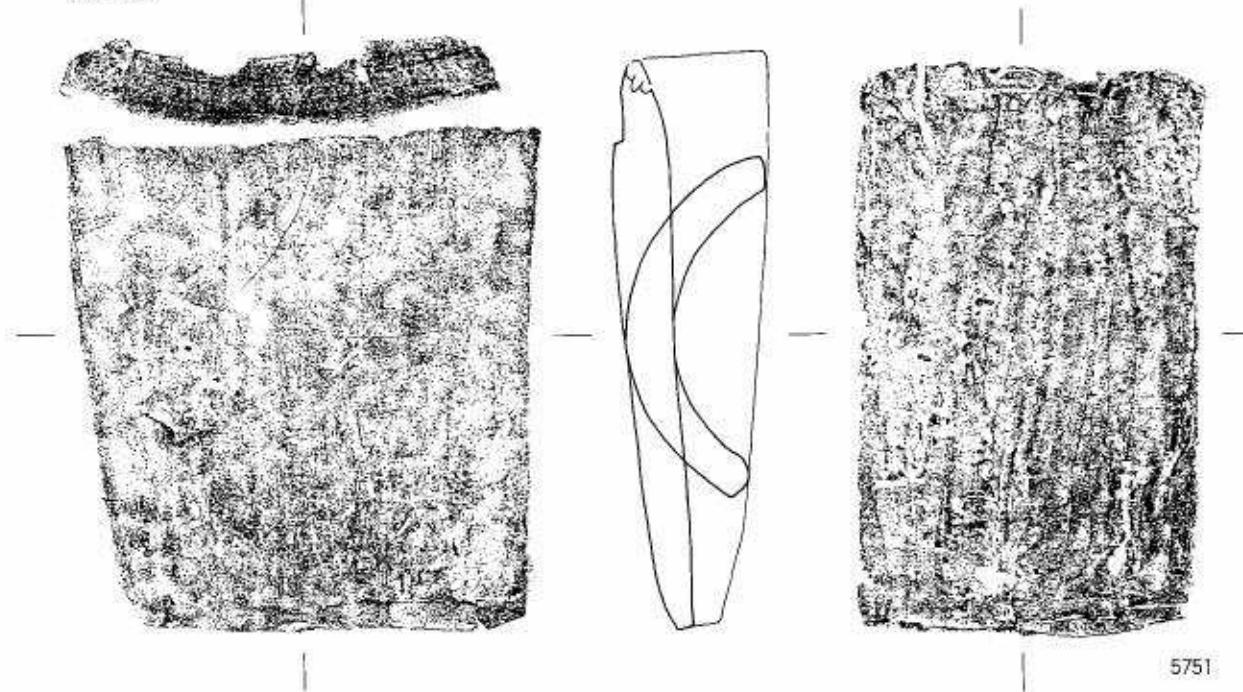
丸 瓦

小型1類



5750

小型2類



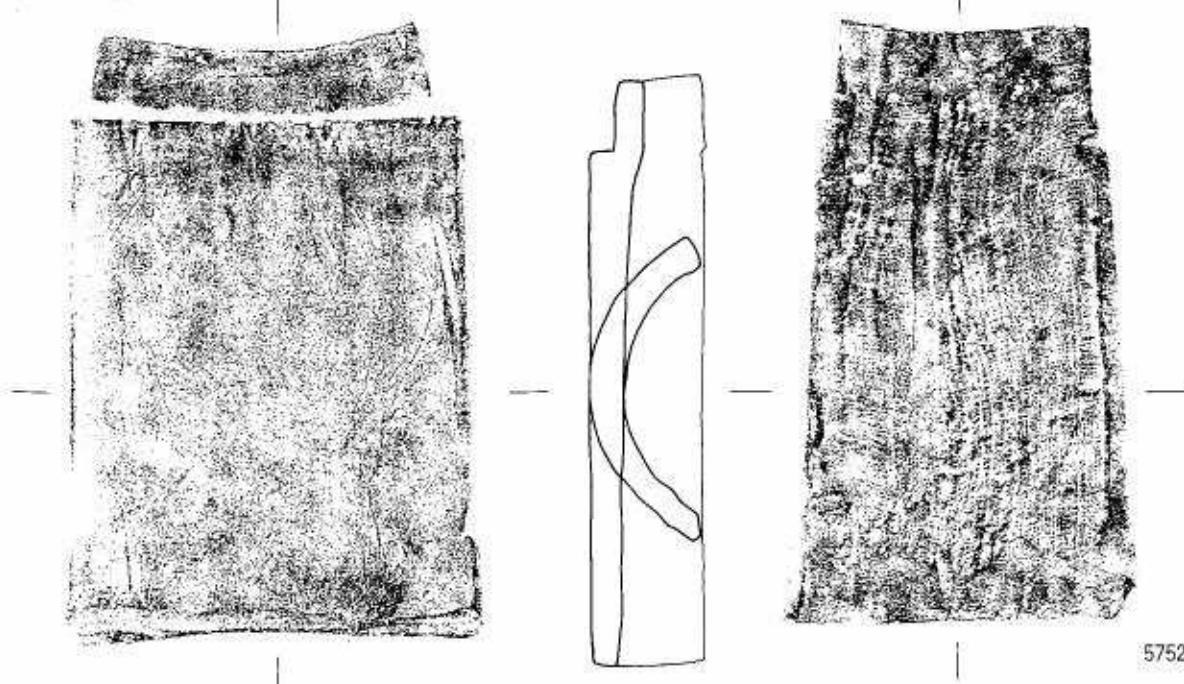
5751



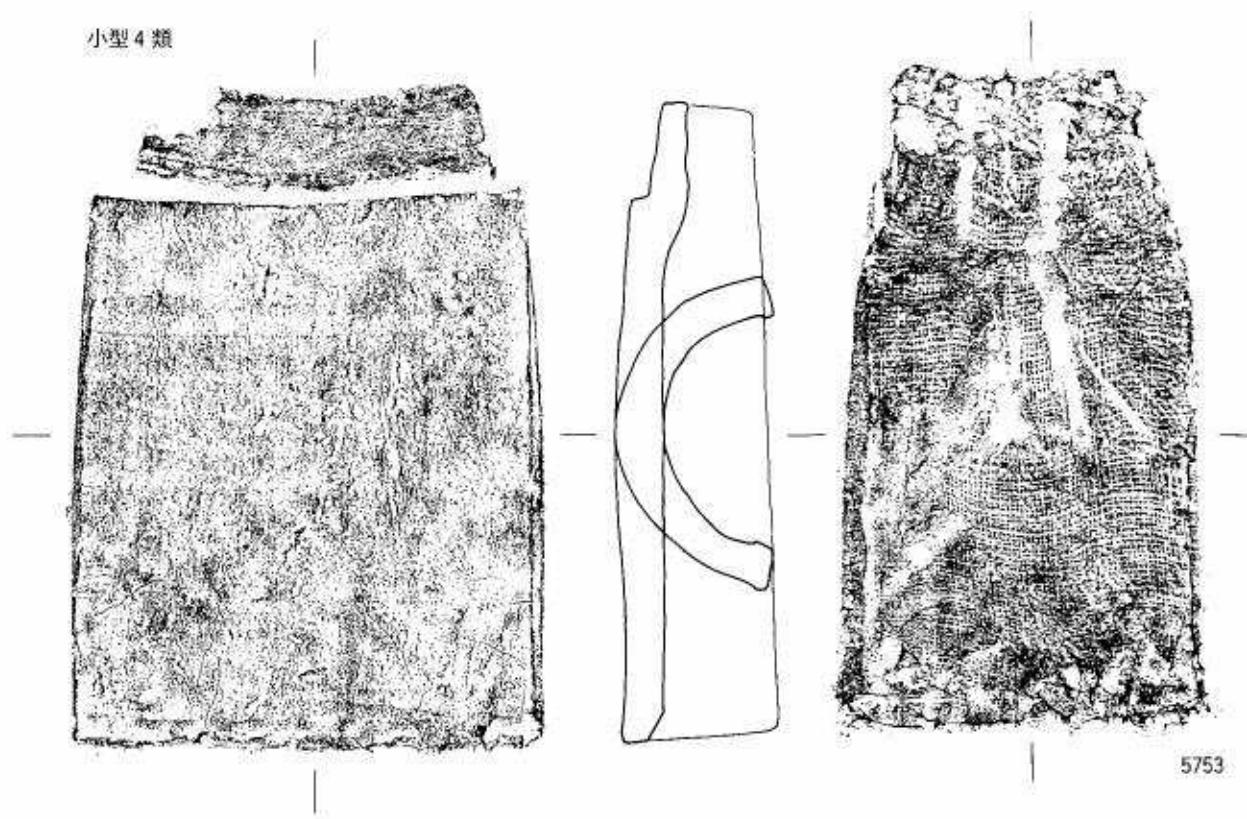
中世の遺物(35) 瓦(20)
(丸瓦) 5752~5753

丸瓦

小型3類



小型4類



図版86

辻ヶ内地区

中世の遺物(36) 瓦(21)

(丸瓦) 5754~5755

丸 瓦

小型5類



5754

小型6類



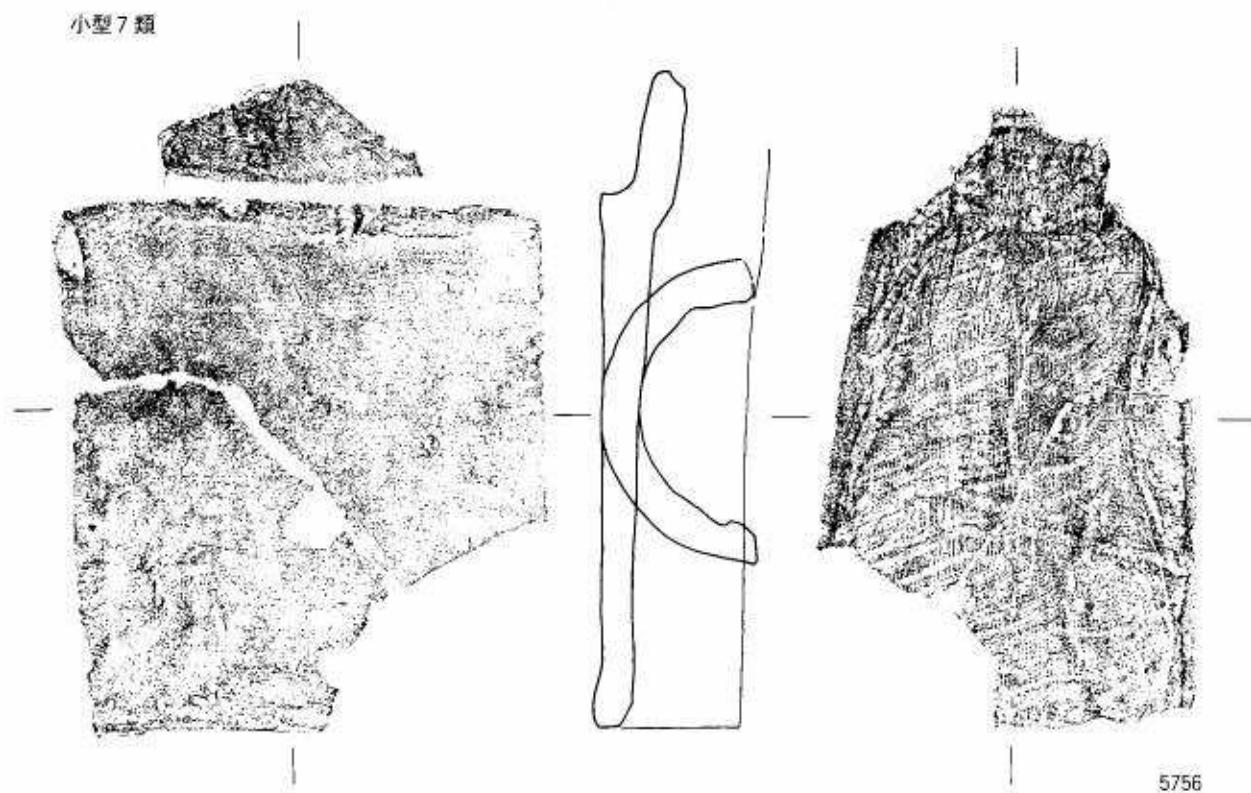
5755



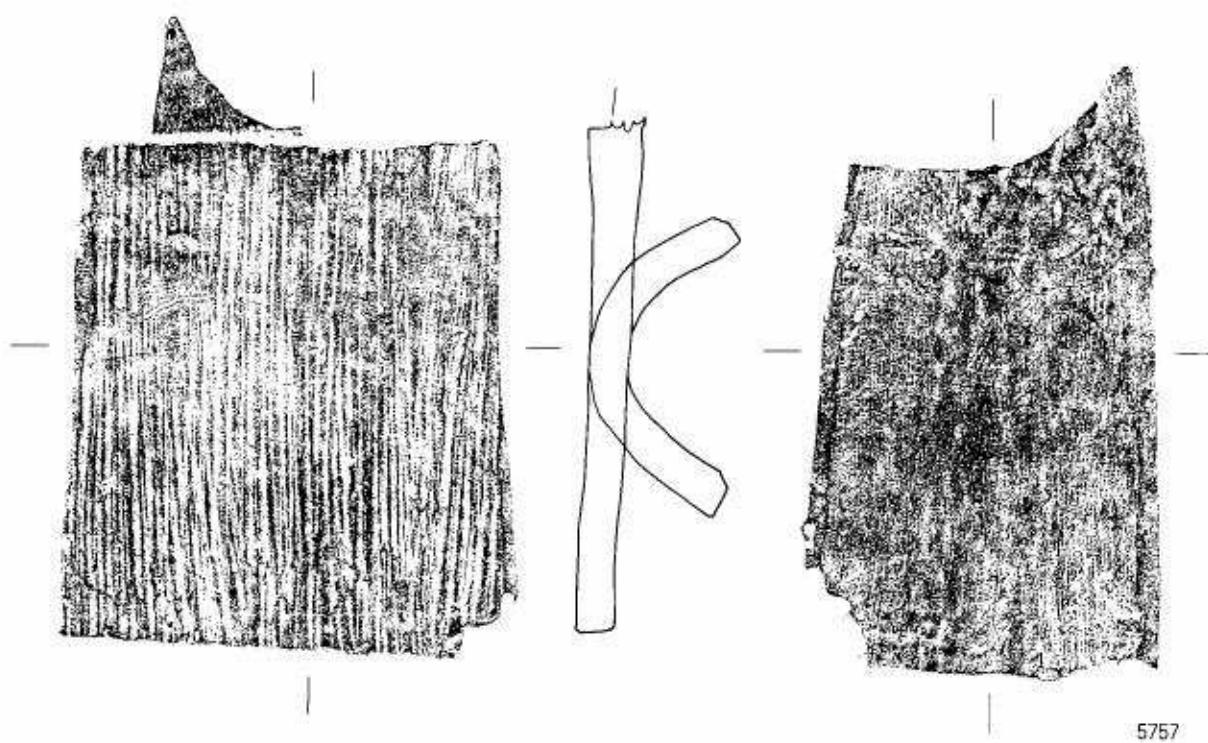
中世の遺物(37) 瓦(22)
(丸瓦) 5756~5757

丸瓦

小型7類



小型8類



図版88

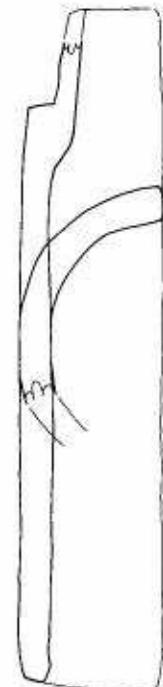
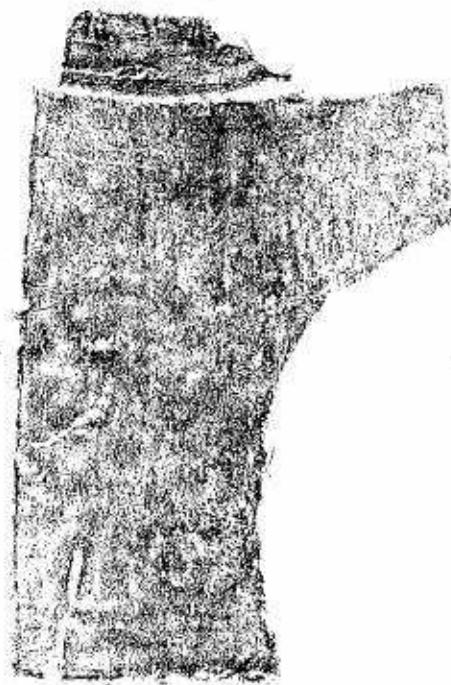
辻ヶ内地区

中世の遺物(38) 瓦(23)

(丸瓦) 5758~5759

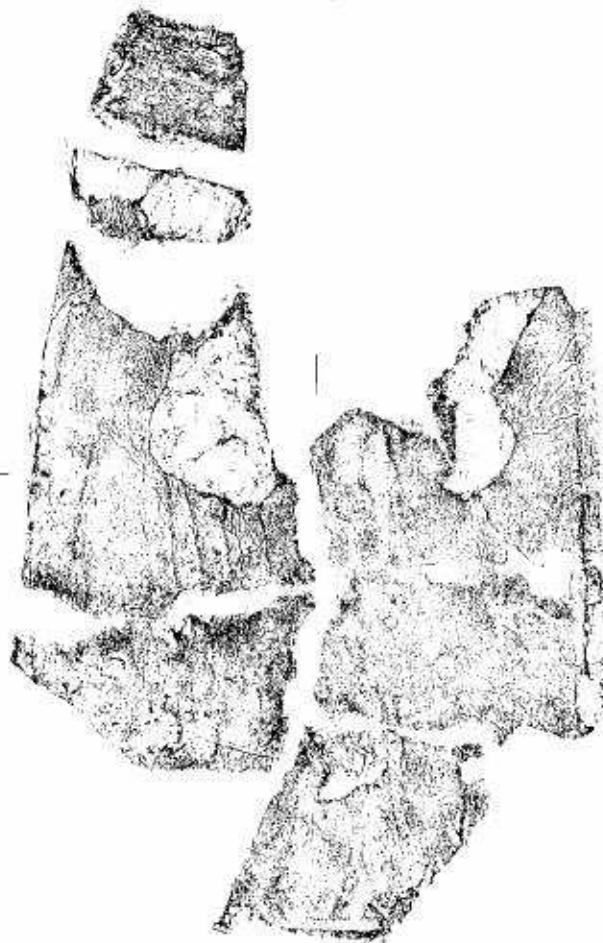
丸 瓦

小型 9 類



大型 1 類

5758



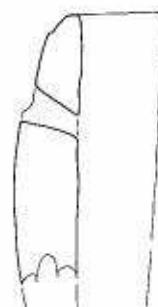
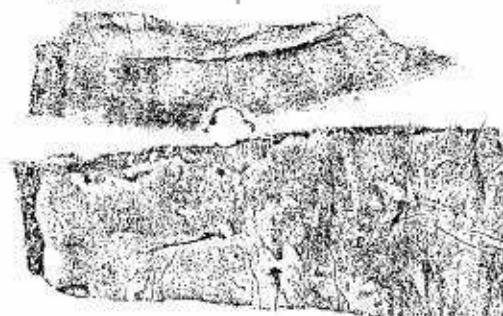
5759



中世の遺物(39) 瓦(24)
(丸瓦) 5760~5763

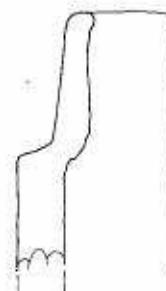
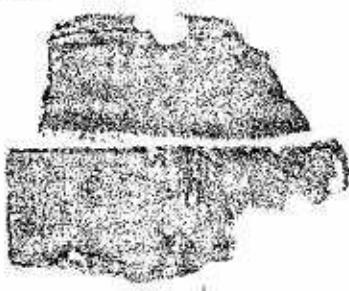
丸瓦

大型2類

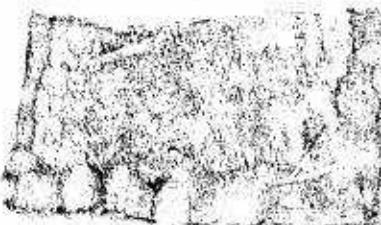


5760

大型3類

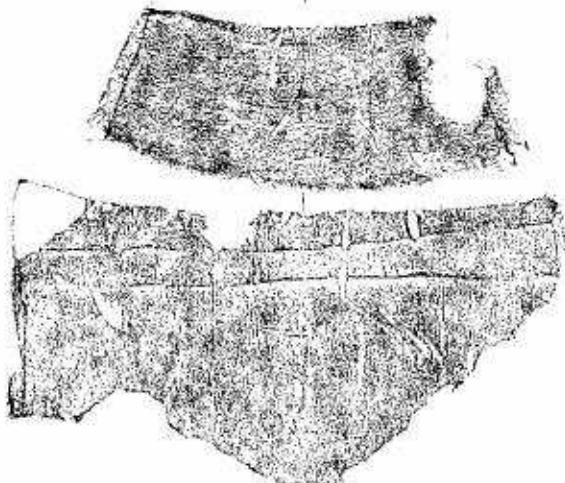


5761



5762

大型4類



5763



図版90

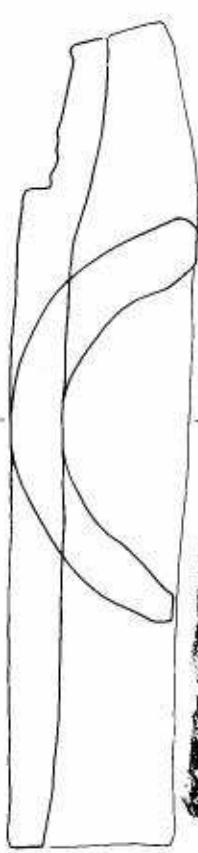
辻ヶ内地区

中世の遺物(40) 瓦(25)

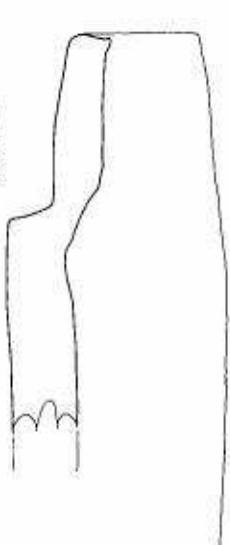
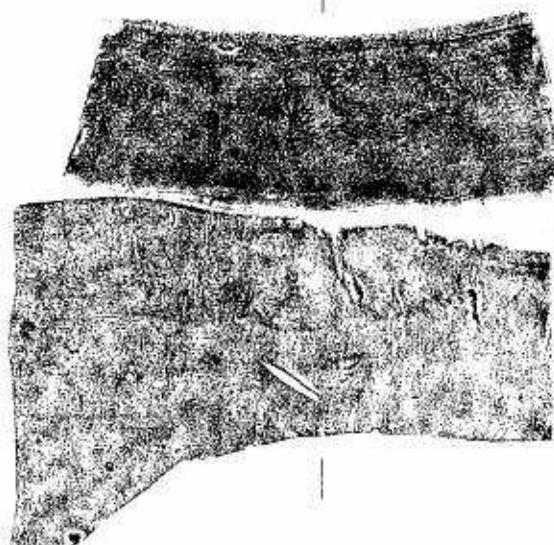
(丸瓦) 5764~5765

丸 瓦

大型 5 類



5764



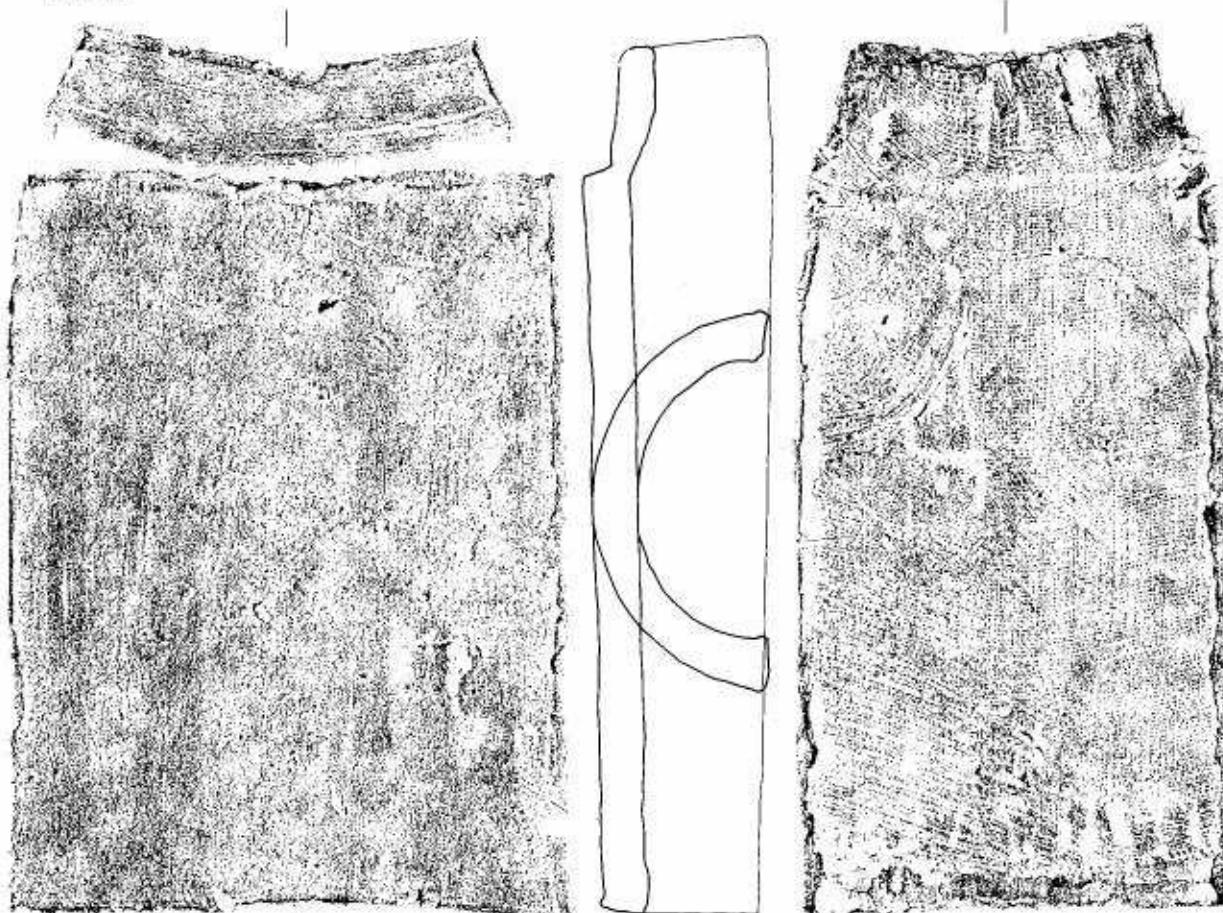
5765



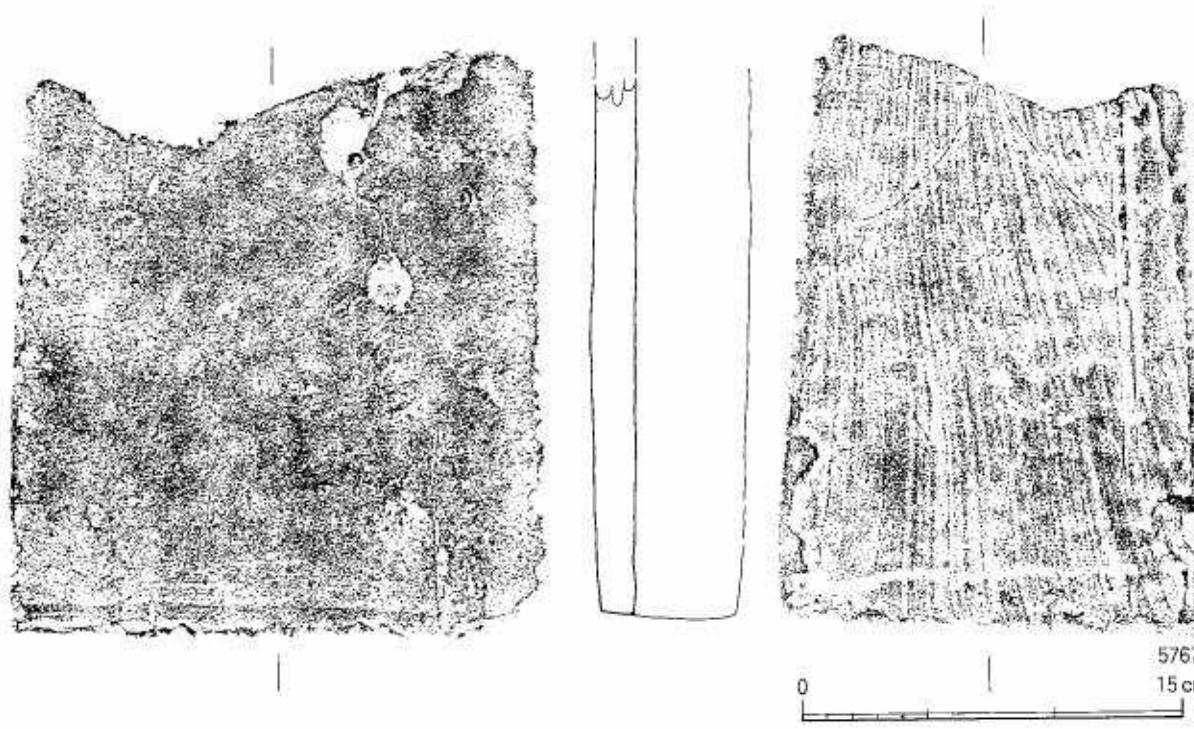
中世の遺物(41) 瓦(26)
(丸瓦) 5766~5767

丸 瓦

大型 6 類



5766



0 15 cm

中世の遺物(41) 瓦(26)

図版92

辻ヶ内地区

中世の遺物(42) 瓦(27)

(平瓦) 5768~5769

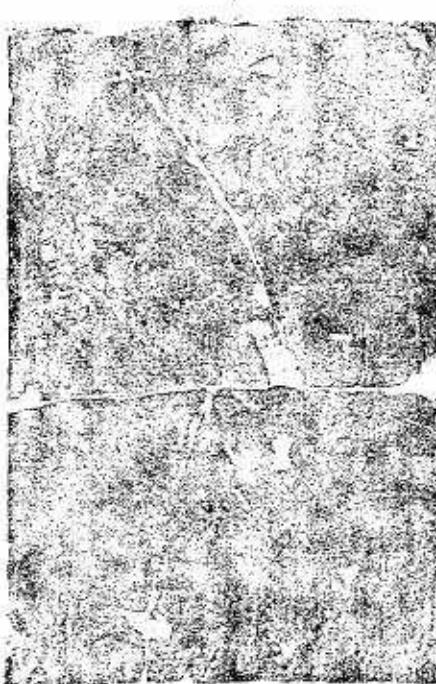
平 瓦

小型1類



5768

小型2類



5769



辻ヶ内地区

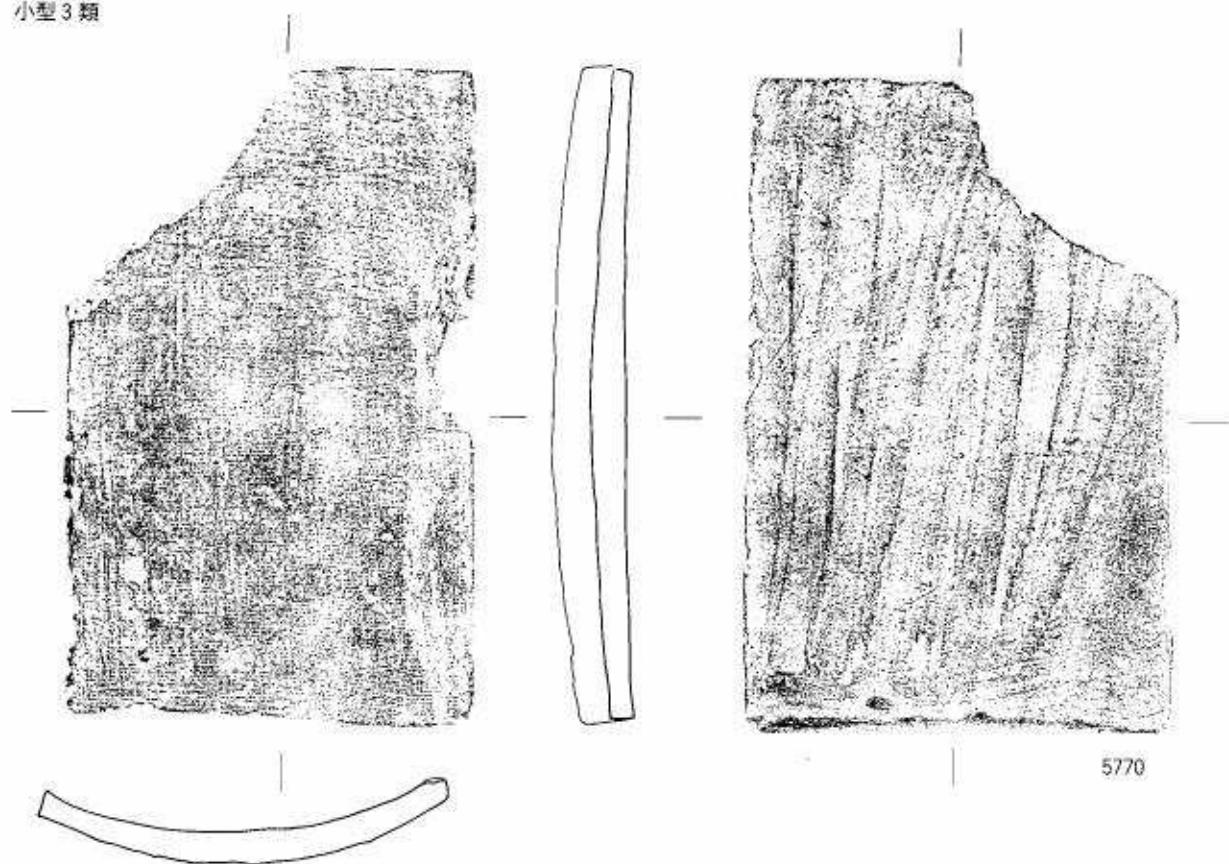
図版93

中世の遺物(43) 瓦(28)

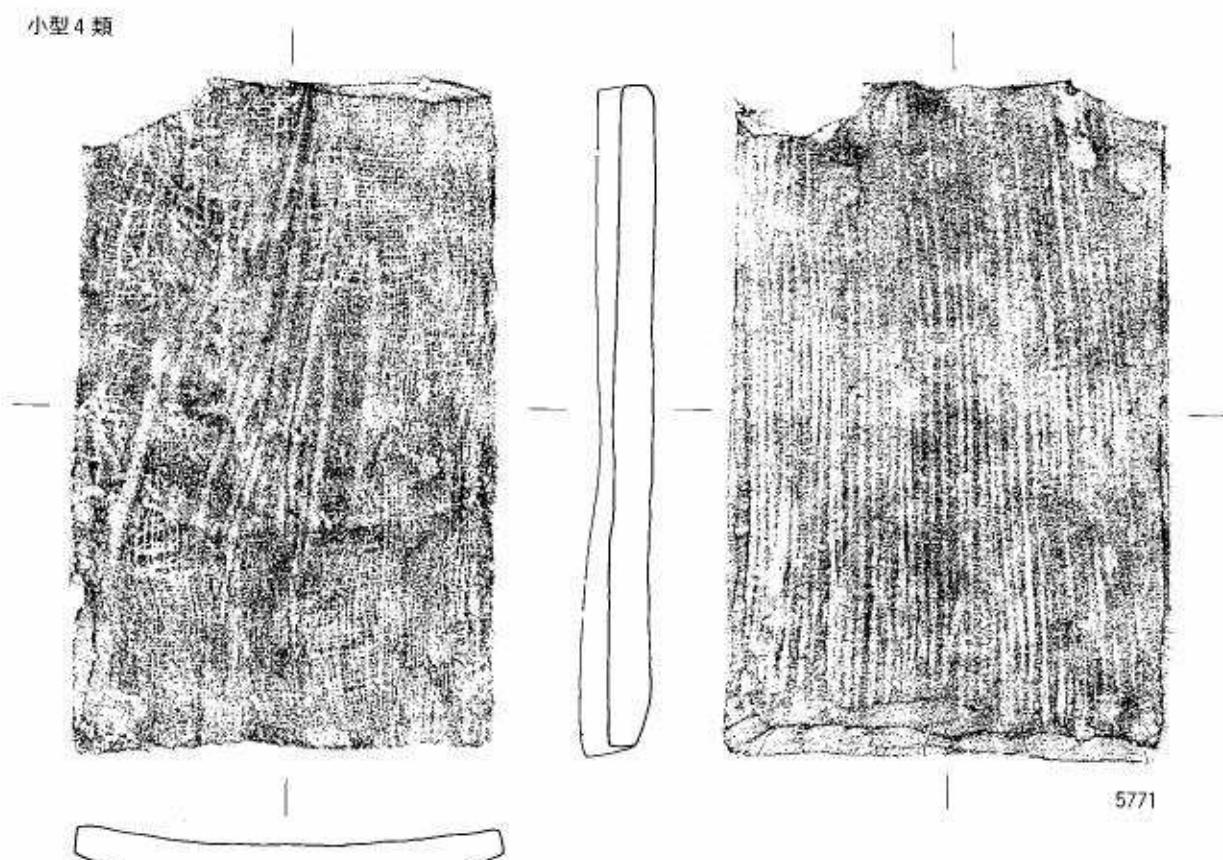
(平瓦) 5770~5771

平 瓦

小型3類



小型4類



図版94

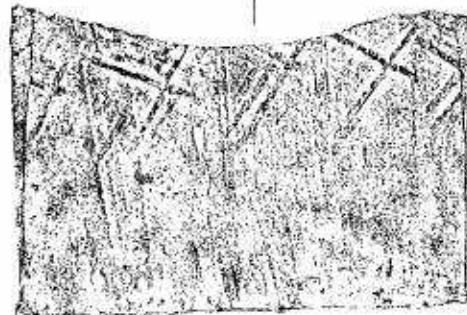
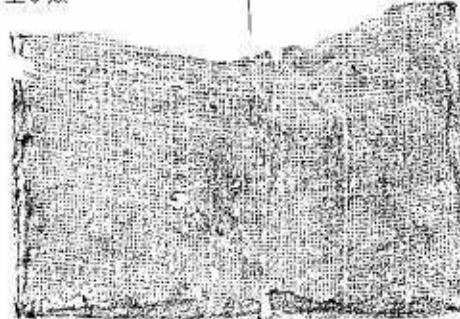
辻ヶ内地区

中世の遺物(44) 瓦(29)

(平瓦) 5772~5773

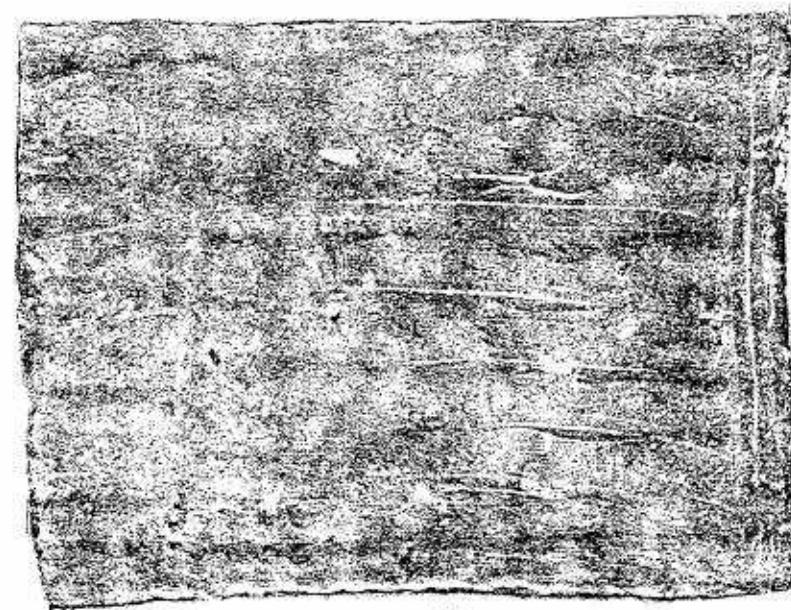
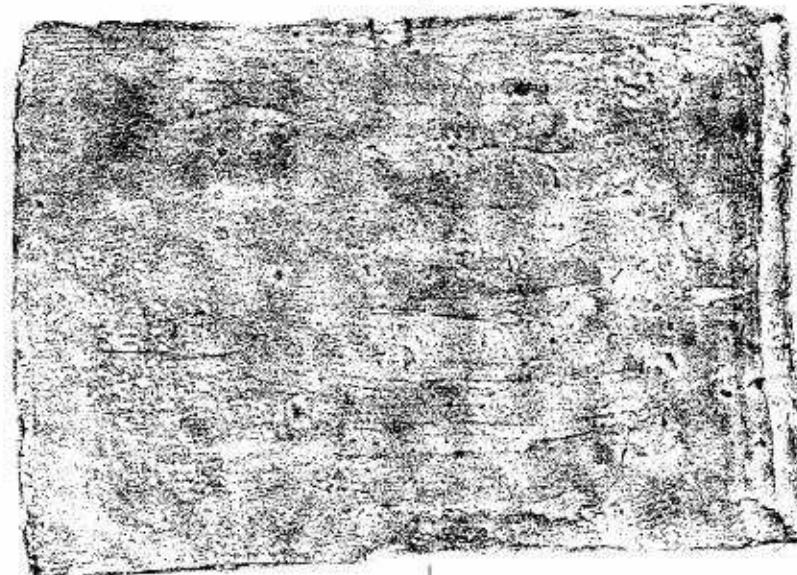
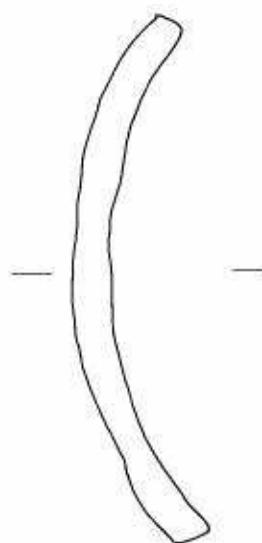
平 瓦

小型5類



5772

大型1類



5773

15 cm

0

辻ヶ内地区

図版95

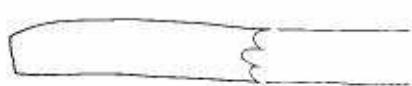
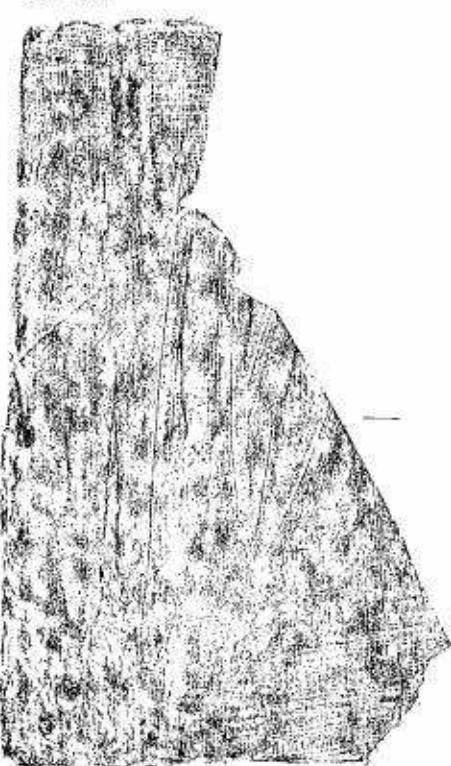
平瓦

中世の遺物(45) 瓦(30)
(平瓦) 5774~5775

大型2類

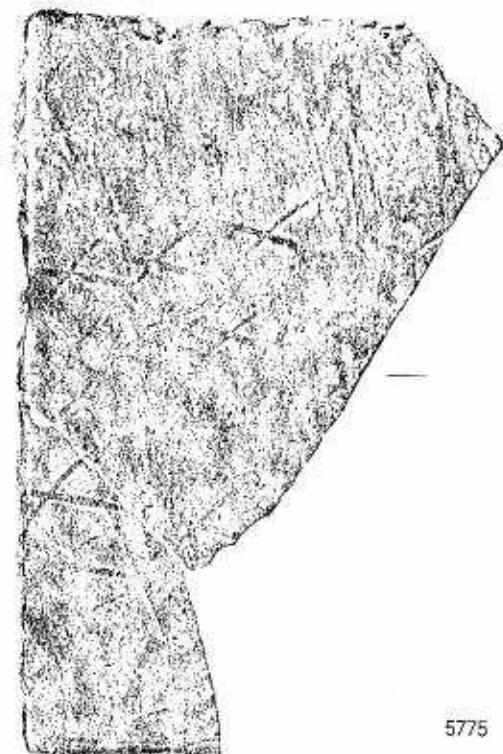


大型3類



0

15 cm



中世の遺物(45) 瓦(30)

図版96

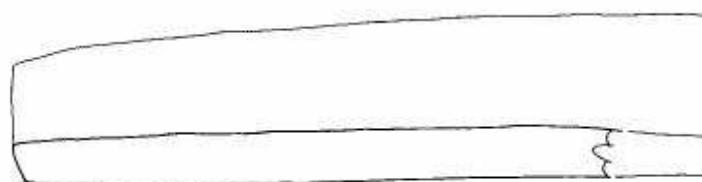
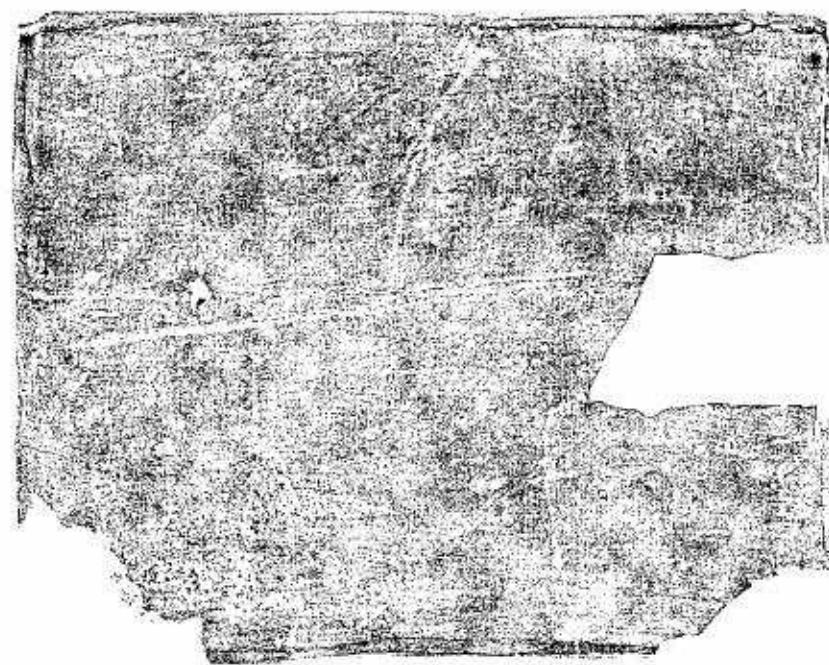
辻ヶ内地区

中世の遺物(46) 瓦(31)

(平瓦) 5776

平 瓦

大型4類



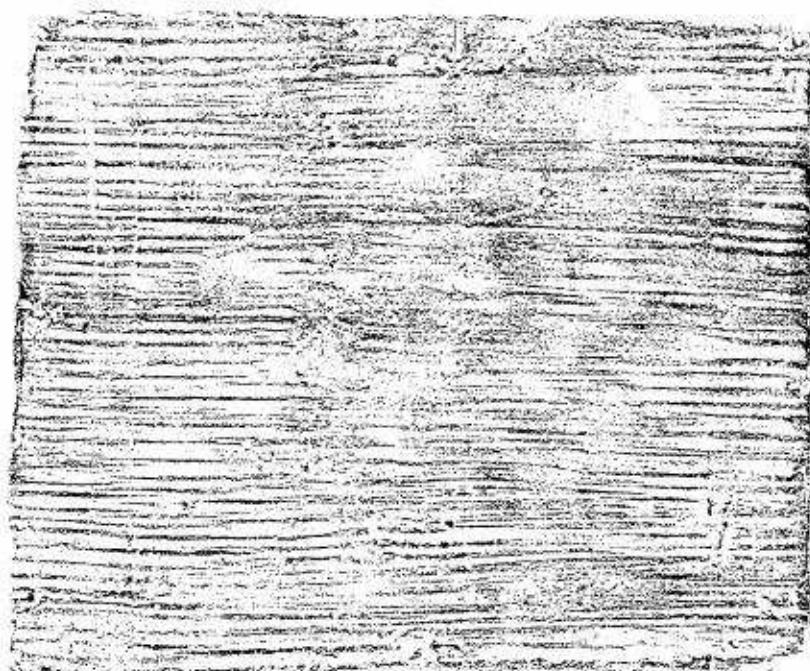
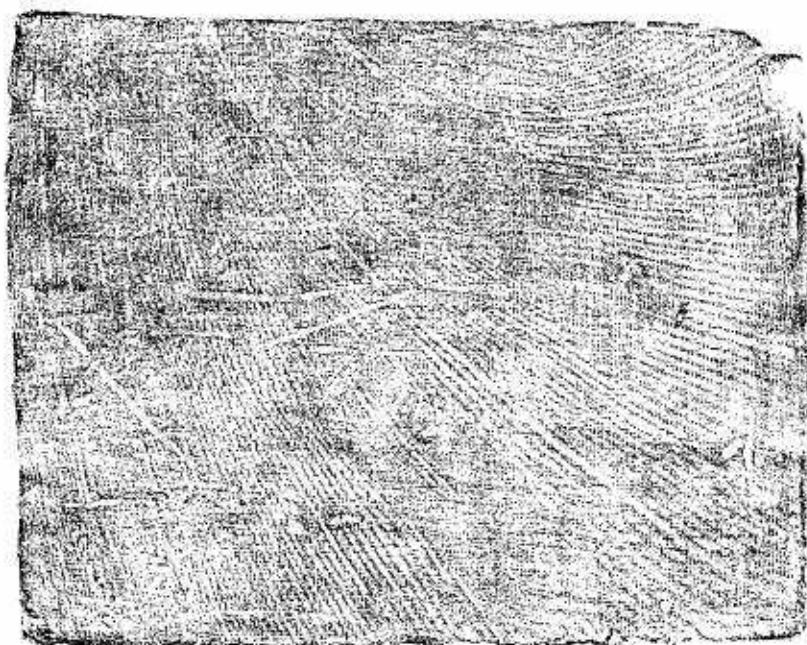
0

15 cm

中世の遺物(47) 瓦(32)
(平瓦) 5777

平 瓦

大型5類



5777

0 15 cm

中世の遺物(47) 瓦(32)

図版98

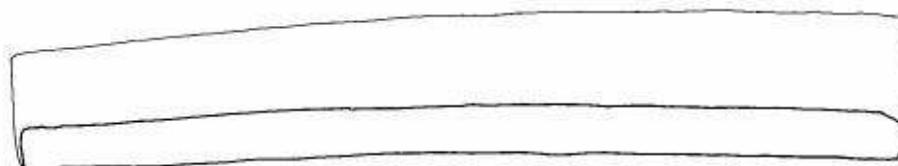
辻ヶ内地区

中世の遺物(48) 瓦(33)

(平瓦) 5778

平 瓦

大型 6 類



5778

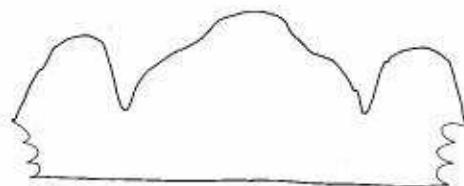
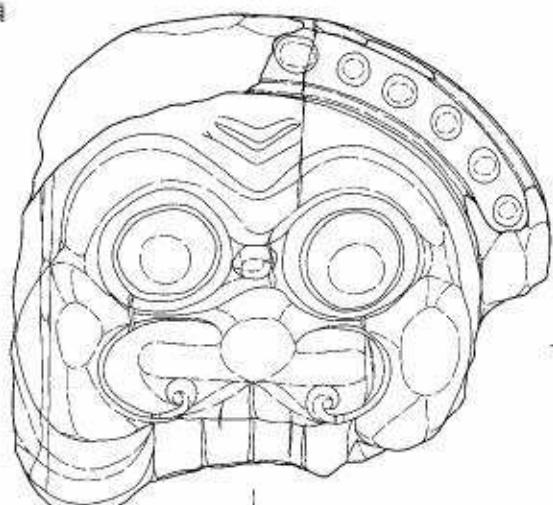
0

15 cm

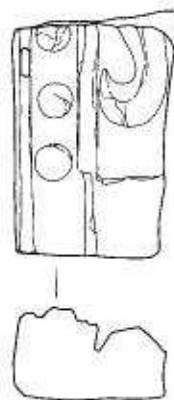
中世の遺物(49) 瓦(34)
(鬼瓦) 5779~5784

鬼 瓦

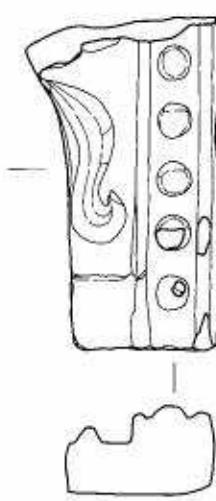
1類



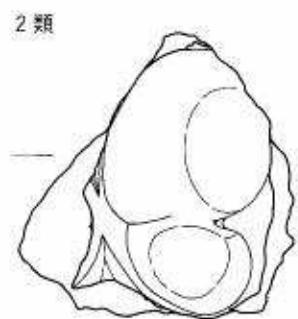
5779



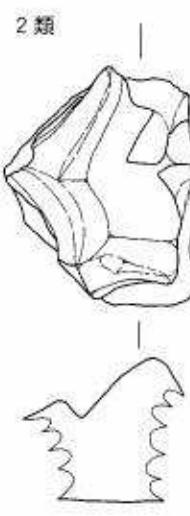
5780



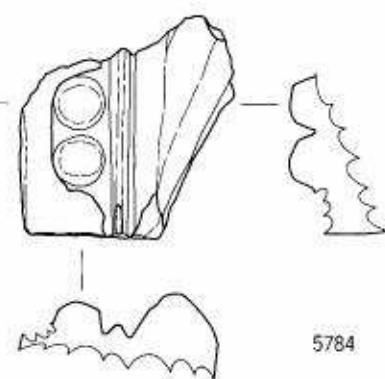
5781



5782



5783



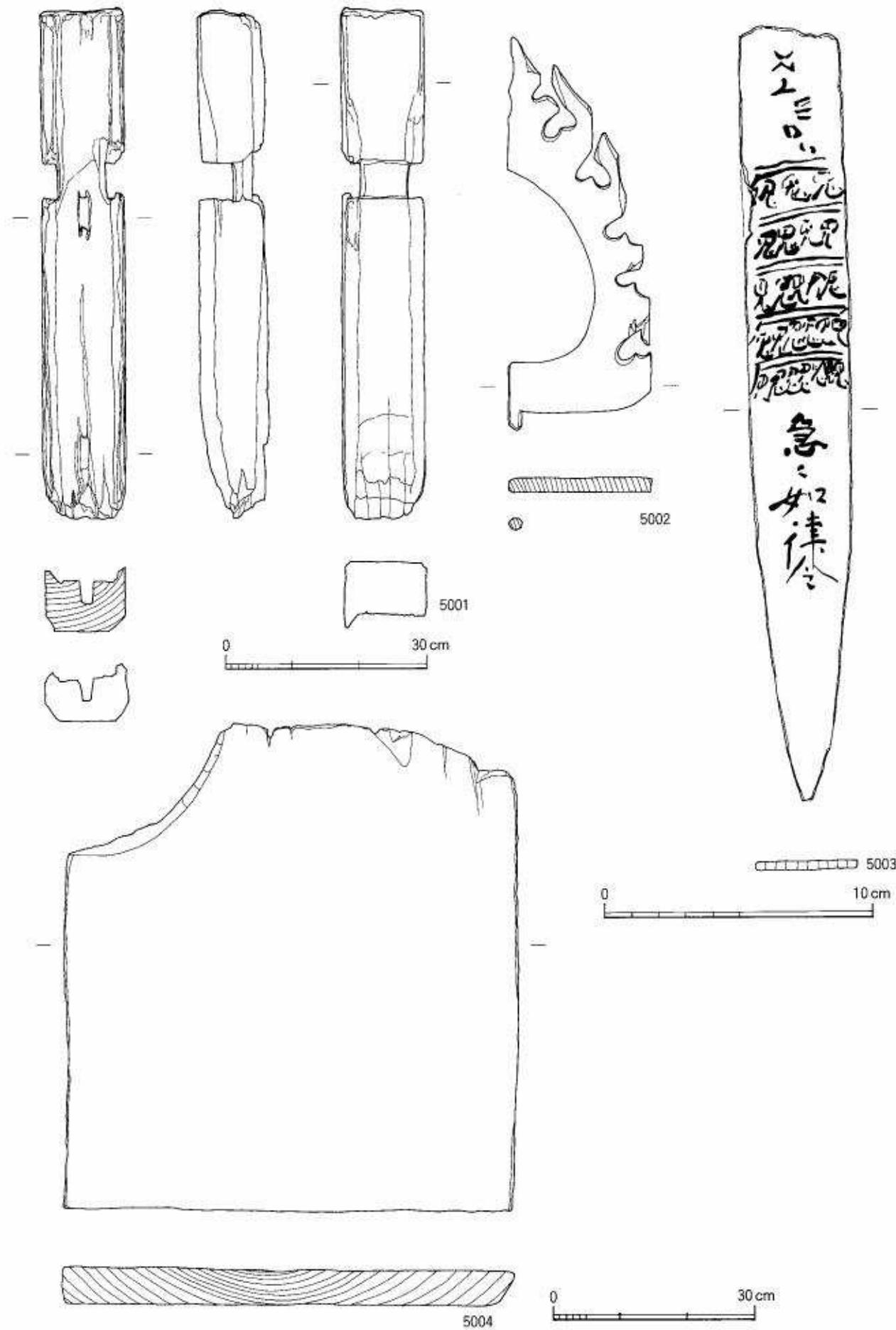
5784



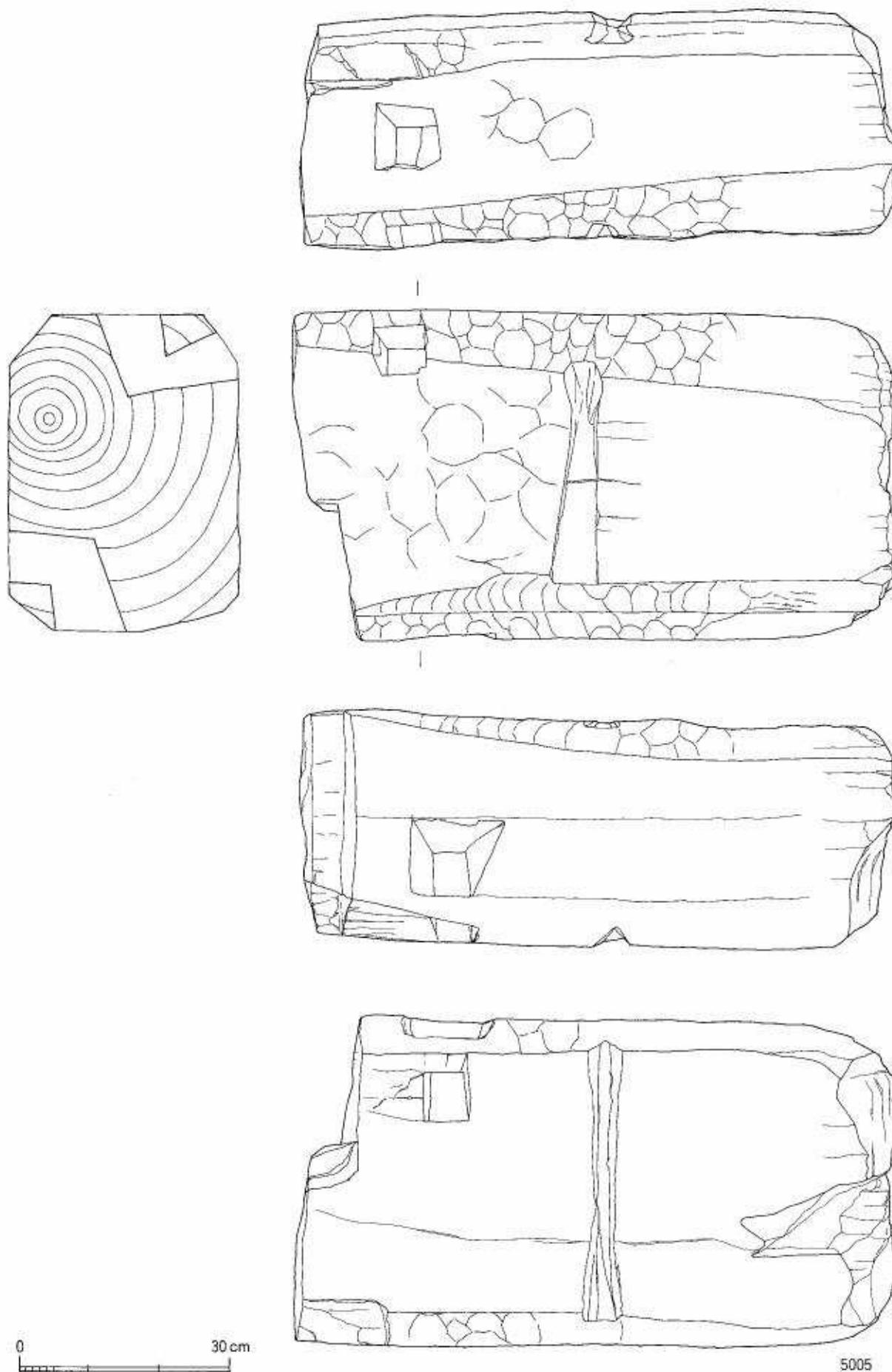
図版100

辻ヶ内地区

中世の遺物(50) 木器(1)
(SK85009/85008) 5001~5004



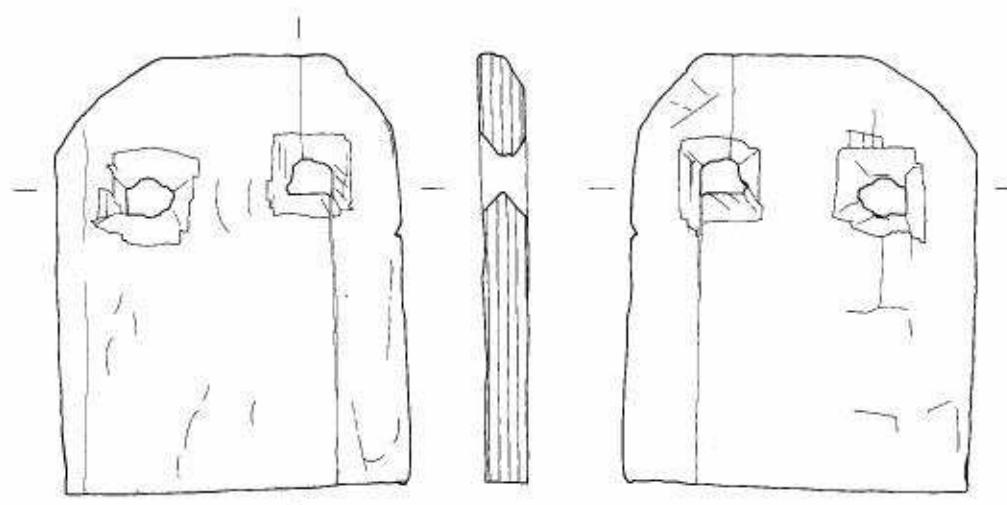
中世の遺物(51) 木器(2)
(SK85008) 5005



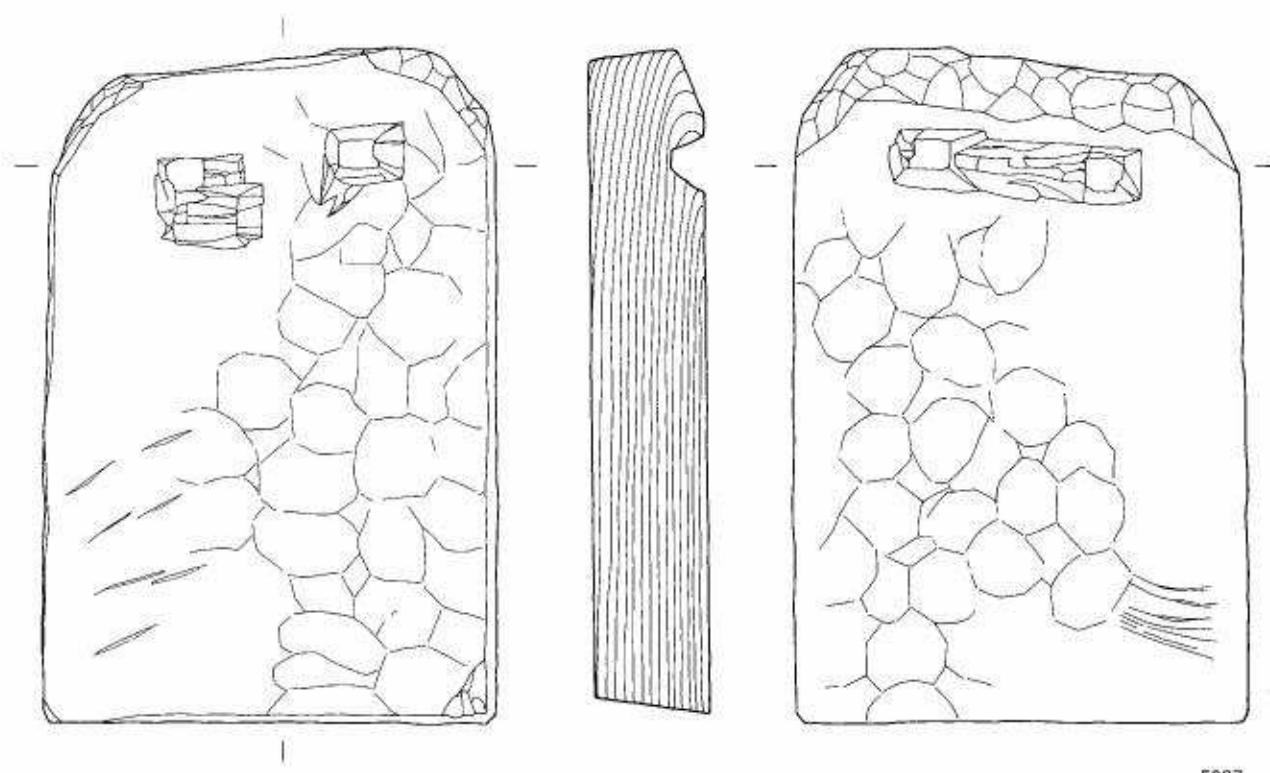
図版102

辻ヶ内地区

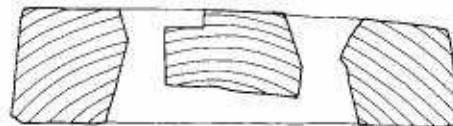
中世の遺物(52) 木器(3)
(SK85008) 5006~5007



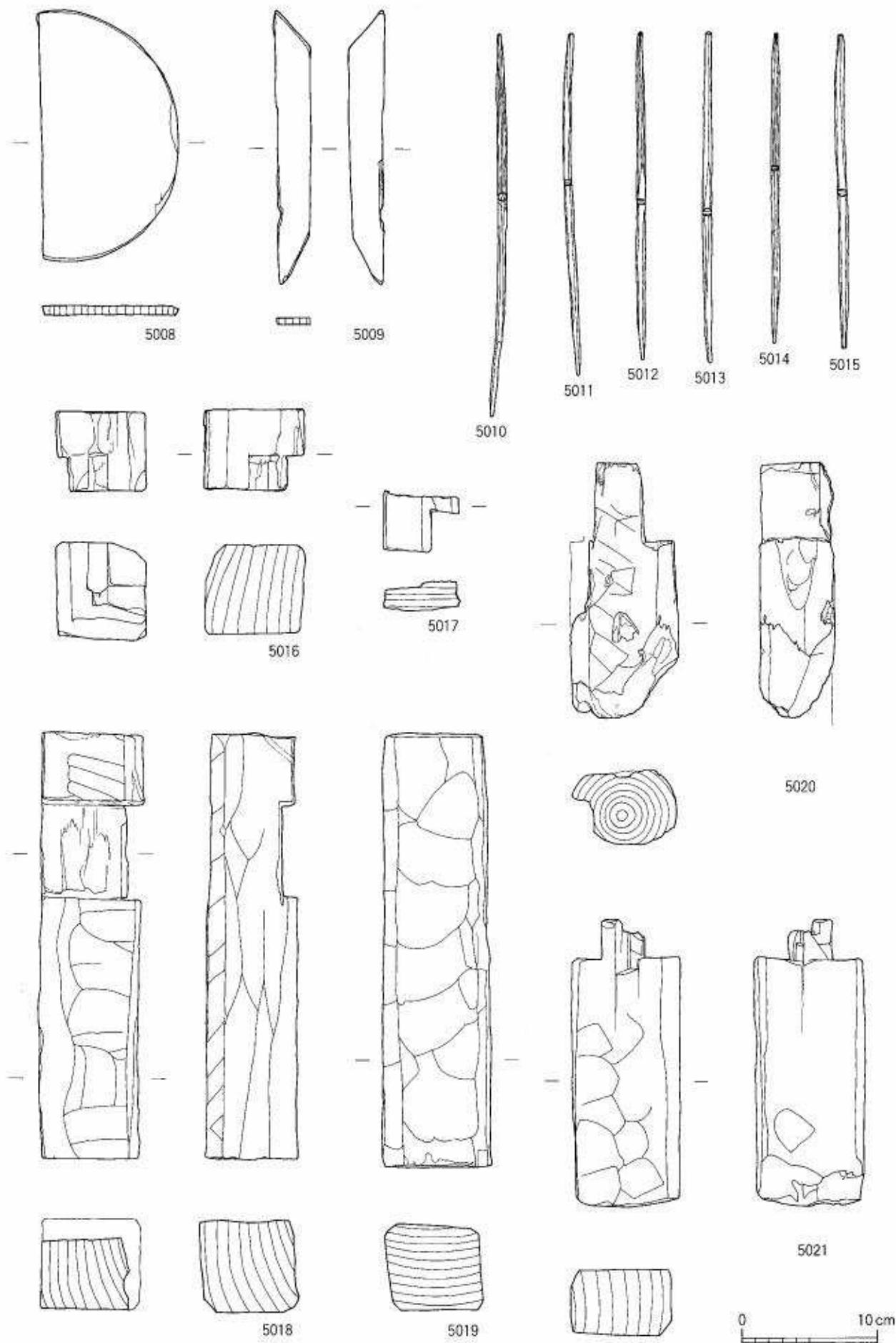
5006



5007



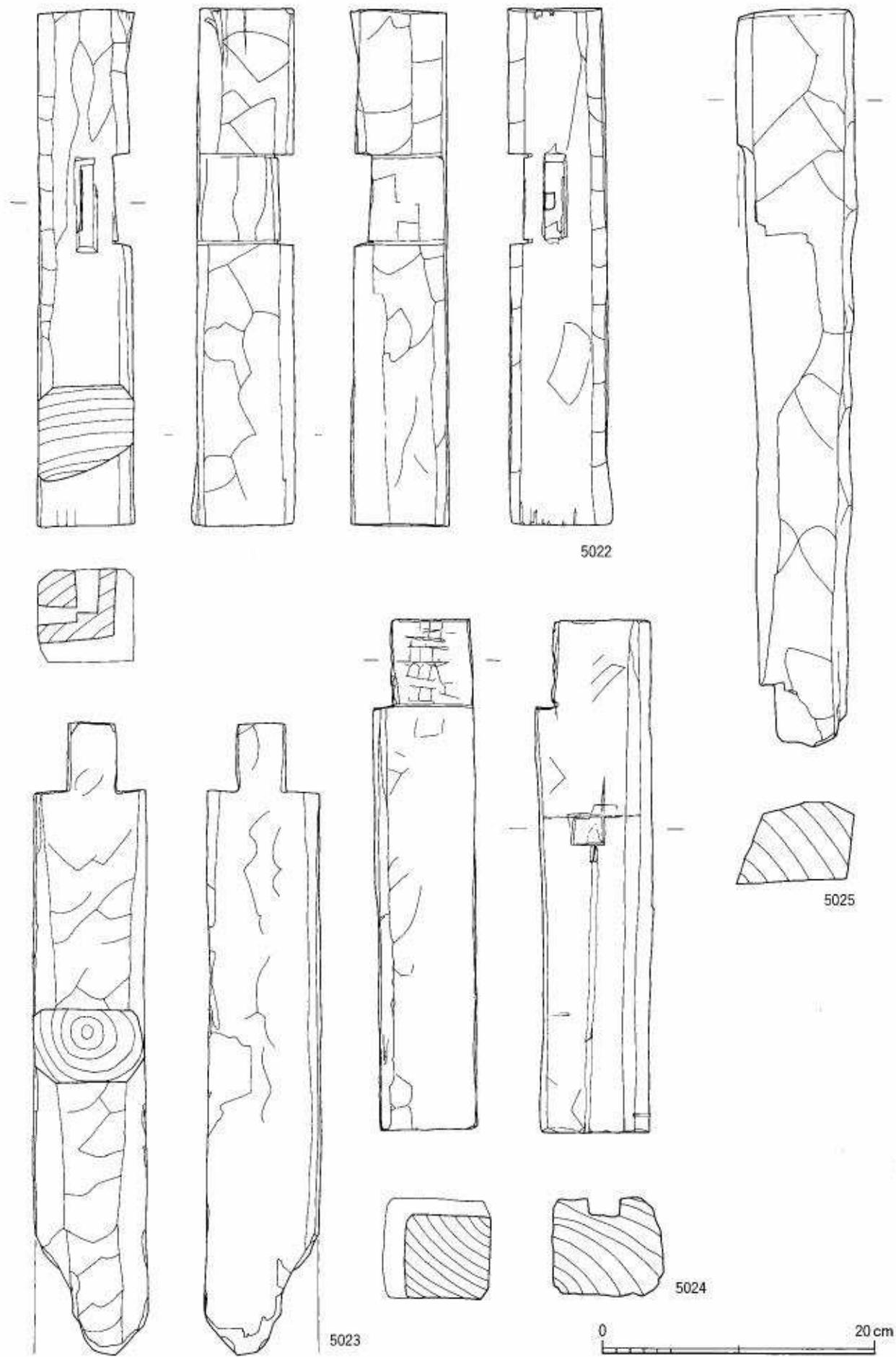
中世の遺物(53) 木器(4)
(SE85001) 5008~5021



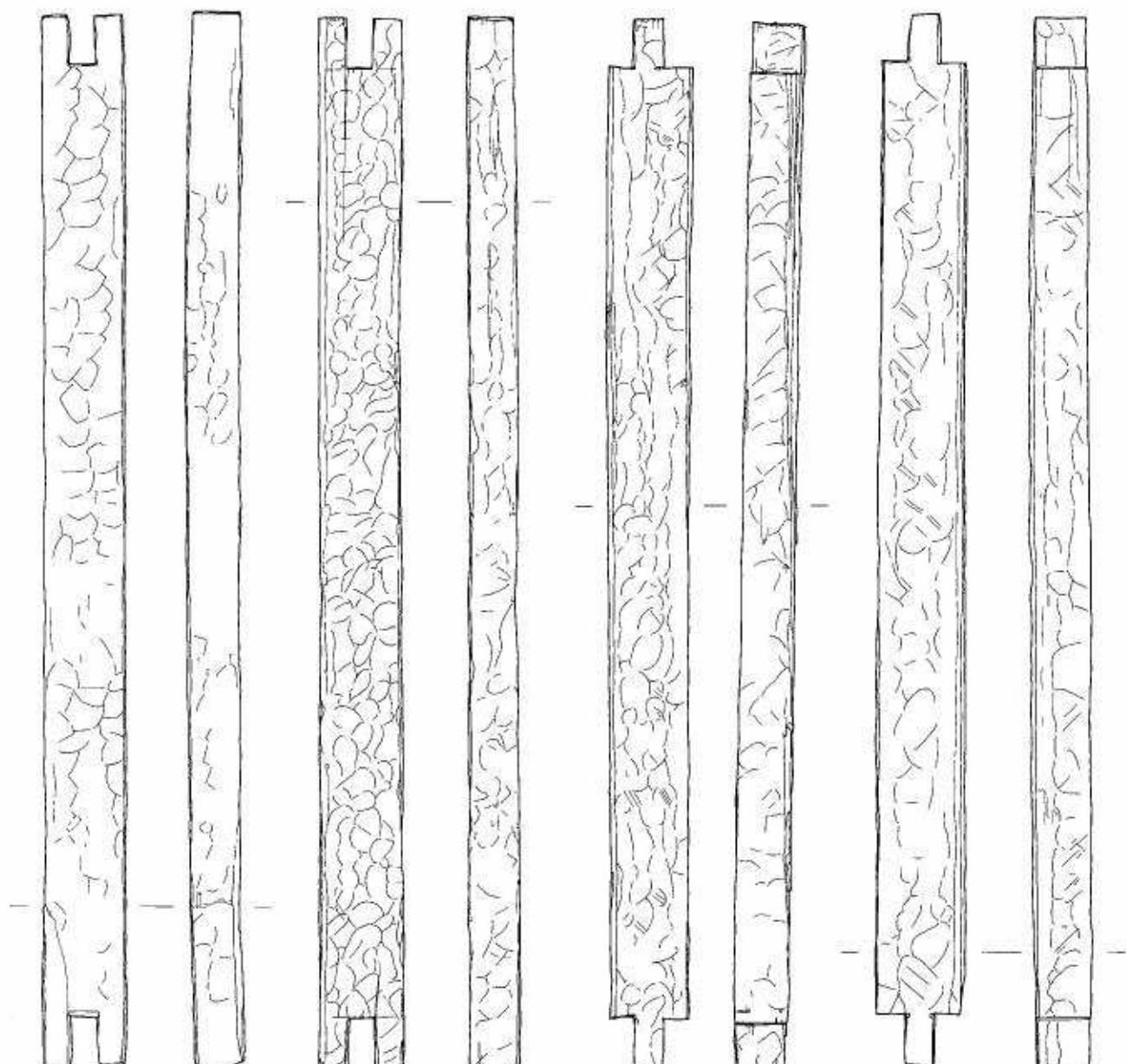
図版104

辻ヶ内地区

中世の遺物(54) 木器(5)
(SE85001) 5022~5025



中世の遺物(55) 木器(6)
(SE85001) 5026~5030



5026



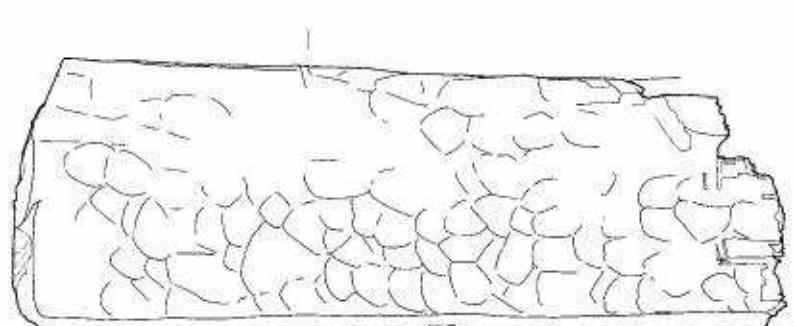
5027



5028



5029



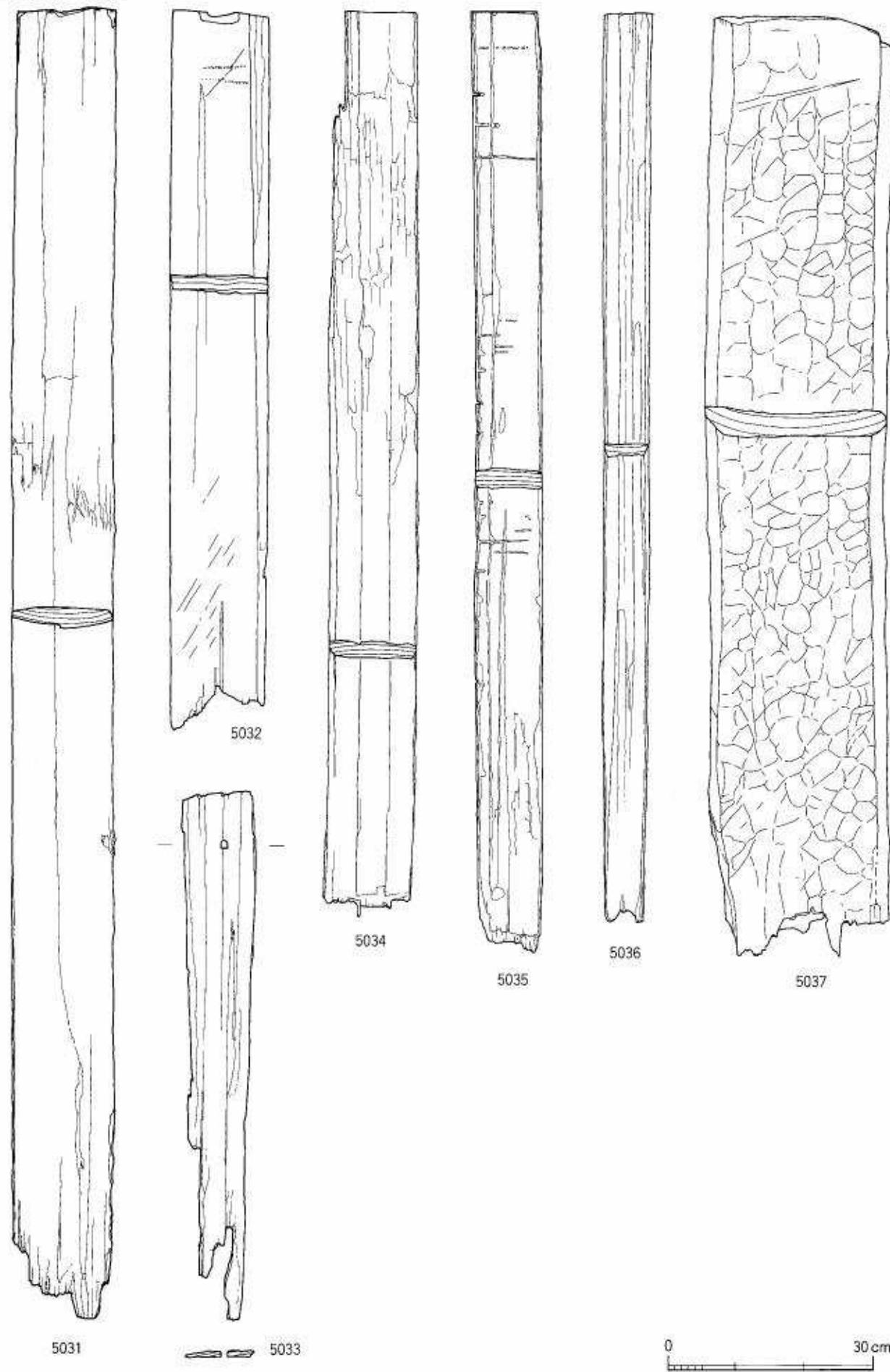
5030



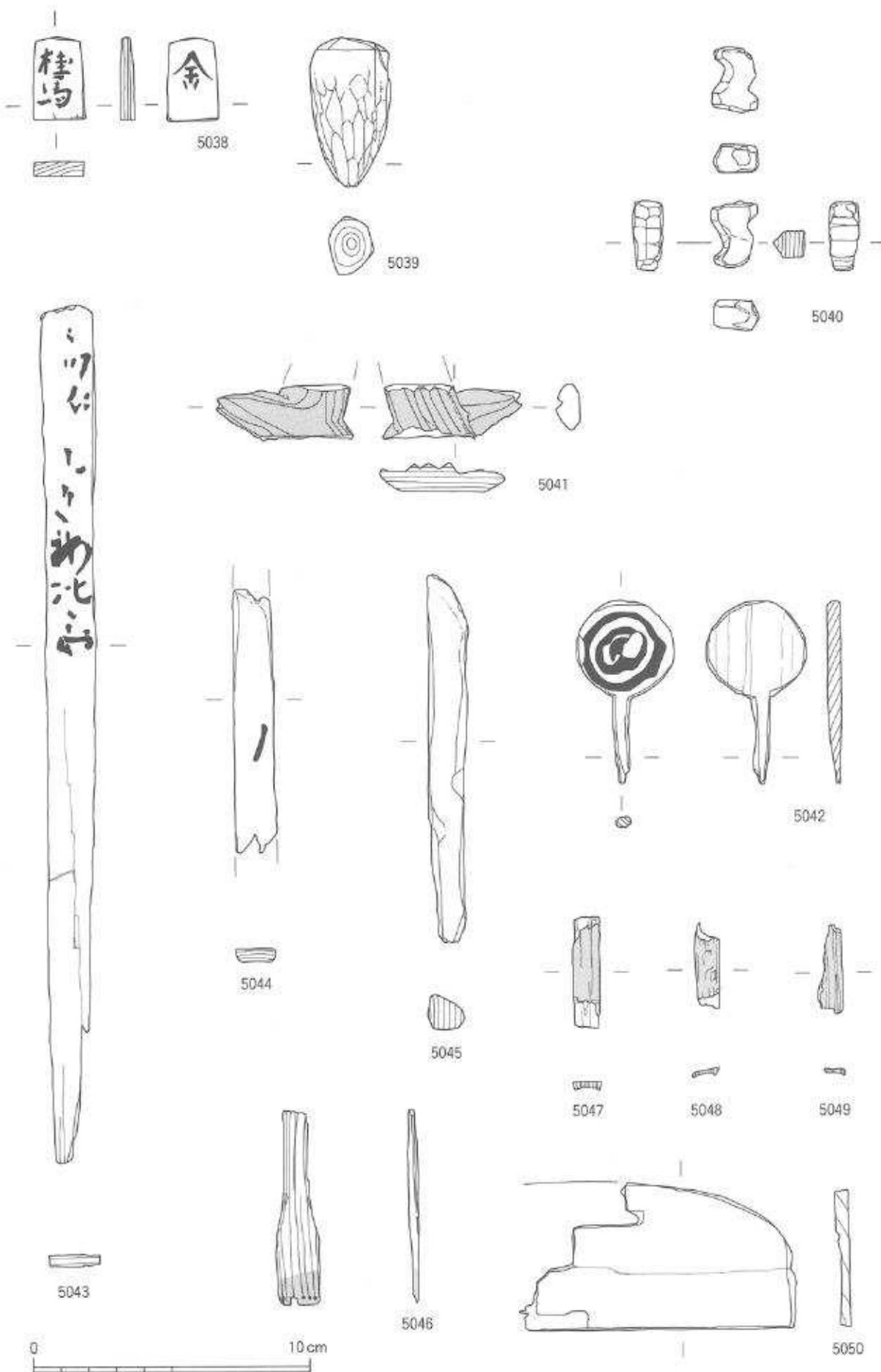
図版106

辻ヶ内地区

中世の遺物(56) 木器(7)
(SE85001) 5031~5037



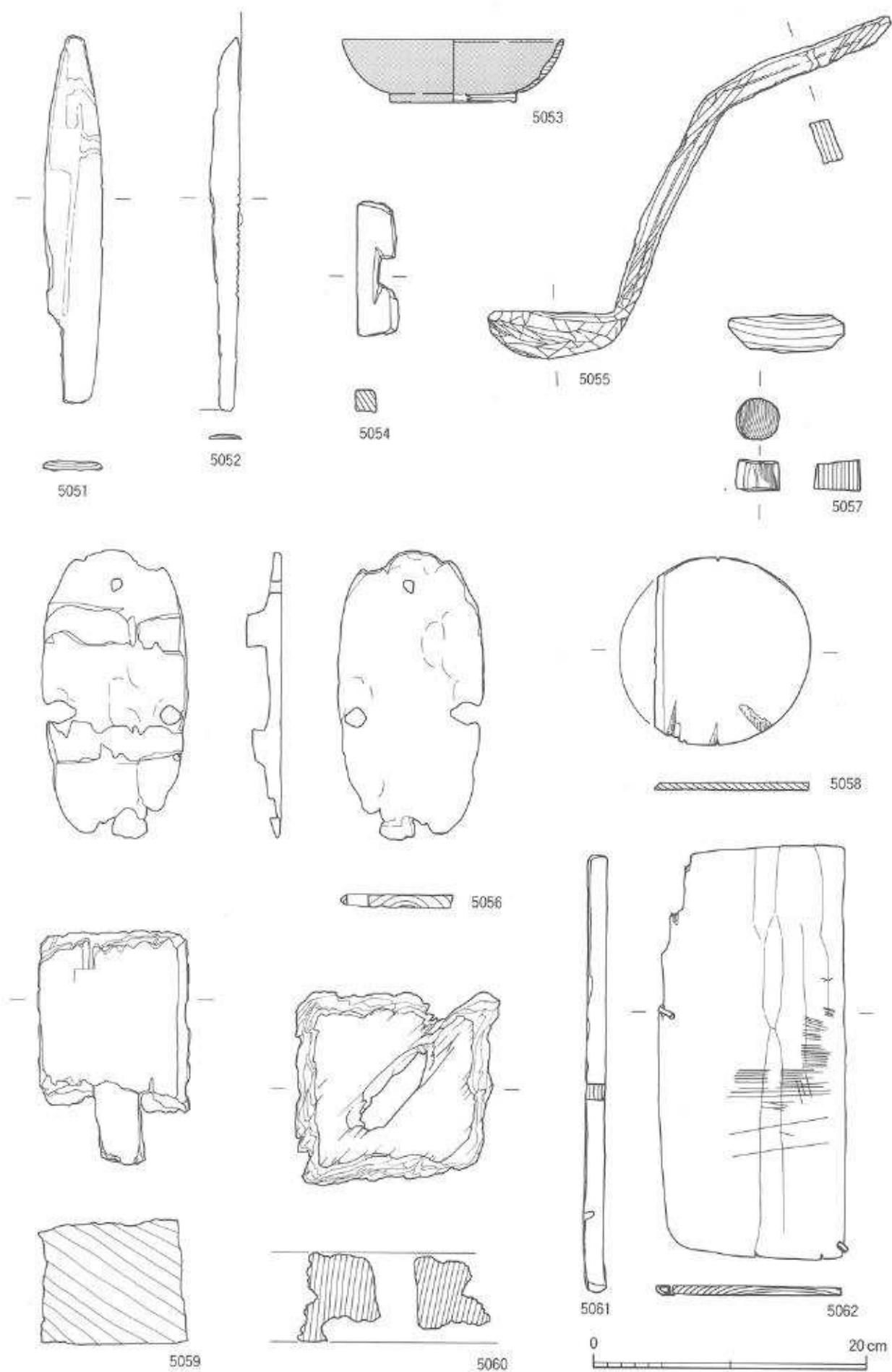
中世の遺物(57) 木器(8)
(SG85001) 5038~5050



図版108

辻ヶ内地区

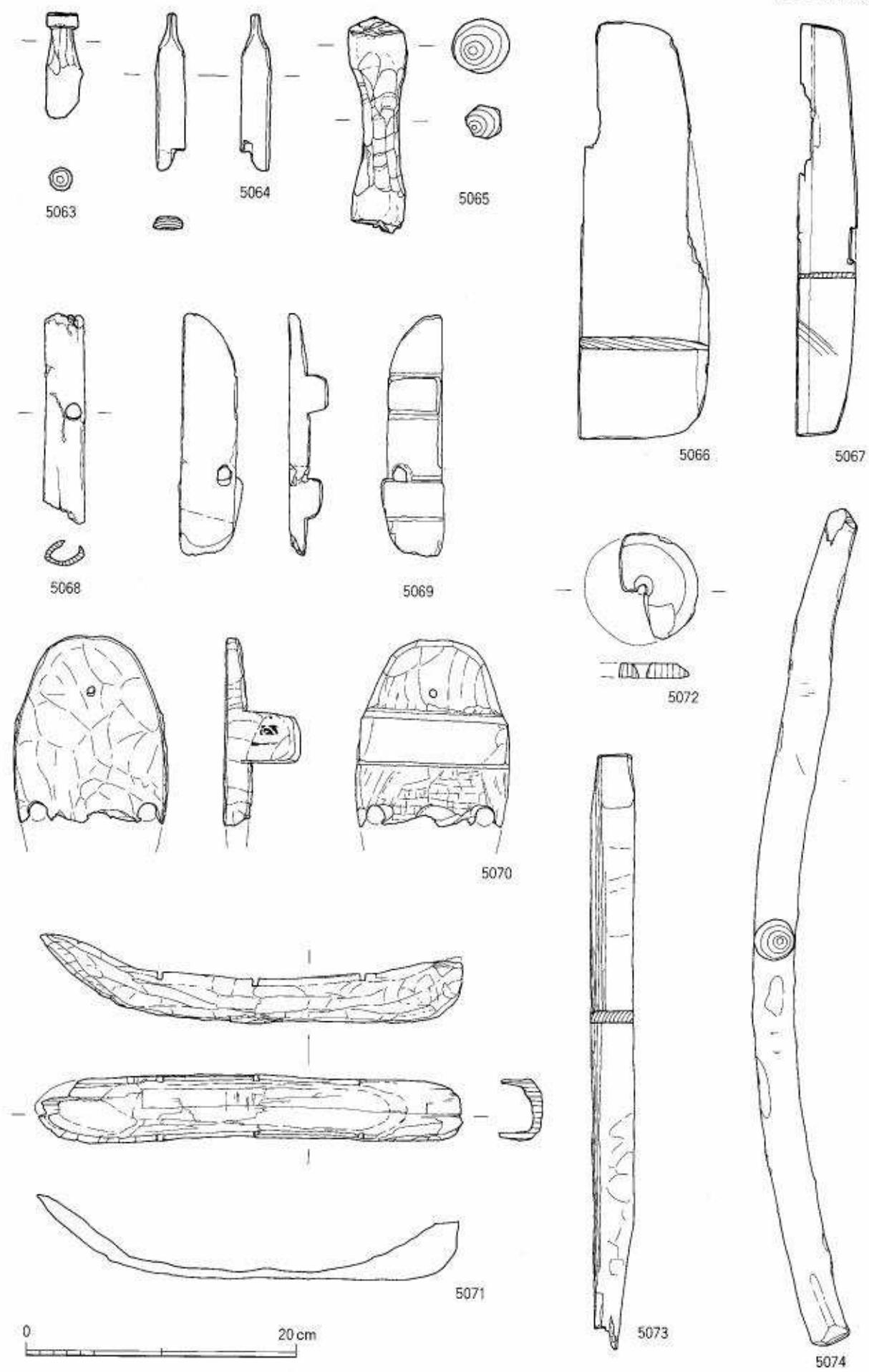
中世の遺物(58) 木器(9)
 (SG85001/85002) 5051~5062



辻ヶ内地区

図版109

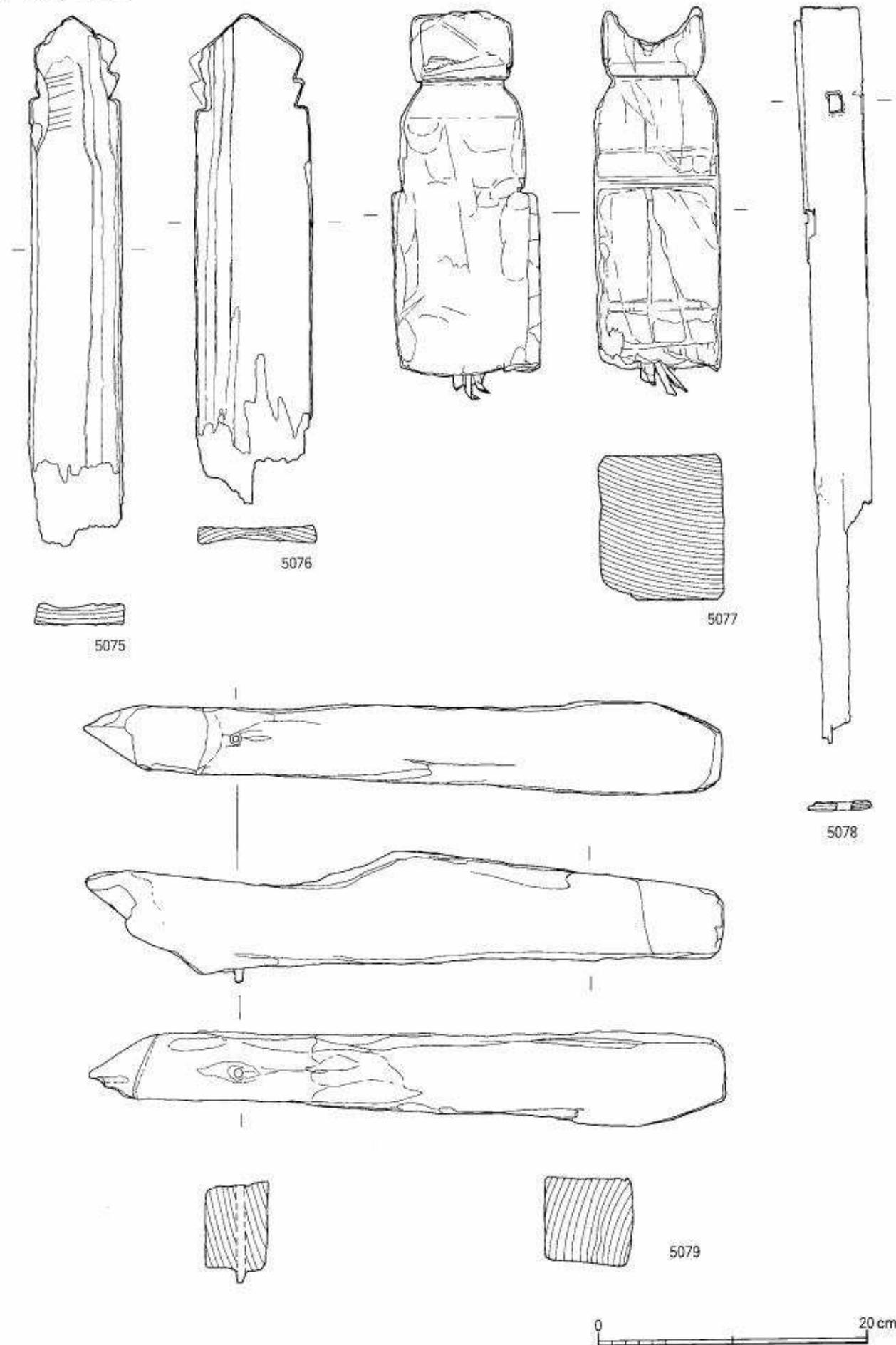
中世の遺物(59) 木器(10)
(SD85001) 5063~5074



図版110

辻ヶ内地区

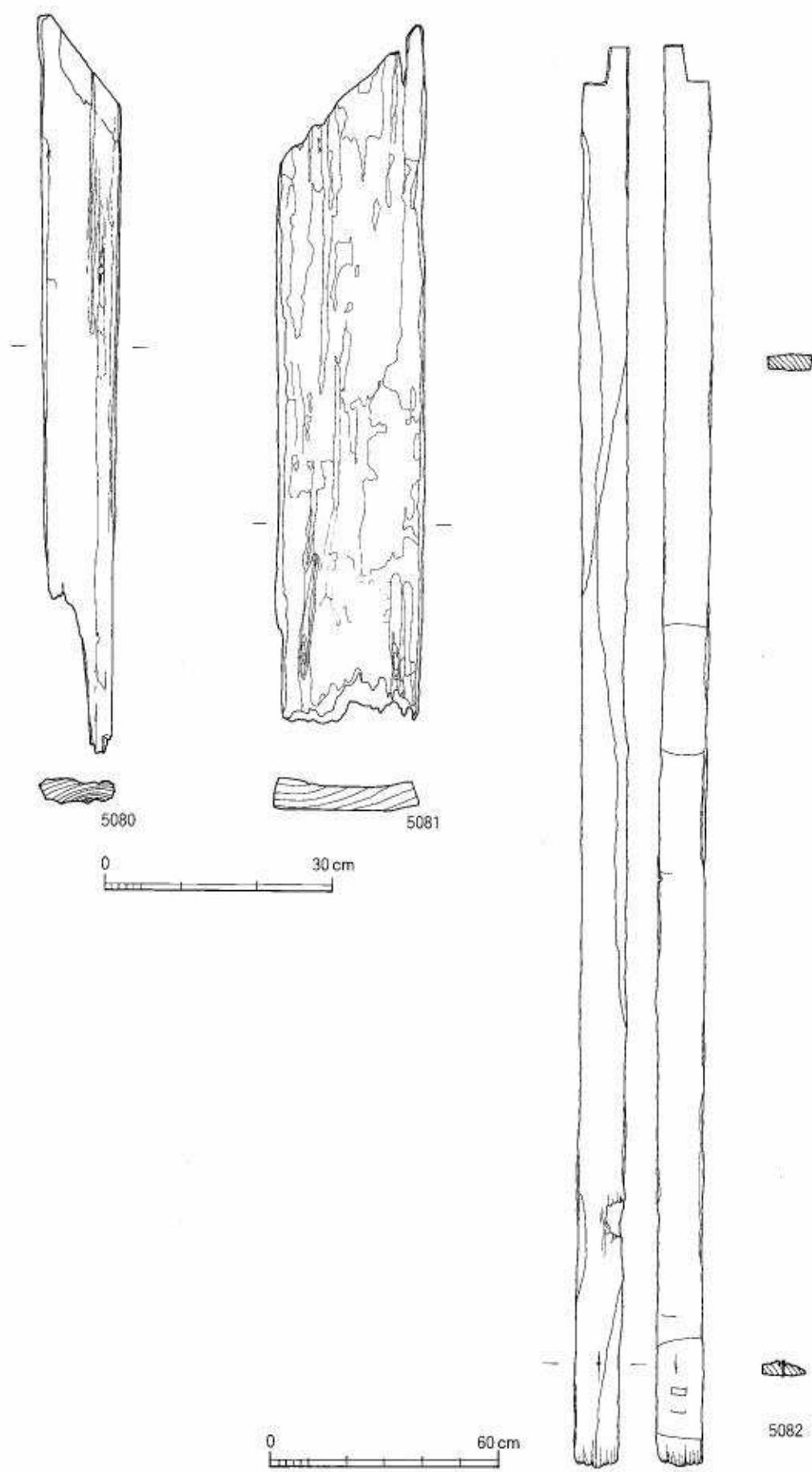
中世の遺物(60) 木器(11)
(SD85001) 5075~5079



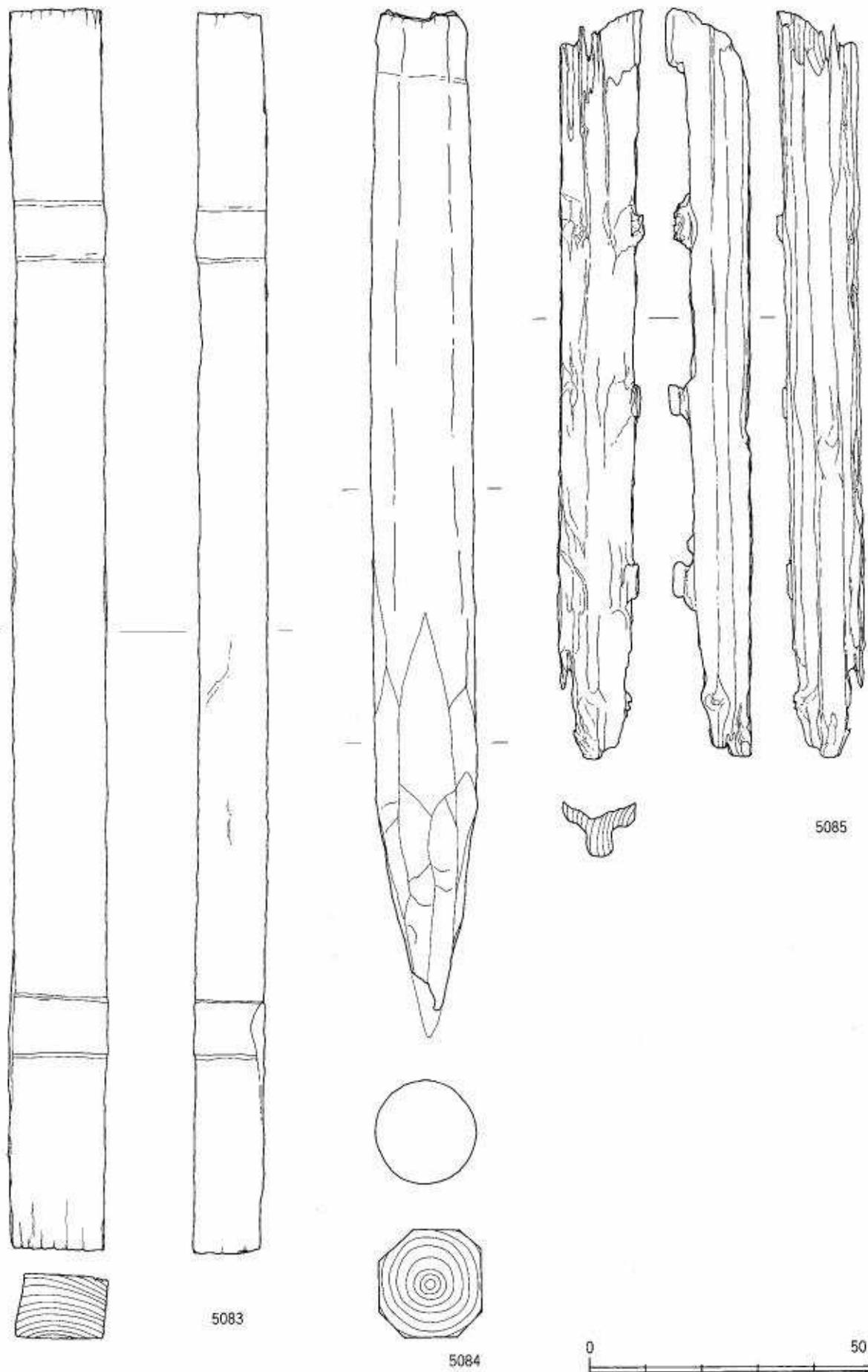
辻ヶ内地区

図版111

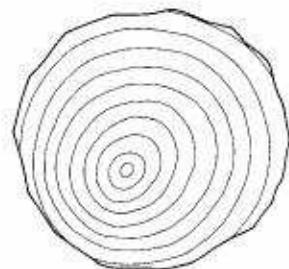
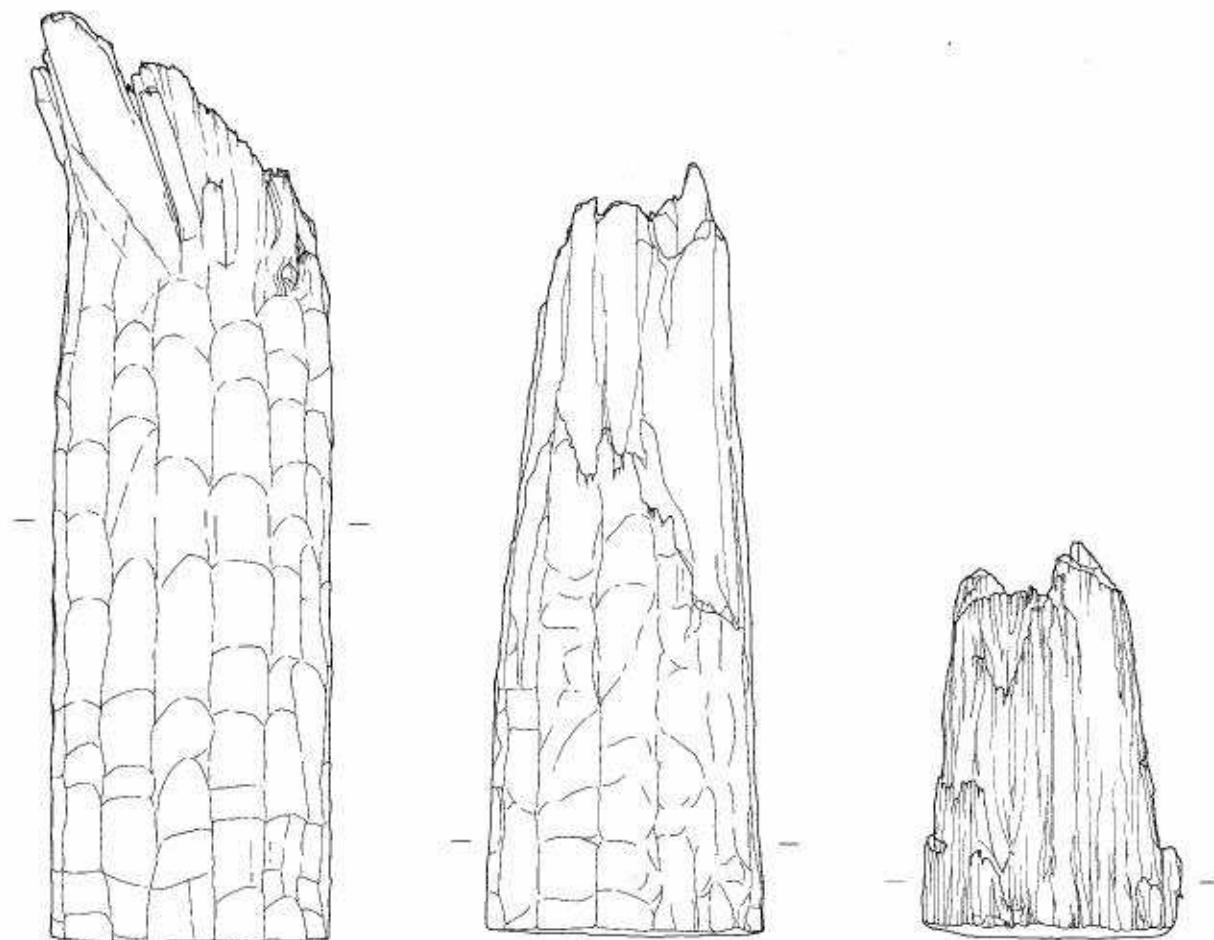
中世の遺物(61) 木器(12)
(SD85001) 5080~5082



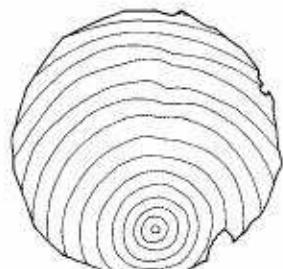
中世の遺物(62) 木器(13)
 (SG85002/SD85001) 5083~5085



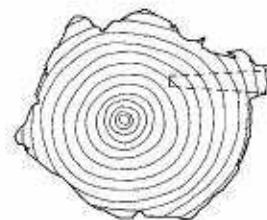
中世の遺物(63) 木器(14)
(柱穴) 5086~5090



5086



5087



5088



5089



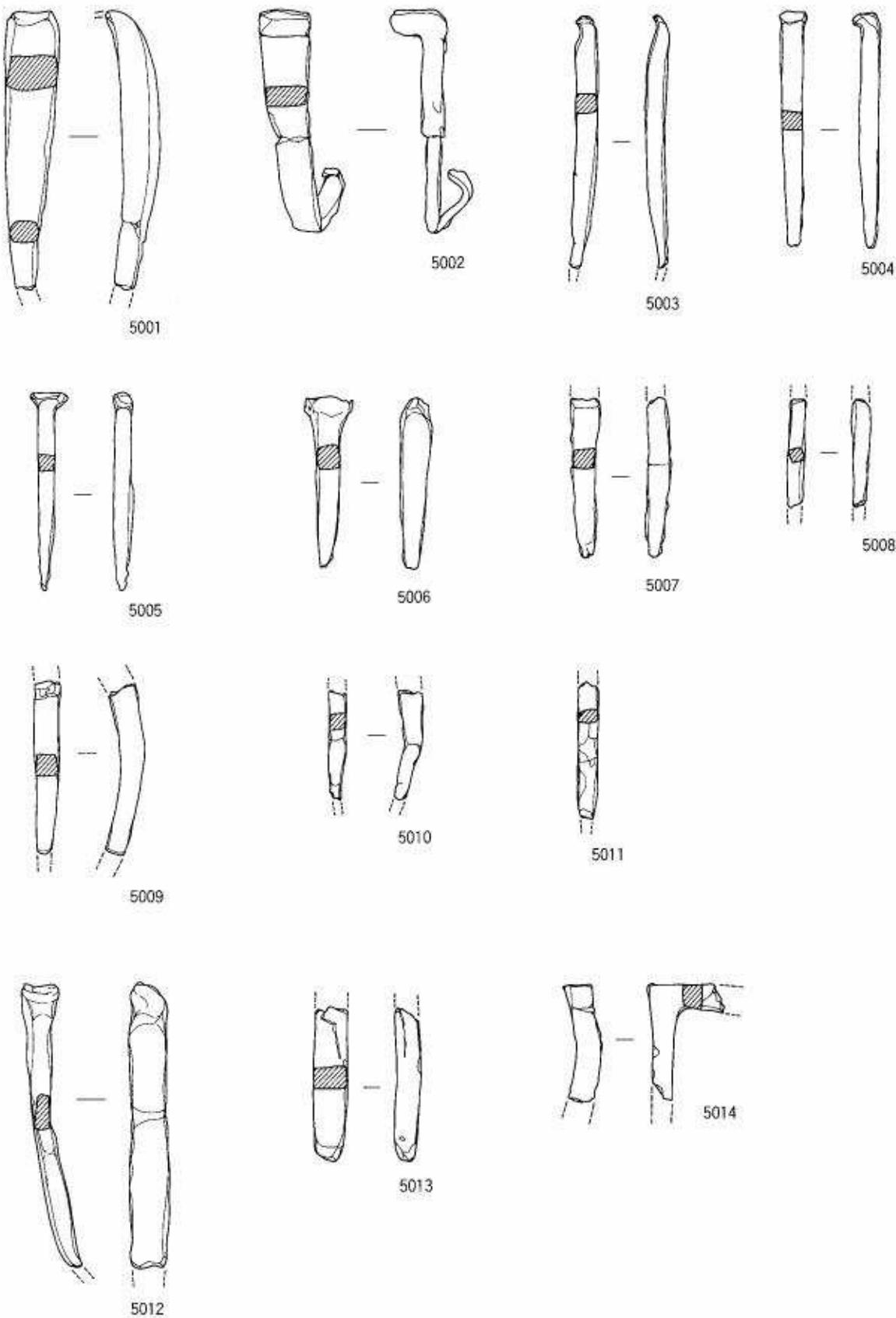
5090



図版114

辻ヶ内地区

中世の遺物(64) 金属器(1)
(鉄器) 5001~5014

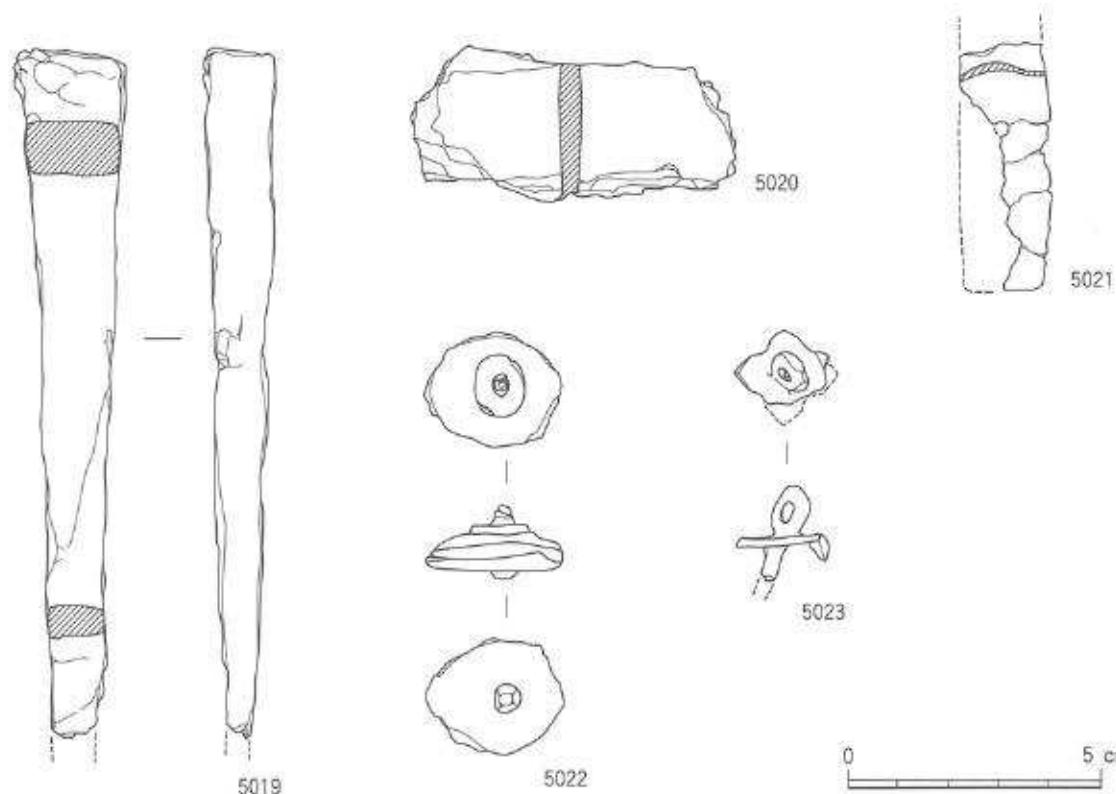
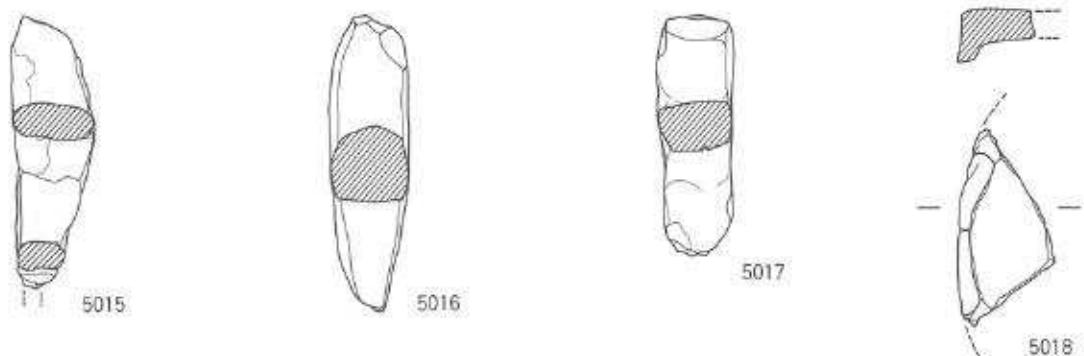


0 5 cm

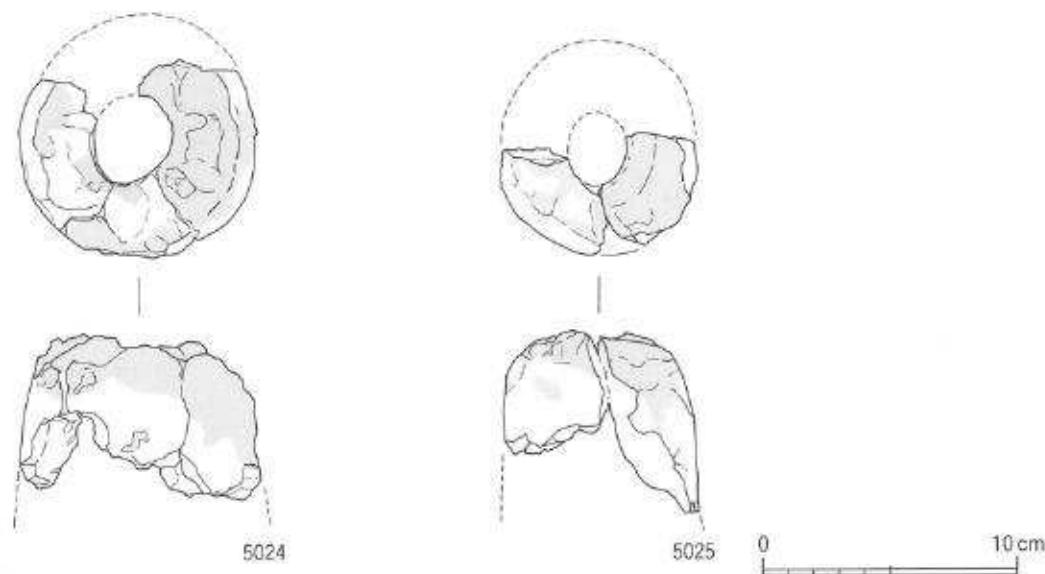
辻ヶ内地区

図版115

中世の遺物(65) 金属器(2)
(鉄器・羽口) 5015~5025



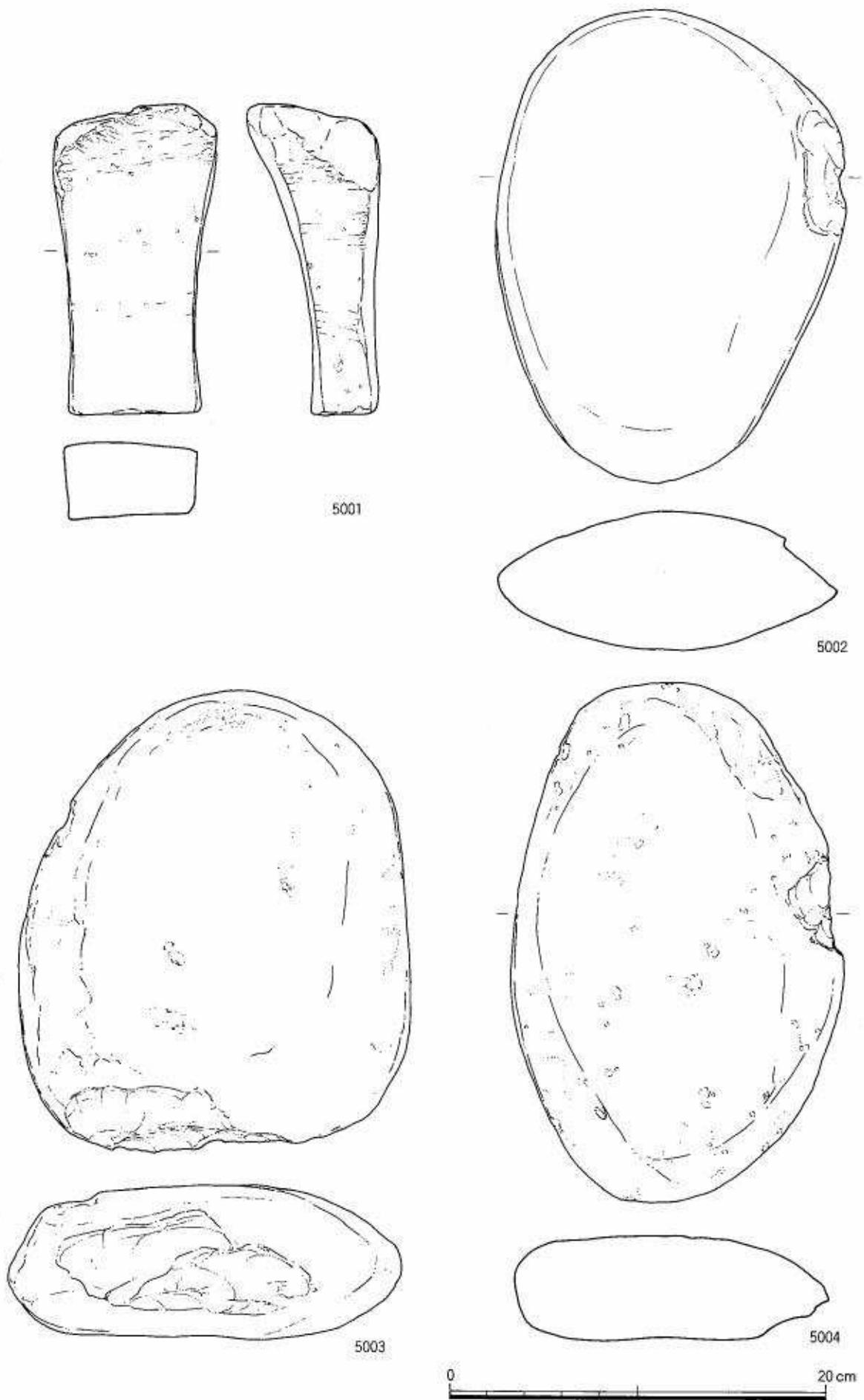
0 5 cm



0 10 cm

中世の遺物(65) 金属器(2)

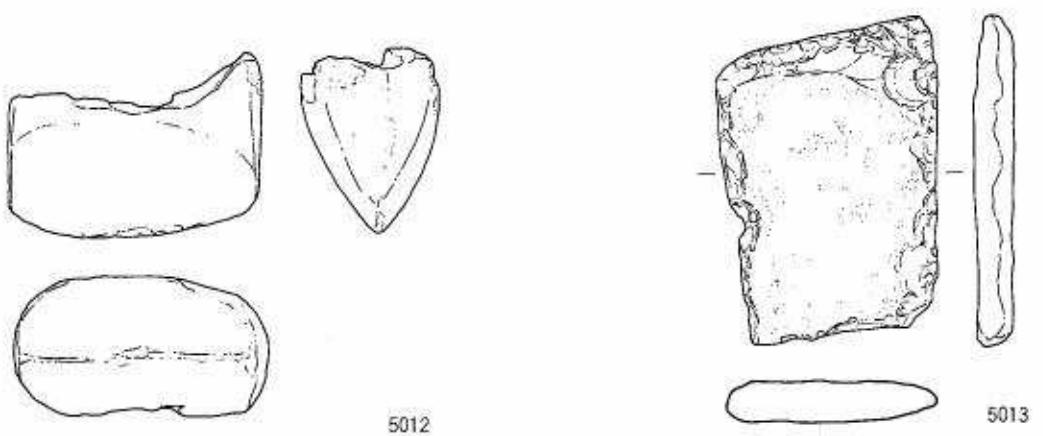
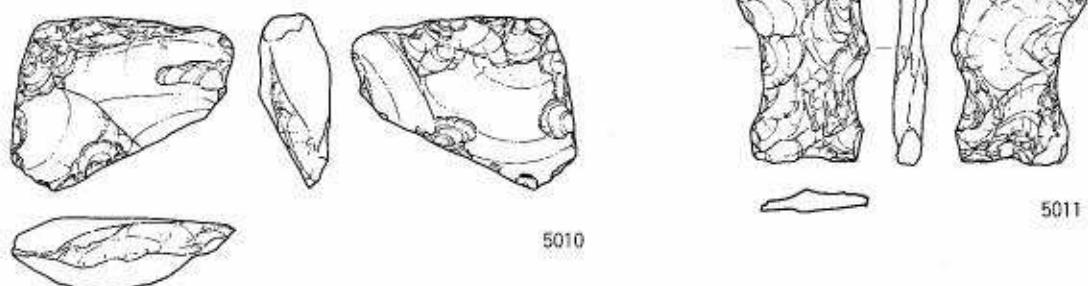
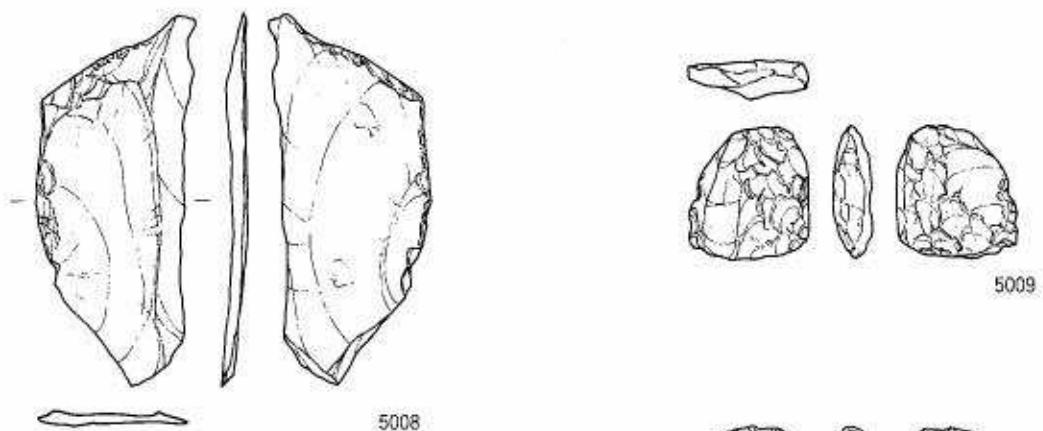
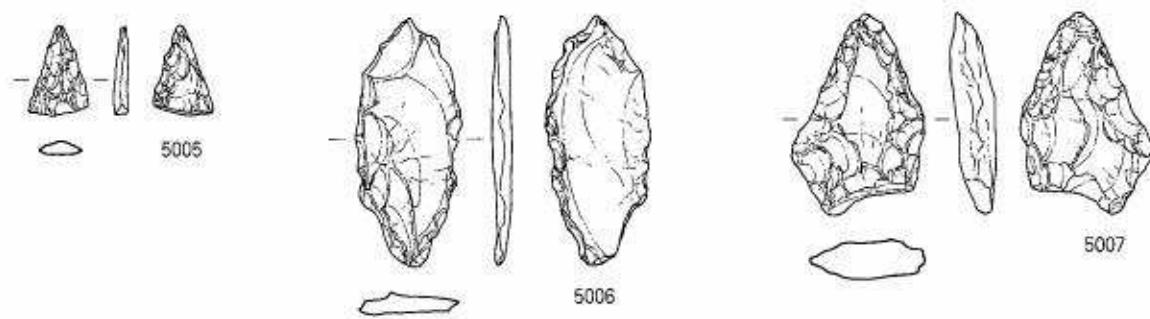
石器(1)
5001～5004



辻ヶ内地区

図版117

石器(2)
5005~5013

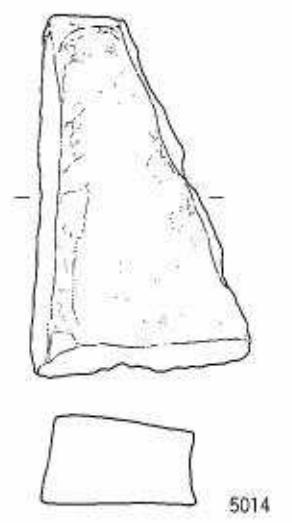


石器(2)

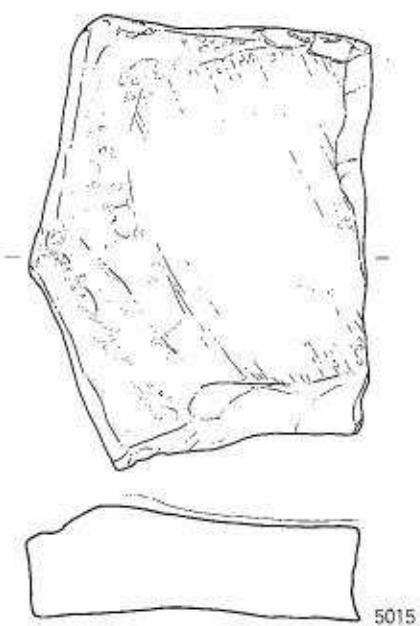
図版118

辻ヶ内地区

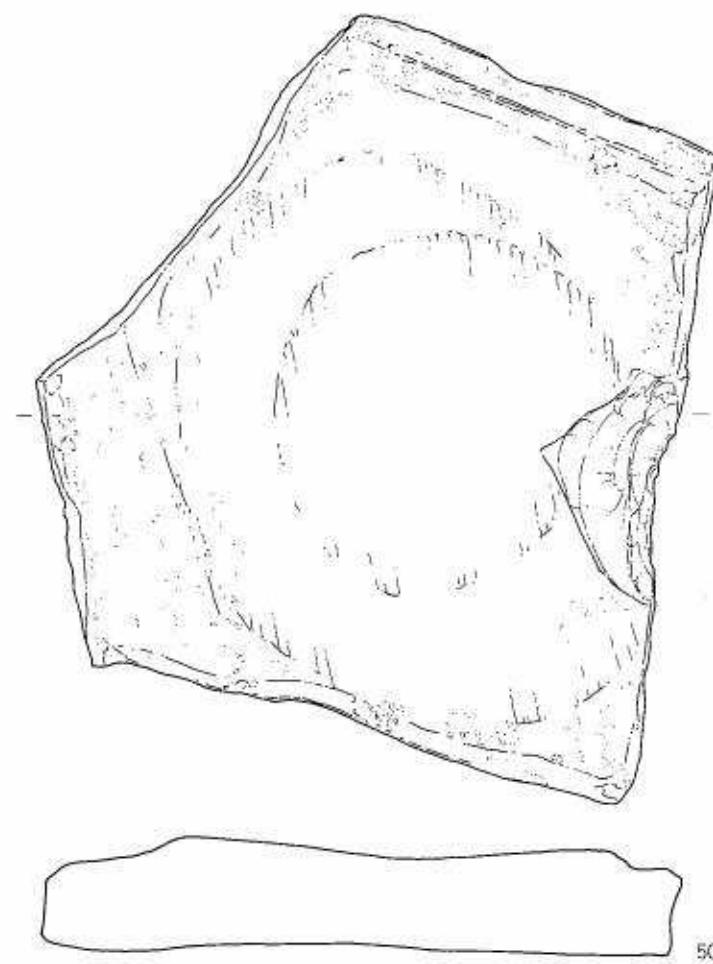
石器(3)
5014~5016



5014



5015



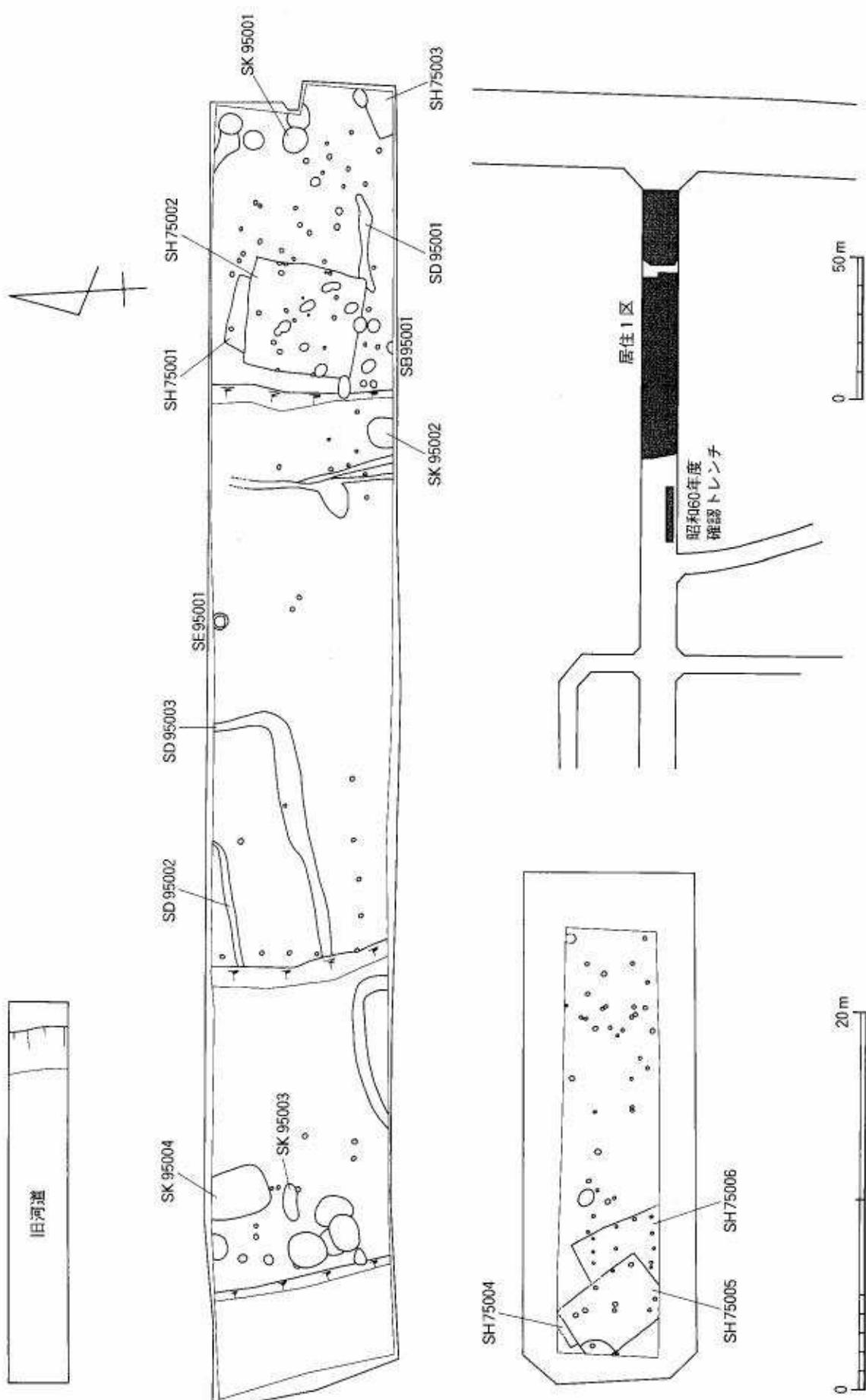
5016



居住地区

図版119

遺構全体図

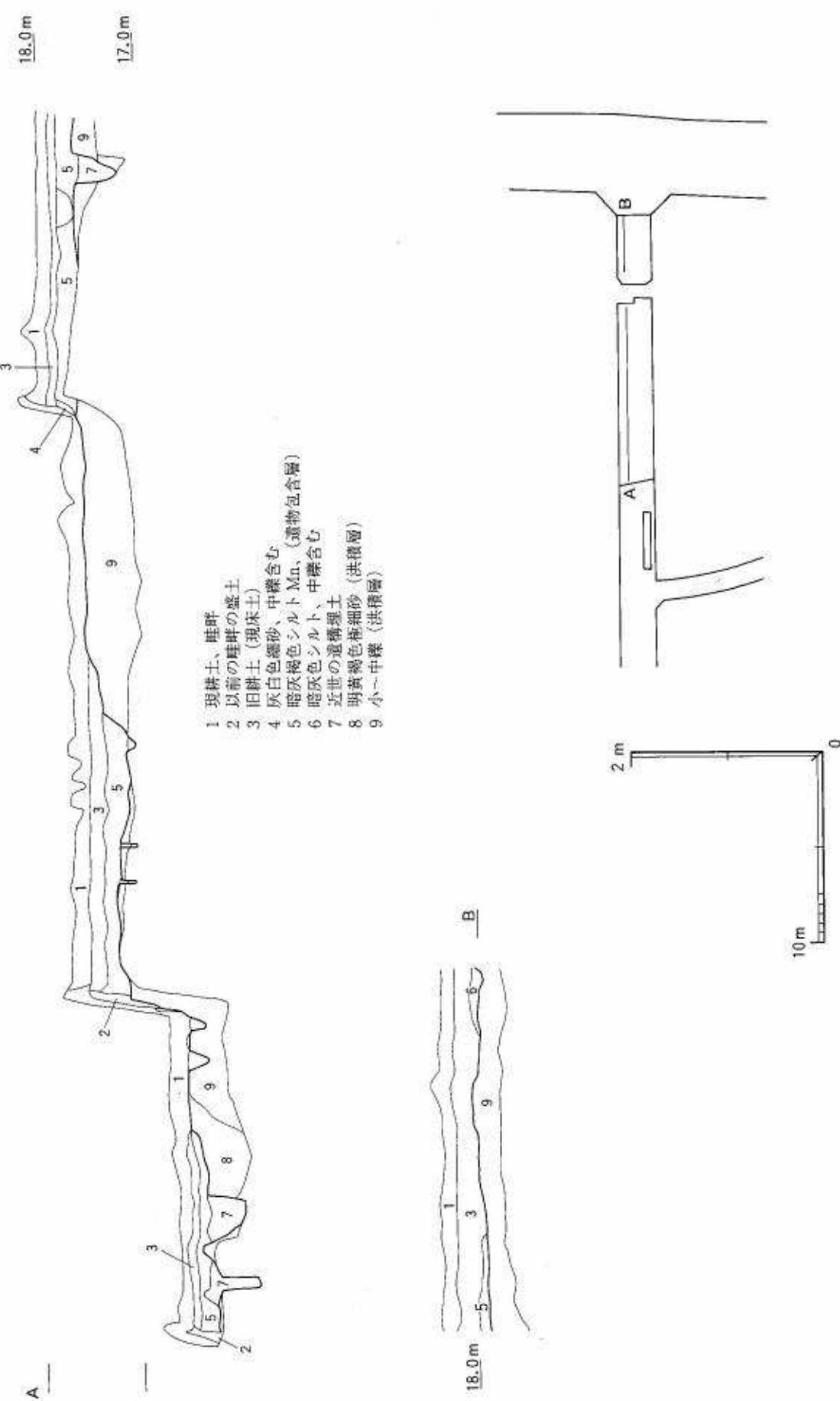


遺構全体図

図版120

土層断面図

居住地区

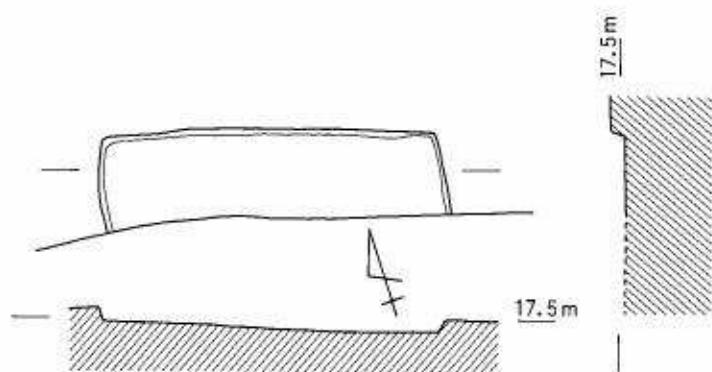


居住地区

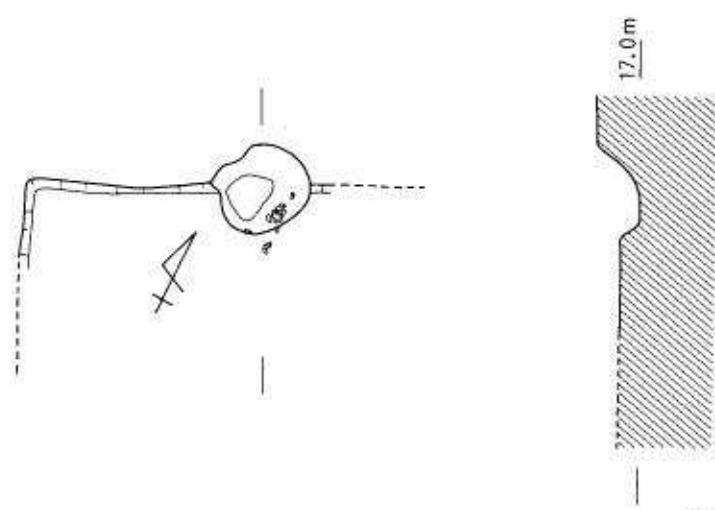
図版121

古墳時代 竪穴住居跡(1)
(SH75001~75003)

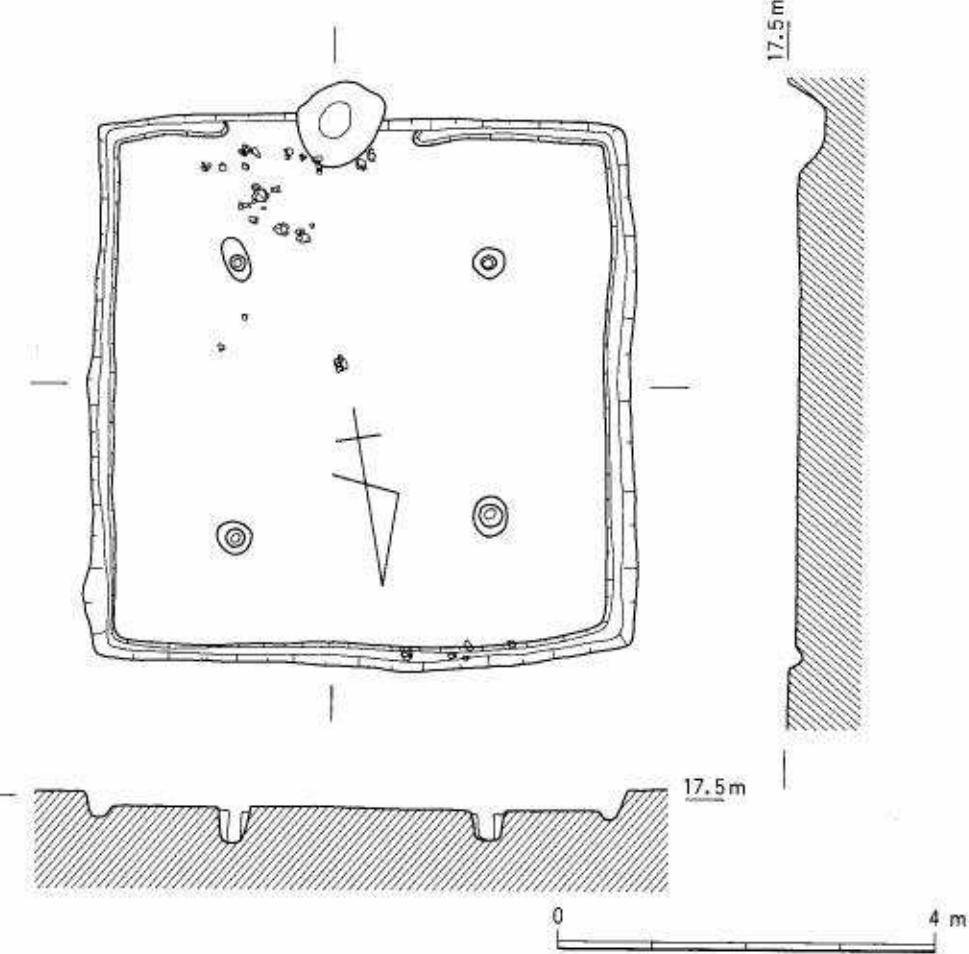
SH75001



SH75003



SH75002

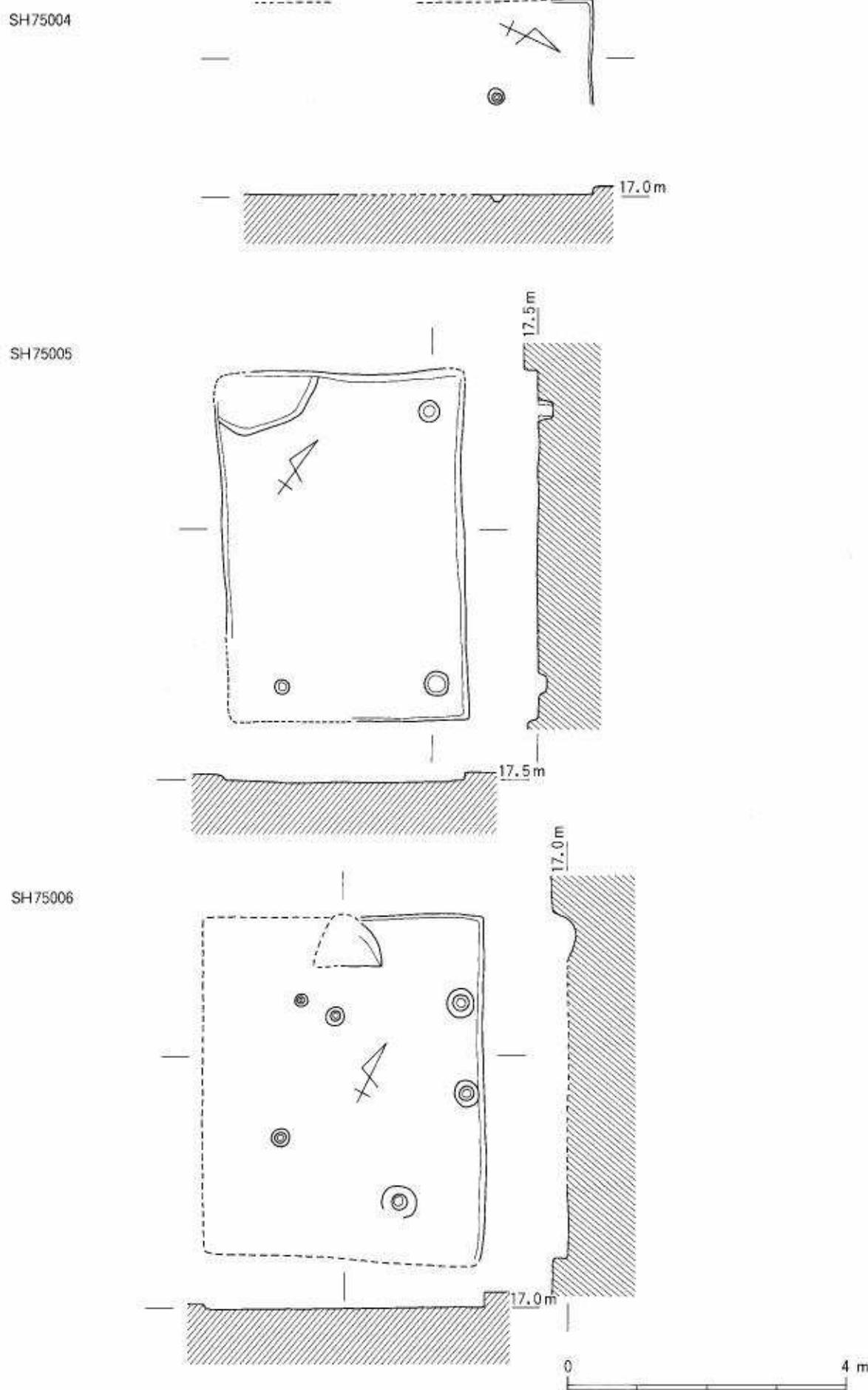


古墳時代 竪穴住居跡(1)

図版122

居住地区

古墳時代 竪穴住居跡(2)
(SH75004~75006)



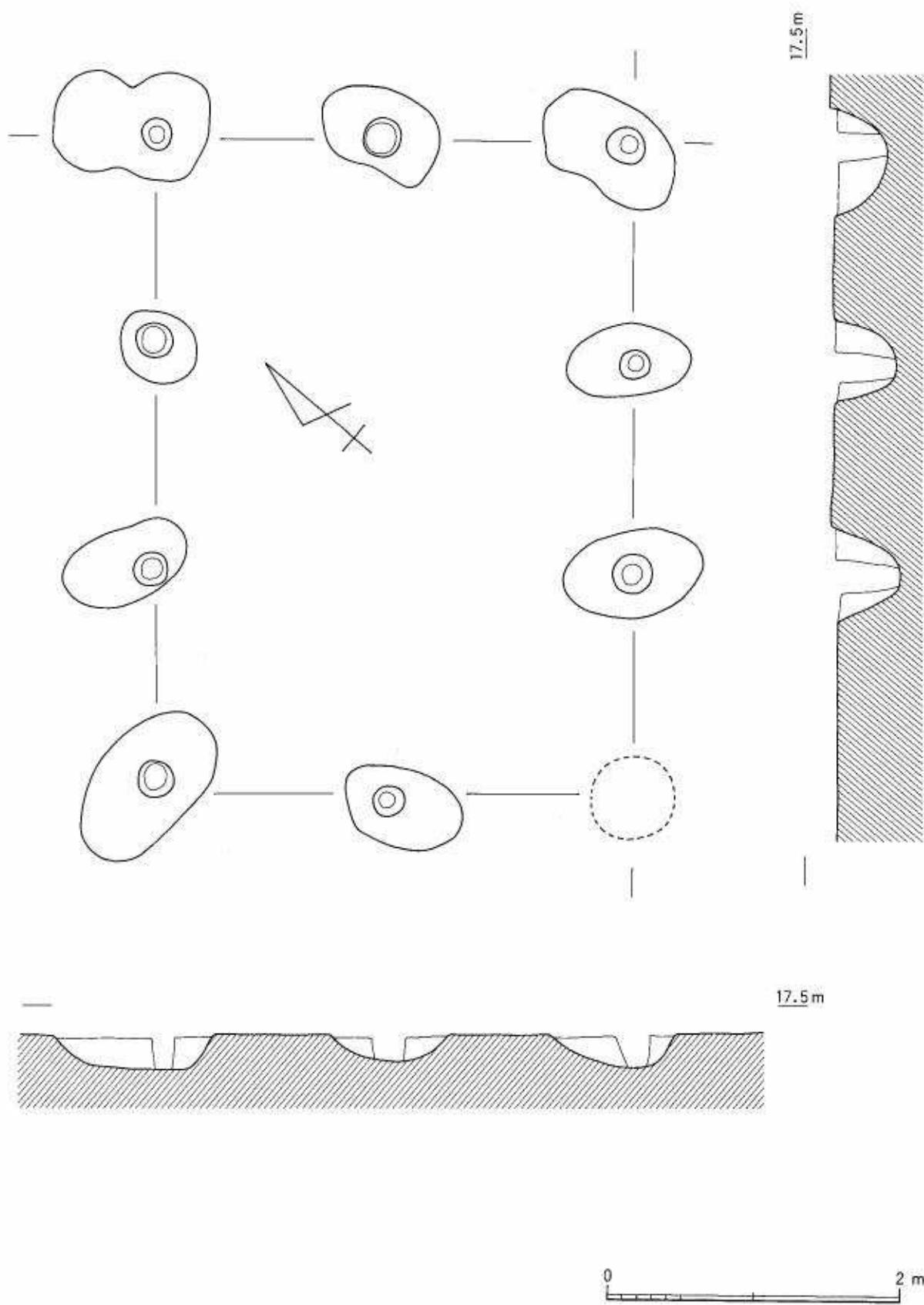
古墳時代 竪穴住居跡(2)

居住地区

図版123

近世 挖立柱建物跡
(SB95001)

SB95001



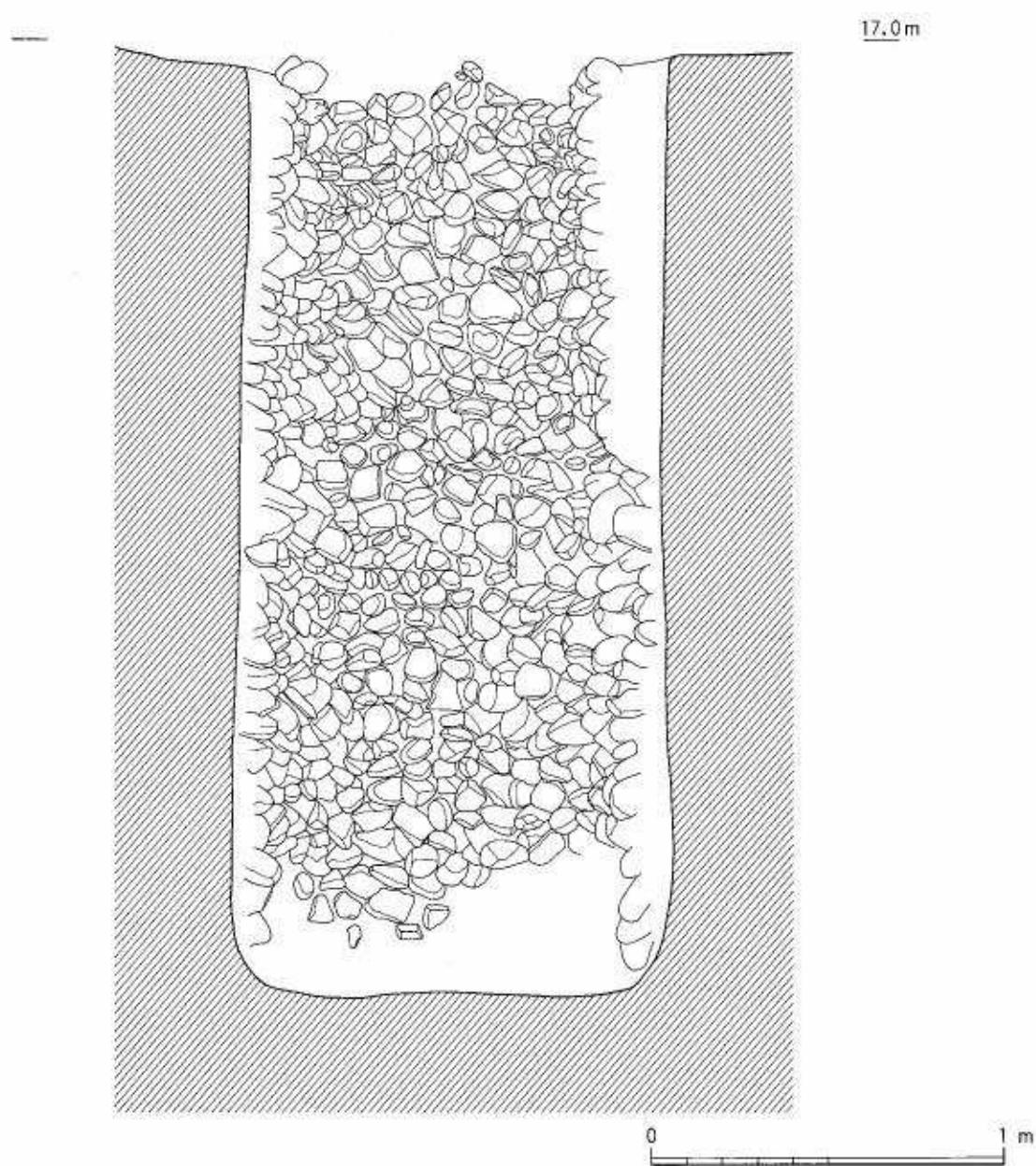
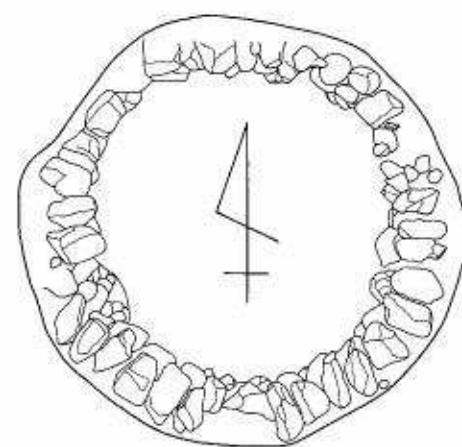
近世 挖立柱建物跡

図版124

居住地区

近世 井戸
(SE95001)

SE95001

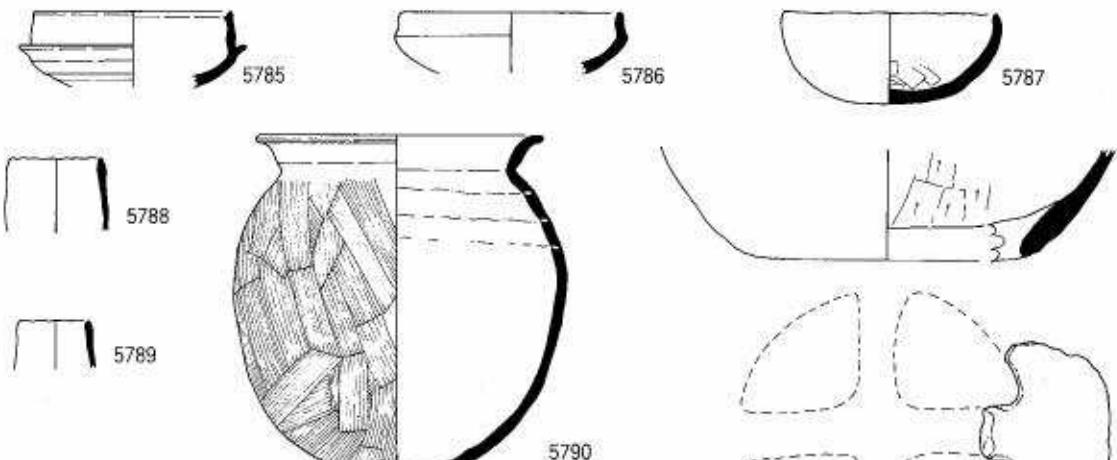


居住地区

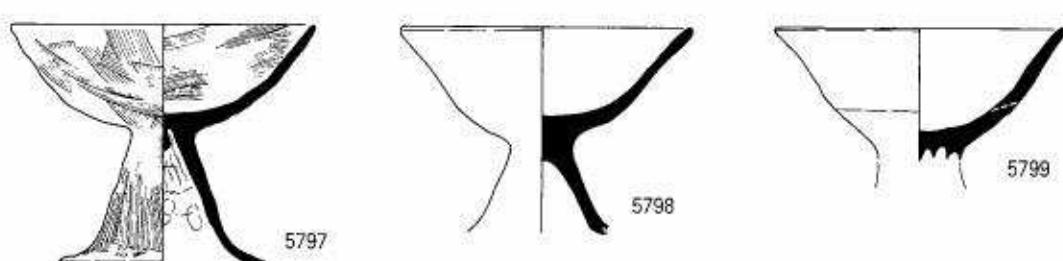
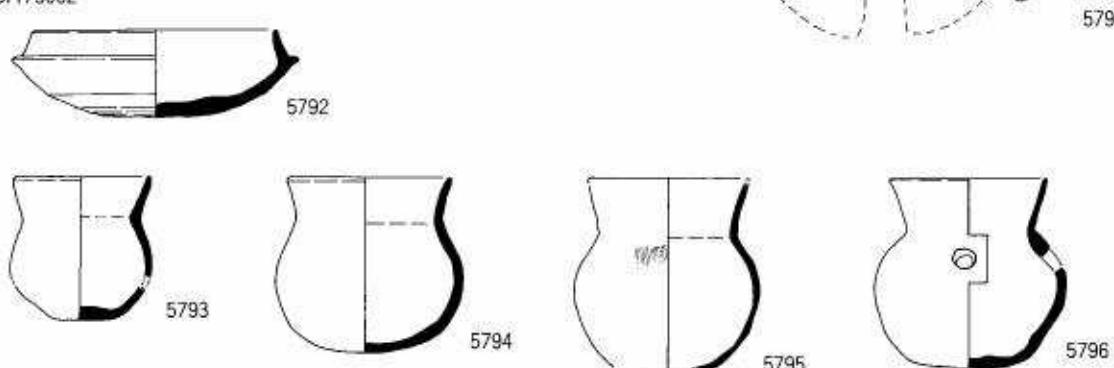
図版125

古墳時代の遺物
(SH75003/75002) 5785~5803

SH75003



SH75002



古墳時代の遺物

図版126

居住地区

古墳時代～中世の遺物

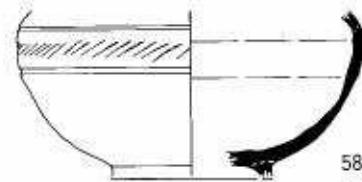
(SH75004～75006/包含層) 5804～5814

SH75004



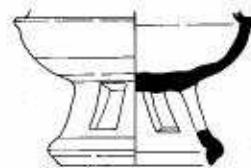
5804

SH75006



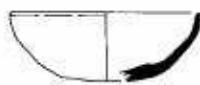
5806

Pit



5807

SH75005

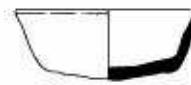


5805

包含層



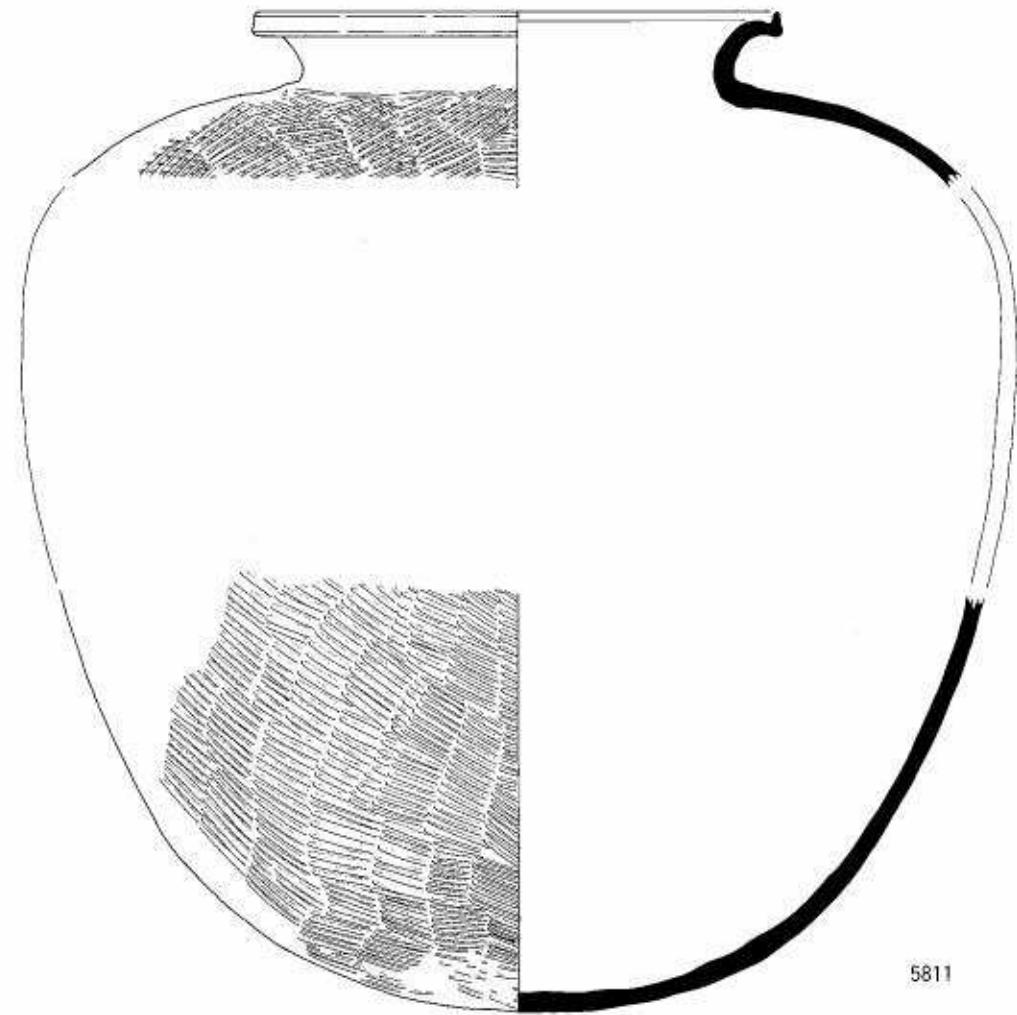
5808



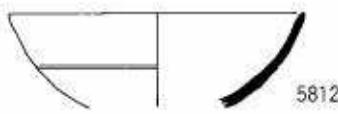
5809



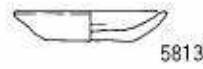
5810



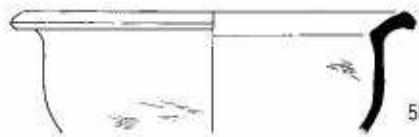
5811



5812



5813



5814

0

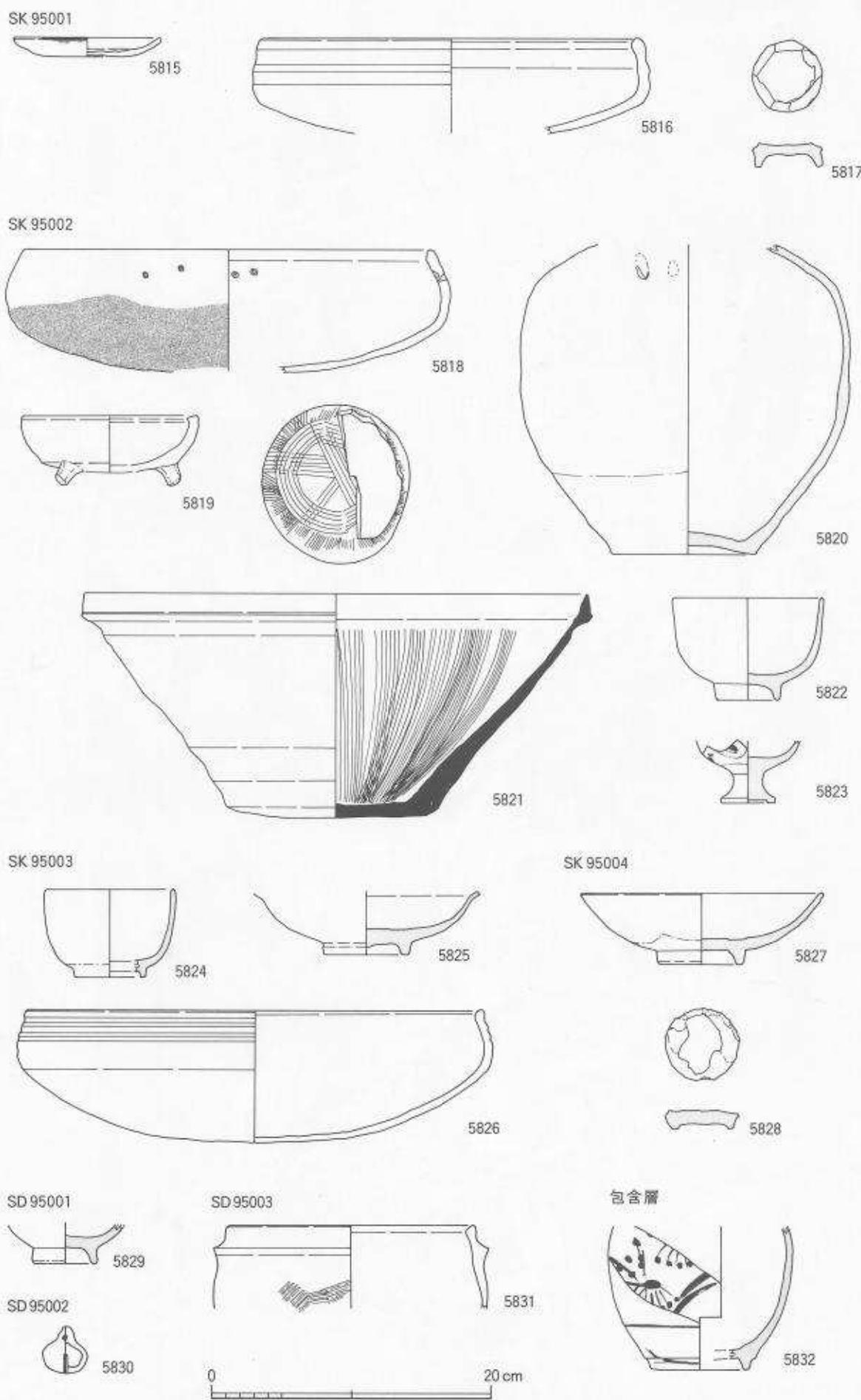
20 cm

古墳時代～中世の遺物

居住地区

図版127

近世の遺物
(土坑/溝/包含層) 5815~5832



近世の遺物